

筑波大学博士（社会学）学位請求論文

ボランティア活動におけるふるまいと認識に
ついての社会学的研究

—社会的意義と参加の論理の関係—

富井 久義

2017年度

目次

序論	1
1 問題の所在——ボランティア活動者のふるまいと認識への注目	1
2 先行研究と分析枠組み	5
2.1 先行研究	5
2.2 分析枠組み	9
3 事例と調査方法	14
3.1 あしなが運動と鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動	14
3.2 調査の方法	17
4 本研究の構成	21
第1部 あしなが運動の論理と活動者の認識	24
第1章 あしなが運動の担い手である遺児学生を規定する制度と理念 ——「恩返し」の思想による寄付者・後輩遺児との結びつき	25
1 はじめに	25
2 「4つの約束」と大学奨学生にたいする教育の内実 ——遺児としてのまなざしを向けることで運動へ動員する戦略	26
3 「敵討ち」から「恩返し」へ——あしなが運動の思想の変遷	31
3.1 「敵討ち」の思想と「交通遺児軟弱説」 ——多様なアクターによって展開される初期の運動	32
3.2 「恩返し」の思想——遺児を主たる担い手とする運動への変質	38
4 街頭募金における奨学生と寄付者との象徴的な結びつき ——奨学生の関与の必要と寄付者の離脱可能性	41
5 「恩返し運動」の展開とその内実の変化 ——育英会と奨学生との関係における「恩返し」の位置づけ	45

第2章 ボランタリーな行動に見いだされる贈与の可視化／不可視化

——あしなが育英会大学奨学生をめぐる「恩返し」の思想の展開	49
1 はじめに	49
2 先行研究と分析視角	52
3 「あしなが運動」における「恩返し」の思想の展開 ——重層化する系列的互惠関係	56
3.1 大学奨学生を「活動」に動員する論理としての「恩返し」の思想 ——系列的互惠関係の積極的な利用	58
3.2 寄付者の贈与を喚起する演出装置としての「恩返し」する主体 ——系列的互惠関係の可視化	58
3.3 「恩返し運動」の展開の拡大——重層化する系列的互惠関係	59
4 大学奨学生の関係認識——想像力において結ばれる贈与関係の回避	60
4.1 育英会との二者関係における関係の把握——交換関係にもとづく理解	61
4.2 贈与の対象としての「後輩遺児」 ——贈与にもとづく関係規定を回避する奨学生の論理	64
5 おわりに	66

第3章 運動にあらたに参与する活動者の理念とのつきあい

——遺児学生があしなが運動において形成する重層化した秩序	68
1 はじめに	68
2 先行研究と分析視角	72
3 「恩返し運動」の担い手をめぐって形成される秩序 ——あしなが運動に期待される役割の取り扱い	75
3.1 ふるまいの水準において期待される役割の遂行と語りの水準における 役割距離の呈示	75
3.2 「アツい想い」をもつまわりの遺児学生を見いだす	78
4 「アツい想い」をめぐって形成される秩序 ——遺児学生相互に期待される役割の取り扱い	80
4.1 「アツい想い」をもたない活動への参与	80

4.2	「アツい想い」をもっているというまなざし	82
4.3	「アツい想い」をもっているというまなざしに対処する	83
5	活動において見いだされる楽しみ.....	87
5.1	活動を遂行するなかに見いだされる楽しみ.....	87
5.2	活動の集まりを維持することのなかに見いだされる楽しみ.....	88
6	おわりに	89

第2部 森林ボランティア活動の社会的意義と鳩ノ巣フィールドの活動の構成 91

第4章 活動者が見いだす森林ボランティア活動の実践的意味と社会的意義への対応——安全管理をめぐる議論のアリーナ

1	はじめに	92
2	森林ボランティア活動の社会的意義づけと活動者の意味づけ	93
2.1	森林ボランティア活動の社会的意義をめぐる議論	93
2.2	活動者にとっての森林ボランティア活動の意味づけ	99
2.3	活動の社会的意義との距離をはかる活動者の活動の意味づけ	101
2.4	分析対象	102
3	「怪我と弁当は手前持ち」 ——みずからの身体をコントロールする楽しみと山林所有者との関係形成... ..	105
3.1	みずからの身体をコントロールしてフィールドにはたらきかける楽しみ	106
3.2	山林所有者や地域住民との信頼関係の形成.....	110
3.3	リーダーの養成という課題の浮上——参加者の増加への制度的対応	111
4	「ケガはリーダーの注意不足」 ——社会的認知の増大と安全管理をめぐる制度的対応	113
4.1	参加者の安全管理の責任を負うリーダー	113
4.2	作業内容の高度化	115
4.3	社会的認知の増大にともなう制度的対応の要請.....	116
5	作業方法に注目する安全管理——技術認定制度と活動者の実践.....	118
5.1	技術認定制度の検討	118

5.2	安全の優先に独自性を見いだす森林ボランティア	121
6	おわりに	123

第5章 ボランティアによる継続的な森林資源管理の可能性

——管理の責任と自由な関与を両立させるための規則としての

「鳩ノ巣流」の作業方法

1	はじめに	125
2	先行研究と分析視角	130
2.1	先行研究	130
2.2	分析視角	131
2.3	分析対象	132
3	都市住民による森林資源システムの維持・管理のしくみ ——鳩ノ巣フィールドの活動形態と活動参加者の動向	136
3.1	鳩ノ巣フィールドの活動形態	138
3.2	活動参加者の位置づけと動向	142
4	経験をもたない都市住民による森林資源システム管理を担保する規則 ——「鳩ノ巣流」の作業方法	146
4.1	安全管理のための「鳩ノ巣流」の作業方法	146
4.2	アクセス権を保障するための「鳩ノ巣流」の作業方法	150
5	継続的な活動参加者にとっての規則の共有と活動に取り組む意義	152
5.1	継続的な活動者にとっての規則の位置づけ	153
5.2	活動に見いだされる多元的な価値の共有	154
6	おわりに	156

第6章 森林ボランティア活動における社会的意義の語られかた

——都市住民が形成するコモンズとしての鳩ノ巣フィールド

1	はじめに	159
1.1	森林ボランティア活動研究の動向	159
1.2	過少利用資源の継続的な利用のしくみへの注目	162

2	鳩ノ巣フィールドにおける活動の語られかた	164
2.1	個人の水準における活動の語られかた	165
2.2	活動体の水準における活動の理念の位置づけ	166
3	鳩ノ巣フィールドの運営のしくみ	170
3.1	都市住民にとっての参加のしやすさを重視した活動体の構成	170
3.2	一時的な集まりとして活動体を構成することが導く都市住民の継続的な 活動参加	172
4	活動者が社会的意義との距離を語ることのもつ意味	176
5	おわりに	181
結論		183
1	本研究の知見——ふるまいと認識の二重性にもとづく活動参加	183
2	本研究の社会学的意義	185
2.1	現代社会におけるボランティア活動への参加の論理	186
2.2	ボランティアの「自発性」の語りかたと社会との関係の結びかた	188
2.3	継続的展開を見据えるボランティア活動の組織化に向けて	189
3	本研究の課題	191
参考文献		193

図表一覧

図

図 1.1	大学奨学生予約募集のしおり	27
図 1.2	あしながさん制度を象徴して描かれるイラスト	42
図 2.1	あしなが学生募金ボランティアスタッフ募集ポスター	49
図 2.2	あしなが学生募金の遺児学生を紹介するあしなが育英会機関紙	51
図 2.3	あしながP ウォーク 10 の参加者募集リーフレット	63
図 3.1	あしなが学生募金で配布されるチラシ	70
図 4.1	草刈り十字軍についての書籍『山へ入って草を刈ろう』	94
図 4.2	政策提言活動についてまとめた書籍『森林の列島に暮らす』	98
図 4.3	『ニュース森づくりフォーラム』1号	105
図 4.4	羽鳥孝明「この頃思う不満……参加者と行政に」	107
図 4.5	『遊ぶ！ レジャー林業』	108
図 5.1	鳩ノ巣フィールド遠景	138
図 5.2	「『多摩の森・大自然塾』奥多摩・鳩ノ巣フィールド」募集案内チラシ	140
図 5.3	鳩ノ巣フィールドの運営体制	142
図 5.4	伐木作業についてのマニュアル	147
図 5.5	鳩ノ巣フィールドでの伐木作業のようす	149
図 6.1	第一次五ヵ年活動計画に示される「長期ビジョン」	167
図 6.2	2016 年度大自然塾「鳩ノ巣フィールド」活動計画・活動報告	168
図 6.3	鳩ノ巣フィールド周辺 MAP	171
図 6.4	定例イベントの集合写真	174
図 6.5	間伐作業でロープを引く作業者のようす	178
図 6.6	枝打ち作業のようす	179

表

表 0.1	あしなが運動活動者の聞き取り対象者.....	18
表 0.2	鳩ノ巣フィールド活動者の聞き取り対象者.....	18
表 0.3	森林ボランティア関係者の聞き取り対象者.....	20
表 4.1	「森林づくり活動についての実態調査」調査対象団体数の推移.....	95
表 5.1	2015 年調査における活動で苦勞している点上位 3 項目の回答推移 (MA) ..	126
表 5.2	活動や支援制度の問題点, 課題, 意見 (FA・主要項目)	127
表 5.3	調査年度別会員数最多の年齢階層.....	128
表 5.4	調査年度別年齢階層別合計会員数の構成比 (単位: %)	129
表 5.5	団体類型別年間活動日数・作業内容実績回答数・年間のべ参加者数の平均...	133
表 5.6	団体類型別活動開始年の分布.....	134
表 5.7	鳩ノ巣フィールド (大自然塾) 活動参加者の年齢構成 (2016 年度・大自然塾)	135
表 5.8	鳩ノ巣フィールド (大自然塾) 年度別各回平均参加人数 (単位: 人)	145
表 5.9	参加者類型別 2016 年度鳩ノ巣フィールド (大自然塾) 参加回数.....	146
表 6.1	鳩ノ巣フィールド (大自然塾) 活動参加者の居住地 (2016 年度)	165

序論

1 問題の所在——ボランティア活動者のふるまいと認識への注目

本研究は、ボランティア活動への参加の論理を活動者の視点に即して明らかにすることで、ボランティアをめぐる活動参加論の組み換えをはかることを目的とする。とくに、活動者のふるまいをめぐって、社会的意義づけと活動者の認識とのあいだに二重性がみられることに注目し、現代社会におけるボランティア活動への参加のしかたの特有性を明らかにする。

ボランティア活動とは、「社会的課題解決のため、対価を期待せず自発的に活動する」(中野民夫 2012) 人びとによる活動である。活動の主要な特性は、自発性、社会性¹、無償性にあるとされ、1995 年の阪神・淡路大震災でのボランティア活動を契機に、とくに社会的な注目を集めるようになった(中野 2012)。

阪神・淡路大震災以後のボランティア活動の実践や研究で注目されるのは、継続的な活動展開を視野に収めるようになったことである。渥美公秀によれば、災害ボランティア活動の実践水準では、ボランティア団体の NPO への組織化、NPO 間の全国的ネットワークの形成、行政や社会福祉協議会などとの連携、ボランティアセンター開設・運営のノウハウの共有・浸透といった動きがみられた(渥美 2014: 122-3)²。また、こうした動きに呼応するようにして、1998 年に「特定非営利活動促進法」が制定されるなど、行政による制度的な基盤整備もすすんだ。

これらの動きは、ボランティア活動の制度化と位置づけられる。制度化とは、①組織基盤の確立と公式化と、それにともなう②政治的影響力の増大、③組織の官僚制化、専門化、経営体化を指す(寺田良一 1998)。長谷川公一によれば、制度化をはかることで、ボラン

¹ 社会性は、公益性(内海成治・入江幸男・水野義之編 1999)や公共性(内海編 2001)と表現されるばあいもある。さらに、先駆性をボランティア活動の特性に含める議論もみられる(遠藤興一・土志田祐子 1995)。

² 渥美は、「秩序化」という概念をもちいて、こうした動きをとらえている。

ティア活動は、活動の継続的な展開を可能とし、それによって、問題の事後的な対応にとどまらず、事前予防的な運動や対案提示型の政策志向的な運動へと活動を展開できるようになるという（長谷川 2000: 182）。反対に、制度化のデメリットとして挙げられるのは、政策形成過程により深く組みこまれたり、「経営体の論理」が前景化したりすることで、運動の穏健化、保守化、体制編入の傾向といった「体制編入（co-optation）効果」が顕在化することである（寺田 1998）。また、活動の受け手のニーズに応じて臨機応変に対応することができなくなることへの懸念もみられる（渥美 2014）³。こうしたボランティア活動の制度化をめぐる議論にみられるように、ボランティア活動は、主として外部のセクターや活動の受け手との関係で、活動が果たす影響や成果に焦点をあてて、評価を受けてきた。

他方で、近年のボランティア活動の課題に挙げられるのは、メンバーの確保や世代を超えた活動の継続である。全国社会福祉協議会の実施する「全国ボランティア活動実態調査」では、メンバーの高齢化や新規活動参加者の不足を活動上の困難として挙げるボランティア活動団体の増加が指摘されている（全国ボランティア・市民活動振興センター 2010: 95）⁴。現実には活動の停止や休止を考える団体はいまのところ少数派であるものの、活動者の入れ替わりを視野に入れ、活動者の不断の動員をはかることは、日常的に継続的な展開を見据えるボランティア活動が直面する、実践的な課題となっている。

この課題に応える既存研究に挙げられるのは、第一に、どのような人びとが活動に参加するのかを明らかにする議論である。それは、主として計量的なアプローチによって、ボランティア活動に参加する人びとに多くみられる属性を抽出するものである。たとえば、三谷はるよ（2016）は、欧米の研究成果をもとにした分析枠組みをもとに、全国調査データをもちいて日本人のボランティア行動の規定要因を検討し、幼少期や青年期の経験が重

³ 新雅史（2013）は、阪神・淡路大震災を契機にすすんだボランティア活動の制度化が、2011年に発生した東日本大震災に関連する支援活動にもたらした影響を論じている。

⁴ 本調査の有効回答数は2,357で、このうち、75.1%にあたる1,771団体が活動において困っていることが「ある」と回答した。そして、「ある」と回答した1,771団体にかぎってその内容を複数回答を許して尋ねたところ、65.3%の団体が「メンバーが高齢化している」ことを挙げ、56.7%が「新しいメンバーが集まらない」を挙げた。また、現実には活動の停止や休止を考えた団体は16.9%にとどまるが、増加傾向にあり、メンバーの確保は活動の継続的展開の鍵となっている（全国ボランティア・市民活動振興センター 2010: 89-96）。

要だとする社会化モデルを知見として示している。こうした研究は、活動への動員にあたって、どのような人びとにどのようにアプローチするべきなのかについての知見を提供する。

第二に挙げられるのは、活動をめぐる理念や社会的意義とのかかわりで、ボランティア活動に人びとがいかにして参加しているかをとらえる議論である。典型的には、社会運動論のフレーミング分析にみられるように、活動体の掲げる理念や集合目標、問題の解釈枠組みに共鳴することによる活動参加というモデルにもとづくアプローチがある (D. A. Snow et. al. 1986; 本郷正武 2007)。また、活動者の取り組みを市民社会形成の担い手ととらえる、市民社会論的アプローチもある (佐藤慶幸 [1982] 1994, 2002, 2007; 西山志保 [2005] 2007; 似田貝香門編 2008)。

しかしながら、第二の議論をめぐっては、近年、活動の理念と活動者の認識の一致を前提としない活動がみられることが指摘されている。そのような活動参加のありかたは、従来の視角からは、問題化されることとなる。

たとえば、西城戸誠は、環境運動の事例研究をつうじて、活動に主体的にかかわって理念を体現するような「強い個人」の再生産の困難と、必ずしも活動参加に積極的ではない「弱い個人」の動員の重要性を指摘している (西城戸 2008: 274-9)。西城戸は、継続的に展開する活動体が掲げる理念や解釈枠組みへの共鳴にもとづく活動参加 (cf. Snow et. al. 1986; 本郷 2007) が新規参入者にとって困難であることをとらえており、そのために、目的誘因や連带的誘因とは異なる誘因にもとづく活動参加を初発の段階で肯定的に受け止める戦略を提唱している。しかしながら、西城戸は結局のところ、「弱い個人」に運動文化 (J. M. Jasper 1997; 野宮大志郎編 2002) の担い手となって「強い個人」へと変身することを期待し、活動理念や問題の解釈枠組みへの共鳴を活動の継続性の前提におく理路をとる。そのため、活動に取り組むなかで「強い個人」へと変身する「弱い個人」の出現がみられないことを、公共性の構築を担うような活動展開にあたつての問題とみなすのである (西城戸 2008: 276)。

⁵ 変身について、荻野昌弘 (1997) は、①身体が加工されている点と②空間の変化／移動を伴う点を一般的特質に挙げている。これを踏まえて、脇田健一 (1997) は、1980 年前後の滋賀県の石けん運動を事例に、運動に取り組むことによる、そのひと自身のライフスタイルや思考の変化を変身と指して考察を展開した。

とはいえ、西城戸にかぎらず、近年では、多くの既存研究が、ボランティア活動や社会運動の社会的意義と活動者の認識のあいだにずれがあることを指摘している（原田隆司 2000, 2010; 松村正治 2007, 2009, 2010, 2013; 西浦功 1997; 栗本修滋 2004; 小野奈々 2008）。これらの研究は、活動者の認識のありかたを問題化するのではなく、むしろ、活動者の立場から、活動の社会的意義をめぐる議論の刷新をはかろうとしている。

また、活動者間の認識の一致をはかることを前提としないような活動展開をとらえる既存研究もある（古市憲寿・本田由紀 2010; 富永京子 2016; 野宮大志郎・西城戸誠編 2016）。そこで明らかにされているのは、活動が具体的に展開される限定的な時間・空間を共有し、その場かぎりにおいてふるまいの一致をみせる活動者の姿である。社会運動を論じる富永京子（2016）が提起するように、個人化・流動化の時代である現代社会において（U. Beck 1986=1998; Z. Bauman 2000=2001），社会運動に参加する活動者は、フレームへの共鳴や活動組織が掲げる集合的アイデンティティにもとづいて活動に参加しているわけではない。そこで重要なのは、従来の社会運動論のように組織に従属するものとして活動者をとらえて議論を展開するのではなく、活動者の経験を起点に活動を論じることである⁶。

このように、近年のボランティア活動への活動者の参加や動員を検討するにあたっては、活動の理念や集合目標への共鳴にもとづく活動参加モデルを前提とすることはむづかしくなっている。単純に活動体が掲げる理念や社会的意義、解釈枠組みへの共鳴によって活動者の動員をはかれるとはかぎらない。活動の社会的意義との認識のずれを表明する活動者の経験を起点として、あらたに活動参加の論理をとらえ直すことが求められているのである。

そこで、本研究は、活動の社会的意義と活動者の認識のずれを指摘する既存研究を踏まえ、事例に則した検討をおこなうことで、活動者の立場から、いかにして人びとがボランティア活動に参加しているのかを明らかにする。とくに、活動の社会的意義と自身の認識

⁶ 富永は、社会運動論のうち、経験運動論（K. McDonald 2002, 2004, 2006）やライフスタイル運動論（R. Haenfler et. al. 2012）、「社会運動と文化」論（J. Goodwin and J. Jasper ed. 2003; H. Johnston and B. Klandermans eds. 1995; 野宮編 2002）の視角から、運動外の出来事と運動外の日常との往還のなかで形成される運動家の「こだわり」や運動体の「しきたり」といった、運動家に共有される行動様式に着目し、それが運動体において「社会運動サブカルチャー」を形成していることを明らかにした。

の二重性を活動者自身がどのようにとらえているのかに注目することで、ボランティア活動への参加をめぐる動機の語彙（C. W. Mills [1940] 1963=1971）の表明のしかたの現代社会における特有性を示すことをねらいとする。

2 先行研究と分析枠組み

2.1 先行研究

活動をめぐる理念や社会的意義とのかかわりで、ボランティア活動に人びとがいかにして参加しているのかを明らかにする既存研究についてくわしく確認しておくならば、従来、ボランティア活動は、市民社会形成の契機として社会的意義を見いだされ、評価されてきた。

先に述べたように、ボランティア活動の特性は、典型的には自発性、無償性、社会性があるとされ、活動者が自発的に、見返りを求めず、社会制度の不備に対応して社会的意義のある活動に取り組む点が評価されてきた。

この点について、社会学的な議論においては、ボランティア活動を市民社会形成の契機ととらえて評価する議論がみられる。たとえば、佐藤慶幸は、ヴォランタリー・アソシエーションを、「精神的充足および／またはより大きな目標——個人的・私的レベルの目標を越える目標——へのコミットメントに動機づけられて、かつ自由な意思決定にもとづいて行なう行為」（佐藤 [1982] 1994: 84-5）と定義されるヴォランタリー・アクションの集合的表出と定義づけ、その活動に、市場と国家から自律した「自由で平等な市民」が形成する市民社会の契機を見いだした（佐藤 [1982] 1994, 2002, 2007）⁷。他方、社会のなかで

⁷ 佐藤は、M. Weber（1956=1972）の社会的行為論の方法論的關係主義的解読と、T. Parsons（1937=1974-89）の主意主義的行為（voluntaristic action）概念を手がかりに、分析概念としてのヴォランタリー・アクションを定義づけた。そして、コミュニケーション的行為にもとづく市民社会を構想する J. Habermas（1981=1985-7, [1962] 1990=1994）との関連で、ヴォランタリー・アソシエーション概念の理論的位置を定めている（佐藤 1976, 1986, 1991, [1982] 1994, 2002, 2007）。具体的な事例として生活クラブ生協の活動

ボランティア活動が果たす役割を論じる佐藤のような議論にたいして、西山志保 ([2005] 2007) や似田貝香門編 (2008) ⁸のように、阪神・淡路大震災後のボランティア活動にみられる、他者の〈生の固有性〉を重視し、支えあうことを尊重する関係性に、あらたな市民社会形成の可能性を見いだす議論もある。

しかしながら、すでに述べたように、こうした、ボランティア活動の社会的意義を見いだして評価する議論にたいしては、活動者の認識とのずれを指摘する議論が示されている。

その第一は、ボランティアをめぐる社会的意味づけの過剰性を指摘する議論である。

原田隆司 (2000, 2010) は、ボランティアをめぐる議論においてなされる活動の意味づけが、活動者の実感に比して過剰であることを指摘している。これにたいして、原田が提案するのは、実践における活動者の認識を反映するかたちでの、ボランティア概念の刷新である。原田は、ボランティアを、受け手の目的実現のために一時的に形成される、担い手と受け手のあいだの二者関係を示す概念と位置づけ直すことを提案している⁹。

活動者の認識と、活動の意味づけをめぐる議論に乖離があることを指摘し、活動者の認識に定位して関係論的にボランティア活動を把握する視角を提示している点で、原田の議論は本研究に示唆を与える。しかしながら、活動の担い手と受け手の一時的な二者関係に限定したボランティア活動の定義づけは、議論の射程の限定にともなって、つぎのような課題を残す。ひとつに、この定義は、活動の担い手や受け手を媒介する活動体や、外部の社会をアクターに据えないために、活動の担い手自身が、みずからに向けられる活動体の

を取り上げており (佐藤編 1988; 佐藤ほか編 1995; 佐藤 1996)、これを背景に、社会経済セクターの重要性を提起している点だが、佐藤のヴォランタリー・アソシエーション論の特徴である。そのほか、NPO, NGO, ボランティア団体、社会運動をヴォランタリー・アソシエーションにあてはまるものとして佐藤は例示している (佐藤 2002: 145)。

⁸ 似田貝は、阪神・淡路大震災におけるボランティア活動を事例に、市民社会による公共圏の構築 (Habermas [1962] 1990=1994) という理論的課題を論じるにあたって、H. Arendt (1958=1994) の公共性をめぐる議論の概念を援用することで、〈弱い存在〉である受動的な他者の〈生の固有性〉を起点とした市民社会形成を構想している。

⁹ 活動の担い手と受け手の二者関係に活動の意味を見いだす議論は、西山や似田貝らにみられたように、ケア論的な視角をもつボランティア論によっても展開されてきた (三井さよ 2004; 西山 2003, [2005] 2007; 似田貝編: 2008; 佐藤恵 2010)。

理念や社会的意義づけをどのようにとらえているのかを明らかにする視点を欠く。また、いまひとつに、制度化され継続的に展開されるボランティア活動や、当事者運動（中西正司・上野千鶴子 2003）的な性格をもつ活動や活動の受け手を一意に指定できるわけではない環境ボランティア活動といった、二者関係にかぎられない関係認識の成り立つボランティア活動を、議論の射程に収めることができない。

活動の社会的意義と活動者の認識のずれを指摘する議論の第二は、動員論による批判である。動員論は、一見してミクロ・レベルでは自発的な社会参加といえる活動者の取り組みが、マクロ・レベルでみると、国家による動員に転化しかねないという議論を展開してきた（中野敏男 1999; 渋谷望 1999, 2003, 2004; 仁平典宏 2011）。松村正治（2007, 2009, 2010, 2013）は、これらの議論を踏まえて、ボランティア活動の実践の水準において動員論的な発想が具体化することにとまなう課題を、里山ボランティア活動を事例に論じている。松村はそこで、みずからの活動を生態系の保全に適しているかどうかを評価し管理することを求める「生態学的ポリティクス」（松村 2007）や「環境統治性」（松村 2013; Darier 1999）が活動体や活動者に作用することを指摘している。ここで問題となるのは、そうした発想の「正しさ」が、個別に有する関心になじまないと感じる活動者の違和感をかき消してしまうことである。こうした課題の解決策として松村が示すのは、活動体の実践水準では、個別の活動者の関心にもとづく目標設定と順応的管理であり（松村 2007）、制度水準では、活動者の自主性を信頼するガバナンスモデルへの転換である（松村 2013）。

動員論的な発想は、社会的意味づけが活動者の活動への取り組みかたや認識枠組みを規定し、限定してしまう側面を明らかにする点で有効である。しかし、動員論による批判の乗り越えは、動員構造を転換してその外部に出ることに求められており、活動者が構造の内部で調整をはかって解消する主体性をとらえる視点を欠く点で課題が残る。

活動の社会的意義と活動者の認識のずれを指摘する議論の第三は、活動体の掲げる理念の達成といった活動の道具的機能に注目する議論にたいして、活動の参加者間で形成される共同性などの表出的機能に注目することで、多様な参加動機を有する活動者がどのように継続的に活動に取り組んでいるのかを明らかにし、活動者の取り組みかたに社会的意義を見いだす議論である（西浦功 1997; 栗本修滋 2004; 小野奈々 2008）¹⁰。

¹⁰ なお、社会運動論のうち、資源動員論は、活動参加にあたっては目的誘因のみならず連带的誘因が重要性をもつことを指摘してきた（B. Fireman and G. A. Gamson

これらの議論は、活動体の理念や社会的意義との関係を視野に入れて活動者の認識をとらえる点で、原田（2000, 2010）にみられた課題を解決する視角をもち、また、活動者が継続的に活動参加する理由を説明する点で、本研究に示唆を与える。ただし、以上に挙げた議論は、活動者が重視する表出的機能に注目するあまり、活動者が道具的機能をどのようにとらえているのかを把握する視座を欠く。それは、活動者の行為にボランティア活動の社会性や公共性を見いだして評価する戦略をとるがゆえのことである。本研究は、これにたいして、活動者が活動をめぐって示される社会的意義と自身の参加の論理との関係をどのようにとらえているのかに注目するアプローチをとる。

こうした観点において注目されるのは、小野奈々（2003）である。小野は、緊急性・柔軟性が強く求められる国際的な NPO/NGO を事例に、組織理念が単純化された形で発動された形態である「単純化されたイデオロギー」の機能を分析している。「単純化されたイデオロギー」は、イデオロギーの厳密度の低さゆえに、個人の裁量権・判断権を確保させ、活動者自身の価値観や使命感を結びつけて判断させる側面があり、組織の官僚制化や経営体化といった運動の制度化（寺田 1998）の負の側面にたいして、現場に即応した創造性を発揮させる機能があることを、小野は明らかにした（小野 2003: 110）。このように、小野の議論は、活動体の理念にたいする活動者の解釈と、その解釈が活動体にもたらす効果の双方をとらえて分析を展開している点で、本研究に示唆を与える。

以上みてきたように、ボランティア活動をめぐっては、活動や活動者にたいして、個別の活動者の実践の水準を超えた社会的な意味づけが向けられている。そこで活動者は、必ずしも社会的な意味づけに共鳴して活動に参加しているわけではなく、それとは異なる水準での意味づけにもとづいて活動に参加するばあいがある。すなわち、活動の社会的意義と活動者の参加の論理には二重性があるということであり、既存研究はこの課題にたいして、活動者の立場に即して二重性の解消をはかる議論の展開をみせてきた。

しかしながら、この二重性は、活動者の立場に沿うように社会的意義の書き換えをはかれれば解消されるような性質のものなのだろうか。むしろ、活動の社会的意義と活動者の参加の論理の二重性は、近年のボランティア活動に広くみられる常態ととらえることができるのではないだろうか。活動者は、社会的意義の書き換えをはからずとも現に活動に取り組んでいるのであり、この二重性に対処する術をもっているのではないか。

1979=1989; 長谷川 2000)。

こうした関心から、本研究は、活動者自身が活動の社会的意義と参加の論理の二重性をどのようにとらえて活動に取り組んでいるのかを明らかにする。いいかえれば、本研究は、これまで取り上げてきた既存研究の問題関心と知見を踏まえたうえで、既存研究では取り上げられてこなかった、社会的な意味づけとは異なる水準での意味づけにもとづいて継続的に活動に参加する活動者が、社会的な意味づけをどのようにあつかっているのかを問う。活動者は、共鳴するにせよしないにせよ、活動の社会的意味づけとの関連から完全に自由ではないのであり、継続的な活動参加にあたっては、活動者自身による自身の関心と社会的意味づけとのあいだの調整のプロセスが見いだせるのではないか。本研究はその機制を明らかにする。

2.2 分析枠組み

ボランティア活動の社会的意義と活動者の参加の論理の二重性に着目する本研究は、具体的な分析枠組みとして、ボランタリー・アクションを贈与行為ととらえて、行為にたいする社会的評価や受け手の期待と行為者の活動認識の関係をとらえる視角と、活動者の相互作用を役割概念をもちいてとらえる視角を援用する。

ボランタリー・アクションを贈与行為ととらえる既存研究として挙げられるのは、仁平典宏（2011）である。仁平は、ボランティア言説を、外部観察によって指摘される〈贈与のパラドックス〉の解決のために展開してきたものととらえ、知識社会学的な考察をおこなった。具体的には、仁平は、〈贈与〉を『「他者のため」と外部から解釈される行為の表象」と定義し、その〈贈与〉は、「被贈与者や社会から何かを奪う形（贈与の一撃！）で反対贈与を獲得していると観察されがちである」ことに注目する（仁平 2011: 10）。そして、「〈贈与〉は、贈与どころか、相手や社会にとってマイナスの帰結を生み出す、つまり反贈与的なものになる」という意味論形式を〈贈与のパラドックス〉と呼び、それがボランティアをめぐる言説の生成において否定的な中心／準拠点となっているという仮説にもとづいて考察を展開した（仁平 2011: 13-4）¹¹。仁平の視角の特徴は、贈与概念をもちいてボ

¹¹ 仁平は、J. Derrida（1989=[1989] 2011）の贈与論を援用して、純粋贈与と交換のあいだで不安定な位置にある贈与-交換として立ち現れ、外部観察によって絶えず反対贈与を発見・暴露される位置にあるものとして、贈与を意味論の水準でとらえる立場をとっている。

ランティア活動をめぐる認識の水準に定位することで、活動がつねに外部のアクターからの観察にさらされていることと、活動者が、その社会的なまなざしに呼应しつつも自身の関心に沿うように読み換えをはかって意味づけをおこなうことを明らかにした点にある。

外部のアクターとの関係で活動者のボランティア活動の意味づけかたをとらえる仁平の議論は、社会や国家といったマクロ・レベルのセクターとの関係を念頭に言説分析をおこなうもので、個別の活動者のミクロ・レベルの実践の水準に目を向ける本研究とは関心が異なる。しかし、その視角は、実践の水準で活動体や活動者が社会的なまなざしをどのようにとらえているのかを検討するにあたって有効だと考えられる。本研究はそのため、他のアクターからの活動をめぐる意味づけに対応しつつ、活動体や活動者が自身にとっての活動の意味づけをおこなうようすを明らかにするにあたって、仁平の発想を引き継ぐ。

贈与概念と役割概念を組み合わせてボランティア・アクションについての分析をおこなう既存研究としては、藤村正之（1999）を挙げられる。藤村は、行為の主体と客体の関係が非対面的であるようなヴォランタリー・アクションとしての寄付行為を事例に取り上げ、権力論的な批判を相対化するかたちで、それをヴォランタリーな贈与行為ととらえる考察を展開した¹²。具体的には、1980年代における交通遺児育英会の寄付制度「あしながおじさん」制度を対象に、贈与をめぐる制度水準の関係規定の構図にたいして、行為者自身が、アクター間関係の意味づけかたを調整することによって、ヴォランタリーな贈与行為を適切なものとして位置づけようとすることを明らかにした¹³。その分析は、①ヴォランタリ

る（仁平 2011: 11-3）。また、贈与をめぐる既存研究が、贈与の内包する権力性を明らかにしてきた点についても、仁平は議論を整理している（仁平 2011: 27-32; M. Mauss 1968=1973; R. Firth 1959; C. Lévi-Strauss 1968=1973; P. M. Blau 1964=1974; F. W. Nietzsche [1886] 1968=2009, [1887] 1968=2009; M. Foucault 1975=1977）。

¹² 藤村は、寄付行為をヴォランタリーな贈与行為ととらえる視角を、K. E. Boulding（1973=1974）や R. M. Titmuss（1970, 1968=1971）に求めている。

¹³ さらにくわしく述べておけば、藤村は、「あしながおじさん」制度の制度水準における寄付者・育英会・奨学生のあいだの三者関係での貨幣財・情報財のやりとりの構図と、寄付者の行為水準における関係への意味づけかたを明らかにした。寄付者と育英会、育英会と奨学生のふたつの二者関係における実体的な貨幣財と情報財のやりとりに下支えされるかたちで、寄付者と奨学生との二者関係が「想像力において結ばれる相互贈与関係」として

一な贈与行為をめぐるアクター間関係を制度水準と行為水準にわけ、②制度水準ではアクター間の贈与をめぐる関係規定の構図をとらえ、③さらに行為水準では、行為をめぐる意味づけを行為者自身が認識の水準で調整していることを明らかにしている点に特徴がある。役割分析の概念は③でもちいられており、行為者の役割行動が、行為の受け手や社会的なまなざしから看取される役割期待をみずからにとって適切なものとなるよう解釈した役割観念にもとづいてあらわれることを明らかにした。

贈与概念にくわえて役割分析の概念を導入することで藤村が明らかにしたのは、ボランティア・アクションの活動者が、一方で、社会的に期待される役割にたいして役割距離 (E. Goffman 1961=1985: 83-172) を示すことで認識の水準で自身の関心を保持しつつ、他方で、ふるまいの水準では役割取得をして役割行動をおこなうという、活動者の参加の論理と社会的意義づけとの関係である。役割距離とは、E. Goffman によれば、「個人とその個人が担っていると想定される役割との間のこの『効果的に』表現されている鋭い乖離」(Goffman 1961=1985: 115) を指す。役割距離を示す「個人は、実際にその役割を拒否しているのではなく、すべてを受け入れるパフォーマーにとって、その役割のなかに当然含まれていると見なされる事実上の自己を拒否している」(Goffman 1961=1985: 115) と Goffman はいう。これを踏まえれば、役割距離を示す個人は、行動の側面で役割を維持すると同時に、役割とはずれをはらむ個人の認識をも維持するといえる¹⁴。すなわち、藤村の議論をもとに、Goffman の役割距離概念を援用することで、本研究は、活動者が、自身のふるまいをめぐる解釈に二重性をもたせることで、社会的意味づけにふるまいの水準で応じているように見えながら、認識の水準で自身の関心を同時に維持していることをとらえる。いいかえれば、本研究がとらえるのは、社会的な意味づけからまったく離れた参加の

寄付者に認識されようとするのが、この寄付制度の制度水準における特徴である。この寄付者と奨学生との二者関係において、育英会は両者を媒介する透明な存在としての役割を担うこととなる (藤村 1999: 204-7)。こうした関係規定の構図のもと、行為水準において寄付者は、奨学生との関係が非対面であることを利用して、その関係認識を調整し、それによって寄付行為を自身にとって適切な役割行動として把握していることを、藤村は明らかにした。(藤村 1999: 211-9)。

¹⁴ この点について、Goffman は、役割距離の表明に、個人のパーソナルなスタイルを見いだすことができると述べている (Goffman 1961=1985: 172)。

論理を示すのではなく、社会的意味づけにふるまいの水準で応じつつ、そこから認識の水準で距離をはかることで自身の立ち位置を定めて活動に取り組むような、活動者の参加の論理である¹⁵。

ところで、仁平と藤村は、社会的なまなざしや活動体の意味づけにたいして、活動者が自身の関心に即して適したものとなるように、活動をめぐる意味づけの調整をはかっていることを明らかにする点で共通する。しかし、明らかにされた調整の方向性は両者で異なる。仁平は、〈贈与のパラドックス〉を観察する外部のまなざしにたいして対抗的に、活動者がそれとは異なる見かたを示して読み換えをはかる方向をとらえた。これにたいして、藤村がとらえたのは、活動体が示す論理に呼応するために、相補的に活動者がその論理との適切な距離をはかる方向である。これは、活動をめぐって示される社会的な意味づけにたいする、活動者の認識のずれの調整のしかたのふたつの方向性を示すものだといえる。このうち、社会的意義にたいして相補的に意味づけをおこなう後者については Goffman の役割距離概念でとらえることができるが、対抗的に読み換えをはかる前者については、役割距離概念はなじまない。

そこで、本研究はさらに、J.-C. Kaufmann (1995=2000) の議論を援用することで、社会的意義にたいして対抗的に読み換えをはかる活動者の戦略を視野に入れた分析枠組みを提起したい。Goffman の視角にもとづいて議論を展開した Kaufmann は、役割距離を示すのではなく、期待される役割に徹することが、かえって外部からのまなざしを受けずにみずからの関心を維持することに資することを明らかにした。「完全に役割にはまると外圧は減少」し、「役割にはまれば、自分でイニシアティブをとれる範囲は最も広くなり、全

¹⁵ なお、役割距離を表明することによるふるまいの水準での役割の維持と認識の水準のずれの維持という活動者の取り組みかたのモデルは、大澤真幸のとらえるアイロニカルな没入（大澤 [1996] 2009, 2008）という行動の態様を想起させる。アイロニカルな没入とは、「本気で信じている他者の存在を、外部に前提にしている」ことを手がかりに、「意識のレベルでは、対象に対してアイロニカルな距離を取っている（「ほんとうは信じていない」と思っている）。しかし、行動から判断すれば、その対象に没入しているに等しい状態にある（実際には信じている）」（大澤 2008: 233）というかたちで、ある論理にたいして、認識の水準での距離を示しながら、行為の水準でそれに没入するという行動の態様を指す。

面的な自由が得られる」(Kaufmann 1995=2000: 314) ののである¹⁶。この議論を敷衍して
いえば、活動者は、求められる役割に適合的なふるまいをとることで、外部の社会的な意
味づけによってではなく、それとは異なる活動者自身の関心に沿った意味づけによって、
自身のふるまいを読み換えてとらえることができる。すなわち、本研究は、Kaufmann の
議論を援用することで、活動者がふるまいの水準で求められる役割に適合的にふるまうこ
とを手がかりに、認識の水準では、かえって、社会的な意味づけとは異なる自身の関心に
沿った意味づけを対抗的におこなっていくような参加の論理を視野に収める。

まとめれば、本研究では、ボランティア・アクションを贈与行為ととらえる視角と、活
動者の相互作用をとらえる役割分析の視角を援用することで、活動者のふるまいをめぐる
社会的な意味づけと活動者自身の意味づけの二重性をとらえ、活動者がその二重性とどの
ように折り合いをつけて活動に取り組んでいるのかを明らかにする。折り合いのつけかた
で注目するのは、活動者が、ふるまいの水準では社会的な期待に応じて役割に徹している
ようであるのにたいして、認識の水準では自身の関心に沿った意味づけをおこなうことで
ある。その具体的な方法として想定されるのは、第一に、社会的な意味づけにたいして認
識の水準で役割距離を示すことで相補的に活動者自身の意味づけをおこなうものであり、
第二に、それとはぎゃく向きに、社会的な意味づけにたいしてふるまいの水準で期待され
る役割に徹することを手がかりに、活動者自身の関心に沿った意味づけを対抗的におこな
うものである。

なお、本研究で、「行動」ではなく「ふるまい」の語をもちいるのは、活動の理念や社会
的意義の達成と活動者自身の参加の論理をめぐる解釈の重層性に焦点をあて、さらに、活
動者自身が、そうした解釈の重層性を前提として、活動において求められる役割を果たし
ていることを行為遂行的に呈示していることをとらえるためである。この点は、石黒毅が、
『行為と演技』における Goffman (1959=1974) の performance 概念について、それが
道具的意義の達成のための遂行という側面と、対面的相互作用における自己呈示という演
技的側面の双方をわかちがたくもつことを指摘していることに示唆を得ている(石黒
1974: 312)。

¹⁶ Kaufmann は、浜辺でトップレスになるという行動が、どのような規範が生成されるこ
とで可能になっているのかを論じている。

3 事例と調査方法

3.1 あしなが運動と鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動

活動をめぐる社会的意味づけと活動者の参加の論理の二重性に注目する本研究は、ふたつの異なるタイプのボランティア活動を事例に取り上げる。両者は、活動者の入れ替わりを視野に入れた動員構造を有し、比較的長期にわたる活動を志向する点で共通するが、活動者のふるまいにたいする活動体の意味規定の強度¹⁷という点で対照的である。

事例の第一は、遺児という集合的アイデンティティを基盤とした活動体による関係規定が明確な「あしなが運動」である。とくに、主たる活動の担い手と目される遺児の学生に注目する。「あしなが運動」とは、親と死別した遺児家庭支援をこれまでおよそ半世紀にわたって展開してきた運動である（副田義也 2003）。匿名の継続的な寄付を募る「あしながさん」制度や、学生主体の街頭募金活動「あしなが学生募金」を軸として寄付を集め、それを原資に、高校生や大学生らの遺児を対象とした奨学金貸与事業や奨学生教育事業を運営してきた。

あしなが運動の活動体は、遺児という類型をめぐる贈与関係を措定するかたちで活動体の理念を提示することで、遺児の大学奨学生（遺児学生）にたいして、理念に共鳴し、街頭募金活動に参加して主たる活動者となることを喚起している。そのため、遺児学生は、活動への継続的な参加にあたって、集合的アイデンティティをみずからのものとして引き受けることを迫られるという課題に直面する¹⁸。こうした構図のもと、遺児学生たる活動

¹⁷ Goffman は、状況についての規則のタイトさとルーズさについて考察を展開し、タイトな規則が共有される状況のもとで行為者がもの思いにふけられることや、ルーズな規則が共有される状況のもとで、行為者が集まり全体に注意を払わなければならないことをとらえている（Goffman 1963=1970: 221）。すなわち、ふるまいをめぐる規則の強度は、必ずしも行為者の実際の行動における注意の必要度と相関するわけではない。

¹⁸ なお、本研究でおこなった調査後の 2011 年以降、あしなが育英会は奨学生を対象とする宿泊型の研修「つどい」において、死別経験を共有する時間「自分を語ろう」を設けることを取りやめた。これにともなって、大学奨学生の遺児という集合的アイデンティティ

者は、一見すると運動の規定する意味世界にしたがって継続的に活動に参加している。しかし、なかには、活動において自身が遺児だと名乗って活動することに抵抗感を抱くという語りを示す活動者もいる。

では、あしなが運動の活動者は、抵抗感を抱くにもかかわらず、なぜ活動に取り組みつづけるのか、いかにして活動において抱く抵抗感に対処しているのか、どのような点に自身が活動に参加しつづける意味を見いだしているのか、あしなが運動の事例では、こうした点を問うことで、集合的アイデンティティの共有を前提とした活動に、活動者はどのようにして継続的にかかわりうるのかを明らかにする。

事例の第二は、活動体による関係規定が明示的ではなく、個別の活動者の関心や認識が尊重される、東京都西多摩郡奥多摩町「鳩ノ巣フィールド」の森林ボランティア活動である。「鳩ノ巣フィールド」は、東京都西多摩郡奥多摩町の植栽後に手入れのすすまなかった私有林地で、2002年10月以来、地域の外部の都市住民が共同でフィールドの利用・管理をおこなっている。活動の柱は、一般参加者を募る毎月開催の定例イベント「多摩の森・大自然塾 奥多摩・鳩ノ巣フィールド」であり、参加者・スタッフともに、基本的にボランティアとして活動に取り組んでいる。

環境ボランティア活動のひとつである森林ボランティア活動では、その社会的意義は多元的な水準で論じられ、活動者が個別に多様な関心を有することが評価される傾向にある。活動体は、必ずしも理念への共鳴を前提として活動者の活動参加を喚起しているわけではない。また、活動を贈与行為ととらえるかどうかという点も、その受け手の措定を含めて、論者によって一様ではない。そこでは、多様な関心をもつ活動者をいかにして組織化するかという、活動体にとっての課題が浮上する。そしてまた、外部のアクターから向けられる期待や社会的意義をめぐる議論にどのように対応するのかが、活動体や活動者に共通の課題となっている。

活動体は、外部のアクターからのまなざしにどのように対応し、また、多様な関心をもつ活動者を組織化しているのか、活動者は、社会的意義をめぐる議論をどのようにとらえ

の引き受けを鍵とする運動の論理や遺児学生の活動参加の論理には変化がみられることが想定される。ただし、この検討は今後の課題とし、本研究は、遺児という集合的アイデンティティの引き受けかたに照準する観点から、調査時点におけるあしなが運動の論理と遺児学生の活動参加の論理を明らかにする。

ているのか。そして、活動体とどのような関係をもっているのか。フィールドで相対する自然との関係をどのようにとらえているのか。鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動の事例では、こうした点を問うことで、活動者の関心の多様性を前提とした活動は、どのように継続的に展開しうるのかを明らかにする。

なお、森林ボランティア活動をめぐる議論の焦点のひとつは、活動における安全管理である。それは、直接活動の社会的意義を論じるものではないが、活動フィールドでの活動体や活動者のふるまいかたを規定する側面をもつ。そして、そのあつかいかたは、活動をめぐる関係規定の構図についての認識を反映する。そのため、鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動の事例では、安全管理にかかわる社会的な期待と、それをめぐる活動体・活動者の認識や対応にも目を向ける。

このように、本研究が取り上げるふたつの事例の性格は、活動者に向けられるまなざしの強度という点で両極に位置する。あしなが運動の事例は、贈与行為としての関係規定の構図が明確であり、鳩ノ巣フィールドの事例は、関係規定の構図や、贈与行為ととらえられるかどうかの見解が一樣ではない。しかしながら、両極に位置するどちらの事例でも、活動者は、自身に向けられるまなざしを意識し、それとの関係でみずからが活動に継続的に取り組む意味を見いだしていることに、本研究は注目する。性格の大きく異なるふたつの事例の分析をつうじて共通性と差異を明らかにすることで、本研究は、ボランティア活動全体を視野に入れた活動参加論を提示することをめざす。

なお、本研究で取り上げるふたつの事例は、活動者間の関係は対面的だが、活動をつうじた行為の受け手を措定しようとするばあいには、その受け手と担い手との関係が非対面的である点で共通する。こうした事例を選択したのは、これらの活動では、活動者自身が社会的意義とのかかわりを取り組みにあたつての課題としていて、活動をめぐる社会的意義との関係に照準して活動者の認識とふるまいを明らかにすることをめざす、本研究の問題関心に適合的なためである。ふたつの事例は、差し向かいの相互作用における受け手への贈与を起点としないため、行為をつうじた受け手との関係における贈与の負荷を検討しえない点で限界をもつが、この点は、本研究の成果を踏まえて取り組むべき今後の課題となる。

また、本研究で取り上げるふたつの事例は、メンバーシップが明確でなく、構成員を確定できない流動性をもつ。いいかえれば、毎回の活動の積み重ねの結果、事後的にふりかえるかたちで、メンバーを特定できるような性格を有する。そうした流動性を含みおいて

事例に取り上げる人びとをとらえるため、本研究は、活動に取り組む人びとを活動者と呼ぶ。そしてまた、活動者の流動性の帰結として、活動者の集まりも、組織や集団としての輪郭にあいまいさを残す。その動態に注目する観点から、本研究では、活動者の集まりを、活動体と呼ぶ。

3.2 調査の方法

本研究は、主として比較的長期間にわたる参与観察と聞き取り調査によって調査をおこない、くわえて、関連する資料を収集した。

継続的に活動に取り組む活動者の認識とふるまいに着目して、活動をめぐる意味づけのあつかいかたを明らかにする本研究は、活動者のふるまいと認識を、できるだけ実践的な水準でとらえることをめざすため、参与観察の方法をとった。すなわち、調査において活動者が筆者に示す活動をめぐる認識は、活動者による筆者との関係認識のしかたに相関すると考えられる。そのため、活動の外部に位置する調査者としてではなく、調査者ではあるが活動者として立場をおなじくする関係において聞き取りにのぞめるような関係形成が重要だと考え、筆者はふたつの事例の活動それぞれで、長期にわたって他の活動者とともに活動に取り組むかたちで参与観察をおこなった。また、活動におけるふるまいの規則は、必ずしも活動者によって明確に言語化されているわけではない。そのため、ふるまいの規則を読み解くためにも、長期にわたる参与観察は重要性をもった。事例の解釈においては、活動の実践における筆者自身の経験を反映している部分がある。

具体的には、あしなが運動においては、筆者自身が2004年4月から2009年3月にかけてあしなが育英会大学奨学生に採用され、遺児学生としてあしなが運動に携わっていた経験を活かし、2009年4月から2010年12月にかけて、断続的に参与観察をおこなった。鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動においては、2011年11月より活動者としてイベントに参加するかたちで、現在にいたるまで断続的に参与観察をおこなっている。2013年11月以降は、一般参加者を募る毎月開催の定例イベントで、参加者への指導をするスタッフとなった。

参与観察にあたっては、あしなが運動においてはあしなが育英会職員、鳩ノ巣フィールドにおいては「鳩ノ巣連絡協議会」から、あらかじめ調査を実施することについて承諾を得た。個別の参与観察にあたっては、機会を得るごとに調査をする意図を活動者に伝える

よう心がけた。

聞き取り調査は、上述の方針から、参与観察をおこなうようになって一定期間が経過したのちに実施した。具体的には、あしなが運動においては、表 0.1 に示すように、2010 年 4 月から 12 月にかけて、10 名を対象におこなった。鳩ノ巣フィールドの事例においては、表 0.2 に示すように、2012 年 5 月から 2016 年 7 月にかけて、鳩ノ巣フィールドの活動者 25 名を対象に実施した。なお、その他に、表 0.3 に示すように、西多摩地域の森林ボランティア活動や、認定 NPO 法人「JUON NETWORK」の活動にかかわる関係者 14 名にたいしても、聞き取りを実施した。

表 0.1 あしなが運動活動者の聞き取り対象者

番号	性別	学年	立場	聞き取り実施日
A1	男性	4 年	大学奨学生	2010 年 4 月 15 日
				2010 年 5 月 27 日
A2	男性	4 年	大学奨学生	2010 年 5 月 18 日
A3	女性	3 年	大学奨学生	2010 年 6 月 1 日
A4	女性	4 年	ボランティア・スタッフ	2010 年 7 月 10 日
A5	女性	4 年	ボランティア・スタッフ	2010 年 7 月 11 日
A6	男性	4 年	大学奨学生	2010 年 7 月 12 日
A7	男性	3 年	大学奨学生	2010 年 9 月 10 日
A8	女性	4 年	大学奨学生	2010 年 10 月 14 日
A9	男性	2 年	大学奨学生	2010 年 12 月 12 日
A10	男性	2 年	大学奨学生	2010 年 12 月 15 日

註：学年、立場は聞き取り時。

出典：筆者作成

表 0.2 鳩ノ巣フィールド活動者の聞き取り対象者

番号	性別	年齢	立場	鳩ノ巣 開始年	森林 V 開始年	聞き取り実施日
H11	男性	60 代	大自然塾スタッフ・	2002	1996	2013 年 6 月 7 日

森づくりフォーラム						
H12	男性	60代	大自然塾スタッフ	2002	1993	2014年7月26日 2015年12月15日 2016年1月17日
H13	男性	40代	大自然塾スタッフ・ 森づくりフォーラム	2002	1996	2014年9月22日
H14	男性	60代	大自然塾スタッフ	2002	2002	2015年5月17日
H15	男性	50代	大自然塾スタッフ	2003	-	2016年5月25日
H16	男性	50代	大自然塾スタッフ	2008	-	2016年7月11日
H17	女性	50代	大自然塾スタッフ	2013	2013	2016年7月15日
H18	男性	30代	大自然塾スタッフ	2009	-	2016年7月19日
H19	男性	40代	大自然塾参加者 (・スタッフ)	2011	-	2013年6月16日
H20	男性	60代	大自然塾参加者	2005	1997	2014年7月6日
H21	女性	60代	大自然塾参加者	2005	1997	2014年7月6日
H22	男性	60代	大自然塾参加者	2011	-	2014年7月29日
H23	男性	50代	大自然塾参加者	2013	2011	2014年7月31日
H24	男性	50代	大自然塾参加者	2009	-	2015年2月1日
H25	男性	50代	大自然塾参加者	2013	-	2015年2月4日
H26	男性	50代	大自然塾参加者	2008	-	2015年2月19日
H27	男性	70代	大自然塾参加者	2007	2007	2015年6月17日
H28	男性	20代	JUON 講座受講生・ 大自然塾参加者 (・スタッフ)	2011	-	2012年7月27日
H29	男性	20代	JUON 講座受講生・ 大自然塾参加者 (・スタッフ)	2009	-	2012年8月11日
H30	男性	30代	JUON 講座受講生・ 大自然塾参加者	2011	-	2012年5月27日
H31	女性	20代	JUON 講座受講生・	2010	-	2012年9月3日

			大自然塾参加者			
H32	女性	20代	JUON 講座受講生・	2008	-	2012年9月3日
			大自然塾参加者			
H33	女性	20代	JUON 講座受講生・	2011	-	2013年1月16日
			大自然塾参加者			
H34	男性	20代	JUON 講座受講生	2007	-	2012年8月29日
H35	女性	20代	JUON 講座受講生	2011	-	2012年12月23日

註：年齢は聞き取り時。また、立場のうち、()内は聞き取り後のもの。「鳩ノ巣開始年」は、鳩ノ巣フィールドの活動にはじめて参加した年を指し、「森林V開始年」は、鳩ノ巣フィールドの活動以前に森林ボランティア活動をはじめた年を指す。

出典：筆者作成

表 0.3 森林ボランティア関係者の聞き取り対象者

番号	性別	年齢	立場	森林V 開始年	聞き取り実施日
F36	男性	40代	森づくりフォーラム・ JUON NETWORK	2004	2014年6月25日
F37	男性	70代	森づくりフォーラム	1985	2014年10月13日
F38	男性	30代	森づくりフォーラム	2002	2014年10月17日
F39	男性	60代	森づくりフォーラム・東京都	1993	2014年10月31日
F40	女性	30代	西多摩地域森林ボランティア・ 森づくりフォーラム	1998	2013年6月26日
F41	男性	40代	西多摩地域森林ボランティア・ 森づくりフォーラム	1991	2014年6月30日
F42	男性	60代	西多摩地域森林ボランティア・ 森づくりフォーラム	1990	2014年10月13日 2015年12月25日
F43	男性	50代	西多摩地域林業家・ 森づくりフォーラム	1993	2015年12月25日

F44	男性	70代	西多摩地域森林ボランティア・ 森づくりフォーラム	1992	2015年12月30日
F45	男性	50代	森づくりフォーラム	1992	2016年1月16日
F46	男性	60代	東京都	-	2016年1月29日
F47	男性	30代	JUON NETWORK	2009	2012年7月15日
F48	男性	60代	JUON NETWORK	1995	2013年3月1日
F49	男性	60代	JUON NETWORK	1998	2015年6月27日

註：年齢は聞き取り時、「森林V開始年」は、森林ボランティアにかかわる活動をはじめた年を指す。

出典：筆者作成

聞き取りは、どちらの事例でも、基本的に自身の活動経験を振り返るかたちで自由に話してもらう形式をとった。あしなが運動の事例では、聞き取り回数はひとりあたり1回ないし2回で、1回あたりの時間は1時間半から2時間ほどの時間をとった。森林ボランティア活動の事例では、聞き取り回数はひとりあたり1回から3回で、1回あたりの時間は1時間から3時間ほどだった。

聞き取りにあたっては、調査対象者にたいして、調査の目的・聞き取り内容をあらかじめ伝え、いつでも協力を辞退できることを明示したうえで、協力を求めた。録音データをもとに作成したトランスクリプトにもとづいて分析をおこなうことや、研究成果の公表にあたってトランスクリプトから語りを引用する可能性のあることを伝えたとうえで、録音の許可も得た。

なお、本研究において、聞き取りで得た語りを引用するばあいには、表0.1・表0.2・表0.3に示した番号を仮名として表記する。また、引用した語りのなかで登場する発話者・筆者以外の人物にたいしては、登場順にアルファベットをZから逆順で割り当てて表記する。

4 本研究の構成

以上みてきたように、本研究は、比較的長期にわたる活動展開を志向するボランティア活動を事例に、活動の社会的意味づけと活動者自身の意味づけとの二重性において、活動

者がどのように継続的に活動に取り組んでいるのかを明らかにする。分析にあたって注目するのは、活動者のふるまいと認識であり、とくに、活動をめぐる関係規定の構図にたいして、活動者がどのように折り合いをつけているのかである。

本研究は以下、2部6章構成で議論を展開する。

第1部では、集合的アイデンティティにもとづく活動の理念や、活動をめぐる関係規定が活動体によって明示的に設定される、あしなが運動を事例に取り上げる。第1部の分析の焦点は、活動体による関係規定に折り合いをつける活動者の認識のしかたとふるまいかたである。

具体的には、第1章では、あしなが運動における遺児学生をめぐる関係規定の構図を、あしなが育英会の奨学金制度・あしなが運動の思想・寄付者との関係の3点からとらえて、遺児学生を「運動の主役」とする活動体の論理を明らかにする。そして、第1章にみた活動体の関係規定の構図を踏まえ、つづく第2章・第3章では、活動において活動者がどのような認識をもち、ふるまっているのかを明らかにする。第2章では、街頭募金活動において活動者である遺児の大学生が直面する、「恩返し」の思想によって規定される寄付者や後輩遺児とのあいだの贈与関係を、活動者自身はどのように認識し、活動に取り組んでいるのかを明らかにする。そして、第3章では、活動者どうしの関係において「恩返し」の思想にもとづく役割期待がどのようにとらえられているのかを、活動者のふるまいと認識の双方から読み解いてゆく。

第2部では、活動体による関係規定が明示的ではなく、個別の活動者の関心や認識の多様性が尊重される、鳩ノ巣フィールドにおける森林ボランティア活動を取り上げる。あしなが運動では、活動者が活動体の理念や関係規定といかにかかわってゆくかが焦点だったのにたいして、森林ボランティア活動の焦点は、外部のアクターのまなざしをめぐって、活動体や活動者がどのように折り合いをつけているかである。

第4章では、まず、森林ボランティア活動のセクター水準でみられる、活動者の意味づけと外部のアクターから向けられる活動へのまなざしとの関係を明らかにする。具体的な事例として、森林ボランティア活動のネットワーク組織であるNPO法人「森づくりフォーラム」の機関誌にみられる安全管理をめぐる論理の変遷を取り上げ、活動者が当初掲げた安全観に込めていた意図と、活動の社会的認知の高まりに応じて登場したあらたな安全観との関係を明らかにする。

第4章でのセクター水準での分析を踏まえて、第5章・第6章では、鳩ノ巣フィールド

を事例に、活動者や活動体が、外部のアクターから向けられる社会的なまなざしにどのように対処しているのかを明らかにする。とくに、活動において共有される規則のはたらきに注目する。なお、森林ボランティア活動研究の観点からいえば、第5章・第6章の分析は、過少利用資源としての森林資源を都市住民が継続的に共同利用・管理することはいかんにして可能かという課題に、コモンズ論の観点から取り組むものと位置づけられる。

具体的には、第5章では、鳩ノ巣フィールドにおいて共有される、「鳩ノ巣流」の作業方法をもちいるという明示的な規則のもつはたらきを検討する。それは、第4章でみた安全管理をめぐる外部のアクターからのまなざしにたいする活動体の水準での制度的な対応である。そして、第6章では、鳩ノ巣フィールドの活動者が、活動をめぐる社会的意義をどのようにとらえているのかを明らかにする。鳩ノ巣フィールドにおいては、活動の社会的意義から距離をとり、自身の森林とのかかわりに焦点をあてて自身が活動に取り組む意味を語るという語りの「型」がみられるのであり、これを、活動を維持するために活動者に共有される非明示的な規則ととらえて、そのもつはたらきを考察する。

結論では、以上の2部6章で導き出した知見を整理したうえで、ボランティア活動をめぐる社会的意義と参加の論理の関係を活動者がどのようにとらえているのかについての検討をおこない、現代社会におけるボランティア活動への参加のしかたの特有性を明らかにする。

第1部 あしなが運動の論理と活動者の認識

第1章 あしなが運動の担い手である遺児学生を規定する制度と理念 ——「恩返し」の思想による寄付者・後輩遺児との結びつき

1 はじめに

本章は、全遺児救済をめざして活動を展開する「あしなが運動」の動員構造と論理に注目し、運動の主たる担い手とされる遺児学生の位置づけを明らかにする。

「あしなが運動」は、社会運動家玉井義臣が主導し、親と死別した遺児家庭の救済をめざしてこれまでおよそ半世紀にわたって展開してきた運動である（副田義也 2003）。運動の基盤は、当初は 1969 年設立の財団法人「交通遺児育英会」、1990 年代以降は任意団体「あしなが育英会」であり、両団体は、匿名の継続的寄付者を募る「あしながおじさん」／「あしながさん」制度と学生による街頭募金活動を軸として寄付を集め、それを原資に、高校生・大学生等の遺児を対象にした奨学金貸与事業とそれに付随する奨学生教育事業を運営してきた。あしなが運動の特徴は、救済の対象とする遺児の範囲を拡大しつつ、運動を展開してきたことにある。当初は交通事故を原因とする遺児を対象にしていたが、災害遺児・病気遺児・自死遺児を対象とした制度をつくることで国内の遺児すべてを運動の対象としている。さらに現在では海外の遺児を対象とした活動も手がけている。

こうしたしくみにおいて、大学奨学生の遺児（遺児学生）は、たんに運動の支援の対象にとどまるのではなく、運動の主たる担い手になることを期待されてきた。運動を主導する玉井は、「運動の主役は遺児と遺児を主体とする全国のボランティア学生であり、〔継続的な寄付者〕あしながさんと運動者である職員は黒子だ」（玉井 2010: 273）と述べている。

では、遺児学生は、どのような論理であしなが運動の担い手となることを求められているのか。なぜ「運動の主役」と位置づけられるのか。かれらにはだれから、どのようなまなざしが向けられているのか。本章は、こうした点を、あしなが運動における遺児学生の動員構造と動員の論理に注目して明らかにする。そして、運動が遺児学生に期待する役割がどのようなものかをとらえる。

まず、2 節では、大学奨学生に奨学生貸与の条件として課される「4 つの約束」が、大学奨学生をあしなが運動に動員する戦略となっていることを確認する。そしてこの奨学生教

育において、大学奨学生は、あしなが育英会大学奨学生としてではなく、むしろ遺児としてまなざしを向けられていることに直面し、それを引き受けることを要請されることを明らかにする。また同時に、大学奨学生の多くが、自身が遺児としてまなざしを向けられることも、遺児問題が存在することも、運動に参加してはじめて知ることとも確認する。

3 節では、あしなが運動のもつ思想の変遷を追いかける。運動が当初もっていた思想を「敵討ち」というキーワードでとらえ、また、1980 年代以降に運動がもつようになった思想を「恩返し」というキーワードでとらえる。そのなかで、奨学生は常に「遺児であること」に由来して運動に参加することを要請される存在であること、次第に運動の担い手が遺児だけに限定されてゆくことをとらえる。

4 節では、「恩返し」の思想において要請される寄付者と奨学生の結びつきが、街頭募金という具体的な運動の展開において象徴されていることをとらえる。

最後に、5 節では、寄付者と奨学生の寄付を介した結びつきが「恩返し」の思想において重要であるにもかかわらず、それよりも、現在では育英会と奨学生の奨学金を介した関係が前景化する可能性を孕み、「恩返し」の思想の貫徹が困難なものとなっていることを示す。それは、あしなが育英会に運動の基盤が移って以降、育英会自身が「恩返し」の向ける先の事業を手がけるようになったことで、生じた事態である。

2 「4 つの約束」と大学奨学生にたいする教育の内実

——遺児としてのまなざしを向けることで運動へ動員する戦略

あしなが育英会は、親と死別した遺児を対象とした、貸与型の奨学金事業を運営している。①高等学校奨学金（国公立月額 25,000 円、私立月額 30,000 円）、②大学奨学金（一般月額 40,000 円、特別月額 50,000 円）、③専修・各種学校奨学金（月額 40,000 円）、④大学院奨学金（月額 80,000 円）の 4 種類の奨学金制度がある（図 1.1）。2009 年度の貸与総

¹ 具体的には、20 歳になるまでに「保護者等（父または母）が、病気や災害（道路における交通事故を除く）もしくは自死（自殺）などで死亡したり、それらが原因で著しい後遺障害を負い、教育費に困っている家庭の子供」を指す（あしなが育英会 2010b）。このうち、保護者等が著しい後遺障害を負っている者を指して「準遺児」と呼ぶことがある。

額は 22 億 4200 万円で、奨学生数は、高校奨学金制度で 4,515 人、大学奨学金制度で 1,343 人だった（あしなが育英会 2010a, 2017a）²。

※願書および添付書類の扱いについては個人情報保護法を厳守します
この願書で専修各種学校奨学金の申し込みはできません

大学・短大進学予定者用

病気遺児・災害遺児・自死遺児の

あしなが奨学金（無利子）

大学奨学生予約募集のしおり

応募できる方

来年度に大学または短期大学の第 1 学年に入学を希望していて、次に該当する生徒。

保護者等（父または母）が、病気や災害（道路における交通事故を除く）もしくは自死（自殺）などで死亡したり、それらが原因で著しい後遺障害^(注1)を負い、教育費に困っている家庭の子供^(注2)。

出願期限
5 月 31 日

募集人員
380 人

奨学金の額と貸与

(1) 奨学金の額
月額 一般 40,000 円。
ただし、申請により、学資の支弁が特に困難と認められる人に限り、月額 50,000 円の特別奨学金が貸与されます。この申請書は予約採用が決定した人に、来年 3 月に直接お送りします。

(2) 貸与期間
入学した年の 4 月から、正規の最短修業年限の終期まで。

(3) 送金方法
原則として、3 か月ごとに 3 か月分の奨学金を、直接本人指定のゆうちょ銀行等の口座を通じて送金します。

あしなが奨学金の対象範囲

保護者等の死亡（後遺障害）の原因

病気

災害 — 労働災害

 — 自然災害

 — その他の不慮の事故など

自死（自殺）

※他の奨学金との併用も可能で、出願者（子供）の連帯保証人は保護者でもかまいません。
※高専を卒業後、大学の 3 年生に編入を希望する人は、入学後大学在学募集で出願してください。

(注1) 著しい後遺障害とは、次の障害認定を受けている場合をいいます。
イ、「国民年金法」による第 1～2 級の障害認定を受けている場合。ロ、「身体障害者福祉法」「厚生年金保険法」「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」等による第 1～3 級の障害認定を受けている場合。ハ、「労働者災害補償保険法」等による第 1～3 級の障害認定を受けている場合。

(注2) 保護者等が死亡したり後遺障害者になったときの子どもの年齢が 20 歳以上の場合は奨学生の対象になりません。

遺児の進学と心のケア

あしなが育英会

〒102-8639 東京都千代田区平河町 1-6-8 平河町貝坂ビル
TEL (03) 3221-0888 FAX (03) 3221-7676
URL <http://www.ashinaga.org> E-mail shougaku@ashinaga.org

図 1.1 大学奨学生予約募集のしおり

出典：あしなが育英会（2010b）

² 大学奨学金制度は、2009 年 12 月時点の在籍数。なお、2015 年度でいえば、貸与総額は 22 億 1477 万円、奨学生は、高校奨学金制度で 3,332 人、大学奨学金制度で 1,509 人だった（あしなが育英会 2016: 4）。

運動参加を求められるのは、このうちの大学奨学生と専修・各種学校奨学生である。筆者が運動にかかわった 2004 年度から 2010 年度の時期には、約 1,500 人の奨学生のうち、毎年全国であわせて 400 人前後の大学奨学生たちが運動の担い手として、街頭募金活動「あしなが学生募金」などの活動に取り組んでいた。

大学奨学生が運動参加を求められるのは、ひとつに、それが奨学金貸与の条件となっているからである。大学奨学生は、奨学金貸与の条件として、「4 つの約束」の履行をあしなが育英会に求められる³。それは、①宿泊型の研修プログラムである大学奨学生のつどいへの参加、②高校奨学生のつどいへのリーダーとしての参加、③遺児家庭訪問調査への参加とその調査レポートの提出、④「あしなが学生募金運動」への参加である。すなわち、大学奨学生は、育英会との二者関係において交換関係を結ぶようなかたちで、奨学金貸与と引き換えに運動参加を求められている。

育英会と奨学生が「4 つの約束」を交わすことは、奨学金制度の文脈でいえば、大学奨学生教育の一環だといえる。奨学生にたいして奨学金制度の運営主体みずからが教育をおこなうことは、人材育成と教育の機会均等という奨学金制度のふたつの主要な目的のうち

³ 具体的には、奨学生採用試験のさいに示されて履行の意思を確認される。2009 年には貸与規程に記載され、2011 年度採用の大学奨学生からは、その履行が育英会の奨学金制度において公式に求められることとなっている。ただし、それ以前でも「4 つの約束」の履行が奨学生にとっての「義務」であるという認識は、育英会や大学奨学生のあいだで共有されていた。これは、あしなが運動が交通遺児育英会において展開されていた時期からつづいている（副田義也 2003: 257）。

(服部憲児 1995), 前者を達成するための手段である⁴⁵。

大学奨学生は、「4つの約束」を履行するなかで、各行事で、あしなが育英会の歴史と遺児問題を学び、さらに奨学金が寄付によって成り立っているということを学ぶ。つぎの引用は、交通遺児育英会時代のものだが、交通遺児を単に遺児と読み換えれば、あしなが育英会大学奨学生にたいする「4つの約束」の説明としてもじゅうぶん通用する。

各行事のねらいは、大学奨学生のつどいは同期の仲間と一堂に会して連帯を結ぶとともに、交通遺児の大学生としての自覚をもたせること。高校奨学生のつどいでは弟妹たちを指導することで自分の一面をのぞき、交通遺児家庭のいわば“長男”“長女”にある立場を自覚させ、何をなすべきかを考えさせる。訪問面接調査では他の家庭を見ることで自分の母親の苦勞を知り、交通遺児家庭全体、いや母子家庭全体の問題を客観的にとらえさせ何をなすべきかを考えさせる。募金では自分たちが使っている奨学金の原点を体験し、奨学金の重さを肌で感じさせ、街頭で声を出して行動力を養い、社会の温かさ冷たさ、社会福祉のあり方まで考えさせる。

これら必修科目を実践するなかで人間にとって幸福な社会とは何か、そんな社会を実現するために、不幸な体験を背負った交通遺児として大学で何を学ぶべきかを考え

⁴ 奨学生にたいして制度の運営主体が直接教育をおこなう奨学金制度は、在籍中の学業成績をもとにして選考するような私立大学の奨学金制度と志向をおなじくする。ただし、あしなが育英会の奨学金制度が奨学生への直接の教育を志向するのにたいして、私立大学の奨学金制度は、奨学金が褒賞的な意味をもち、奨学生というよりも制度の対象者全体にたいする学習のインセンティブとしての効果が期待されている点で、ちがいもある。なお、人材育成を目的とした奨学金制度で一般的なのは、学力基準基準などを設けて、事前の選抜段階での能力の高さによって奨学生を選抜する方法である(服部 1995; 小林雅之編 2007: 4)。

⁵ あしなが育英会の奨学金制度は、選抜基準という観点からみれば、家計所得水準が相対的に低い遺児を対象にしており、また、選考にあたって学力基準を明示していないため、教育の機会均等を重視する奨学金制度だといえる。つまり、あしなが育英会の奨学金制度は、教育の機会均等と人材育成の目的の双方の達成を志向したしくみをもつのであり、この点でユニークな奨学金制度だといえる。

させることをねらっている。単なる頭の学問でなく、不幸な原点を虫メガネにして人類に役立つための学問を追求させたい、と願っている。

一連の厳しい教育のなかでまじめにやったものには、かなりの力と自信がついているようである。今後もこれらを大学奨学生教育の基本にしたい（交通遺児育英会二十年史編集委員会 1990: 347）。

ところが、奨学生自身にとってみれば、遺児問題なるものが存在することや、ばあいによっては、自身が遺児と呼ばれることを知るのは、典型的には、育英会の奨学生になってからのことである。それも、遺児問題の存在がさも当然のことかのように育英会のつどいが進行することを目の当たりにすることによって、その事実直面するのである。だから、奨学生はその「参加にあたってためらい、戸惑い、不安などを感じる」（副田 2003: 257）ことになる。

最初はまじいやでした。気持ち悪い団体みたいな、気持ち悪いっていうかなんか、なにしに大学来てんだろうみたいな、先輩とか……なんか「遺児が遺児が」みたいな、もういままでいなかった世界じゃないですか。なんかすごい自分がふつうのひとつとは別なんだなって思いました。⁶

換言すれば、この「4つの約束」に直面するまで、（すでに出願書類や採用試験で記載されているにもかかわらず）奨学生は単なる奨学金団体としてあしなが育英会を見ており、自身が遺児でありそれに起因する遺児問題に巻き込まれているということを知らずにいる。

それにもかかわらず、育英会が奨学生にこれらの教育を志向するのは、ひとつには、あしなが運動が、かれらのもつ思想を遺児である奨学生に伝えるという意向を強くもつためである。そしてまた、その運動の思想が、遺児である奨学生が運動の担い手となることを要請するという帰結をもつためでもある。

すなわち、「4つの約束」は、たんに奨学生教育の文脈に位置づけられるだけでなく、あしなが運動の動員戦略にも重なる。「4つの約束」を履行することで、奨学生は、自身が遺

⁶ 2010年10月14日におこなったA8さんへの聞き取り。なお、……は中略を示す。以下おなじ。

児であることによって経験したことを省察し、ほかの遺児がおかれる状況に高校奨学生をつどいや遺児家庭訪問調査で直面する。そしてまた、遺児問題の存在を教える主体となり、具体的な運動の一端を担うことで、遺児問題に取り組む運動の代弁者となるのである。

つまり、あしなが育英会はこれらのプログラムにおいて、そのプログラムの参加者をたんなる奨学生としてまなざしているのではない。そうではなく、かれらには遺児としてのまなざしをつねに向けているのである。そして、遺児として運動に参加することを求めている。運動参加は、育英会と奨学生のあいだの二者関係を越えた意味づけをもつのである。

次節では、あしなが運動の歴史的展開を追うことで、その思想の特質をとらえ、大学奨学生に向けられるまなざしや期待される役割の内実を明らかにする。

3 「敵討ち」から「恩返し」へ——あしなが運動の思想の変遷

あしなが運動を率いるのは、現在あしなが育英会会長の玉井義臣である。玉井は、交通遺児育英会の設立に大きく寄与し、交通遺児育英会育英会設立後は専務理事として運動を主導してきた。かれが1994年に交通遺児育英会の専務理事の職を辞して、あしなが育英会に活動の基盤を移してからは、運動もその基盤をあしなが育英会に移している。そして1998年になると、玉井はあしなが育英会会長に就き、名実ともにあしなが運動を率いる存在となった。

そのため、運動の掲げる思想も、一義的には玉井によって練り上げられたものと考えられる。副田義也(2003)は、社会運動家としての玉井義臣に注目して、あしなが運動を歴史社会的に考察している。副田はそのなかで、つどいでの玉井のあいさつから、奨学生教育観と交通遺児教育観をとらえている(副田 2003:246-8)。それによれば、大学奨学生のつどいがはじまった1974年から1981年までの時期のキーワードは「交通遺児軟弱説」であり、1982年から1993年までの時期のキーワードは「恩返し」である。

本節は、副田にしたがって運動の歴史的展開をみるなかで、あしなが運動の思想のもつ輪郭を取り出すことを課題とする⁷。具体的には、1981年までの時期のあしなが運動の思

⁷ 本節の記述は副田義也(2003)に多くを負っている。ただし、本節が注目するのは、運動のもつ思想とそれが運動の文化的側面あるいはそれぞれのアクターの意味づけにおよぼ

想を「敵討ち」の思想、1982年以降の時期の運動の思想を「恩返し」の思想と呼び、それぞれの思想の内実をアクター間関係の位置づけに注目して整理する。

3.1 「敵討ち」の思想と「交通遺児軟弱説」

——多様なアクターによって展開される初期の運動

まず、初期のつどいでみられた、「交通遺児軟弱説」についてみてゆく。

玉井は初期の大学奨学生をつどいで、「交通遺児の男子は“ひ弱い”。諸君のお父さんが生きておられたらなさるであろうように、育英会は君たちを厳しく教育する」（石井栄三編 1990: 93）と大学奨学生に述べている。これには、高校奨学生をつどいで多くの交通遺児に接するなかで、遺児が「ひ弱い」ことを認識するようになったという経緯がある。

遺児に「ひ弱い」子どもが目立つ……つまり、母親の愛情は一般家庭に比べはるかに強く、遺児たちは本当の母親の愛情を知っているという意味では幸せとさえいる。しかし、これも度がすぎると溺愛となり、子どもがひ弱でわがままな社会性に欠けた子になることもある。特に、男子は父親の死をバネに強くなる子とそうでない子とに二極に分かれる傾向が強い。また女子は総じて「気が強くしっかりもの」である、といえる。（交通遺児育英会二十年史編集委員会 1990: 310）

このように玉井がいうのは、玉井が、交通遺児にたいして、父親を交通事故で亡くしたことを原体験として、社会を変革する「運動」の担い手になってほしいという期待をもっていたからである。玉井は、1977年度のつどいの開会式でつぎのように語っている。

「交通遺児である」ことの自覚。なぜこんなことをいうかというと、高校生のつどいなどで聞くと、大抵の子は「交通遺児といわれたくない」「交通遺児ということが皆に知られると恥しい」「交通遺児といって同情されたくない」といいます。この気持ちはわからぬではない。交通遺児であることから逃げたい。差別されたくない。しかし、諸君はもはや大学生である。感情だけでこの問題から目をつぶるわけにはいかない。

す影響であり、運動の歴史的展開の詳細は大幅に省略している。

逃げられない現実を直視しなければならないのです。

諸君は悲しい原体験をもっている。お父さんを交通事故で亡くした。いまなお重い後遺症のため苦しんでおられそのお母さんがどれほど苦勞をされたか。自分や弟、妹たちがどんな辛い思いをしてきたか。その原体験から目をそらしてはいけない。その悲しい、厳しい、不幸な原体験からものを考えていくところから、いかに生くべきか社会をどう変えるべきか、どう学ぶべきか——がわかるはずです。諸君はこれからさまざまな学問を学ぶでしょうが、諸君にはこの原体験という武器がある。諸君こそが学問をし、社会を変革する資格者であり、またその責任を負っているのです。(石井編 1979: 920-1)

初期のつといで、玉井は、激励調のあいさつをし、「遺児ガラ」を破り、遺児であることを「バネ」（「遺児バネ」）にして交通遺児問題についての問題意識をもつべきであると語っていた。すなわちこの時期、大学奨学生は、交通遺児というアイデンティティを引き受けたうえで、「運動」の担い手となることを期待されていた。

こうした交通遺児観の背景には、この時期の運動の思想がある。それは「敵討ち」による交通遺児問題の解決の思想である。「敵討ち」というのは、玉井が母親の交通事故死を原体験として、交通問題に取り組み交通評論家となっていたこと、さらに「あしなが運動」に取り組んでゆくことになったことについて語る象徴的なエピソードのなかに出てくるキーワードである。

玉井の母親は、1963年末、自宅前の道路横断中に自動車にはねられる交通事故に遭い、ひと月後に亡くなる。玉井が病室で母親の看病をしていたある夜半、母親は病床で突然目を見開き、なにか訴えかけようとしていることを玉井は感じとった。玉井はそれにたいし、「わかってるてお母ちゃん、この敵はきっと僕が討たるから、今は眠っていて頂戴」（玉井 2010: 6）と答えたという。

母親の死後、玉井は、1年半をかけて取材と調査を繰り返し、1965年に「交通犠牲者は救われていない——頭部外傷者への対策を急げ」、「ひかれ損の交通犠牲者——損害補償の現状と打開策」の論文2篇を『朝日ジャーナル』に立て続けに発表し、論壇デビューを果たす。論文は反響を呼び、それをもとにした単行本『交通犠牲者——恐怖の実態を追跡する』が刊行される。そして、翌1966年3月からは2年半にわたって、テレビ番組「桂小金治アフタヌーンショー」の交通キャンペーンに週1回、レギュラー出演する。そこでキ

キャンペーンの材料を集め、台本をつくり、専門家としてコメントをつける仕事をする中で、玉井は交通問題に精通し、知名度も上げ、さらには各界に人脈を広げることとなった。

こうして玉井は、交通評論家としての活動を展開することで、母の交通事故死に対していわば象徴的に「敵討ち」(副田 2003: 9)を果たしたのである。

玉井は、この交通キャンペーンを通じて、交通にかんする制度の実現を訴え、それを果たすという経験によって社会運動家としての素地を身につけた。そして、社会人を中心として「交通事故遺児を励ます会」を結成した岡嶋信治との出会いを契機に、テレビ番組でのキャンペーンを足がかりに作文集の刊行や街頭募金活動を展開、交通遺児の高校・大学進学のための育英資金を貸与する財団法人「交通遺児育英会(仮称)」設立を求める運動へと舵を切ってゆく。

副田によれば、玉井が「敵討ち」というとき、それは、復讐を象徴するというよりはむしろ、死者の死の意義づけの象徴を強く意識したものである。玉井は、社会的事象にたいする根源的な批判を言論によっておこなうことで象徴的に「敵討ち」を果たし、それが救済運動、教育運動へ向かうことで博愛の価値をもつものとなったという(副田 2003: 9)。

副田の見解を踏まえてさらにいえば、玉井が「敵討ち」というとき、そこには、母親を交通事故によって殺された子だという強い自覚がある。玉井が母親を亡くしたのは28歳のことであり、やや違和感の残る表現だとはいえ敢えて換言すれば、「敵討ち」の思想は、自身が交通遺児であることを強く意識することをつうじて、交通事故問題を自身にとっての問題ととらえて、課題解決に取り組むことを可能にするという論理構成をもつ。

財団法人「交通遺児育英会」発足後、運動は、1970年代半ばにかけて組織づくりをおこなった。具体的には、交通遺児育英会のほか、「全国学生交通遺児育英募金」事務局、各地「交通遺児を励ます会」の組織化がはかられ、大きくこの3つの団体で運動は展開されるようになった。玉井は、これらの団体を率い、高度成長期に対する根源的批判をおこないつつ、交通遺児母子家庭の制度的救済を目標として、運動を展開してゆく。

全国学生交通遺児育英募金は、1970年5月に秋田大学祭の企画のひとつとして、実行委員会が各地の自動車部をはじめとする自動車関連の団体のタイ・アップによる「日本縦断チャリティーラリー」を企画し、その寄付先を交通遺児育英会と決めたことに端を発する。このときラリーは直前になって中止となり、街頭募金だけが実施された。

同年夏には、玉井の呼びかけに応じて全国学生交通遺児育英募金が組織され、秋田大学祭実行委員会メンバーが事務局長、事務局次長の役員に就いた。全国8大学の自動車部が

夏休みの遠征合宿で交通遺児救済のキャンペーンをおこなって募金の協力を呼びかけ、また、役員が手分けして全国の大学をまわり、自動車部にかぎらずさまざまな部活動の部室をたずねては趣旨を話して協力を頼む、かれらが「オルグ」と呼ぶ活動をすることで、475大学（団体）の協力を得て、第1回学生募金が10月に全国各地で実施された。つづく第2回以降は、1983年秋の第27回に交通遺児育英会大学奨学生に引き継ぐまで、全日本学生自動車連盟が事務局役員に就いて活動を展開した⁸。

学生募金は、「①育英会募金の呼び水効果②政治への圧力団体的効果③人材育成という大きな貢献をはたした」（石井編 1979: 1051）ことから、交通遺児育英会によって、交通遺児育英会の「育ての親」とされている。「全国一斉に大量の学生が街頭に立って訴えるので、そのつどマスコミが交通遺児家庭の問題点を報道し、世論はもりあがり、募金がふえるという“好循環”をくり返してきた」（石井編 1979: 1049）のであり、そのことで、個人や企業の寄付が増え、また政府の補助金の多寡についての議論が国会でなされて徐々に増えてゆくという動きを呼んだ。また、「政治が動くその日まで」をスローガンとしているように、学生募金は、育英会による交通遺児家庭にかんする調査の発表を受けて、その時々政治への要望を世論に訴える役割を果たしていた。これは、すぐのちに述べる「遺児と母親の全国大会」において、政府・各党へ要望を提出することで、具体的に実現がめざされた。

この学生募金に参加した団体を中核として結成された交通遺児を励ます会も誕生し、そのメンバーがオルグ活動を展開することで、さらに全国各地に交通遺児を励ます会が誕生した。岡嶋が結成した「交通事故遺児を励ます会」がそうであったように、交通遺児育英会設立以前の励ます会は、社会人がそのメンバーの中心だったが、交通遺児育英会設立後、メンバーの中心は次第に学生へとシフトしてゆくこととなる。

各地交通遺児を励ます会の活動は、生活実態調査や作文集の発行をおこなったほか、家庭訪問やレクリエーション活動、文通や会報を日常的な活動としていた。つまり、日常的な活動においては、遺児の精神的サポートに主眼が当てられていた。

そして、各地交通遺児を励ます会は、全国組織「交通遺児を励ます会全国協議会」を組

⁸ 各地の交通遺児を励ます会代表の学生が役員となることもあった。また、第6回の役員は各地交通遺児を励ます会代表が務めた。

織し、「遺児と母親の全国大会」を開催した⁹。これは、「遺児家庭の窮状を世論に訴え、政府・各党・地方自治体に要望文を提出し、世論の支援で政策を引き出そうとするものである」（石井編 1979: 414）。大会は第2回以降、運営を大学奨学生が担当し、第3回からは大会会長にも大学奨学生が就くようになった。主催や後援には、交通遺児を励ます会全国協議会のほか、全国交通遺児育英募金事務局、交通遺児育英会大学奨学生有志、交通遺児育英会などが名を連ねた。

全国大会は、交通遺児家庭の生活を政治による制度的な解決を求めることを目的としている。交通遺児育英会による調査とその公表、街頭募金での遺児問題の訴えによる世論喚起を経て、年末の予算編成の直前、12月はじめに開催された。大会は、「①育英会調査による問題の整理と重要課題の示唆を受け②大学奨学生が中心になり運営面を担当、③地方の大学奨学生が代表家族に付き添って上京し④前日の分科会で要望をまとめ、⑤当日、政府や各党の代表に対して訴え、⑥デモ行進では広く国民に窮状をアピールするという一連のパターン」（交通遺児育英会二十年史編集委員会 1990: 978）で運営された。

以上みてきたように、初期のあしなが運動には、育英会や大学奨学生、遺児にかぎられない、複数のアクターがかかわっていた。

「敵討ち」の思想にもとづいて、大学奨学生は、遺児であることを強く意識し、そこを立脚点に、運動にくわわることを求められていた。しかし、この時期の運動は、交通遺児問題を自身の問題として引き受けることが運動参加の焦点だったため、遺児でなくとも運動に参加し、その担い手となることができた。

交通遺児育英会設立運動が展開された1960年代には、急速なモータリゼーションの進行にともない、「交通戦争」といわれるほどのさまざまな社会問題が、身近に起こりうる問題として、引き起こされていた。とはいえ、みずからの生活の便宜において車を利用し、また、自動車関連産業ではたらく人びとの比率も高まっていた。人びとは、「大衆は加害者と被害者の二つの顔をもつ」（副田 2003: 53）という状況に身をおかれてしまっていたのであり、否応なく交通問題に巻きこまれていた。

また、当時の学生は、学生運動からまったく無関係でいられるわけではなかった。体制や制度の変革を暴力も辞さずに追い求める学生運動に賛同できなくとも、社会的関心をも

⁹ 交通遺児を励ます会全国協議会は、1974年から「ゆっくり歩こう運動」を4回にわたって実施して、モータリゼーション社会を批判する社会運動の展開も模索した。

つことが要請されるような状況にあった。ここで学生募金は、学生運動から距離をとりつつも、社会参加をすることが可能なひとつの形式として、選ばれる素地があった（副田 2003: 109）。

たとえば、1969 年当時、大学 3 年生だった長原昌弘は、交通遺児作文集『天国にいるおとうさま』を読んで募金活動を企画し、秋田大学祭に先立つ 1969 年夏に「交通遺児救済募金」を高校の同級生だった松本茂雄とともに実施した。長原は、その作文集を読んだときの感想について、つぎのように話した。具体的に効果のある行動への志向がうかがえる。

この若い遺児たちの作文集を読んだその夜、ついに一睡もできなかったですね。体制だ、制度だなんてノンビリ時間のかかることと言ってられない気分になったんです。早く、少しでも彼らのためになってやろうと決心したんです。（石井編 1979: 1057）

つまり、運動はこの時期、政治による交通遺児母子家庭の制度的な救済を具体的目標に、車社会の変革をめざして、交通遺児と支援者が一体となって、交通遺児をめぐる社会問題に取り組んでいたといえる。運動は、「交通遺児と支援者」対「社会」という構図をもっていたといえることができるだろう。このとき、運動にたいする寄付は、社会から運動にたいする支援を引き出していることを象徴するものだったといえる。

こうした構図のもとで、交通遺児である大学奨学生は、「敵討ち」の思想にもとづいて、交通遺児であることの自覚と、それを立脚点とする運動への参加を求められていた。とはいえ、だからといって支援者が運動から排除されることはなく、むしろかれらは、積極的に運動の担い手となっていった。いわば、交通遺児問題を自身のこととして引き受けることこそが、運動のメンバーシップにとって重要だったのである。

つまり、「敵討ち」の思想は、交通事故死による父親との死別や当時の時代状況への危機感にたいして、交通遺児問題を自身にとっての問題として引き受けてその解決に取り組むことで、象徴的に敵を討つことをめざすものだった。玉井が大学奨学生に「遺児軟弱説」を唱えたのは、「強味は『父の死』の意味を考えれば政治、経済、社会の仕組みと不条理さが見えてくることだった」（交通遺児育英会二十年史編集委員会 1990: 67）と、のちに玉井自身が振り返るように、交通遺児問題を自身の問題として引き受けさせるためだった。

3.2 「恩返し」の思想——遺児を主たる担い手とする運動への変質

1982 年から 1993 年までの時期の、大学奨学生をつどいでの玉井のあいさつにみられる、交通遺児観のキーワードは「恩返し」である。

1979 年 4 月、交通遺児育英会は継続的な寄付者を募る「あしながおじさん」制度を発足させた。これは、育英会に大幅な寄付収入の増大をもたらしたという点で、成功した制度である。この制度は、現在のあしなが育英会の「あしながさん」制度にまで受け継がれており、育英会における寄付制度の柱である（副田 2003: 207-36）。この寄付制度による収入は、育英会の収入に占める割合のもっとも高いものとなってゆく¹⁰。

あしながおじさん制度の成功を受けて、1982 年のつどいでは、「あしながおじさん」について考えることが、その主題のひとつに据えられた。また、1983 年には「あしながおじさん」の愛と母の愛についての哲学的考察、1984 年には「あしながファミリー（交通遺児ファミリー＋あしながおじさん・学生募金・励ます会など）みんなの幸せ」（交通遺児育英会二十年史編集委員会 1990: 352）を考えることが、それぞれつどいの主題とされた。

くわえて、1981 年からは、それまで育英会職員主体でやっていたつどいの運営を、大学奨学生中心にシフトしてゆくことが意識されるようになる。1984 年にはプログラムづくりも大学奨学生が手がけるようになり、総合司会も玉井に代わって大学奨学生が務めることとなった。それまでのいわゆる「厳しいつどい」は、1986 年に「相談にのるつどい」「話を親身になって聞いてやるつどい」「感動的なつどい」へと変化してゆく。つどいは、「あしながおじさん」制度の誕生を契機として、愛や幸せについて考察するものへと変化し、同時に、その運営主体が大学奨学生中心のものへと変化した。

このなかで、「あしながおじさんや多くの支援者から受けた恩を何かの形でまた社会に返していくことを忘れないで」（玉井 2010: 86）という表現ですでに存在していた「恩返

¹⁰ 2009 年度でいえば、当期収入 37 億 3563 万円のうち、寄付金収入総額は 26 億 6734 万円と 71.4%を占める。さらにこのうち、あしながさん制度による寄付収入は 12 億 3531 万円で、寄付金収入の 46.3%、当期収入の 33.1%を占める（あしなが育英会 2010c）。

また、2015 年度では、当期収入 58 億 5637 万円にたいし、寄付金収入総額 44 億 7463 万円（当期収入比 76.4%）、あしながさん制度による寄付収入は 15 億 9027 万円（寄付金収入比 35.6%、当期収入比 27.6%）だった（あしなが育英会 2016: 20-2）。

し」の思想が、「恩返し運動」というかたちで結実してゆくこととなる。

「恩返し」の思想というのは、「あしながおじさんがお金持で余ったお金をくださるのではなく、ふつうの庶民が君たちの心の痛みをわかって生活費の一部をさいて援助してくださっているのだと」伝えられ、『あしながおじさんの無償の愛』に「心からの『感謝』」に胸をひたし、恩を感じた遺児たちが、『あしながおじさんは“陰徳の人”だからお返しなど考えるはずがない』『私たちが今できることで社会に返すことを密かに期待されているのではないか』と」考え、『社会への恩返し』をするというものである（交通遺児育英会二十年史編集委員会 1990: 586）。

副田がいうように、『あしながおじさん』は交通遺児を支える社会の象徴であるという位置づけがおこなわれ、また、「交通遺児は社会から恩を受けた存在、社会に恩を返す存在であると規定された」（副田 2003: 248）。すなわち、寄付は、「無償の愛」の象徴と位置づけられ、また、その「無償の愛」は、奨学金というかたちをとって、奨学生に伝わるものだと言われた。この「無償の愛」にたいする「恩返し」という論理は、それまでも、社会に出てから返されることを期待するという文脈で使われていたが、「恩返し運動」の論理は、それにくわえて、運動の局面において「恩返し」を実践してゆくことを、奨学生に求めるものである。

「恩返し運動」は、最初、1982年夏に高校奨学生のつどいで企画され、高校奨学生をその運動の主体としてはじまった。具体的には、1982年秋に第一弾として献血運動がおこなわれ、1983年に第二弾としておこなわれた災害募金を経て、さらに1983年末からは、第三弾として災害遺児育英募金が展開された。1984年にはこの運動に大学奨学生もくわわり、「災害遺児の高校進学をすすめる会」を発足させた。そして、「恩返し」にもとづく災害遺児育英運動は、次第に運動のメイン・テーマとなってゆく。

1983年秋からは、全国学生交通遺児育英募金事務局の役員から全日本学生自動車連盟が降り、大学奨学生が務めるようになっていた。この背景には、1978年に交通遺児育英会が学生寮「心塾」を東京都日野市に建設したことで、大学奨学生の塾生が、運動の人的資源として継続的に供給されるようになったことがある。

学生募金は従来、募金額の全額を交通遺児育英会に寄付していたが、1987年からは、災害遺児の高校進学をすすめる会に募金額の半額を寄付するようになった。それによって、

学生募金と災害遺児育英募金との一本化がはかられた。そして、この運動は、災害遺児奨学金制度設立要求へと向かい、1988年4月には、災害遺児の高校進学をすすめる会が、独自財源による高校・大学奨学金制度の実施に踏み切った。また、同時にあしながさんからの寄付を募集するようになった。

さらに翌1989年夏には、災害遺児の大学奨学生を代表として「病気遺児の高校進学を支援する会」が組織され、秋に病気遺児育英募金をおこなっている。それにあわせて、学生募金は1990年から、募金額を1/3ずつ、交通遺児育英会、すすめる会、支援する会に寄付するようになり、また、その名称を「あしなが学生募金」へと改めた。1991年には、支援する会でもあしながさん制度をつくり、1992年に奨学金制度を創設、予約採用を募集するようになった。そして、1993年4月1日、すすめる会と支援する会の合併によって、「あしなが育英会」が誕生した。

このように、「恩返し」の思想は、運動の支援対象を交通遺児にかぎらず拡大し、あしなが育英会を生みだすにいたったのであり、この時期の運動の原動力となる思想であった。

「敵討ち」の思想に代わって「恩返し」の思想が前面に出てくる変化で注目されることは、運動の主たる担い手が、次第に遺児に収斂してゆくことである。すなわち、「敵討ち」の思想の時期とおなじように、運動にはいくつかの組織が存在したが、すべての組織を遺児が担うようになっていた。交通遺児育英会事務局にも、大学奨学生出身者が職員として入局するようになっていた。

これは、「恩返し」の思想が、「恩」を受ける存在としての遺児にその運動の主体を限定していることの帰結である。「恩」とは、「あしながおじさん」からの「無償の愛」としての寄付を指すのであり、それは、自身が遺児であり、奨学生であるからこそ受けられるものである。そのため、この時期のつどいでは、「交通遺児アイデンティティ」について検討する機会が後景に退いたのにもかかわらず、むしろ、運動に参加する者にとっては、遺児であることが以前より重要性を増すようになっていた。自身が遺児であることの自覚は、遺児問題を自身の問題として引き受けるという文脈において要請されるのではなく、社会からの「恩」を受けていることの自覚のため要請されるものなのである。いいかえれば、運動の構成員となるにあたっての一義的な問題は、「恩」を受ける遺児であることとなったのであって、運動が主題とする遺児問題を自身の問題として引き受けるかどうかは、二義的な問題となった。

そしてまた、これまでは運動が変革を迫るものであった社会は、「あしながおじさん」が

象徴するものとして、いわば運動の内部に取りこまれることとなった。すなわち、「交通遺児と支援者」対「社会」という運動の構図は、遺児＝奨学生とあしながさん＝寄付者が象徴する社会の結びつきという構図へと変化した。運動は、外部との対抗関係よりも、むしろ、その内部における関係の結びつきを強く意識するようになった。

この運動の構図の変化によって、遺児ではなく運動から直接利益を得るわけではない良心的構成員（J. D. McCarthy and M. N. Zald 1977=1989; 本郷正武 2007）は、立つ瀬を失うこととなる。「遺児（＝奨学生）－あしながさん（＝社会）」という二者関係の結びつきを強調する論理において、遺児ではない運動の良心的構成員は、遺児とともに社会に対して変革を迫ることを志向するような具体的な取り組みをするのにもかかわらず、その取り組みを遺児にとっての「恩」と位置づけられてしまうことで、遺児とは対置させられてしまい、いわば引き裂かれた存在となってしまうのである。

同時に、育英会の立ち位置も変化する。

「敵討ち」の思想にもとづく運動の展開期には、育英会は、交通遺児の支援者としての役割を自負していたといえる。それは端的に、初期の育英会職員が遺児ではない活動家出身であったことによるといえる。この時期の運動に取り組むにあたっての問題は、交通遺児問題を自身の問題として引き受けるかどうかということであったために、わざわざ自身のいわば遺児性を強調する必要もなく、遺児を支援するという立場から、交通遺児問題に遺児とともに取り組むことができた。

しかし、「恩返し」の思想にもとづいて運動を展開するようになると、次第に運動の主体が遺児たる奨学生に限定されるようになってゆく。「恩返し」の思想にもとづいて運動を展開する以上、運動の主体は、「恩」を受ける存在としての遺児であることが求められるようになり、育英会は、遺児に仮託して運動を語る必要に迫られるようになったのである。このことは、「恩返し運動」のあらたな展開が、玉井自身の立案としてではなく、奨学生が発起人となることで提案されるかたちで出てくることによく現われている。育英会は、自身の存在を次第に背景化してゆき、遺児たる奨学生と寄付者との結びつきにおいて、遺児たる奨学生に自身を仮託させるかたちで、運動を語るようになるのである。

4 街頭募金における奨学生と寄付者との象徴的な結びつき

——奨学生の関与の必要と寄付者の離脱可能性

このように、「恩返し」の思想にもとづく運動の構図においては、奨学生と寄付者の贈与を基調とする二者関係が重視される。両者の結びつきは、大きくふたつのしくみにおいて象徴されている。ひとつは、機関紙や手紙を介した結びつきであり、もうひとつは、街頭募金における結びつきである。前者の機関紙や手紙によるものは、藤村正之（1999）においてすでに整理されているので、本節は、とくに後者の街頭募金における奨学生と寄付者の結びつきに注目する。

確認しておく、奨学生にとって「無償の愛」たる寄付をしてくれるあしながさんは、その制度の制約上、個別具体的な存在として直接会うことができない。そしてまた、奨学金は実際のところ、育英会から個々人の口座に振り込まれるのであり、あしながさんとの結びつきを確認するほどの機能を有してはいない。奨学生は、機関紙に掲載される育英会への便りや、残暑見舞いや年賀状への返信によって、あしながさんの存在を想像力において把握し、結びつきを間接的に認識するのである。すなわち、藤村（1999:206-7）が寄付者に注目しているところの想像力において結ばれる相互贈与関係は、奨学生にとってみれば、育英会が語る「あしながさん像」を下支えに、機関紙や手紙への返信などの寄付者から寄せられるメッセージによって担保されようとしているのである。



図 1.2 あしながさん制度を象徴して描かれるイラスト

出典：あしなが育英会（2017b）より転載

育英会が語る「あしながさん像」というのは、「募金箱にお金を入れてくださるのは買物帰りの子連れの主婦に象徴される庶民だった」（玉井 2010: 265）というように、「庶民」であること、「貧者の一灯」としての寄付をするものとして語られる。それは、税金やお金持ちの同情としての寄付、という見かたを打ち消し、そこに「無償の愛」や「善意の寄付」を見いだそうとするものである（図 1.2）。

これまでみてきたように、街頭募金は、あしなが運動を代表するキャンペーンである。とくに学生募金は「育英会の育ての親」とであると目され、その効果は「呼び水効果」も含めて、大きくアピールされる場所である（交通遺児育英会二十年史編集委員会 1990: 192）。あしなが育英会にその基盤を移してから運動にまで目を向けてみても、震災遺児、海外遺児と、支援対象をあらたに「発見」するたびに実施される街頭募金が、それぞれの運動の展開の起点となっている。

とはいえ、街頭募金による寄付は、育英会の寄付全体に対して占める比率でいえば、それほど大きなものではない。2009 年度でいえば、街頭募金による寄付は 3 億 6276 万円で、寄付収入総額 26 億 6734 万円の 13.6%、当期収入 37 億 3563 万円の 9.7%を占めるにすぎず（あしなが育英会 2010c）、交通遺児育英会のころにさかのぼっても事情は変わらない。

それでも街頭募金があしなが運動において重要な位置を占めるのは、それが運動の主要な広報戦略であることにくわえて、奨学生と寄付者を象徴的に結びつけるという「恩返し運動」を象徴する機能を有するためである。

奨学生にとって、自身のもつ募金箱に寄付を受けることを目の当たりにすることは、その寄付が、育英会の奨学金としてもちいられることを勘案すれば、自身の奨学金が、その寄付者によって象徴される人びとによって贈与されていることによって成り立っていることを決定的なものにするという機能を有している。「恩返し」は、寄付＝奨学金を「恩」として受け取ることを起点とする。寄付者が奨学生に寄付をするという構図は、街頭募金で象徴的に可視化されるのである。そしてまた、寄付者の贈与が自発的に、絶対的に先行するものとしてなされていることを目の当たりすることともなる。その自発性は、「庶民」による「貧者の一灯」というイメージによってさらに増幅される。このことで、奨学生は街頭で「施しを受けている」ような心持ちになるのであり、その贈与にたいする返礼の義務をかきたてられることとなる（M. Mauss 1925=2009: 108; K. E. Boulding 1973=1974: 52）。

寄付者にとっては、奨学生が街頭募金で「自分史」をまじえつつ呼びかける姿は、自身の寄付によって進学し、運動にさえ励む奨学生を目の当たりにする機会となり、それは自身の寄付が役立っていることを示す効果をもつ。機関紙や手紙とおなじように、あるいは、実体的に見える存在として、それらの情報を補完するようにして、寄付者は奨学生との想像力における結びつきを感じる機会を、街頭募金を通じても得ることとなる。

このようにして、奨学生と寄付者は街頭募金という場で、想像力において象徴的に贈与関係を結ぶ。

とはいえ、ここで注意を向けておく必要があるのは、藤村（1999:214）の指摘を踏まえれば、寄付者はこうした象徴的な結びつきにたいして、ボランティアであるがゆえにこそ、常に離脱可能な立ち位置を保っていることである。かれらは、育英会へ貨幣を贈るというかぎりにおいてこの関係を結んでいるのであり、こうした二者関係のとらえかたの外側にありながら貨幣を贈り続けることができる。また反対に、貨幣を贈るという行為が存在する以上、こうした二者関係の結びつきの認識のしかたを支持しつづける可能性も否定されない。その贈与行為にどのような意味づけをおこなうことも排除されないのである。そしてまた、かれらの贈与行為がこれらすべての関係に先行しているのであって、贈与行為をやめてしまえば、それだけでこの関係から離脱することが可能である。

他方、奨学生についてみてみれば、かれらは奨学金を得ているかぎり、この結びつきに多かれ少なかれコミットすることを要請されている。奨学生が街頭に実際に立ち、自身が遺児であると表明することは、この結びつきを成立させるためには不可欠である。育英会にとってみれば、すべての奨学生が街頭に立たない、という事態は育英会にとって「恩返し運動」の構図のもとでは想定不可能なのである。育英会は、寄付者から貨幣を贈られるにもかかわらず、遺児である奨学生を介してしか「恩返し」をすることができず、運動を展開しえないとさえいいうる。

ところで、あしながさん制度による寄付は、育英会にとって、いくつかある寄付制度の種類の中なかではもっとも比重が大きいといえる。交通遺児育英会の時期にあたる1980年代後半には、寄付収入のうちの半分以上があしながおじさん制度によるものであり、あしなが育英会においても、寄付収入のうちの半額近くがあしながさん制度による寄付である。具体的には、2009年度でいえば、あしながさん制度による寄付収入は12億3531万円で、寄付金収入総額は26億6734万円の46.3%を占める（あしなが育英会 2010c）。定期的な

寄付を求める制度設計のため、寄付件数でいえば圧倒的な比率を占める¹¹。

ただし、総収入に占める比率でいえば、あしながさん制度による寄付収入は、全体のおよそ 1/3 を占めるに留まる。2009 年度でいえば、あしながさん制度による寄付収入は、当期収入 37 億 3563 万円の 33.1%を占めた¹²。また、返還金による収入は 10 億 3553 万円で、あしながさん制度による寄付収入に近い規模である。さらに、学生募金による寄付をのぞいても、あしながさん制度以外にさらに 10 億円近い寄付があしなが育英会に寄せられている（あしなが育英会 2010c）。これらを勘案すれば、あしながさんの寄付と学生募金によって育英会が成り立っているとする見かたは、「恩返し運動」の思想を成り立たせるために要請されるものなのであって、その見せかたには強弱があることに留意しなければならない¹³。

5 「恩返し運動」の展開とその内実の変化

——育英会と奨学生との関係における「恩返し」の位置づけ

3.2 でみたように、あしなが運動は、「恩返し」の思想と、その思想から派生する想像力や育英会の「あしながさん像」を介した寄付者と奨学生の結びつきによって、あしなが育

¹¹ 2015 年度でいえば、寄付収入にかかる総振込件数 369,514 件のうち、あしながさん制度による寄付は 256,835 件で、69.5%を占める（あしなが育英会 2016）。

¹² 寄付収入総額は、当期収入の 71.4%を占める。この点に注目していえば、あしなが育英会の運営にあたって、寄付が重要な位置づけを担うことに疑いはないのであり、あしなが育英会は、あしながさん制度にかぎらず、各制度の寄付者全体を象徴するかたちで、奨学生にたいして「あしながさん像」を提示しているといえる。

¹³ なお、2015 年度では、あしながさん制度による寄付収入は 15 億 9027 万円で、寄付金収入総額 44 億 7463 万円の 35.6%、当期収入 58 億 5637 万円の 27.6%をそれぞれ占めた。あしながさん制度による寄付収入の占める比率が相対的に低下していることを指摘できる。ただし、寄付収入は総額では当期収入比 76.4%で、わずかに相対的な比率の上昇がみられる。すなわち、全体としては、あしなが育英会の運営にあたって寄付が重要な位置づけを担う点に変わりはない（あしなが育英会 2016: 20-2）。

英会を設立させる運動を展開し、運動の基盤をあしなが育英会に移した¹⁴。

あしなが育英会にその基盤を移してからの「恩返し運動」は、1995年の阪神・淡路大震災を契機とする震災遺児支援において心のケアを主題としたのちに、震災遺児の「恩返し」と銘打って、海外遺児支援を手がけるようになった。これによって「運動」は、世界じゅうの遺児を支援することをその理想としつつ、いまなおその展開をつづけている。

あしなが育英会時代に入ってからの変化で注目すべきことは、「恩返し運動」が支援対象とする事業を、あしなが育英会自身が手がけるようになったことである。

交通遺児育英会時代、献血運動はまさに外部の団体に対する支援であったし、災害遺児や病気遺児支援のばあいでも、交通遺児育英会本体が災害遺児や病気遺児支援に乗り出すことはなかった。育英会自身が事業を拡大するには財団法人の寄付行為を改正することが必要であることから、別団体をつくることが技術的に要請されていたと考えることができる。そのため、運動は支援対象を拡大するにあたって、形式的に外部に別団体をつくり、その団体に対して支援をおこなうというかたちをとった。しかしこのことは、交通遺児育英会にとっては技術的な問題であっても、「恩返し運動」の思想にとっては重要な意味をもったと考えられる。運動の外部に支援対象を設定することで、「恩返し」をする主体は、一方で遺児として客体でありながら、他方で外部の他者に支援する主体であることが、制度水準で担保されていたのである。

しかし、任意団体として設立されたあしなが育英会は、震災遺児支援における心のケア事業や、海外遺児支援事業を、みずからの事業として取りこみ、運動を展開していった。そのことで、遺児たる奨学生による「恩返し」の向ける先は、運動の外部から、運動の内部へ向けられるものへと変化した。それは、運動が、遺児の当事者運動という文脈でとらえられるものになったことを意味するわけではない。依然として、支援を受けた遺児が他の遺児を支援するという形式をもつ点で、「恩返し」の思想にもとづくものとして、運動は展開されている。

ところが、こうしたしくみにおいて、「恩返し」の思想は、疑問に曝される可能性を内包する。

¹⁴ 副田(2003)によれば、運動の基盤が交通遺児育英会からあしなが育英会に移ったのは、災害遺児支援の展開期に生じた育英会理事会内の亀裂と、政界を巻き込みながらの抗争の結果である。

育英会は、「恩返し」の思想にもとづいて運動を展開するようになって以降、自らの存在を遺児たる奨学生に仮託することで、自身の存在を背景化することに努めながら運動を展開するようになった。それは、遺児たる奨学生が育英会の外部の対象に向けて運動を展開にするかぎりにおいては、成功した戦略であった。「恩」は寄付者に象徴される、外部の社会に「返された」のである。

しかしながら、遺児たる奨学生の手がける「恩返し」の支援対象を育英会の事業とするようになると、育英会が奨学生に仮託した運動が、当の育英会の事業を支援するという構図があらわになる。

これまでのあしなが運動の展開に照らしていえば、運動は、一義的には社会運動家である玉井の企図として諒解されてきたといえるだろうし、支援対象となる事業が別団体によるものであっても育英会によるものであっても、その運動の内実には変わりはないので、さして変化がないように思える。そのため、あしなが育英会を基盤とするあしなが運動もまた、「恩返し」の思想によってさらにあらたに支援対象を発見した、と整理することは可能であるのかもしれない。

しかし、奨学生にとってみれば、この運動に参加することは、育英会との二者関係で奨学金貸与の交換条件として、いわば「義務」として要請されているものでもある。それにたいして、寄付者との贈与関係を基調とする「恩返し」の思想による意味づけが重層的になされ、後者が強調されるのが、あしなが運動の関係規定の構図の特徴である。この構図において、育英会が「恩返し」と銘打って、奨学生に運動参加を喚起しつつ、その運動の支援対象が育英会の事業であることは、後者の関係よりも前者の関係を前景化させる解釈を招来する余地を残す。

すなわち、「恩返し」の思想は、確認しておけば、寄付者と遺児たる奨学生のあいだの象徴的な結びつきをとらえることで成立するものである。そこで育英会は、遺児たる奨学生に自らを仮託させ、後景に退くことに努めている。そして、遺児たる奨学生は、社会を象徴する寄付者からの「恩」として寄付＝奨学金を受け取り、それを「返す」べきであることを感じとる。そして、その「恩返し」は、あしなが運動において「恩返し運動」として制度化されていて、そこで自分とは異なる他者にたいする支援をおこなうことで、達せられる。

しかしここで、遺児たる奨学生が支援対象とする他者として育英会を措定しうるのが、あしなが育英会を基盤とするあしなが運動のしくみのもつ帰結である。寄付者と奨学生の

結びつきよりも、育英会と奨学生の二者関係が前景化しうるのである。すなわち、奨学金を提供されたことに対する育英会への「恩返し」の「義務」として、奨学生が運動への参加をとらえる可能性を否定できない。奨学生にとっては、寄付者の存在も支援の対象も、育英会の事業の範囲のなかにあり、「恩返し」の思想は、育英会が奨学金を提供することを「恩」ととらえ、その「恩返し」を、奨学生が育英会の事業に対して貢献することによって果たされるものであるというかたちで、運動における関係認識がなされうる余地がある。

そうした関係認識のもとでは、奨学生が遺児としてまなざしを向けられる必然性も、寄付者と遺児たる奨学生の結びつきを強調される必然性も失われてしまう。育英会と奨学生とが奨学金を介して関係を結んでいるということそれ自体によって、「恩返し」の思想は成立してしまうのである。

このように、奨学生は、寄付者との象徴的な贈与関係において運動参加を喚起されつつも、育英会との交換関係においてそれを理解する余地をもつという、二重の関係規定の構図のもとで、運動に参加することとなっている。では、かれらは、具体的にはどのようにして運動に参加し、「恩返し」の思想をとらえているのだろうか。本章でみたあしなが運動の制度水準での関係規定の構図を踏まえて、2章・3章では、大学奨学生のふるまいと認識に注目し、かれらが運動に参加する論理の構成を明らかにしてゆく。

第2章 ボランタリーな行動に見いだされる贈与の可視化／不可視化 ——あしなが育英会大学奨学生をめぐる「恩返し」の思想の 展開

1 はじめに

毎年春と秋になると、全国200箇所にのぼる主要駅や中心街で、募金箱をもったりチラシを配ったりしながら通行人に寄付を呼びかける大学生や高校生の姿を見かけることができる。遺児のおかれる状況を伝え、遺児に対する奨学金の必要生を訴えるこの街頭募金のようすは新聞やテレビでニュースとして取り上げられ、この時期、いたるところで「あしなが学生募金」の名前を目にすることができる（図2.1）。



図2.1 あしなが学生募金ボランティアスタッフ募集ポスター

出典：あしなが学生募金事務局提供

「あしなが学生募金」は、前章でみたように、調査時点において、毎年3億円を超える寄付を集める街頭募金活動である。募金はその全額があしなが育英会に寄付され、遺児の奨学金として利用されている¹。寄付先となるあしなが育英会は、病気や災害・自死遺児を対象とした奨学金貸与制度を運営する民間団体である²。あしなが学生募金からの寄付を含めた、年間25億円超の寄付収入が会の運営を支えており、あしなが育英会の奨学生は毎年全体で6,000人強を数え、その貸与総額は22億円超にのぼる(あしなが育英会 2010c)。

あしなが学生募金の中心的な担い手はあしなが育英会大学奨学生である(図2.2)。かれらは街頭募金に代表される活動に参加することを求められていて、活動の担い手でありながら、その活動によって支援を受ける存在とも重なるという意味で、特異な位置を占めている。かれらの活動への参加を規定するのは、前章でみた、「あしなが運動」を貫く論理である「恩返し」の思想である。「あしなが運動」は、あしなが育英会を組織的基盤とし、すべての遺児に対する教育支援・心のケアをおこなうことをめざして展開する諸活動の総称である。「恩返し」の思想のもつ論理は、確認しておくならば、大学奨学生が、寄付者(「あしながさん」)からの寄付＝奨学金を「恩」として受け取ることを起点に、その「恩」を社会に「返す」手段として活動に参加し、「後輩遺児」を支援する活動をおこなうというものである。大学奨学生は、寄付者からの贈与を受け、同時に、後輩遺児にたいして贈与をおこなう存在と規定されている。受けた贈与の対となる贈与を、最初の贈与の贈り手ではな

¹ 実施回によって、使途の一部または全部が、育英会の他の遺児支援事業に変更されることもある。

² 確認しておけば、あしなが育英会は高等学校・高等専門学校奨学金、大学・短期大学奨学金、専門学校奨学金、大学院奨学金の4種類の奨学金制度を有している。また教育支援としては、毎年夏に奨学生を対象とした宿泊型の研修「つどい」を開催したり、東京と神戸で学生寮を運営したりしている。さらに、心のケア事業もあしなが育英会の事業の柱のひとつとなっている。

³ 活動として大学奨学生に認識されているのは、おもにあしなが学生募金と海外遺児支援を目的とするウォーキング・イベント「あしながPウォーク10」の運営である。この活動に継続的に参加する大学奨学生の多くがあしなが育英会の主催するつどいに携わり、プログラム内容の企画や運営をおこなっている。

く、第三者におこなう形式をとることで、「恩返し」思想のもつ論理は、大学奨学生を軸とした「系列的互惠関係」(K. E. Boulding 1973=1974)を形成している。「恩返し」の思想はこのように、あしなが運動にかかわる諸アクター間の関係を規定する論理として作動している。とくに、大学奨学生の参与する活動は、運動で形成される諸関係の結節点となっていて、そこで大学奨学生は、贈与の受け手にも、贈り手にも位置づく。



図 2.2 あしなが学生募金の遺児学生の声を紹介するあしなが育英会機関紙
出典：あしなが育英会 (2008)

しかしながら、大学奨学生の話聞いていてすぐに気づくのは、かれら自身はあしなが運動において形成される関係を、「恩返し」の思想とは異なる論理によって認識しようとしていることである。議論を先取りするかたちでいっておけば、それは、大学奨学生があしなが運動における贈与を取り扱う方法である。

本章は、ボランティアな行動における贈与を諸アクターがどのように扱うのかを明らかにすることをめざして、あしなが運動における「恩返し」の思想の展開の内実を、大学奨学生を中心として形成される関係の重層性に着目して、その関係規定と諸アクターの関係

認識相互を読み解いてゆく。それは、ボランティアな行動における贈与のもつ負荷とその調整のしかたを検討することにつながるものである。

具体的には、まず2節で、先行研究の検討をつうじて、ボランティアな行動においては贈与の扱いかたがひとつの課題となっていることを確認し、本章があしなが運動の大学奨学生を取り上げて、その諸アクターの贈与の扱いかたを考察する意義を示す。それを踏まえて、3節では、あしなが運動の制度水準における関係規定に着目し、「恩返し」の思想にもとづく諸アクター間の関係の構図を明らかにする。つづく4節では、大学奨学生の認識の水準に定位して、かれらが諸アクターとの関係をどのように認識しているのかと、その認識のしかたをつうじた大学奨学生の「恩返し」の思想の扱いかたを明らかにする。5節では、結論として、ボランティアな行動においては、それを喚起する制度水準では贈与を可視化することが鍵となるのにもかかわらず、その認識の水準では贈与にもとづく関係を可視化させないことが、贈与にもとづく関係における相互作用がともなう負荷を回避する方策のひとつとなっていることを論じる。

2 先行研究と分析視角

ボランティアな行動に見られる贈与をとらえる先行研究として代表的なものに、序論でもみた、仁平典宏（2011）がある。仁平は、ボランティアの意味論を歴史社会的にとらえる観点から、〈贈与のパラドックス〉に照準しつつ、主としてボランティアの主体によって形成されてきたその言説の変遷を明らかにしてきた。

確認しておけば、仁平は、〈贈与〉を「『他者のため』と外部から解釈される行為の表象」と定義し、〈贈与〉は、「被贈与者や社会から何かを奪う形（贈与の一撃！）で反対贈与を獲得していると観察されがちである」と位置づけている（仁平 2011: 10）。そして、〈贈与のパラドックス〉とは、「〈贈与〉は、贈与どころか、相手や社会にとってマイナスの帰結を生み出す、つまり反贈与的なものになる」という意味論形式を指すものである。こうした定義のもと、仁平は、「ボランティア」的なものの言説の生成において、〈贈与のパラドックス〉が否定的な中心／準拠点となっているという仮説を提示し、議論を展開した（仁平 2011: 13-4）。

その帰結は、ボランティアの意味論が〈交換〉へと近づき、ボランティアの特徴が、〈交

換〉の意味を中核にもつ「互酬性」によって特徴づけられるようになっていくというものである（仁平 2011）。このように仁平は、ボランティアな行動に見られる贈与が、その外部からの〈贈与のパラドックス〉というまなざしに対処しつつ位置づけられたことを論じている。

なお、仁平は、ボランティアな行動に見られる贈与が回避されてきたことについて、別の側面からの議論も展開している。すなわち、P.M. Blau (1964=1974) を引きつつ、「〔〈贈与〉は〕受け手に対しては、二者関係において、相手に優位性を与え自らを劣位に置くことを意味してしまう。相手からの〈贈与〉は、象徴的な負債となり、「感謝」といった返礼を与え続けることで、人格的に自らを劣位に置くという表象を召喚してしまうのである⁴」

（仁平 2011: 341-2）というのである。この点は、とくに社会福祉の領域において実際に問題として認識されていたことを指摘したうえで、仁平は、このような問題を解決する一手段として、〈交換〉の実体化／制度化が真剣に模索されてきたことをとらえている⁵。すなわち、それは、贈与の贈り手-受け手という二者関係ではなく、交換関係における二者関係において社会福祉の提供という行為をとらえることで、贈与の受け手に位置づくことにもなう象徴的な負債の回避という方法である（仁平 2011: 341-3）。

まとめれば、ボランティアな行動の主体と客体のあいだの関係を贈与概念によって規定することは、その行動主体にとっては〈贈与のパラドックス〉を回避するという意味論的要請から、客体にとっては象徴的な負債を回避するという権力論的要請から、それぞれ回避されようとしている。代わって要請されるのは、〈交換〉の意味を中核にもつ「互酬性」である。

しかし、ボランティアな行動に見られる贈与はつねに回避されるべきものであるわけではない。贈与として規定することによって、ボランティアな行動が喚起されようとする側面もある。藤村正之（1999）は、この点について、寄付行為という行為の主体と客体の関係が非対面的であるボランティアな行動を取り上げ、権力論的な批判を相対化するかたちで、それをボランティアな贈与行為ととらえる考察を展開している。

具体的には、藤村が分析の対象としたのは、1980年代における交通遺児育英会の寄付制

⁴ □ 内は筆者による補足説明。以下おなじ。

⁵ 例として、障害者の自立生活運動とも密接に関わっていた「福祉における消費者主権」が挙げられている。

度「あしながおじさん」制度である。藤村は、制度水準における関係規定の構図と、寄付者の行為水準における関係への意味付与を明らかにした。それによれば、あしながおじさん制度は、寄付者・育英会・奨学生のあいだの三者関係として把握される。三者間では、実体的には、寄付者と育英会、育英会と奨学生のふたつの二者関係において、貨幣財と情報財がやりとりされている。前者では、寄付者から育英会には貨幣が贈与（寄付）され、育英会から寄付者には機関紙などの情報財が贈与されて、育英会の活動や遺児たちの学生生活が知らされる。後者では、交換関係が築かれていて、育英会から奨学金が貸与され、奨学生はそれを二十年賦無利子で返還することとなっている⁶。そして、このような実体的な水準での情報財のやりとりに下支えされるかたちで、寄付者にとって、寄付者と奨学生との二者関係が「想像力において結ばれる相互贈与関係」として認識されようとするのが、この寄付制度の制度水準における特徴である。想像力において寄付者と奨学生とのあいだに結ばれる相互贈与関係という構図のなかで、育英会は、この二者関係を媒介する透明な存在としての役割を担うこととなる（藤村 1999: 204-7）。さらに、こうした関係規定の構図をもとに、行為水準において寄付者は、奨学生との関係が非対面であることを利用して、その関係認識を調整し、それによって寄付行為を自身にとって適切な役割行動として把握しているという（藤村 1999: 211-9）。

このように、藤村は、非対面的な関係を形成することで、ボランティアな行動に見られる贈与のもつ負荷に対処しつつ行動を起こすという術を示唆する議論を展開している。このさい、諸アクターの間を、行為を組織する制度の水準の関係規定と、行為者による行為の水準における関係認識とでわけてとらえる視角は、諸アクターそれぞれが関係の意味づけかたによってそれを適切なものとして調整しようとするはたらきをとらえる本章の分析に示唆を与える。

とはいえ、藤村の関心は贈与の贈り手にとっての認識にあり、その受け手にとっての認識にかんする分析はじゅうぶんとはいえない。仁平が付随的ながら触れているように、ボ

⁶ 無利子であるであることを、有利子ではないという点で、贈与ととらえることも可能である。なお、藤村は、一時的に延期されている交換の履行の代わりに、遺児の奨学生には育英会から生活状況や学業報告などの年度報告が義務づけられていることで、かれらから育英会に情報財が提供されるという。また、育英会は教育効果をねらって、奨学生に機関紙という情報財を贈与しているとも述べている（藤村 1999: 206）。

ランタリーな行動において贈与にもとづく関係がどのように取り扱われているのかを明らかにするためには、その贈り手のみならず、受け手にとっての認識も明らかにする必要があるだろう。とくにあしながおじさん制度のような寄付制度において、贈与の受け手となる遺児は、「人格的類型」（藤村 1999: 207-11）たる他者として寄付者に指定されるよう、その可視化が制度的にはかられている側面があり、そのように贈与の受け手と制度的に規定される遺児を対象とした考察もありうべきである。この点にかかわって、贈与の概念を理論的に考察した K. E. Boulding（1973=1974）は、財のやりとりのもつ意味が二当事者間で異なる可能性があることを示唆している。Boulding は、交換や贈与の関係において、財のやりとりと同時になされるコミュニケーションのやりとりについて、「コミュニケーションにおいては、一方の当事者から発するものが他方の当事者に達するものとは等しくない……という可能性がきわめて強い」（Boulding 1973=1974: 32）と指摘しているのである。

そのため、本章は、こうした非対面的な関係における贈与が、その受け手に位置づくアクターにとってどのように認識されているのかに着眼し、考察を展開してゆく。

なお、藤村が考察の対象としたあしながおじさん制度は、あしなが育英会の寄付制度「あしながさん」制度のモデルとなっていて、あしなが運動の文脈において連続するものである。そのため本章の考察は、あしなが運動の寄付制度を、藤村とは別の側面からの考察をこころみるものと位置づけられる。本章は、「恩返し」の思想にもとづく関係規定の論理に着眼することで、「透明な媒介者」たろうとする育英会の制度水準の規定における贈与の扱いいかたにも目を向ける。

また、本章は、贈与にもとづく関係を整理するにあたって、Boulding（1973=1974）⁷の提起する贈与概念を援用する。Boulding に特徴的なのは、①現代社会を対象として贈与と交換の問題をとらえていることと、②贈与や交換関係にある二当事者間のあいだで、二当事者間の関係認識が異なりうることをとらえていることである。Boulding は、贈与や交換

⁷ Boulding は、「近代の経済システムを組織していくためには、贈与および交換の両者が必要であり、およそ賢明な改革がなされうするためには、それは、経済システムが贈与および交換の両者を相互に作用しあうメカニズムとして含んでいる、という総合的な観点に立っていないなければならないのだ」（Boulding 1973=1974: iv-v）という主張のもと、贈与の経済学を提起し、その理論的分析を展開している。

に付随する規範や原理にそれほど厳密ではないという点で一定の限界があるが、以上の点で、本章の関心に有用な視座を供する。

簡潔に説明しておく、Boulding は交換を財とコミュニケーションそれぞれの二当事者間の二方向的な移転とし、贈与をこのうちの財の移転が一方向的になされるものとしている。くわえて、互惠 (reciprocity)⁸にみられるきわめて興味深い側面として「系列的互惠」(serial reciprocity)を取り上げている。それは、「A から B への贈り物が B の側での一般的な責務感を引き起こすということ」について、その責務感を「B から A に対してではなく、第三者である C に贈り物が贈られることによって果たされ、C は C で自分の責務感をさらに他の D に対して果たし、このような系列性が輪を描いて広がっていった、ついにはおそらく贈り物が A の手に返ってくるに到り、そしてその過程の全体が反復されていく」(Boulding 1973=1974: 52) という関係である。

付言しておけば、Boulding の視角は、系列的互惠における関係のなかで、ひとつひとつの贈与関係のなかでの反対贈与を想定していない点でも特徴的である。たとえばそれは、近代社会における系列的互惠の例として世代間の関係を取り上げるなかにあらわれている。そこでは、ふたつの世代間の関係において、異時的な互惠がみられることも取り上げているが、「われわれが親達に対して負う負債は、親に返済されることはあまりなく、むしろそのかわりにわれわれの子供達に対して支払われる」(Boulding 1973=1974: 52) として、系列的互惠のなかのひとつの二者関係内でも互惠関係が必然的に見いだされるとはとらえていない。

3 「あしなが運動」における「恩返し」の思想の展開 ——重層化する系列的互惠関係

⁸ 互惠は、二当事者間での財の二方向の移転という点では交換と共通するものの、それが形式上無条件におこなわれるという点で、条件付きの申し出の受容に基づいておこなわれる交換とは区別されるものである (Boulding 1973=1974: 49)。なお、訳書において、reciprocity は互惠と訳されている。副田義也 (1993: 139-40) のように、互惠と互酬を異なる概念として扱うべきもあるが、本章においては区別しなかった。

本節では、「恩返し」の思想にもとづいて展開されるあしなが運動の活動において形成される関係の内実を、制度水準において明らかにしてゆく。

「恩返し」の思想は、あしなが運動の展開を貫くかたちで長くもちいられている論理であり、「恩返し運動」の論理は、そこから派生的に生じたものである。交通遺児育英会で専務理事を務め、現在ではあしなが育英会会長として、一貫して「あしなが運動」を率いてきた玉井義臣は、つぎのように記している。

高校奨学生をつどいで僕がいつもいうことがある。

「高三の諸君、社会にでたから恩返しをわすれないように」彼らはじつと僕の目をみつめて聴いている……つどいでいうのは、あしながおじさんや多くの支援者から受けた恩を何かの形でまた社会に返していくことを忘れないで、という意味である……一度周囲を見まわして受けた恩を点検しよう。その人にそつと感謝しよう。まなざしだけでもいい。言葉、賀状、プレゼントなど恩返しを態度で示そう。それが育英会のいう「暖かい心」なのだ。(81・2・14記)(玉井 2010: 85-6)

このように、「恩返し」は、街頭募金などの活動参加と結びつかなくとも、あしながさんに象徴される支援者の「恩」を受けることで奨学金を得た遺児が、卒業後、社会に出るなかで象徴的に「恩返し」をするという文脈で語られるものである。

奨学生にとってみれば、奨学金を得て進学し、その学校での経験を踏まえて、将来にわたって「恩返し」をするという「恩返し」の方法は、日々の学業やその後の生活を営むことでほとんど自動的に成立する「恩返し」である。その意味で、「恩返し」の思想のもつ論理は、すべての奨学生に適用され、奨学金制度の要求する進学や卒業を果たすことによって、あるいは、その後になんらかの生活が営まれることによって、達成されるものである。そこでは、支援者による支援の結果として奨学金があり、それを利用した奨学生が進学機会を得たその成果として「恩返し」がある、という物語が想定されている。それは比較的単線的に想定される「恩返し」であり、奨学金制度が順調に運用されているかぎりにおいて、つねに成立するものである。

ではなぜ、あしなが運動は「恩返し」の思想を「恩返し運動」という形式に派生させて活動に奨学生を動員し、また、その支援対象に遺児を据えたのだろうか。

3.1 大学奨学生を「活動」に動員する論理としての「恩返し」の思想

——系列的互惠関係の積極的な利用

まず、あしなが運動における「恩返し」の思想のもつ論理を確認しておこう。それは、遺児たちが奨学金について、「あしながおじさんがお金持で余ったお金をくださるのではなく、ふつうの庶民が君たちの心の痛みをわかって生活費の一部をさいて援助してくださっているのだと」ということを学び、それを踏まえて、『あしながおじさんは“陰徳の人”だからお返しなど考えるはずがない』『私たちが今できることで社会に返すことを密かに期待されているのではないか』と」考え、『社会への恩返し』をするというものである（交通遺児育英会二十年史編集委員会 1990: 586）。

すなわち、あしなが育英会大学奨学生は、寄付制度に関連づけられることで贈与の受け手と位置づけられる。だが、寄付制度は基本的には非対面的な関係であり、奨学生は実際のところ、この位置づけを回避する可能性を有している（cf. 藤村 1999）。それにもかかわらず、あしなが運動は、むしろ積極的に大学奨学生を寄付制度における贈与の受け手と位置づけようとするのであり、それが「恩返し運動」の特徴である。「恩返し」の論理は、贈与の受け手として位置づけられることで引き起こされる「一般的な責務感」（Boulding 1973=1974: 52）を梃子に、大学奨学生を活動の担い手として動員することで、系列的互惠関係を形成しようとする。責務感とは、大学奨学生が第三者としての「遺児」にたいする贈与として、あしなが運動の活動に参加して活動することで果たされていると規定されている。

このように、「恩返し」の思想は、あしなが学生募金に代表される活動に大学奨学生を動員するための論理として機能している。そこでは、寄付＝贈与の受け手という位置づけが積極的にもちだされ、その責務感を果たす方法として、活動への参加が提示されるというかたちで、寄付と活動が結びつけられている。

3.2 寄付者の贈与を喚起する演出装置としての「恩返し」する主体

——系列的互惠関係の可視化

「恩返し」の方法が「恩返し運動」という形式に定まると、それは、あしながさんの贈与を受けた遺児の奨学生が成長して「恩返し」をするまでになった、という物語を具体化

し、可視化する機能をもつようになる（副田義也 2003: 298）。

「恩返し」の思想のもつ論理は、本来、機関紙などによって個別に卒業後の奨学生の姿をとらえることによって可視化されるものであった。しかし、「恩返し運動」においては、現に奨学金を受けている奨学生が活動に参加するという具体的な姿において「恩返し」が可視化される。街頭募金活動が全国規模で展開されていることで、寄付者を含む人びとは、遺児の奨学生をより具体的な姿においてとらえやすい。

このようにして、「恩返し」の主体としての遺児が、活動に参加する奨学生の姿によって可視化されることは、寄付者にたいして贈与を喚起する作用をもたらす。すなわち、あしながさんは、藤村がとらえたように、寄付の返礼として年に一度、奨学生の名入りの直筆の残暑見舞いや年賀状を受け取り、また、育英会の機関紙を受け取るというかたちで遺児についての情報財を得ることで、遺児とのあいだに、育英会を媒介者とする、想像力において結ばれる贈与関係を結ぶのであった（藤村 1999: 205-7）。こうした関係のなかで、奨学生が「恩返し」としてあしなが運動に参加することは、あしながさんにとって、遺児である奨学生についての情報を補完し、かれらが「恩返し」の主体となるほどに成長していることを可視化する機能を果たしている。

3.3 「恩返し運動」の展開の拡大——重層化する系列的互惠関係

また、「恩返し運動」における支援の対象が遺児と規定されることは、前章でみたように、遺児が遺児を支援するという形式をとまって「あしなが運動」が展開してゆくことを帰結し、「あしなが運動」はこれによってその展開を拡大してゆくこととなった。確認しておけば、「恩返し運動」は当初、交通遺児の高校奨学生による「献血運動」としてはじまったのだが、その後、「災害遺児育英募金運動」を展開するようになった。そして、この災害遺児育英募金運動が継続的に展開することで、災害遺児に対する奨学金制度が発足し、交通遺児による災害遺児に対する支援は、ひとつの成果をもたらす。さらに、あらたに奨学金を受けることとなった災害遺児もこの活動に参加するようになって、「病気遺児育英募金運動」が後続の「恩返し運動」として展開されることとなり、その成果として、1993年4月にあしなが育英会が発足、自死遺児を含む災害遺児、病気遺児に対する奨学金貸与事業がおこなわれるようになった（副田 2003）。

この展開のなかで、「恩返し運動」における系列的互惠関係は、あしながさんの寄付にた

いして遺児の奨学生が「恩返し」をするという関係だけにとどまらず、重層化することとなる。すなわち、ある類型の遺児が別の類型の遺児を支援するというかたちで連鎖的に形成される系列的互惠関係が同時に結ばれるようになるのであり、この関係こそが、「あしなが運動」を拡大する原動力となったのである。

さらにまた、「あしなが運動」の展開によって奨学金を得ることが可能になった遺児があらたに「活動」に参加するという形式をもつことで、死別原因による類型にかかわらず、「先輩遺児」が「後輩遺児」を支援するという遺児どうしの世代的な系列的互惠関係が、「恩返し運動」における系列的互惠関係にさらに重なることとなる。こうしたしくみによって、「あしなが運動」はその支援対象の拡大だけでなく、その担い手の規模の拡大にも成功したのである。

このように「恩返し」の思想は、「恩返し運動」という形式をとって遺児を支援の対象とすることで、重層化した系列的互惠関係として立ち現れることとなったのであり、そのことで、運動の規模と担い手を拡大して展開してゆくことを可能にしていた。

あしなが運動は、この「恩返し運動」の論理によって、調査時点においてもその展開をつづけている。あしなが育英会発足後は、1995年の阪神・淡路大震災による震災遺児支援をおこない、そして、その震災遺児の「恩返し」として、1999年以降、海外遺児を対象とした支援を展開するようになっていく。あしながさんによる寄付に加えて、遺児が遺児を支援するという形式が、運動の展開の柱となっているのである。

4 大学奨学生の関係認識——想像力において結ばれる贈与関係の回避

このように、あしなが運動では、「恩返し」の思想のもつ論理によって、諸アクターの関係規定がなされている。しかし、活動に継続的に参加する奨学生に話を聞くと、かれらにとっては、「恩返し」の思想のもつ論理が重要視されていないという側面がある。

「恩返し」っていうことばはでも使ったことはないですね。どっちかっていうと、やっぱつどいに転嫁してたっていうのがあるんじゃないですかね。⁹

⁹ 2010年5月18日におこなったA2さんへの聞き取り。

「つどい」とは、あしなが育英会が奨学生を対象におこなう宿泊型の研修であり、大学奨学生は、活動の一環として、その運営を担う。奨学生は、ここで接する具体的な後輩たる奨学生である「後輩遺児」との関係において活動を認識しているというのであり、「恩返し」ということばが含みをもつ、寄付者との関係は意識されていないかのようなのである。では、このような奨学生は、具体的には、活動における関係をどのように認識しているのだろうか。本節はこの点について、「恩返し」の思想によって規定される活動における諸関係の、奨学生にとっての意味内実を明らかにしてゆく。

4.1 育英会との二者関係における関係の把握——交換関係にもとづく理解

「恩返し運動」を展開する奨学生の取り組みは、藤村（1999）にならっていえば、運動が支援の対象とする遺児とのあいだに想像力において結ばれる関係における贈与と位置づけられる。この想像力は、つどいなどで現に遺児と接し、あるいは「後輩」にあたる遺児の奨学生とともに活動に携わることで担保され、育英会の職員の話や機関紙をつうじた情報提供によって補完される。この関係においても、育英会は透明な媒介者としての機能を果たそうとしている。

しかし、こうした「恩返し運動」の論理による関係規定にもかかわらず、奨学生はむしろ、育英会との二者関係において活動を位置づけるばあいがある。それを端的にあらわすのが、大学奨学生の多くが実際のところ、最低限の義務だけを果たして活動から退いてしまうという事態である。活動に継続的に参与するある大学奨学生は、活動にあらたに参与する大学奨学生の動向について、つぎのようにいう。

大学1年生が……残らないんですよね……がつつり消えられてしまいました。16人ぐらいいたんですよ。〔1年も経たないうちに〕もう4人か5人しかいない。10人ぐらいもうどっかにいっちゃいました。¹⁰

育英会との二者関係にもとづく活動の把握は、大学奨学生にとっては、活動参加を育英

¹⁰ 2010年6月1日におこなったA3さんへの聞き取り。

会から求められていることに由来するものである。あしなが育英会は、奨学金貸与の条件として、大学奨学生にたいして活動への参加を求めている。この文脈での活動への参加は、年度末の生活状況や学業報告の提出と同様に、奨学金貸与に付随する、契約関係において履行しなければならない「義務」として理解されることとなる。

だがそれだけでなく、活動の支援する対象が贈与の対象として想像力を喚起しないことの帰結として、こうした関係認識が生じることも考えられる。奨学生にとって、活動が「遺児のためにつながる……実感は湧いてない」という事態である。

別に実感ないですからね、正直、自分らが募金やってて、学生ってか、遺児学生が学校に行ける、行けたっていう。自分らの、その活動でっていう実感なんてまったくないですからね……お金集まった、いくら集まったっていうそれぐらいしか。¹¹

この集めたお金が後輩遺児のためにつながることっていうのは、まあ言っちゃいますけど、そんなに頭で理解してないっていうか、実際は湧いてないって感じですかね……活動はやっぱり、お金を集めるだけじゃないっていうところが、ある意味そういったひとたちの支えになったりするのかなと思うんですけど……で、個人的には活動で一番大切なのは広めることだと思ってるので。¹²

たとえば、海外遺児に対する支援は、2000年代後半から、つどいにおいて交流会をおこなったり、日本への海外遺児の留学生があしなが育英会の学生寮で生活して活動とともに取り組んだりすることで、具体的な姿において対象を把握する機会があるのだが、必ずしも贈与の対象として像を結んでいるわけではない。海外遺児支援を目的とするウォーキング・イベント「あしながPウォーク 10」(図 2.3) について後輩から質問を投げかけられた経験について、ある奨学生は、育英会の事業を支援するものとして活動を位置づけ、これを納得しようとしているのである。

P〔ウォーク〕が「なぜ世界に目を向けたんですか？」っていうことにたいしては、

¹¹ 2010年10月14日におこなったA8さんへの聞き取り。

¹² A2さんへの聞き取り。

4 年生の後半あたりは、「日本だけで活動をしてると、〔育英会が〕ジリ貧になるからじゃない？」って〔答えてました〕……P〔ウォーク〕にかんしてはもうなんか、自分らの知らざるところでそうなっちゃってるっていうのがやっぱり……でもそういう風に説明するとたいいてい、「じゃあなんで海外、やんなくていいじゃないですか！」ってなるんで、もうそういわれたら「しかたがない」としかいえないんですけどね、自分にとってはもう、「そんなおれにいわれても」って感じなんですよ……「それ伝えたいんだったら育英会にいつてくれ」って感じで、¹³

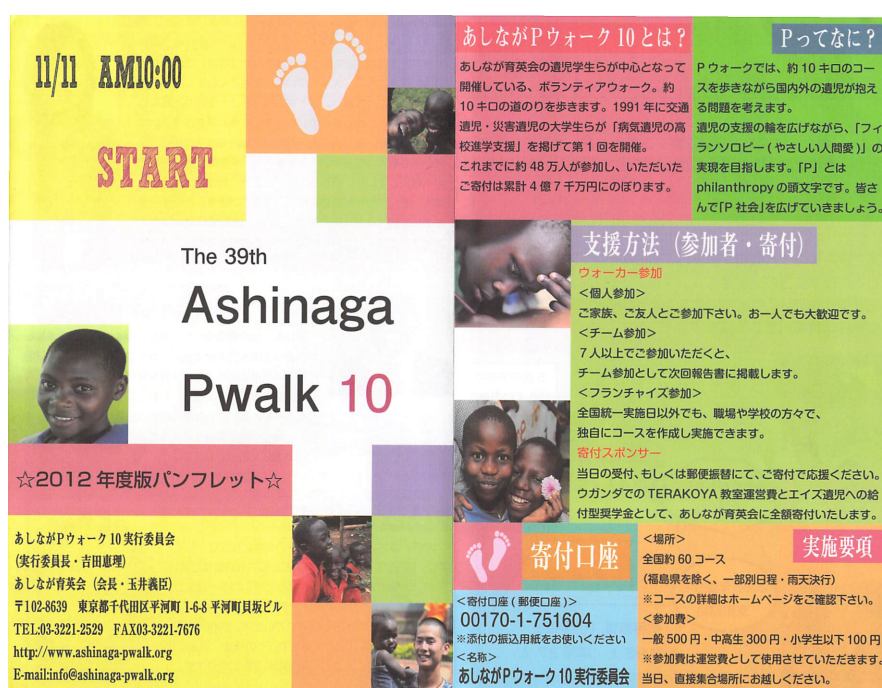


図 2.3 あしなが P ウォーク 10 の参加者募集リーフレット

出典：あしなが P ウォーク 10 実行委員会（2012）

贈与の対象が想像力において像を結ばないとき、活動への参与を「義務」と位置づけ、育英会との二者関係を措定することで、継続的な活動への参与を可能にしている奨学生もいる。それによって、「恩返し運動」の論理で規定される関係にかかわらず、奨学生は、活動への参与それ自体による満足に目を向けることができるのである。

¹³ A2 さんへの聞き取り。

義務ってことでやってるのも少しはあるんですけど、すべて義務でやってるって思うとやな自分もいるんで……義務でやるから、やるのはやるにしても、やるからには楽しもうかな、ということですね。¹⁴

4.2 贈与の対象としての「後輩遺児」

——贈与にもとづく関係規定を回避する奨学生の論理

「恩返し」の論理が規定する贈与にもとづく関係とは異なる関係認識によって奨学生が活動を把握しようとするのは、贈与の対象が想像力を喚起しないためだけではない。むしろ、敢えて想像力における贈与関係を回避している側面がある。このことは、活動に携わる奨学生にとって比較的贈与の対象として像を結びやすい「後輩遺児」との関係を、奨学生がどのように扱うのかをみることで明らかになる。

「後輩遺児」とは、「恩返し運動」の論理においては、奨学生が現に接してきた後輩の奨学生のみならず、これから遺児となる可能性のある子どもまでをも含んだ存在として規定されようとするものである。しかし実際のところ、「後輩遺児」はしばしば、活動に参加する奨学生自身の目に見える範囲にかぎった「後輩遺児」として理解されている。それは、あしなが育英会の主催するつどいや遺児家庭訪問調査で接した遺児であったり、自身とおなじように活動に参加する「後輩」にあたる奨学生であったりする。

たとえばある奨学生は、「後輩のため」とみずからがいうときの意味内実について、つぎのように説明し、あしなが運動に携わるなかで出会った具体的な存在としての遺児が想定されていることを示す。

「後輩のため」とはいいますよね、でも「遺児のため」かっていったら、ちがいますよね、「遺児のため」って、具体的にいうと、遺児の生活を考えてってことですよ？……それはでも実際、あしながのひとのためだけですよ。 ¹⁵

「恩返し」の論理が規定する「後輩遺児」という贈与の対象は、奨学生にとっては、活

¹⁴ 2010年9月10日におこなったA7さんへの聞き取り。

¹⁵ 2010年7月12日におこなったA6さんへの聞き取り。

動のなかで具体的に接する存在としての「後輩」をとらえることで説明される。

また、活動に参加する奨学生にとって、「後輩遺児」を贈与の対象としてとらえることは、街頭募金において自身の経験を語りながらも、しかしそこで受ける寄付を、みずからにたいするものとしてではなく、「後輩遺児」にたいする贈与として受け取るための手段という側面がある。奨学生は、街頭に立ってみずからの経験を語るのにもかかわらず、寄付者の「後輩遺児」にたいする贈与を媒介する役割を果たす立場をとろうとしているのである。これによって奨学生は、寄付者との差し向かいの二者関係において贈与の受け手と位置づき、その非対称的な関係に直面することを回避している。

すなわち、つぎのように語る奨学生がいるように、親との死別の経験は、自身の経験としては「めっちゃいいたくない」「思い出したくもない」ものである。それにもかかわらず、活動を単に寄付を募るためのものという文脈に位置づけることによって、その経験は、事実を述べるという形式をとりながらではあるものの、「後輩遺児」という対象を寄付者に想起させるために、街頭で語られる。

〔親との死別の経験を街頭でいうのは〕抵抗はありましたね……たぶんやんなかったですね、1年のそのときは……。いまは〕だって、そっちのほうは〔お金がよく入るから、いいます〕……実際そういう〔親を亡くした〕経験をしてきたひとたちがやってる団体なんで……めっちゃいいたくないですよ。すごい惨めな気分になります……なんで〔親がいないのか〕とかはあんまいわないですよ……いついなくなって、で、まあ大学行くにも奨学金ないと行けないしみたいな。〔実際は〕話したくないです。思い出したくもないです。基本、思い出すのもやだし。¹⁶

こうして、奨学生が敢えて想像力における贈与関係を結ぶことを回避しているという見かたをとれば、前節でみた「集めたお金が後輩遺児のためにつながるからっていうのは……そんなに頭で理解してないっていうか、実際は湧いてないって感じですかね」という発言は別様の意味を帯びてくる。すなわちかれらは、「後輩遺児」にたいする贈与の主体として位置づけることを一方で回避しようとしているのである。

それは、「後輩遺児」を贈与の対象と指定することが、「恩返し」の思想にもとづく重層

¹⁶ A8 さんへの聞き取り。

的な互惠関係を作動させる引き金となっていることと関連する。「後輩遺児」が贈与の対象と規定されることは、遺児どうしの世代的な互惠関係を形成する鍵となっており、また同時に、「恩返し」の思想が規定する重層的な系列的互惠関係を作動させる鍵ともなっている。奨学生はこれにたいして、活動を結節点として結ばれる諸関係をひとつひとつの二者関係として把握し、想像力において結ばれる関係の像を結実させないことで、系列的互惠関係の形成を、認識の水準で回避している。そしてこのことは、藤村（1999）が見いだしたような、非対面的な関係として贈与を位置づけることでその負荷を回避する方法の、奨学生自身による遂行とみることができる。

5 おわりに

これまでに明らかになったことを整理しておこう。あしなが運動における「恩返し」の思想にもとづく関係規定は、系列的互惠関係を利用して贈与の対象となる遺児の姿を可視化することで、寄付者にとっての贈与を可視化する論理であった。その論理はまた、「恩返し運動」というかたちで活動に取り組む遺児と後輩遺児との世代的互惠関係を同時に措定している。このような重層的な系列的互惠関係を利用して想像力における贈与を可視化することが、あしなが運動の拡大の鍵となっている。翻って奨学生自身の関係認識に目を向けてみると、そこではむしろ、すでに可視的な育英会や後輩遺児との二者関係において活動をとらえる奨学生の姿を見いださせる。奨学生の活動への参与は、「恩返し」の論理が規定するのは別の関係によって担保されようとしているのであり、それは、かれらが想像力における贈与関係のアクターとして像を結ばれることを回避し、それを不可視化しようとする方法といえるのである。

ここから踏み込んでいっておけば、このような奨学生の関係認識こそが、あしなが運動における非対面的な関係にもとづく贈与を維持するひとつの鍵となっている。つまり、奨学金を贈与として認識することを回避し、あるいは活動における行為の贈り先を明確に措定しないことで、奨学生は、寄付者とのいわば差し向かいの二者関係に相対することを避け、それを不可視化するのである。それでも、奨学生が継続的に活動に参加するというふるまいの水準の事実それ自体によって、贈与にもとづく関係は観察されうるのであり、結果として、「恩返し」の思想は、あしなが運動において贈与を喚起する論理として有効性を

もちつづける。

結論的に述べておくならば、ボランティアな行動における非対面的な贈与関係は、一方で想像力において結ばれる贈与関係を措定し、他方でそれが非対面的な関係であることを措定しようとするなかで成立する関係であるということである。そのような関係のしかたによって、ボランティアな行動における贈与は生起・維持されうる。

このように本章では、あしなが運動の「恩返し」の思想にもとづく関係をめぐる論理を取り上げ、ボランティアな行動に見いだされる贈与の負荷とその調整のしかたを検討した。なお、本章が取り上げた奨学生の活動への取り組みかたは、活動における関係認識をつうじた贈与の扱いかたを議論するという、限定的な関心において明らかにされたものである。奨学生が、そのような関係認識をしてなお活動に継続的に取り組もうとするのはなぜかを明らかにすることは、次章での課題とし、活動における奨学生の具体的なふるまいと認識をさらに詳細に検討することで、あしなが運動の活動者に特有の意味づけの内実をさら検討したい。

第3章 運動にあらたに参加する活動者の理念とのつきあい ——遺児学生があしなが運動において形成する重層化した 秩序

1 はじめに

前章では、あしなが運動の「恩返し」の思想にもとづく関係規定にたいして、活動者のあしなが育英会大学奨学生たる遺児学生が、どのように活動における関係を認識しているのかを明らかにした。遺児学生は、可視的なあしなが育英会や後輩遺児との二者関係によって活動をとらえることで、寄付者とのあいだで想像力において贈与関係を結ぶことによる負荷を回避して、活動に取り組んでいた。

これにたいして、本章では、活動者間の関係に注目して、「恩返し運動」の論理がどのように取り扱われているのかを明らかにする。いいかえれば、本章は、遺児支援活動を展開するあしなが運動の担い手とされる遺児学生の取り組みを、遺児学生自身がその集まりにおいて形成する秩序に注目しつつ読み解いていくものである。これによって、比較的長い期間にわたって展開する運動にあらたに参加する活動者の動員の問題を扱うに際して、活動者が運動の理念をどのように取り扱うのかに注目することの重要性を示す。

確認しておけば、「あしなが運動」は、交通遺児支援に端を発する40年にわたる歴史をもつ遺児支援の運動である。これまで一貫して運動を率いてきたのは、社会運動家の玉井義臣である(副田義也 2003)。運動は現在、あしなが育英会をその組織的基盤とし、病気・災害・自死遺児に対する奨学金貸与、学生寮運営、教育、心のケアなどの各種事業をおこなっていて、最近では海外遺児支援事業にも力を入れている。

あしなが運動の特徴は、寄付を得てはそれを費やすことによって遺児支援を展開していることにある。事業支出は、基本的に寄付収入によってまかなわれている。運動の手がける事業の主力である奨学金貸与事業は2009年度時点で、単年度で6,000人を越える奨学生を有しており、その貸与総額は年間22億円を越える(あしなが育英会 2010c)。運動は、みずからの事業によって継続的に維持に対する支援をおこなうという性質をもつ以上、継続的な寄付収入が担保される必要がある。そのため、寄付を募る事業が、実際に遺児を支

援する事業と並んで重要性をもつ。寄付収入のうちで代表的なのは、継続的に奨学金を送金する「あしながさん」制度による寄付¹と、街頭募金「あしなが学生募金」による寄付である。

本章はこのうち、あしなが学生募金を取り上げ、とくにその担い手である遺児学生に着目する。遺児学生とは、そのほとんどがあしなが育英会大学奨学生である。あしなが学生募金は、400人ほどの遺児学生が全国でおよそ200箇所の街頭に立ち、遺児の置かれる現状について人びとに訴え、募金を呼びかけるもので、調査時点でいえば、年に2度のキャンペーンによって3億円を超える寄付を集めている。

遺児学生があしなが運動の担い手であることは、あしなが運動のもつ「恩返し運動」の論理によって説明される。確認しておけば、それは、あしながさんに代表される寄付者から奨学金を受け取るというかたちで受けた「恩」を、社会に返してゆくひとつの手段として、遺児学生は活動に取り組むという論理構成をもつ²。

遺児学生は、「恩返し運動」の論理にもとづいて活動に取り組んでいることを表明するかのように、しばしば、自身の親を亡くした経験を話すことによって、遺児の置かれる現状について人びとに訴える。それは、自身が運動に携わる動機となり、あるいはまた、かれらが支援しようとする遺児の姿に重なる。遺児学生は、街頭においてはときに叫ぶようにして、「自分史」と呼ばれるその経験を語るのである。

私は……父親をガンで亡くしました。父の死後、将来への不安が常にありました。しかし、私は、あしなが育英会の奨学金によって進学することができ、希望を見出すことができました。遺児が自分の力で貧留から抜け出し、格差社会に立ち向かえるようになるためには、教育を受ける機会を平等に得ることが必要です。³

¹ あしながさん制度は、J. Webster の小説『あしながおじさん』に着想を得た寄付制度である。寄付者は「あしながさん」と呼ばれ、任意の期間、任意の金額を遺児の奨学金として継続的に寄付をすることで、遺児の進学を支援する。あしながさん制度による寄付の総額は、2009年度時点で年間12億円超を数える（あしなが育英会 2010c）。

² おなじ論理で、遺児学生は、海外遺児支援をおこなうウォーキング・イベント「あしながPウォーク10」の開催も手がけている。

³ あしなが学生募金に配布されるチラシから。

70

学貸与の条件として、調査時点において2期1年にわたって活動に参加することを求めている。このようにしてあしなが育英会大学奨学生をあしなが学生募金に動員する構造は、毎年多くの構成員が参加しては離脱し、入れ替わるなかで活動が減り立つことを帰結する。すなわち、活動は、毎年500人を超える大学奨学生にたいして活動への参加を要請するが、活動に参加することとなった大学奨学生の大半は、最低限の「義務」を果たすと活動から退いていってしまうという動員構造をもつ。具体的な活動を展開する最小単位の「県」の水準でみれば、たとえば、16人いた大学1年生が10人ぐらい、「どっかにいっちゃいました」というような状況が生じる。各学年の遺児学生は、1年も経てば「もう4人か5人しかいない」という比率でしか残っていないのであり、かれらのような継続的に活動に取り組みつづける遺児学生が一定の比率で存在することで、活動は成り立っている⁴。

このような動員構造において、継続的に活動に参加してあしなが学生募金の担い手となる遺児学生は、どのようにして活動に取り組んでいるのだろうか。本章は、遺児学生の活動におけるふるまいの水準と認識の水準とのあいだにみられるギャップに注目し、この点を検討してゆく。遺児学生は、活動の具体的な局面においては「自分史」を街頭で語り、あるいは動機に対する言明をおこなってあたかも「恩返し運動」の担い手としてふるまうのにもかわらず、活動をめぐる語りの水準では、かれらはそうしたふるまいを役割距離をとりながらおこなっていたのだと呈示してみせるのである。

先取りしていっておけば、遺児学生がこのようなギャップを見せながら活動に取り組むのは、かれらにとって、あしなが運動の理念の取り扱いが、活動に参加しつづけるにあたっての課題となっているためである。遺児学生は、活動に取り組むなかで相互に運動のもつ理念を取り扱うための秩序を形成し、重層化した秩序のなかで自らの楽しみをそれぞれに見いだしている。

本章の構成はつぎのとおりである。まず、2節において先行研究と分析視角の検討をおこなう。つづく3節では、遺児学生が運動で期待される役割をどのように取り扱っているかを考察する。さらに、4節では、遺児学生のあいだで「アツイ想い」と呼ばれる、活動に取り組む姿勢をめぐって形成される秩序をとらえる。そして、5節において、遺児学生が活動に見いだす楽しみを取り上げ、6節で本章のまとめをおこなう。

⁴ 2010年6月1日に実施したA3さんへの聞き取り。

2 先行研究と分析視角

あらたに運動に参加する活動者の動員の問題をとらえる既存の社会運動研究に通底する関心のひとつは、対象となる運動体の理念に照らした活動者の動機を探索することである。

たとえば、西城戸誠（2008）は、1990年代半ばから2000年代半ばにおける「生活クラブ生協協同組合北海道（生活クラブ生協・北海道）」の活動が、以前と比較して沈静化した要因を考察している。要約的にいえば、西城戸は、生活クラブ生協・北海道の理念を受け入れて積極的に活動に参加するという、組合員としてのアイデンティティを確立することが、組合員にとって構造的に困難になっていることを指摘している⁵。

あるいは、脇田健一（1997）⁶は、1980年前後をピークに大々的に展開した滋賀県の石けん運動を事例として、人びとに現れた変身⁷をとらえ、「喜びとしての変身」と「強制と

⁵ 具体的には、西城戸は、生活クラブ生協・北海道において形成される「班」制度のシステム不全の様相を明らかにしている。すなわち、西城戸は、班の構造とそこに埋め込まれた運動文化、その変化をとらえて、「停滞」の様相を呈している3つの要因を示している。その要因とは、①班別共同購入システムから戸別配送システムの導入というシステムの変更によって、組合員同士の相互作用の機会が減少し、組合員としてのアイデンティティの確立が困難になったこと、②個人主義化という組合員自身の意識の変化によって、生活クラブ生協・北海道の運動理念を受け入れる素地を持った組合員が減ってしまったこと、③生活クラブ生協・北海道の主要な社会運動が1990年代から次々と外部化し、活動的な組合員が流出したことの3つである（西城戸 2008: 195-6）。

⁶ 脇田は、「運動組織を分析単位としながら、社会運動を、組織と資源との関数として捉えようとする」（脇田 1997: 58）資源動員論によるアプローチではとらえることのできない、環境運動の過程における、環境運動に参加したひとびとの変容をとらえる視角として、変身という概念を用いている。変身概念を用いることによって可能となるのは、「環境運動におけるひとびとを、創造的で独創的な存在であると同時に、環境問題や運動組織、そして行政による環境政策といったよりマクロなレベルからも影響を受ける存在として把握すること」（脇田 1997: 62）である。

⁷ 脇田は変身概念を明確に定義していないが、同書のなかで編者の荻野昌弘（1997）は、

しての変身」というふたつの変身の緊張関係のうちに、運動にかかわった人びとの存在を把握している。すなわち、前者の変身をする人びとは、内的な必然性をともなった創造的な存在として把握され、後者の変身をする人びとは、組織体の力によって規定される存在として把握されるのである⁸。

いずれの研究も、対象となる運動のもつ理念が活動者にとっていかなる魅力をもつかどうかに着目した分析をおこなっていて、そこでは、運動の理念のもつ魅力は前提とされている。しかしながら、ボランティア活動を事例に取り上げる原田隆司（2000, 2010）が明らかにするように、活動者は、運動の理念のもつ魅力とはかかわりのないところで運動に参加する可能性をもつ。すなわち、原田は、「ボランティアを『する』側の意志や姿勢だけ」

（原田 2010: iii）からとらえる理解にたいして、活動における相互作用やそれによって形成される人間関係に注目する視角を提起している。そして、原田（2006）は、この視角を「する側」のあいだの人間関係をとらえる視角に応用し、若者と大人の相互作用の場としてボランティア活動を取り上げ、世代間の関係としての若者論をこころみている⁹。原田が指摘するのは、若者たちが活動で形成される人間関係を活動の中心に据えていて、活動の現場での判断や反応そのものも、大人たちによって導かれようとする傾向にあることである。原田のとらえる若者たちは、脇田のとらえるような、活動のめざすところとの関係における変身の魅力というよりも、むしろ、その活動によって形成される人間関係にこそ魅力を感じているのである。若者たちはその魅力のためにこそ、感情をコントロールし、参与しているボランティア活動に自分自身を埋め込んでゆくのである。

変身の一般的特質として、①身体が加工されている点と②空間の変化／移動を伴う点を挙げている。脇田のいう変身とは、石けん運動に取り組むことによる、そのひと自身のライフスタイルや思考の変化を指していると思われる。

⁸ 脇田によれば、「喜びとしての変身」とは、「自己の内に生まれる、ある意味で、必然性をともなった喜び」（脇田 1997: 74）を見いだすことによる変身であり、「強制としての変身」とは、組織の持つ力に大きく規定され、義務と苦痛をともなうものである（脇田 1997: 78）。

⁹ 具体的には D. Riesman（1961=1964）の他人指向の類型のうち、ボランティアを主導する大人たちを自律型、ボランティア活動に関わる若者たちを適応型とアノミー型と位置づけ、理論的な考察をおこなっている。

原田の議論を敷衍していえば、人びとの運動への参与の動機づけは、運動のもつ魅力だけによって説明されるのではなく、人間関係といった、かれら自身によって発見された魅力によってもまた説明されうる。

ただし、原田の議論では、活動によって形成される人間関係に魅力を感じながらも、あるいは魅力を感じるからこそ感情をコントロールしてゆくということが、若者においてどのように成り立っているのかということについて、やや判然としない。それは、原田もまた、活動の魅力と若者の活動への参与を因果論的にとらえていることの帰結である。

原田の議論を踏まえてさらに検討すべきは、活動に魅力を感じているとして、それを確保するために活動者がどのように活動に取り組むのかということである。すなわち、運動の理念のもつ魅力とはかかわらないところでの活動者の活動への参与を考えると、運動の理念とは異なる魅力を見いだしてもなお考えなくてはならないのは、運動の理念が活動者に要請する秩序と活動者自身の認識とのあいだの関係である。いいかえれば、活動者が、運動の理念やそれにもとづく秩序とどのようにつきあっているのかを検討する必要がある。本章は、この点をとらえる視角を提起する。

こうした視角からあしなが運動に参加することとなる遺児学生をとらえるにあたっては、序論で示したように、E. Goffman (1963=1980) の対面的相互作用における行為をめぐる規則とふるまいの関係をとらえた分析視角を援用してゆく。それは、運動の理念や秩序を相対化してとらえることを可能にする概念である。とくに、本章が事例として取り上げるあしなが運動のように、比較的長期にわたって展開する運動にあらたに参加することとなる活動者をとらえる際に重要となる。運動は次第に制度化し(寺田良一 1998; 長谷川公一 2000)、その理念は活動者にとって必ずしも魅力をもつというわけではなく、むしろ時代が下るにつれ適合しなくなってゆく可能性を内包する。あらたに参加する活動者にしてみれば、運動の理念や秩序は、かれらとの相互作用によって形成されていくというよりはむしろ、すでに形成された、いわば所与のものとしてとらえられるものである。そのような状況におけるふるまいかたを会得した上にこそ、活動への継続的な参与がありうるのである。

本章における具体的な遺児学生のふるまいと認識の考察にあたっては、Goffman を援用した議論を展開した J.-C. Kaufmann (1995=2000) ¹⁰ の役割概念に、とくにその中心的な

¹⁰ Kaufmann は、浜辺でトップレスになるという行動が、どのような規範が生成されるこ

発想を負うところが大きい。Kaufmann は、人びとが役割に執着することについて、「役はその人の外側にあるのではなく、制約でもないことを示す理由があるからだ」と述べている。「制約どころか、役割は自分を作る道具であり、自分がイニシアティブをとるスペースを広げるものなのである」(Kaufmann 1995=2000: 313)。すなわち、「役割との距離が増せば、自分に課せられる制約が増えるが、完全に役割にはまると外圧は減少する。役割に深くはまり込みすぎないように慎重に臨むなどということは稀だというのが理解できる。自分にかかる制約を少なくするのにいちばんいい方法は、役割に従い、役割を自分のものにしてしまい、役割として演じていることを忘れるまでに一体化することだ。それはつまり役割を演じるのではなく、役割自体になりきることである」(Kaufmann 1995=2000: 314)。つまり、役割という基準があることによって、人びとは「よけいな疑問を感じずに自分自身でいられて、行動の自由があり、自分と同類の者たちがいる、安心感を与えてくれる空間」(Kaufmann 1995=2000: 322)を確保する可能性を有するのである¹¹。

以上を踏まえて、次節以降では、あしなが運動に参加することとなる遺児学生が、運動の理念や秩序を活動において具体的にどのように取り扱うのかを記述していく。

3 「恩返し運動」の担い手をめぐって形成される秩序 ——あしなが運動に期待される役割の取り扱い

3.1 ふるまいの水準において期待される役割の遂行と語りの水準における役割距離の呈示

本節では、遺児学生が「恩返し運動」の論理にもとづいて運動に参加しているという説明を忌避するような A8 さんの発言を手がかりに、遺児学生が活動で期待される役割をどのように取り扱っているかを検討する。

とによって可能になっているのかを論じている。

¹¹ ただし、Kaufmann は、「基準とはいっても実際は偽物で、見かけ上は完璧で心安らぐものではあるが、その裏では解釈が非常に混乱していることである。基準が曖昧になればなるほど、ガードレールの役割は、最も公式的な側面において儀式化された行動に任されることになる」(Kaufmann 1995=2000: 3-32) ことに注意を向けている。

やる気あるやつだけで、〔活動をやるん〕だったらみんな辞めちゃうんじゃないですか？「そんな重い」とかって、みんな「もう無理」とか、「アツい」みたいな。余計キモい団体ですから、「救うんだー！」みたいなのをやりはじめたら¹²。

彼女の発言からうかがえるのは、活動には「やる気あるやつだけ」なのではなく、「やる気ある」とはかぎらない遺児学生もいるということである。そして彼女は、これに肯定的な態度を示している。

とはいえ、「余計キモい団体」だということからは、A8さんは、あしなが運動をなにがしか「キモい団体」だという認識をもっていることがうかがえる。彼女が「キモい」と感じているのは、活動に携わる先輩の遺児学生が、学校にも行かずに活動ばかりに精を出していると見えること、それに、かれらが「遺児が遺児が」と、遺児ということばをキーワードに活動を語ることである。

最初はまじいやでした。気持ち悪い団体みたいな。気持ち悪いっていうかなんか、なにしに大学来てんだろうみたいな、先輩とか。けっこうなんかみんな、同期たちとでいったのが、「学校行かないで、なんで活動やってんの？」みたいな……「遺児が遺児が」みたいな。もういままでいなかった世界じゃないですか。なんかすごい自分がふつうのひととは別なんだなって思いました。¹³

彼女にとってみれば、遺児であることは、あしなが育英会の奨学金を利用するさいにその貸与の条件として意識されること以上のものではないのにもかかわらず、それがあしなが運動に携わることによって、特別なこととして意識させられることとなる。A8さんは、それを戸惑いをもって迎えている。

なんか別にそんなにお父さんがいないことが特別なの？ 的な。¹⁴

¹² 2010年10月14日におこなったA8さんへの聞き取り。

¹³ A8さんへの聞き取り。

¹⁴ A8さんへの聞き取り。

そのため、A8さんは、遺児を主題に据えて活動することに自身が距離をとっていることを筆者に語り、呈示するのである。

別に実感ないですからね、正直、自分らが募金やって、遺児学生が学校に行ける、行けたっていう。自分らの活動で、っていう実感なんてまったくないですからね、お金集まった、いくら集まったっていうそれぐらいしか、「なにごともなく終わったー」みたいな。¹⁵

A8さんは、具体的な活動の場面においても、一見それとはわからないようなやりかたで、役割距離をとっているのだと語る。たとえば、活動には準備段階でおこなわれる会議があり、その話し合いの場面では、自身が活動に取り組む意義について意見を交わす機会がある。会議でこのような議題が取り上げられるのは、この活動でしばしば見られる光景である。彼女はその場面で、「模範解答みたいな」を述べているという。それは、A8さんにとって、「誰にも非難されることなく、無難に、平凡に」やってゆくことを可能にするものである。

でも模範解答みたいなものってあるじゃないですかやっぱ。その「高奨生のつどいでこういう子に会って」みたいな。「そういう子助けたいって思った」みたいな……正直なところ、原稿があるんです、ちゃんと……孤立したくないっていうか、まあなんか、「こうやってやるとけば無難かな」みたいな……誰にも非難されることなく、無難に、平凡に。¹⁶

街頭で「自分史」を語ることにしても、A8さんは、同様のことを語っている。彼女は、「自分史」を語ることに抵抗を感じるといいながらも、事実だけを並べ、感情を差し挟まないようにすることで、「自分史」を街頭で話しているのだと語り、街頭での活動中にも役割距離をとっていることを筆者に呈示しようとしている。そのようにしてでもA8さんが

¹⁵ A8さんへの聞き取り。

¹⁶ A8さんへの聞き取り。

「自分史」を話すのは、「変に決まりになって」いるからだという。

〔「自分史」を街頭でいうのは〕抵抗はありましたね……たぶんやんなかったですね。1年のそのときは、〔いまは〕だって、そっちのほうが〔お金を示すジェスチャーをする〕。やっぱあれなんじゃないですか？ 実際そういう〔親を亡くした〕経験をしてきたひとたちがやってる団体なんで、一番。しかもそのほうがやっぱりまわりの後輩のやる気になるじゃないですか……やる気っていうか、一回いわれたんですよね。誰かやなくて「なんであのひといわないの？」みたいな。なんていうか、変に決まりになってないですか？ いうのって、なんかそういう雰囲気があるじゃないですか。（「自分史」をいうときは）なんで〔親がいなくなったのか〕とかはあんまいわないですよ。ね……いついなくなって、で、まあ大学行くにも奨学金ないと行けないしみたいな。〔実際は〕話したくないです。思い出したくもないです。基本、思い出すのもやだし。

17

A8さんは、このように、会議の場面で自身が活動に取り組む意義を述べたり、街頭で「自分史」を語ったりする活動の経験を、活動のそれぞれの場面で要請される役割の遂行と解釈して語ることで、活動において役割距離をとっていることを筆者に呈示している。ふるまいの水準で求められる役割に徹することで、認識の水準では役割距離をとっているという二重性において、活動に取り組んでいるのである。そしてまた、A8さんは、このように語ることで、活動に参加する遺児学生が「やる気あるやつだけ」で構成されているわけではないことも示している。

3.2 「アツい想い」をもつまわりの遺児学生を見いだす

A8さんの話でさらに特徴的なのは、A8さん自身は活動の具体的な局面において役割距離を呈示していると話すのにもかかわらず、同時に、「救うんだー！」という「想いをもつてのひとが発信」することが大事だとも述べている点である。

¹⁷ A8さんへの聞き取り。

想いをもってるひとが発信して、じゃあがんばんなきゃって思いますけどね……〔学生募金の代表である事務〕局長っていうか、前に出るひとたちはやっぱもってて、でこう発信していかないと、下はついていかないんじゃないですか？ じゃないとなんでこんな募金やるのかもわかんなくなる。¹⁸

彼女は、まわりの遺児学生に「想いをもってるひと」を求めている。それは、Bさんが「アツい」と評した「遺児が遺児が」といい、活動に没頭している遺児学生の姿に重なる存在である。また、「恩返し運動」の論理において想定される、遺児問題についての関心を自身のものとして引き受けて活動に取り組む遺児学生の姿にも重なる。

たまにすごいアツい子とかはいるじゃないですか。なんか「高校生が学校に行けなくて、だからがんばるモチベーションになる」みたいな。¹⁹

A8さんは、このような遺児学生の姿を、一面では「アツい」ということによって距離をとりながらも、活動においては積極的に必要とされる存在として見いだしている。

そのねらいは、このようなまわりの「想いをもってる」遺児学生が存在を「恩返し運動」の論理を引き受けて活動に取り組む担い手として見だし、それをいわば隠れ蓑とすることで、「やる気のあるやつだけ」ではない、活動に継続的に参与する遺児学生の集まりを確保、維持することにある。「誰にも非難されることなく、無難に、平凡に」活動に参加しつづけようとする彼女たちにとって、「想いをもってる」遺児学生が存在は、期待される役割を遂行する意義を示し、また、隠れ蓑としての役割を果たす存在として、非常に重要な位置づけをもつ。

すなわち、遺児学生は、一方で求められる役割に徹しつつ（Kaufmann 1995=2000）、他方で「アツい想い」をもつまわりの遺児学生を見いだして、「恩返し運動」の論理にもとづいて活動に取り組む遺児学生の姿に自身を重ね合わせることで、「恩返し運動」の論理を回避して、「誰にも非難されることなく、無難に、平凡に」活動に参加することを可能にし

¹⁸ A8さんへの聞き取り。

¹⁹ A8さんへの聞き取り。

ている²⁰。

しかしながら、その帰結として、A8 さんの見いだす「すごいアツい子」と、役割距離を呈示していると語る A8 さんのような遺児学生とは、活動において一見しておなじようにふるまうことになる。「高奨生のつどいでこういう子に会って」「そういう子助けたいって思った」というようにして、A8 さん自身が「模範解答みたいなの」としつつ語る活動に取り組む意義は、「すごいアツい子」が語るモチベーションとおなじ形式で語られていて、一見してそこにちかみを見いだせないのである。このことによって、遺児学生は、まわりの遺児学生から向けられる「アツい想い」をもっているというまなざしに対処する必要が生じることとなる。

4 「アツい想い」をめぐって形成される秩序 ——遺児学生相互に期待される役割の取り扱い

4.1 「アツい想い」をもたない活動への参与

そこで、今度は A7 さんの事例を取り上げ、「アツい想い」をめぐって形成される秩序を明らかにしてゆく。

A7 さんは、具体的に活動を展開してゆく単位である県で、街頭募金の代表を務めた経験をもつ。それは、おなじように役職に就いている遺児学生から「〔まわりの遺児学生に対して自分のもつ〕想いを伝えろ」といわれる立場である。しかし、「まじめに考えてるつもり」でも、A7 さんにはそれに応じたふさわしい「想い」がことばに「出てこない」。そして、

²⁰ こうした活動参加の論理は、大澤真幸 ([1996] 2009, 2008) のいう「アイロニカルな没入」という行動の態様に重なる。アイロニカルな没入とは、「本気で信じている他者の存在を、外部に前提にしている」ことを手がかりに、「意識のレベルでは、対象に対してアイロニカルな距離を取っている（「ほんとうは信じていない」と思っている）。しかし、行動から判断すれば、その対象に没入しているに等しい状態にある（実際には信じている）」（大澤 2008:233）というかたちで、ある論理にたいして、認識の水準での距離を示しながら、行為の水準でそれに没入するという行動の態様を指す。

そのようなA7さんの態度は、まわりの遺児学生には「かわしている」と映る。

「〔県単位でおこなわれる〕ミーティングでは想い伝えろ」みたいな〔こといわれま
すね〕……正直いつもは、なんすかね？ そのときの状況とかにもよるんすけど、よく
いうのが、やっぱ、「ひとと会えるのが楽しい」だとか、なんかやっぱ楽しさを見い
だしてる的なことをいって、「だから、いますよ」っていつてます。「遺児家庭を救い
たい」とか、そういうひともいれば、「こういう後輩がいたから、そういう後輩を助け
たい」とかそういうのはけっこう、心にしんみり問いかけてくるようなことというひと
はいますね。なんかアツク説明されるんすよね。でやっぱ、Zさんとかけっこうア
ツクいつてるんで、そういうひとは、それでモチベーションがあがってるんだなと、
見えます。でも自分は、ちがうなと。そこはそこで、流されないようにしてます……
そうすると、けっこうまじめな話してる時もよく、「かわしてる」っていわれるんす
よ。Yさんですね。卒業する前に一回、ご飯食べにいったんすよ。で、「A7くんはい
つもおもしろいことをいって逃げてるよね」って。まあ、そうなのかな。やーなんか、
なんすかね？ 案外まじめに考えてるつもりなんすけど、出てこないんすよ。²¹

A7さんは、自身が活動に継続的に参与することを「義務」という観点から位置づけてい
る。しかし、「期間限定」と割り切って、「やるからには楽しもう」という心持ちをもって
いて、「当日とか全力でやってる」のだという。

義務ってことでやってるのも少しはあるんすけど、すべて義務でやってるって思う
とやな自分もいるんで……そこに抵抗してるとたぶん、時間も無駄ですし、あんまり
先に進めないんで。義務でやるから、やるのはやるにしても、やるからには楽しもう
かな、ということですね……けっこう時間あるんで……やっぱ学生のときだけと、
ぼくんなかで割り切ってるんで。期間限定って感じですね。やるからにはまあ、当日
とか全力でやってるんすけど。²²

²¹ 2010年9月10日におこなったA7さんへの聞き取り。

²² A7さんへの聞き取り。

4.2 「アツい想い」をもっているというまなざし

このように話すのにもかかわらず、しかし、A7さんは「超やる気ある」とまわりの遺児学生に見られることがあるという。かれはこのことを、「ミーティングをほぼ休ま」ず、「一番出席率〔が〕高い」ためであると説明する。

ぼく活動、ミーティングをほぼ休まないんですよ。たぶん一番出席率高いですよ。で、見かけ上、超やる気あるんですよ。でなんか周りからはよく、「A7はしゃべらないけど、アツいなにかをもってる」っていう噂が立ってるんですよ。耳にも入ってくるんですよ。でも直接いわれるんですよ。Zさんからも、「なんかすごい考えもってるんだろうけど、いわない。けどまあそのうち、なんか出ることをすごい期待してるよ」って。

23

確認しておけば、「想いをもってるひと」とは、「恩返し運動」の担い手として、「高校生が学校に行けなくて、だからがんばるモチベーションになる」というような「アツい想い」を、いわば本気でもっている遺児学生のことである。A7さんの言明からうかがえるのは、かれ自身は、そのような「アツい想い」を実際のところもっておらず、まわりの遺児学生のなかにこそ、そのような「アツく説明」する遺児学生がいるということである。

それにもかかわらず、A7さんはまわりの遺児学生から、「超やる気ある」と見られるのである。A7さんがこうした立場に立たされるのは、前節でA8さんに見たように、遺児学生がまわりの遺児学生のなかに「想いをもってるひと」を見いだそうとしているためである。A7さん自身もまた、まわりの遺児学生に「想いをもってるひと」を見いだしているのは興味深い。

「アツい想い」というのは、「恩返し運動」の担い手としていわば本気で「高奨生のつどいでこういう子に会って」「そういう子助けたいって思った」ということのできるような遺児学生の姿勢を指す。しかし、まわりの遺児学生が「アツい想い」をもっているかどうかは、実際のところ、そのような徴候をもっているかどうかによって判断される。その徴候とは、A7さんの説明するように、活動の集まりに頻繁に参加していることや、街頭募金な

²³ A7さんへの聞き取り。

どを「当日とか全力でやる」こと、あるいは役職に就いていることである。

このような徴候によって「アツい想い」をもっているという判断がなされるのは、すでに確認しているように、本気で「アツい想い」をもっている（と思われる）遺児学生も、A8さんやA7さんのようにそうした「アツい想い」に対して距離をもっているという遺児学生も、活動の具体的な局面においてはおなじような動機づけを語ることや、おなじように「自分史」語りをすることが要請されているからである。つまり、活動の具体的な局面における言明や行動によっては、「アツい想い」をもっているかどうかの判断がつかない。こうした状況にあって、まわりの遺児学生が実際に「アツい想い」をもっているかどうかを判断することは容易ではない。そのため、そのひとが実際に「アツい想い」をもっているかどうかを判断するよりも、むしろ、より「アツい想い」をもっているように見える徴候を示していることこそが、重要な判断基準となる。

このため、まわりの遺児学生に「想いをもってるひと」を見いだすことによって、「想いをもってるひと」とおなじように遺児学生がふるまうことで、今度はその遺児学生自身が、まわりの遺児学生から「想いをもってるひと」として見いだされるという事態が起こりうる。結果として、「アツい想い」をもっているようにふるまうことが、あしなが運動に継続的に参与する遺児学生にとって、遺児学生相互に要請される規範となつてゆくのである。

そしてこの規範は、あしなが運動に取り組む遺児学生を全体として、あしなが運動のもつ論理である「態返し運動」の担い手として想定される姿に重なるかたちで活動に取り組んでいることを人びとに呈示させるものともなっている。

4.3 「アツい想い」をもっているというまなざしに対処する

このような秩序のために、「超やる気ある」遺児学生としてまわりの遺児学生に見いだされたA7さんは、それを簡単に否定するわけにはいかなくなる。かれは、「そんなアツい想いはないよーとかつて、いいたい」と思っている、ひとまず「超やる気ある」というまなざしに応えてふるまうことを求められている。

そんなアツい想いはないよーとかつて、いいたいです……〔でも〕いえないですね。まずいですね。そこはやっぱもってるような雰囲気を出します。そのアツい想いをいおうとしても、別にないんでいいないわけですし。かといって、「やる気ないんだよ

ね」っていうのも、ちょっと引け目を感じるんで、なんか申し訳ない、とりあえずは参加はしてるっていうので、そこで見せれば、²⁴

とはいえ、「大げさにとらわれ」てしまって、本気で「想いをもってるひと」ととらえられてしまうことは、A7 さんにとってなお避けるべき事態である。そのため、A7 さんは、役割距離 (Goffman 1961=1985: 83-172) をとりつつ活動に継続的に参与していることを、活動のいわば舞台裏 (Goffman 1959=1974: 131) で、同期の遺児学生にたいして話し、呈示している。

いってるひとにはいってるんすけどね……大げさにとらわれたくないんで、自分の本音をたまにいいますけどね、同期にはけっこういってますね、さらっと、「ただ時間あるから行ってんだよ」みたいな。²⁵

遺児学生はこのようにして、活動のいわば表舞台においては「アツい想い」をもつ者として役割に徹してふるまい、他方で、活動のいわば舞台裏においては、認識の水準で役割距離をとっていることを語ってみせることとなる。

かれらがまわりの遺児学生に「アツい想い」にたいする距離を呈示しようとするのには、ふたつの意図がある。ひとつは、「恩返し運動」の担い手として要請される「想い」をもつことができないことの表明である。いまひとつは、それにもかかわらずまわりの遺児学生が「アツい想い」をもっているというまなざしを向けてくることを回避するための自己呈示である。

こうした秩序のなかで活動に取り組むにあたって、A7 さんは、自身に「アツい想い」がないことを悩む必要はない。むしろ、マニュアルをはずれたところにある、自身の「想い」(のなさ) について本気で訊かれてしまうことにこそ、A7 さんは悩むこととなる。

あんまり、活動に対する想いつつうのはわからないんすよね、実際には……この想いはその〔県代表〕のときは、さすがに伝えてないすけど、本音伝えるとみんな、ほ

²⁴ A7 さんへの聞き取り。

²⁵ A7 さんへの聞き取り。

んと、ちょっと、離れてしまうんで……たまにやっぱり、悩むときもありますよ。もしその、想いとか、本気で訊かれたらどうしようとか。ぼくはもうほんとマニュアルどおりにしかいけないような男なんで。²⁶

活動の場においては「アツい想い」をもっているようにふるまうことが要請されるとはいえ、それは、A7 さんが「アツい想い」をもつ遺児学生をまわりに見いだし、そのことによって、要請にしたがって「マニュアルどおり」に動いている結果として可能になっていることである。

そのため、「マニュアルどおり」ならざるかれ自身のもつ「想い」について本気で訊かれることで、A7 さんは、活動の場において要請される規範と、A7 さんの「想い」の実際とのあいだのギャップに直面することとなる。A7 さんは、活動の規範にしたがって安易に「アツい想い」をもっていると表明してしまえば、「想いをもってるひと」として向けられるまなざしを引き受けることにつながるものであり、それは、A7 さんが自身の論理において活動に参加することを不可能ならしめる結果を招く²⁷。

そのため、A7 さんは、活動の場の秩序を尊重していることを示しながら、しかし、その「想い」のなさを表明することを慎重におこなう必要に迫られている。すなわち、A7 さんは、「学年が上のひとでけっこう役職とか就いてるひと」から「アツい想い」があることをたしかめられたとき、すぐに「ないっす」というのではなく、何度も尋ねられるやりとりを慎重にくり返したのちにはじめて「ないっす」ということによって、なんとか「アツい想いはないよー」ということを活動の場において呈示しているのである。

たまに、学年が上のひとでけっこう役職とか就いてるひとに、訊かれて、最初はなんか、きわどいこといってるんすよね。きわどく。あるようなないような、やる気が。でも最終的になんかもう、「まいいやー」って。「ないっす」。最初はまあ、強いていえ

²⁶ A7 さんへの聞き取り。

²⁷ 大澤 ([1996] 2009, 2008) の表現を借りていえば、A7 さんは、「アツい想い」をもって活動に没入しているとみなされてなお、あくまで「アツい想い」をもつのは他の活動者であり、A7 さん自身はアイロニカルな態度をとっているという解釈を維持しようとしている。

ば、下の上ぐらいのやる気ですね。ふつうよりちょっと下ぐらいの。²⁸

このように、遺児学生は、「アツい想い」をめぐる、運動の要請する秩序にたいして重層化した秩序を形成している。これまでの議論を整理しておけば、かれらは、「恩返し運動」の論理に対処するために、「アツい想い」をもつ遺児学生を見だし、そしてまた「アツい想い」をもつ遺児学生としてふるまうことで、求められる役割を遂行する。これによって、遺児学生は、自身を活動をする集まりにいわば埋めこもうとし、「恩返し運動」の論理にもとづいて活動に取り組む遺児学生として、外部からみずからにまなざしを向けられることを避けるのである。そのまなざしの向く先は、類型としての遺児学生であり、より具体的には、まわりにいる「アツい想い」をもつ遺児学生だとされる。くわえて、遺児学生は、活動を学生として見いだされることを避けるために、活動の舞台裏において、実際には「アツい想い」をもっているのではなく、活動で要請される役割から距離をとっているのだと語ってみせるという秩序をも、同時に形成してゆく。

遺児学生は、このように重層化した秩序を形成することで、運動の理念によって要請される役割にたいして、それを自身がどのようにとらえているのかについての態度表明を背景に置いている。かれらは、すでに活動に参加してしまっているという事実を前提に、活動で求められる「想い」についての自身の態度を不問に付し、活動に取り組むにさいしての楽しみをそれぞれに見いだそうとするのである。A7 さんが「やるからには楽しもうかな」といっていたのは、この意味においてである。

義務ってことでやってるのも少しはあるんですけど、すべて義務でやってるって思うとやな自分もいるんで……そこに抵抗してるとたぶん、時間もむだですし、あんまり先に進めないんで。義務でやるから、やるのはやるにしても、やるからには楽しもうかな、ということですね。²⁹

²⁸ A7 さんへの聞き取り。

²⁹ A7 さんへの聞き取り。

5 活動において見いだされる楽しみ

それでは、遺児学生が活動に見いだす楽しみとはどのようなものなのか。

遺児学生の語りから明らかになる楽しみは、ごく大まかにわけで 2 種類ある。それは、活動を遂行するなかに見いだされる楽しみと、活動をする集まりを維持してゆくことのなかに見いだされる楽しみである。いずれも、「恩返し運動」の論理から離れたうえで、自身の活動で直面する経験に焦点をあてる点に特徴がある。

5.1 活動を遂行するなかに見いだされる楽しみ

前者はたとえば、A1 さんがいうような、活動における議論をする楽しみである。A1 さんは、イベントの発展改善に焦点をあてて、それをめざして遺児学生のあいだで意見を交わしては実行に移してゆく「ゲーム」として、活動を遂行するなか楽しみを見いだしている。

ぼくは思想的な部分はまったく興味がなくて、正直どうでもいいですよ。遺児を助けようか国内のだろうが国外だろうが、そういうことは割とどうでもよくて、ぼくは……イベントのことの発展改善にしか興味ないんですよ。で、その結果というか見えてくる成果として支援があるんだから、その支援もちゃんとしましょうよっていう。別に、支援、なにをするかっていうのはあんまり興味がないですね……こういうのを一般的には職員とか認めたくないと思いますけど、ぼく、なんか仕事感覚っていうか、ゲーム感覚っていうか、どうやったらでかくできるのかとか〔を考えてやってます〕。

30

あるいは、A2 さんのいうように、自己鍛錬の場として活動における経験を位置づけてゆく楽しみもある。すなわち、A2 さんは、活動に取り組むことで直面するあらたな経験を、かれにとっての学びの機会ととらえてゆき、その学びのなか楽しみを見いだしていつている。その学びにおいて、A2 さんの目の向く先は、遺児問題についてというよりは、むしろ

³⁰ 2010 年 4 月 15 日におこなった A1 さんへの聞き取り。

ろ、活動によって経験される A2 さんの体験それ自体である。

まあ、忙しいと思ったこともありますけど、なんですかねえ。いつてしまえば大学のときだけですし。基本的にかなりポジティブなんですよ。考えかたは、なんで、そういう忙しいのをこなせるようになろうっていう風にどっちかっていうと思うんで……もともとそういうのがあるんで。まあだったら、むしろ環境を変えるっていうよりは自分が変わるっていう風なのに重きを置いているじゃないですけど、大学生活ではそういうのを中心にしよう、っていうのがあるんで。³¹

遺児学生のあいだでは、活動における「成長」ということがしばしば話し合われる。それは、このような、活動に取り組むまでは知らなかった経験をすることによって、あらたにできることが広がったという意味でもちいられている。

5.2 活動の集まりを維持することのなかに見いだされる楽しみ

つぎに、活動の集まりの秩序を維持してゆくことのなかに見いだされる楽しみというのは、たとえば、A7 さんが活動に参加する理由として、「ひとに会いに来てる」ということと、「独特な雰囲気」を味わいたいと述べていることに示唆される。

おれも、ひとに会いに来てるっていうのが多いですね、みてる。独特な雰囲気ですね。まあ〔あしなが運動〕の、あれを味わいたいというやつが、いたりいなかったり。³²

すなわちそれは、あしなが運動の活動の場における相互作用とそれをつうじて形成される関係についての魅力である。その魅力は、ひとつには遺児学生自身が、これまで見てきたような、重層化した秩序を形成するなかでの相互作用に関与することで見いだされるものだが、それだけではない。まわりの遺児学生どうしの相互作用のようすを見ることによ

³¹ 2010 年 5 月 18 日におこなった A2 さんへの聞き取り。

³² A7 さんへの聞き取り。

ってもまた、その魅力は見いだされる。

たとえば、A3さんは、会議において「活動をするモチベーション」について話し合うとき、それを自身にとっては「もうするもんだと思ってるから」と、自身にとって関係のないことだとしている。しかし彼女は、そうすることによって、活動に恒例の「イベントでいいなと思って」その話し合いを見ているのだという。彼女にとっては、そうした光景が自前に広がることこそが活動に取り組む「スイッチ」となっていて、その集まりにくわわっていると感じられることこそが、A3さんにとっての楽しみとなっているのである。

もう、高校生のときからやってたから、大学生になったらやるものがあたりまえだと思ってたから、活動するモチベーションとかかーとかって、会議が盛り上がってても、もうするもんだと思ってるから。まあ、でもなんか、季節が来たなと。自分のなかでこう、そういう季節が来たなっていうスイッチにしてて、そういうのでこう、「やるぞ」っていうモチベーションあげてくひともいるから、それはそれで、まあイベントでいいなと。思ってます。³³

6 おわりに

ここまでみてきたように、遺児学生は、活動に継続的に参与するにあたって、重層化した秩序を形成していた。それは、第一に、あしなが運動が要請する「恩返し運動」の理念や役割に応じるための秩序であり、運動で要請される役割に徹したふるまいをすることと、「アツい想い」をもつまわりの遺児学生を「恩返し運動」の担い手に重ね合わせて見いだすことで形成される。第二は、まわりの遺児学生から「アツい想い」をもつとまなざしを向けられることに対処するための秩序であり、こちらは語りの水準で、自身のふるまいについて、役割距離をとっていたと語ってみせることで形成されるものである。このように、遺児学生はふるまいの水準と語りにみられる認識の水準でギャップをみせることで、「恩返し運動」の論理に対処する秩序を形成し、そのうえで、それぞれ継続的に活動に参与す

³³ A3さんへの聞き取り。

ることを可能にする楽しみを見いだしていった³⁴。

本章の知見をやや一般化して述べれば、比較的継続的に展開され、制度化した運動にあらたに参与することとなる活動者は、継続的に活動に参加することを可能にする自身にとっての楽しみをそれぞれに見いだすにあたって、運動の要請する論理に応えることが求められるのであり、かれらはそのための秩序を形成する。このように活動者が形成するふるまいと認識をめぐる秩序によって、運動の継続性が担保されている側面がある。

付言しておくならば、もちろん、このように重層化した秩序のなかで、本気で「想いをもってるひと」が出現して、運動に積極的に関与してゆく可能性は否定されない。その遺児学生は、役割距離を語る必要もなく、みずからの問題意識にもとづく行動を向ける先として、運動に取り組むことができる。そして、まわりの遺児学生もそうした遺児学生のふるまいを肯定的にとらえることとなる。そのような遺児学生の存在によってこそ、「やる気あるやつだけ」ではない、遺児学生の活動をする集まりの維持は担保されるのである。

また、「恩返し運動」の論理や「アツイ想い」をもつことに役割距離をとっているのだと語る遺児学生にとって、あしなが運動での経験というのは、そのように語るなかでな一度は遺児をめぐる問題を自身の問題としてとらえてみせる機会となっている。このことに目を向ければ、遺児学生にとって、あしなが運動は、自身に向けられる遺児という類型のもつ社会的位置を学ぶ機会となっている。そしてそのうえで、かれらが役割距離を呈示してゆくことは、その遺児という類型のもつ社会的位置を相対化してゆく機会ともなっているのである。

³⁴ 本郷正武（2011）は、問題の当事者としてではなく、運動から直接の利益を得ないにもかかわらず運動参加する「良心的支持者」（J. D. McCarthy and M. N. Zald 1977=1989）としてふるまうことを可能にしたことで、いわゆる「薬害 HIV」感染被害者が訴訟運動に参加できたことを明らかにした。本郷は、「感染者探し」を慎み、共通の集合目標に向かうことを重視する活動理念としくみをとらえたが、これにたいして本章は、活動者自身が遺児としてまなざしに向けられるなかで、それを回避しつつ活動に取り組むようすをとらえた。

第2部 森林ボランティア活動の社会的意義と鳩ノ巣フィールドの活動の構成

第4章 活動者が見いだす森林ボランティア活動の実践的意味と社会的意義への対応——安全管理をめぐる議論のアーリーナ

1 はじめに

第2部では、森林ボランティア活動を事例に取り上げて、活動の継続的な展開にあたって活動体や活動者が構成する論理と、活動に向けられる社会的評価や期待との関係を検討する。

第1部で取り上げたあしなが運動とは対照的に、森林ボランティア活動は、その社会的意義や活動の理念を多元的な水準でとらえることができる。そのため活動者は、自身が活動に取り組む意味を、比較的自由に語ることができるように思われる。

しかしながら、実際には、森林ボランティアの活動体や活動者は、他のアクターから向けられる期待や社会的意義をめぐる議論を意識しながら活動に取り組んでいる。森林ボランティア活動においてもまた、それらの期待に応えたり、期待から距離をはかったりすることが、活動への継続的な取り組みにあたっての重要な課題となっているのである。

第2部では、森林ボランティアの活動体や活動者が、活動の社会的意義や活動の理念をどのようにとらえて活動に取り組んでいるのかを明らかにすることで、活動にたいする意味づけをめぐる、活動体や活動者が、社会的意義にたいして距離をはかるようにして活動に取り組んでいるのはなぜなのかについての考察を深めてゆく。

第1部で取り上げたあしなが運動では、活動体による関係規定の構図が活動者や外部の社会を覆うようにして成り立っていたが、第2部で取り上げる森林ボランティア活動においては、活動体による関係規定や意味づけは極めて限定的なものにとどまる。むしろ、活動体もまた、社会的なまなざしの影響を受ける立ち位置にある。また、森林ボランティア活動をめぐる意味づけには、多数の活動体がかかわって、セクター水準で議論が展開されてきている。そのため、森林ボランティア活動を取り上げるにあたっては、活動者と活動体の関係のみに注目するのではなく、セクター水準での議論の推移を視野に入れて、森林ボランティアセクターが、みずからの活動の意味づけを定めるにあたって、社会的なまなざしをどのようにとらえ、対処してきたのかをとらえる必要がある。

そこで、本章では、森林ボランティア活動をめぐるマクロ・レベルの議論のアリーナにおいて、社会的意義や活動への期待がどのように論じられ、また、森林ボランティア活動の実践者がそれにどのように対応してきたのかを明らかにする。注目するのは、安全管理をめぐる議論である。森林ボランティア活動における関心は、活動体によってさまざまに異なりうるが、安全管理は、多くの活動体が共通して関心をもつこととなるトピックであり、マクロ・レベルの議論のアリーナをとらえるのに適した対象だといえる。

具体的には、まず2節で、既存研究の整理をつうじて、森林ボランティア活動の社会的意義をめぐる主要な議論を整理する。そのうえで、3節以降では、森林ボランティア活動のネットワーク組織であるNPO法人「森づくりフォーラム」の機関誌にみられる安全管理についての認識を事例に、森林ボランティア活動に向けられる社会的期待に活動者がどのように対応しつつ、活動の意味づけをしようとしてきたのかを明らかにする。

2 森林ボランティア活動の社会的意義づけと活動者の意味づけ

2.1 森林ボランティア活動の社会的意義をめぐる議論

森林ボランティア活動とは、「一般市民の参加により、造林・育林などの森林での作業（森林や林業に関する普及啓発活動として行うものを含む）をボランティアで行うもの」（日本林業調査会 1998: 14）である。

先駆的な活動としては、たとえば、1974年に富山県で除草剤の空中散布に反対するための対抗手段としてはじまった「草刈り十字軍」の活動がある（足立原貫・野口伸 1991; 日本林業調査会 1998: 80）（図 4.1）¹。東京都西多摩地域では、1986年に発生した雪害への対応を契機として活動がはじまり、各地で活動団体が結成された（山本信次編 2003: 128-39）。

¹ 草刈り十字軍の活動は、2016年の43年目の活動をもって幕を閉じた（「草刈り十字軍、43年の活動に幕」『朝日新聞』2016.6.25朝刊、富山県版）。

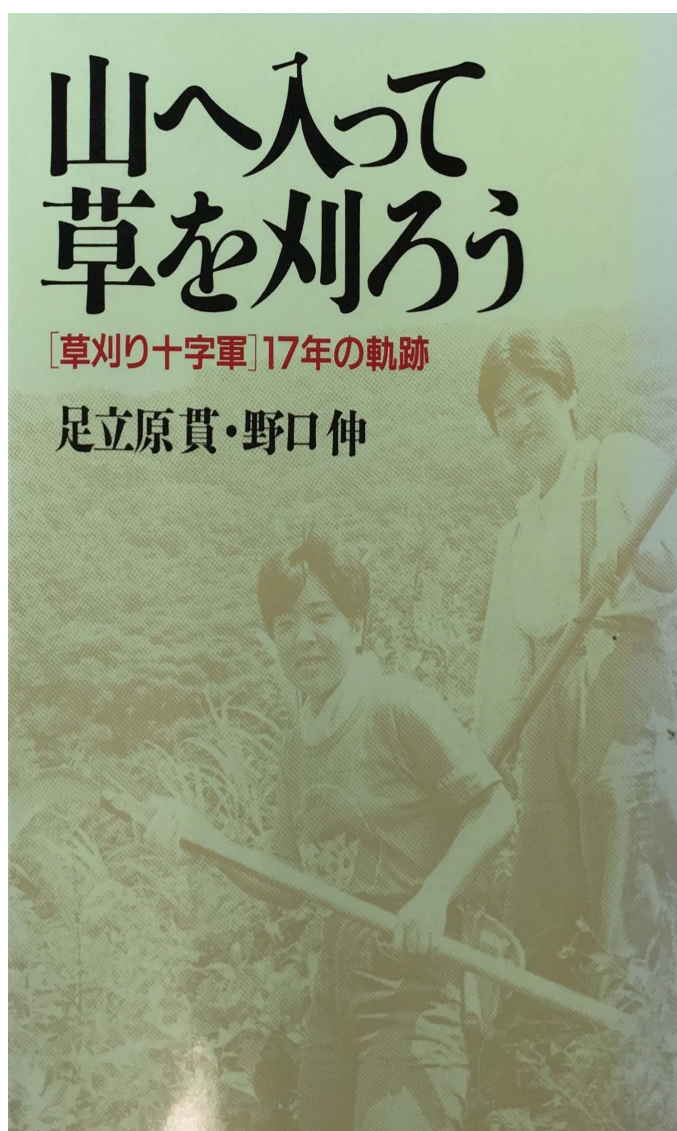


図 4.1 草刈り十字軍についての書籍『山へ入って草を刈ろう』

出典：足立原貫・野口伸（1991）

1990年代なかばには、行政主導で森林ボランティアの育成がおこなわれるようになり（山本編 2003: 113-28）、それを契機に活動をはじめた活動者や活動団体間のネットワーク形成の動きがみられるようになった。たとえば、「森づくりフォーラム」は、1993年に東京近郊で森づくり活動にかかわる人びとのネットワークづくりを目的に活動をはじめ、2000年のNPO法人格取得を契機に全国ネットワークを標榜するようになっている。また、国土緑化推進機構は、複数の森林ボランティア活動団体と共催で、「森林と市民を結ぶ全国の集い」を、1996年以降、毎年度開催している（鹿住貴之 2014）。

こうした活動の盛り上がりを受けて、1997 年以降、林野庁は、「森林づくり活動についての実態調査」を 3 年ごとに実施するようになった²。それによれば、当初 277 だった活動団体数は、2000 年代にかけて増加の一途をたどり、2012 年には 3,060 を数えるまでになった（林野庁 2013）。しかし、林野庁調査を引き継いで森づくりフォーラムが 2015 年に実施した調査によれば、活動団体数は 3,005 で、わずかながら減少傾向にある（森づくりフォーラム 2016）（表 4.1）。

このように、活動団体数の推移からみれば、森林ボランティア活動の展開は、大きく 3 つの時期にわけられる。第一は、少数の団体による先駆的な活動がみられた 1990 年代までの萌芽期、第二は、活動団体数が大幅に増加する 2000 年代の拡大期、そして、活動団体数が減少に転じる 2010 年代の停滞期である。

表 4.1 「森林づくり活動についての実態調査」調査対象団体数の推移

調査年度（年度）	1997	2000	2003	2006	2009	2012	2015
対象団体数（団体）	277	581	1,165	1,863	2,677	3,060	3,005

註：対象団体の把握は、都道府県に調査を依頼しておこなった。ただし、2015 年度は、都道府県の把握する 2,694 団体に、森づくりフォーラムが別途把握する 312 団体がくわわっている。

出典：林野庁（2001）・森づくりフォーラム（2016）

² 本調査は、「森林づくり活動」を非営利かつ自発的におこなう団体を対象とする、郵送法による悉皆調査である。調査項目は、①団体構成の概要、②活動内容、③活動場所、④安全確保、⑤活動の課題の 5 つの柱からなる。

「森林づくり活動」とは、「目的とする森林を造成、維持するために、植え付け、下刈り、除伐、間伐、枝打ちなどの作業を行うこと」を指し、直接に森林作業を手がけるのではないタイプの団体は対象としていない。2012 年度のみ抽出調査であり、また、2015 年度は、調査主体が森林づくりフォーラムに代わったことにともない、調査対象団体の把握のしかたが代わり（表 4.1 註参照）、Web フォームによる回答が許されるようになった。

なお、調査の名称は、1997 年度から 2009 年度調査までは「森林づくり活動についてのアンケート」だったが、2012 年度以降、「森林づくり活動についての実態調査」に変わっている。

森林ボランティア活動にたいしては、具体的な活動の実践者にとどまらず、林業者や研究者など、多様なアクターから期待が寄せられ、それぞれの関心に応じた社会的意義が多元的な水準で論じられてきた。とくに、活動の萌芽期・拡大期にあたる 1990 年代・2000 年代には、多数の議論がみられた。そうした議論に応じるようにして、森林ボランティア活動は、森林の手入れを直接おこなうことだけにとどまらず、外延を拡大してきた。

森林ボランティア活動に向けられる評価や期待は、既存研究をもとに整理してみると、大きく 3 つの文脈にわけられる。

第一は、林業・木材産業の活性化や、地域の活性化への寄与である。

森林ボランティアは、燃料革命・肥料革命を経て利用・管理の必要性を低下させた里山林や、木材自由化後に材価の低迷や間伐材需要の低下によって管理コストを捻出できずに放置されるようになった人工林の管理を、従来生活や生業のために使ってきた地域住民や林業者に代わって、都市住民が担う活動として当初注目された（重松敏則 1990, 1991, 1992; 中川重年 1996; 柿澤宏昭ほか 2006）。

ただし、山本信次編（2003）にみられるように、森林ボランティアによって管理しうる森林面積はきわめてかぎられていること、森林ボランティアを林業に代わる「安価な労働力」とみなすことが林業の労働条件を低位水準にとどめることにつながることから、森林ボランティアの意義をめぐる議論は、地域住民や林業者に代わって都市住民が森林の管理主体となることではなく、むしろ、森林にかかわる問題を掘り起こし、地域住民や林業者と協力して、市民としてかかわることに力点がおくようになった。

山本編（2003: 133-7）は、「グループ浜仲間」の取り組みを具体的な事例に挙げ、森林ボランティア活動が外延を拡大させ、森林にかかわる多面的な課題に取り組むようになったことを評価している。グループ浜仲間とは、人工林保全活動をおこなう「浜仲間の会」を立ち上げた羽鳥孝明が、興味・関心に応じて西多摩地域や周辺でさまざまな会を立ち上げて、派生的に展開していった活動の総体を指す（羽鳥 2001）。山本は、グループ浜仲間の会の活動のうち、東京の林業についての勉強会「東京の林業家と語る会」が立ち上げられたことをきっかけに、東京の地域産材をつかって家を建てる活動をする「東京の木で家を造る会」が派生し、さらに全国的な「近くの木で家を造る運動」へと展開したことを高く評価した（緑の列島ネットワーク 2000）。また、山本（2014）では、愛知県矢作川流域での森林調査活動「森の健康診断」（蔵治光一郎ほか編 2006）や、和歌山県九度山町で森

林での活動から派生して地域コミュニティの課題に取り組むようになった日本森林ボランティア協会の活動を挙げて、森林ボランティア活動の外延の拡大を例証している。

第二は、林野行政への市民参加の実現である。

森林ボランティア活動の登場は、林野行政の転換期と軌を一にしている。従来の木材生産を重視した政策が行き詰まり、森林の多面的な機能に目を向けるようになった 1980 年代・1990 年代の政策の転換期に（宮林茂幸 2006; 土屋俊幸 2006）、森林ボランティア活動は登場した。東京都西多摩地域で森林ボランティア活動が登場する契機となった 1986 年の雪害は、東京都が「生産型林業」から「都市型林業」へと転換する契機でもあった（山本編 2003: 129; 東京の森林を考える懇談会 1986）。

こうした状況において、林野行政への市民参加の実現は、森林の手入れからの派生的な活動のひとつとして重視されるようになった。具体的な実践としては、森づくりフォーラム内の「森づくり政策市民研究会」がおこなった政策提言活動を挙げられる（内山節編 2001）。国有林野会計の一般会計化問題や林業基本法改正にあたって、市民の立場から意見を出すために 3 次にわたって提言が出された（図 4.2）。山本（2014）によれば、提言のなかで示された、市民参加によって森林計画の策定・調整をおこなう「地域森林委員会」や「流域森林委員会」の構想は、各地の「森林委員会」設置につながっている。

また、柿澤宏昭（2000）は、1990 年代のアメリカの「エコシステムマネジメント」という自然資源の総合的な管理方法の日本への導入を検討し、政策決定過程への市民参加の重要性について議論を展開している。

第三は、環境保全や生物多様性保全の担い手としてのはたらきである。

柿澤宏昭（2001）は、自然保護を求める開発反対運動からのあらたな展開として、みずから森林保全に関与する森林ボランティア活動をとらえている。すなわち、1960 年代の自然保護運動が、奥地での林道開発への反対運動を中心に展開したのにたいして、1980 年代以降の森林ボランティア活動は、地域での伝統的な自然利用とそれによって維持されてきた自然を、都市住民のボランティアによって担い、受け継ごうとするかたちで森林保全に関与するものと位置づけられている。1960 年代の抵抗型の運動にたいして、1980 年代以降の森林ボランティア活動の特徴は、地域住民の生活に根ざした視点に立脚し、ボランティアと地域住民、さらには行政が協力関係を構築することで森林保全を担っていく点にある。



図 4.2 政策提言活動についてまとめた書籍『森林の列島に暮らす』

出典：内山節編（2001）

このように、森林ボランティア活動は、多元的な水準で社会的意義づけがなされてきた。森づくりフォーラム代表で哲学者の内山節（2003）は、これらの社会的意義づけをつらぬく、活動の思想的課題を示している。それは、森林の荒廃の背景にある、戦後の都市型社会への急激な移行による農山村と都市との関係のひずみの是正である。その課題に取り組む具体的な方法として内山が挙げるのは、農山村住民のローカルな世界の固有のまなざしを共有し、林業者や農山村住民が森林とかかわりを持ちつづけることに寄与する実践である。すなわち、森林ボランティア活動の社会的意義をめぐる議論は、活動者のモデルと

して、森林や農山村の抱える問題についてのまなざしを当該地域の住民と共有し、その課題解決に貢献する、市民社会論的な市民像をえかいてきた。いいかえれば、活動者は、フィールドで結ぶ自然との関係よりも、活動を介した社会との関係を重視する視座において、社会問題の解決に資するボランティア・アクションをおこなう主体と位置づけられ、評価を受けてきた。

2.2 活動者にとっての森林ボランティア活動の意味づけ

しかしながら、こうした観点から活動の社会的意義をとらえる議論にたいしては、動員論的な観点から、活動を一定の方向に水路づけるものとして批判が寄せられている。たとえば、松村正治（2007, 2009）は、活動者が、既存研究で論じられてきたような社会的意義にとどまらない動機にもとづいて活動に取り組んでいることを明らかにした。松村は、多様な考えをもって活動に取り組む個別の活動者の認識を評価する立場をとり、その取り組みを「人と里山との関係を豊かに描き直そうとする運動」（松村 2007: 152-3）と位置づけている。すなわち松村は、活動を介した他のアクターや社会への貢献としてではなく、活動者自身が目の前の環境の関係で共生のありかたを模索する方策ととらえて、森林ボランティア活動を評価している³。

こうした、森林ボランティア活動を、社会的意義からでなく、活動者にとってもつ意味からとらえる議論は、社会的意義づけに違和感を表明する活動者の語りのリアリティに迫るものだといえる。森林ボランティアの活動者のなかには、「森林ボランティア」という表現にたいする違和感を手がかりに、「日本の森林を守る」ことや「社会に貢献する」という見かたを退けようとする語りがみられる。みずからの活動の社会的意義が語られてしまうことは、かれらが「自分がやりたくて、楽しみたいくて山仕事を始めた」ということや、「好きでやっているんだから」というリアリティと折り合うものではないと感じられている。

³ 活動参加者の多様な参加動機に目を向け、活動の道具的機能に対置される表出的機能の側面に注目して活動体の運営のようすを明らかにする既存研究は、ボランティア活動研究にもみられる（西浦功 1997・小野奈々 2008）。同様の問題意識をもつ栗本修滋（2004）は、森林ボランティア活動を対象に、場所の共同を基盤とした道具的共同と表出的共同という重層的な共同性が、活動の継続性に寄与することを指摘している。

たとえば、山本編（2003:133-7）が取り上げた、浜仲間の会の羽鳥孝明は、自身の活動を「ボランティア」ととらえて「誰かの何かのためにしている」とみられることに違和感を自著で表明している。

現在、「森林ボランティア」という言葉が、広く使われています。「浜仲間の会」も森林ボランティアの1つと見られることが多いのですが、私自身は、森林ボランティアだとは思っていません。あくまでも山仕事で遊ぶ、「レジャー林業」だと言い続けています……私は、「ボランティア」という言葉が持っている「誰かの・何かのためにしている」というニュアンスには違和感があるのです。もともと私は、ボランティア活動をやろうと考えて山仕事を始めたわけではありません。自分がやりたくて、楽しみたいくて山仕事を始めた。その出発点（原点）を大事にしたいのです。（羽鳥 2001: 20-1)

同様に、羽鳥と同時期に活動をはじめた「西多摩自然フォーラム⁴」代表の久保田繁男も、活動者や活動団体で「ボランティア」と名指されることへの違和感が共有されていたことをふりかえっている。

因みに、20年ほど前に森づくりの団体がいくつもできましたが、どこもボランティアという言葉が嫌いで、使わなかったです。なんか、人のため、それから奉仕、こういう匂いがして、森づくりを始めた人たちは、俺らは好きでやっているんだ、別に人の為にしているのではないし、社会に貢献するためにやっているんでもない、好きでやっているんだからという風潮があった。どうも解釈が合わないということで、あえて使う場合には、ボランティア＝自主的にやっているという位置づけをしてやってきたということもあります。（久保田繁男 2012: 26）

⁴ 西多摩自然フォーラムは、1991年に、東京都の秋留台開発計画の見直しを求める運動を契機に結成された団体である。行政機関へのはたらきかけのみならず、炭焼きや谷津田の復元、里山林整備などの里山の保全活動を手がけ、さらに、生物調査や自然観察会などをおこなうことで、西多摩地域の里山の自然の多様性を活かした地域社会のありかたを考えることをめざした活動を展開してきた。

これらの語りは、ボランティアの意味論を知識社会的に検討した仁平典宏（2011）が指摘するような、〈贈与のパラドックス〉を回避し、活動者の自己効用を強調する語りと同型であるように映る。その見かたにしたがえば、活動に他者への貢献（贈与）を見いだす観察者にたいして、活動者は、自身にとっての効用に限定して、活動に取り組む意味を呈示しようとしている。

そしてまた、前項にみた活動の社会的意義をめぐる議論を踏まえれば、これらの語りは、地域住民とまなざしを共有して、森林や農山村の抱える問題の解決に取り組む、市民社会論的市民像への距離の表明を示している。動員論的な立場をとる松村（2009）や仁平（2011）にしたがえば、そのような市民社会論的市民像には、市民参加型の新しい森林管理体制の形成という、社会システムの要請に適合するような政治的な力がはたらいっている。活動者が自己効用論的な語りをするのは、このような活動を一定の方向に水路づけようとする力を回避し、自律的に活動に取り組んでいることを示すためである。

また、相互作用水準での〈贈与のパラドックス〉に注目すれば、みずから率先して自己効用を強調する活動者の語りは、地域住民や山林所有者からの反対贈与を観察者に指摘されることを未然に回避しようとするものだといえる。仁平（2011）はこれを交換の意味論の援用だとみているが、活動者は、山林所有者や地域住民との贈与あるいは交換関係の措定を回避して切り離し、むしろ、活動の対象となるフィールドとの関係において見いだされる楽しみを強調している。すなわち、森林ボランティア活動などの環境ボランティア活動においては、フィールドを介した活動の担い手と受け手間の関係のみが措定されるわけではなく、活動の担い手とはたらきかけるフィールドの環境との関係も措定されうるのである。鳥越皓之が、「直接的な対象が多くの場合、自然的環境や文化・歴史的環境のひとつであるため、人間ではなくモノである」（鳥越 2000: 14）と述べているように、モノとの関係において活動の意味づけがなされることが、環境ボランティア活動の特徴である。

2.3 活動の社会的意義との距離をはかる活動者の活動の意味づけ

ところで、森林ボランティア活動が社会への貢献という文脈において語られることに言及しつつそれをしりぞけ、代わって自身が森林で活動する効用を強調するという活動者の語りは、序論で整理したように、動員論的な観点から説明されればじゅうぶんなわけでは

ない。動員論的な観点では、社会的意義と活動者の個別の関心が過度に対比的にとらえられ、活動者は、社会的意義に共鳴できるかできずに違和感を感じるかという二分法においてとらえられることとなる。

松村（2007, 2009）は、活動を方向づける政治的な力を回避する方策として、個別の活動者の関心に即した目標を設定し、それを自己評価しながら順応的に活動に取り組むモデルを示しているが、活動者は、どのような動機をもつにせよ、活動の社会的意義をめぐる議論と無関係でいられるわけではない。むしろ、社会的意義との距離をはかるなかで、自身にとっての活動の意味づけを定めてゆくという相互作用のプロセスがあるのではないか。

こうした点を検討するにあたって、本研究は、第1部と同様に、活動者や活動体が、関連する諸アクターとの関係をどのように認識し、役割期待をどのようにとらえることで活動に取り組んでいるのかをとらえる視角をとる。具体的には、地域外部の都市住民である森林ボランティアの活動者は、山林所有者や地域住民、行政といった、さまざまなアクターから活動にたいする社会的期待を向けられるなかで、活動における責任を意識しつつ、みずからにとって自由な領域を確保できるように折り合いをつけながら、活動の意味づけを模索しているという仮説を立てて、論証をすすめる。

2.4 分析対象

本章で具体的な分析対象として取り上げるのは、森林ボランティア活動のネットワーク組織である森づくりフォーラムの機関誌にみられる、1990年代後半から2000年代前半にかけての、活動をめぐる安全管理についての認識の変遷である。

安全管理をめぐる議論に注目するのは、それが、順応的管理⁵とならぶ2000年代初頭以降の森林ボランティア活動における重要な課題であり⁶（松村 2007）、森林ボランティア活

⁵ 順応的管理とは、「調査に基づいて保全計画を立て（PLAN）、作業を実施し（DO）、その結果を見て（SEE）計画を再考するといった仕組みを備え」て、「フィードバック・ループを繰り返すことで望ましい生態系を実現しようとする」という、生態系管理の方法である（松村 2007: 145）。

⁶ 松村によれば、2004年に発生した森林ボランティアによる間伐作業中の死亡事故を契機に、安全管理を徹底する動きが強まった（松村 2007: 154）。また、西多摩地域においては、

動の特有性を示すキーワードだからである。

安全管理は、既存研究では主として、作業にともなうリスクを最小に抑える仕組みが備わっているのか」(松村 2007: 144) という、リスクの最小化という観点から取り上げられてきた。もちろん、森林ボランティア活動は、急斜面や高所などの危険な場所で重量のある木を相手に刃物を取り扱い、寒さや暑さという条件の下、危害を及ぼしうる動植物となりあう環境で作業をするため、けがや事故の発生する可能性がつねにある危険な活動だと認識されており⁷ (cf. 森づくり安全技術・技能標準化促進委員会 2013: 60)、リスクの最小化は、現在の森林ボランティア活動においてすべての活動体に共通する重要な課題である。

しかしながら、そうした視点は、松村 (2007) が順応的管理の視点について明らかにしたのとおなじように、活動にたいする社会的期待によって方向づけられて出現したという側面をもつ。後述するように、活動の初期には、「怪我と弁当は手前持ち」や「わざとケガをしてもらう」(羽鳥 2001: 35) といった、リスクの最小化とは一見相反する見かたが示されている。つまり、安全管理についての認識は、当初から一貫していたわけではなく、活動者それぞれの森林ボランティア活動をめぐる関係認識と意味づけを反映するかたちで意図が込められ、認識が変遷してきたと考えられる。すなわち、安全管理についての認識に込められた意図を検討することは、活動者が活動をどのように意味づけ、他のアクターとの関係をどのようにとらえていたのかを明らかにすることにつながるといえる。

また、森づくりフォーラムの機関誌を分析対象とするのは、それが、活動者のみならず林業関係者や地域住民、行政などの多様なアクターによる森林ボランティア活動をめぐる議論のアリーナを形成しているためである。とくに、本章で取り上げる時期には、安全をめぐる議論がさまざまな観点から取り上げられ、認識の変遷がみられた。

2003 年に活動現場への移動中に活動者が急病により死亡したことを契機として、「安全白書」が作成された (森づくりグループ安全白書作成委員会 2005)。

⁷ 森づくりフォーラムは、森林ボランティア活動団体が利用できる「グリーンボランティア保険」を取り扱っている。2008 年度から 2013 年度にかけての利用状況を分析した久保田 (2015) によれば、利用のための登録をした団体は年度平均で 403.7 団体、保険利用件数計 17,371 にたいして、保険金請求にいたった保険事故件数が計 198 で、事故発生率は 1.1%だった。88 回の活動につき 1 回の割合で事故が発生した計算となる。

森づくりフォーラムは、先にもふれたように、東京都西多摩地域を中心とした森林ボランティアや森林にかかわる諸アクターのネットワーク形成をめざして結成された団体である。1993年の「森林（もり）づくりフォーラム実行委員会」設立に端を発し、シンポジウムや「下草刈り大会」の実施を経て、1995年に任意団体として本格的に活動をはじめた。2000年にNPO法人格を取得し、ネットワークの範囲を全国に広げている。そして、「草の根的な各地の森林ボランティア活動をネットワーク化し、市民セクター的な役割を果たすことを目指すと同時に、行政・企業・林業関係者との協力による新しい森林管理システム構築を目指した」（山本編 2003: 323）活動を展開してきた⁸。

こうした性格をもつ森づくりフォーラムは、任意団体の設立以来、機関誌を発行してきた（図 4.3）⁹。そこには、ボランティアの活動者のみならず、関係する林業者や行政の職員などが登場し、それぞれの立場から意見を表明しており、森林ボランティア活動をめぐる主要なトピックを把握することができる。本章では、機関誌を通読したうえで、関連する資料も参照しながら、安全管理をめぐる特徴的な発言を取り上げ、そこに込められた意

⁸ NPO 法人格取得のさいに定めた 2000 年の事業計画にもとづいて、森づくりフォーラムの具体的な事業を整理すると、①市民参加の森づくり推進事業、②ネットワーク化の促進、③森林政策に関する提言、④情報誌の発行、⑤森林ボランティア保険（2003 年から「グリーンボランティア保険」に名称変更）取り扱い業務の 5 種類に分けられる（佐藤岳晴 2003: 45）。これらは相互に関連しているが、主要な事業としては、①に関連して、初期のフォーラムの象徴的な活動であった「下草刈り大会」の開催や、国有林内における森林造成を市民と協働でおこなう「フォレスト 21・さがみの森」の運営を挙げられる。③については、政策提言活動をおこなう「森づくり政策市民研究会」を立ち上げている（内山節編 2001）。さらに関連団体として、後述するように、森林ボランティアの技術認定制度を手がける「森づくり安全技術・技能全国推進協議会」の設立（2006 年）にも携わっている。

⁹ 森づくりフォーラムの機関誌は、1995 年の任意団体の設立を機に発行された 1 号以前に、「0 号」、「-1 号」、「スタッフ 1 号」があり、2017 年 10 月時点で、164 号が最新である。創刊から 9 号までは『ニュース森づくりフォーラム』、10 号から 99 号までは『NEWS 森づくりフォーラム』というタイトルで、それぞれ月刊で発行されていた。2004 年 1 月の 100 号からは、タイトルを『森づくりフォーラム』と改め、隔月刊となった。さらに 2010 年 1 月の 134 号以降は季刊となっている。

図を明らかにする。

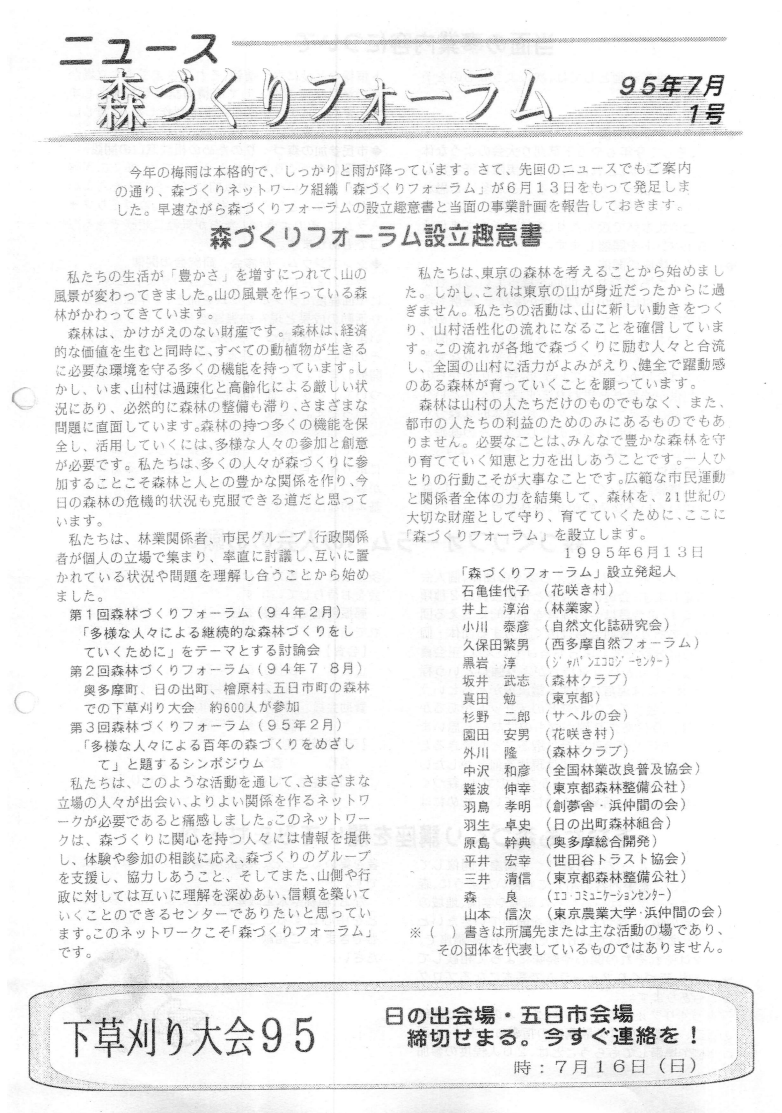


図 4.3 『ニュース森づくりフォーラム』1号

出典：森づくりフォーラム提供

3 「怪我と弁当は手前持ち」

——みずからの身体をコントロールする楽しみと山林所有者との関係形成

安全管理についての認識をめぐって、森づくりフォーラムに関連する資料で活動者の主

張が最初にみられるのは、1995 年 2 月に森林づくりフォーラム実行委員会が開催したシンポジウムのパンフレットに寄せられた、浜仲間の会の羽鳥孝明の文章である。それは、活動が認知されてあらたな参加者が参入するなかで、羽鳥が活動において会得していた「怪我と弁当は手前持ち」という認識が共有されていないことへの不満の表明である。

本節では、羽鳥の文章を手がかりに、森づくりフォーラムが任意団体として活動をはじめ前後の活動における安全観に込められていた、活動者にとっての森林ボランティア活動の価値と、フィールドとの関係についての考えかたを明らかにしてゆく。

3.1 みずからの身体をコントロールしてフィールドにはたらきかける楽しみ

羽鳥は、先にみたように、初期の西多摩地域の森林ボランティア活動を主導してきた人物のひとりである。1986 年に「五日市青年の家」主催の林業体験学習事業「木と人のネットワーク」に参加したのち、雪害を受けた山の手入れに取り組むことをきっかけとして、1987 年に森林ボランティア団体「浜仲間の会」を結成。その後も派生するさまざまなグループをつくって活動を展開してきた（羽鳥 2001）。

西多摩地域の森林ボランティア活動諸団体のメンバーからなる森林づくりフォーラム実行委員会にも、羽鳥は名を連ねていた。実行委員会は、「多様な人々による 100 年の森林（もり）づくり」をテーマに掲げ、1995 年 6 月の任意団体「森づくりフォーラム」設立にいたるまで、シンポジウムや下草刈り大会の開催などを手がけた。

1995 年 2 月開催のシンポジウムにおいて、羽鳥は、そのパンフレットに「この頃思う不満……参加者と行政に」と題する文章を寄せ、「わがままな参加者」にたいする不満を表明した（図 4.4）。この文章は、自身の所属団体の紹介や森林ボランティア活動の意義を述べる他の寄稿者の文章のなかにあって、異質なものと映る。そこで表明されている不満は、羽鳥の接してきた活動参加者が「怪我と弁当は手前持ち」という、活動における安全観を理解しようとしなかったことであつた。

わがままな参加者は要りません。「怪我と弁当は手前持ち」ということがわからない人間がいますが、そういう人の面倒をみる気はありません。会の事務局の者が楽しくなければ市民運動はつまらないし続かないのではないのでしょうか。^{ママ}参加者の面倒をみるなどという気はあまりありません。参加者はすでに会を育てていく一員なのです

から、お客様ではないのですから、自分という者の位置づけを認識して活動に入ってくるべきだと考えています。(羽鳥 1995)

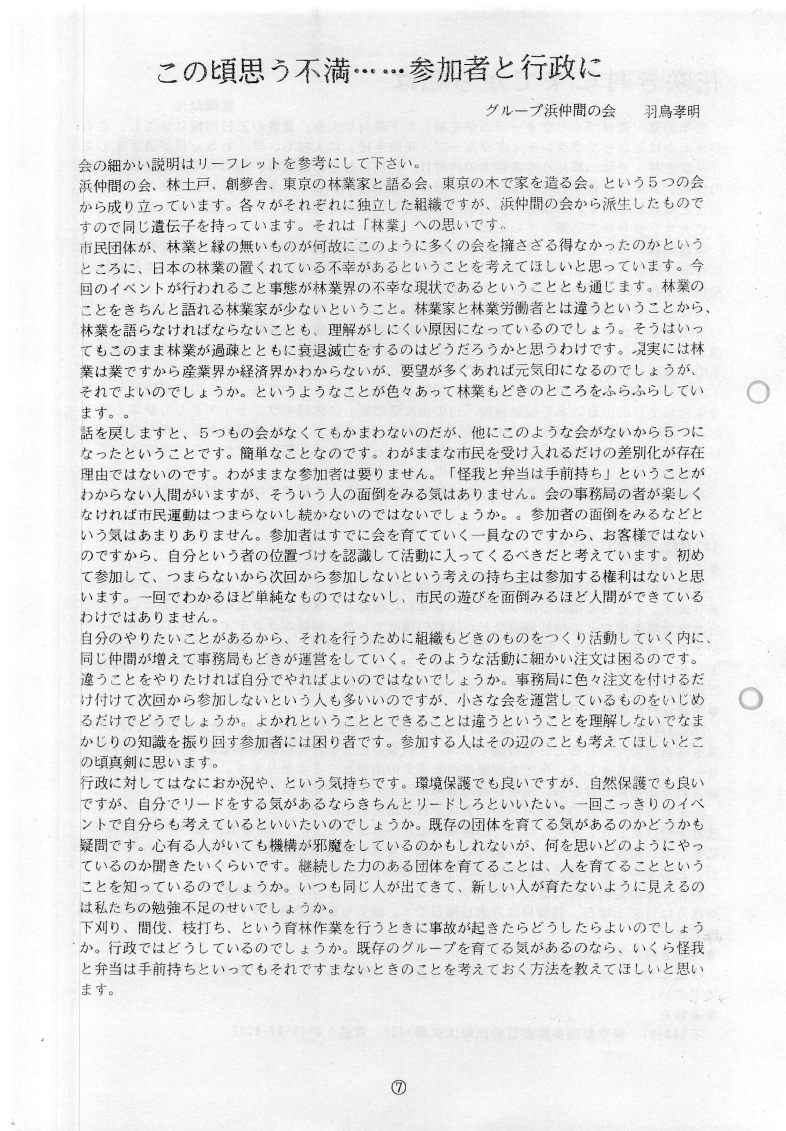


図 4.4 羽鳥孝明「この頃思う不満……参加者と行政に」

出典：羽鳥（1995）

羽鳥は、2001年に、自身の取り組みをまとめるかたちで『レジャー林業』（羽鳥 2001）を著している（図 4.5）。「レジャー林業」とは、地域外の都市住民として、どのように林業にかかわりうるのかを模索するなかで見いだした、羽鳥の造語である。それは、山仕事で遊び、そのなかにある楽しみを追求するというスタンスを示す。



図 4.5 『遊ぶ！ レジャー林業』

出典：羽鳥（2001）

羽鳥はその著書でも、「ケガなどについては自分で処理をする。会では責任をとらない」（羽鳥 2001: 29）という姿勢を強調している。「1 歩間違えれば命とりになるようなケガが、いくらでも」あるような現場であることを認識しつつ、それでもなお、「自分の安全は自分で守ってもらう」としている。

山仕事にケガはつきものです。「浜仲間の会」のメンバーにも、枝打ちをしていて 5 m のところから落ちた者や、鋸で足を切った者など、いろいろいます……実際、1 歩

間違えれば命とりになるようなケガが、いくらでもあったのです。ですから、参加者には、自分の安全は自分で守ってもらうようお願いしています。（羽鳥 2001: 30）

ただし、羽鳥はおなじ著書で、会員外の一般参加者を募るイベントの開催にあたって、参加者を割り振った作業班の班長（羽鳥のいう「サブリーダー」）の主たる役割は、参加者の安全に注意をはらうことにあるという認識を示している。

極端な言い方になりますが、サブリーダーを任された人は、基本的に作業（山仕事）はできないと考えておいた方がいいと思います。自分の作業に夢中になってしまうと、どうしても参加者への気配り、目配りが行き届かなくなり、ケガの原因にもなるからです。（羽鳥 2001: 110）

すなわち、羽鳥は実際のところ、イベントを主催する活動体やそのスタッフが、参加者の安全管理に責任を負うことに目を配っている。

それでもなお羽鳥が「怪我と弁当は手前持ち」ということを強調し、さらには「わざとケガをしてもらう」（羽鳥 2001: 35）とさえいうのは、そのようにして参加者に自覚をうながすことが、安全な作業のやりかたを参加者自身でおぼえてゆくことにつながると考えるためである。あるいはまた、自分の身の安全を「自分で管理できる」ことが、「自分の力で生きている、自由であることを実感できる」という「レジャー林業」の魅力を感じる鍵だからである。

ケガを怖がって避けるのではなくて、ケガの痛さをよく知ってもらって、安全な作業のやり方を覚えてもらうのが「レジャー林業」です……山仕事を何回か続けると、ケガをするから面白いとさえ感じるようになってきます。ケガをするか、しないかは、自分で管理できることです。そんな当たり前の状況が、現代の一般的な都市生活ではほとんどなくなっています……誰にも守られないということは、誰にも迷惑をかけないということの裏返しでもあります。同時に、自分の力で生きている、自由であることを実感できる状況でもあるのです。（羽鳥 2001: 35-6）

つまり、羽鳥は、フィールドとの差し向かいの関係において、活動者がみずからの身体

をコントロールし、フィールドにはたらきかけられるようになることの重要性を強調している。そこで活動体は、あくまで活動者とフィールドの媒介者であり、後景におかれるべき存在と位置づけられる。

こうした安全観を踏まえて、羽鳥のいう「わがままな参加者」をとらえてみれば、それはかれにとって「レジャー林業」の魅力に気づかないばかりか、それを否定しさえするような存在に映る。すなわち、「レジャー林業」の楽しみは、作業をつうじたフィールドとの相互作用関係において、試行錯誤の過程でみずからの身体をコントロールできるようになるなかで見いだしてゆくべきものであるはずなのに、「わがままな参加者」はこれを、会の活動の運営という枠組みのなかに見いだそうとしているのである。それは、活動者と活動体との関係を前景化させ、活動体に安全管理や活動の楽しさの責任を帰す見かたであり、フィールドとの差し向かいの関係に目を向けない点で、活動の楽しさを理解していないと羽鳥には映る。

さらに、活動体やそのスタッフが参加者の体験について責任を負うことになってしまえば、参加者とおなじように享受しうるはずの自由がスタッフから奪われてしまい、スタッフとなる人びとの楽しみを毀損してしまう。羽鳥はこのような観点から、「わがままな参加者」にたいする不満を表明している。

3.2 山林所有者や地域住民との信頼関係の形成

ところで、当初の森林ボランティア活動における課題のひとつは、その活動フィールドを確保することにあつた。森林ボランティアは「フィールドを得ることができなければ何も進まないという活動」であり、かれらは「山を守ろうという意欲のある……所有面積の大きい林業家の人たちや所有面積は少なくとも山に愛着のあるお年寄り……を頼りにとっかかりをつくってきた」(50号 1999年11月5日¹⁰)。とはいえ、かれらは「森づくり作業においては……『新参者』」(3号 1995年10月)であり、活動するフィールドの地域の人々から信頼を得ることは、活動における大きな課題のひとつだった。

羽鳥もまた、フィールドの確保について、「なによりも受け入れ側の山(農山村)の人達

¹⁰ 森づくりフォーラムの機関誌からの引用については、号数と発行日を付した。以下おなじ。

から信用されることが大前提になります。それには時間がかかることを理解（覚悟と言ってもいいでしょう）しなければなりません」（羽鳥 2001: 163）と述べている。「山の人達」は、「おまえが山に入って、一体何ができるのだ」と羽鳥にいい、疑心暗鬼をつのらせて山仕事のようなすを遠巻きに見たり、作業地の点検に行ったりしていたが（羽鳥 2001: 32-3）、これにたいして羽鳥は、「丁寧に真剣に山仕事をやる」ことで信頼を得ていったという。

「遊び」を思いっきり楽しむためには、一生懸命やることが大切です。時間がかかってもいいから、丁寧に真剣に山仕事をやる……山の人達は私の行動・作業をよく見て……私がまじめに丁寧な山仕事を続けていると……心配や不安が次第に薄まっていったようで、やがて山の人達から信頼してもらえるようにもなりました。（羽鳥 2001: 32-3）

羽鳥の真剣さは、ひとつひとつの「山仕事」に文字どおりていねいに取り組むことによる見いだされるのではない。むしろ、その作業の方法を自ら学び、必要な道具も自分で用意して、まさに手弁当で「レジャー林業」を実践していったことにこそ見いだされる。

すなわち、「怪我と弁当は手前持ち」という表現は、たんにフィールドとの関係における活動者にとっての楽しみをとらえるためのものではない。それは、フィールドを提供してくれる森林所有者や地域住民との関係における活動者のとるべき姿勢を示すものでもあった。地域外部の都市住民である森林ボランティアの活動者は、活動にともなう責任をみずから引き受ける姿勢を示すことで、森林所有者や地域住民との関係で、信頼を得るための足がかりを築いたのである。

こうした、羽鳥にみられる森林ボランティア活動についての認識と姿勢は、2.2 でみたように、この時期の活動者に共有されるものだった。しかしながら、その後、森林ボランティア活動の裾野が拡大し、安全管理についての制度的な対応が求められるようになるなかで、こうした認識は、次第に後景に退いてゆくこととなる。

3.3 リーダーの養成という課題の浮上——参加者の増加への制度的対応

下草刈り大会に象徴される初期の森づくりフォーラムの活動は、活動への新規参加者を呼び込み、森林ボランティアの裾野を拡大した。下草刈り大会は、西多摩地域の各地で造

林後に育林のための下草刈りが必要な場所で実施されたイベントで、森づくりフォーラムが任意団体となる前年の1994年から、NPO法人となった初年度の2000年まで6年間、毎年夏に実施されてきた。1994年の大会は少なくとも400人を超える参加者を集め、最初期の森づくりフォーラムの活動における成功体験となった。大会は、参加者にとって「汗をかき、森林への親しみを増していく」機会であり、「持続的に森林にかかわる入口」（35号1998年8月5日）だった。森づくりフォーラムは、下草刈り大会を「多くの人たちが体験として参加できる有効な企画」（32号1998年5月5日）にとらえ、新規参加者向けの入門的な位置づけのイベントとして重要視していた。

こうした裾野の拡大のなかで、制度的に対応すべき課題として浮上してきたのが、参加者に作業の指導をおこなうリーダーの養成である。たとえば、1995年の下草刈り大会では、事前に「スタッフ研修」が実施された。その募集案内には、「安全な作業をしようと思えば、多くのリーダーが必要」とあり、リーダーに「実際に役にたつ」ものとして、「作業の技術……安全性への配慮、緊急の場合の対応方法、グループをまとめ楽しく作業できる技術など」が挙げられている。

下草刈りなど山林での作業で一番気を使うのは安全性です。安全な作業をしようと思えば、多くのリーダーが必要です……リーダーを養成していくことは市民参加の森づくりにとって急務の課題です……〔研修の内容は〕作業の技術はもとより、安全性の配慮、緊急の場合の対応方法、グループをまとめ楽しく作業できる技術などです。
(-1号1995年6月)

こうした対応は、個別の参加者の活動における安全管理や楽しさにかんする責任をリーダーが引き受けることにつながる。それは、活動体の存在を前景化させ、個別の参加者がフィールドと差し向かいの関係でみずからの身体をコントロールする楽しさという価値を減じさせかねないものである。しかしながら、それ以上に、リーダーの養成という対応において重視されていたのは、経験のない参加者の増加に対応しつつ、山林所有者・地域住民との関係形成をはかり、両者のバランスをとってゆくことである。

たとえば、1997年に結成された「奥多摩・山しごとの会¹¹」は、結成の目的のひとつに、

¹¹ 「奥多摩・山しごとの」会は、都の体験施設「東京都奥多摩都民の森（体験の森）」の「通

森林ボランティアの指導員の養成を明示的に掲げたことに特徴をもつ団体である。山しごとの会は、活動への新規参加者が増加する一方で、「慢性的な人材不足」となっている「正しい指導技術を行えるメンバー」を育てることで、「山主や地元住民の信頼期待」に応えるという方針を示した。

この会の主旨は個々の技術向上をめざし、現場を経験し繰り返し学ぶことでより深く森林と関わろうとする方向にあるのです。本来、市民グループが手入れ不足の山林に手を加える場合は、相当な経験と知識を持つメンバーが指導的な役割を果たさないと、危険で無謀な活動になるばかりか、山主や地元住民の信頼期待を裏切る結果になり兼ねません。しかし、実態はどのグループも正しい技術指導を行えるメンバーが少なく、慢性的な人材不足に悩まされております。そこで当会としては、やるからには時間がかかっても基本的に忠実に丁寧な作業をし、結果として山主や地元住民との信頼関係を築きつつ、そこで学んだことを、それぞれのメンバーが別の活動にも大いに参加し、大いに役立ててほしいと考えています。(23号 1997年7月5日)

このように、新規参加者の増加という状況下、「山主や地元住民の信頼期待」に応えるという観点から、活動体の水準で「基本的に忠実に丁寧な作業」をおこなう責任は、「正しい指導技術」をもつメンバーに託されることとなる。そしてそこで、「怪我と弁当は手前持ち」という認識にみられた、個別の活動者がみずから責任を引き受けて活動に取り組むという観点は、活動に先だってあらかじめ共有されるべきものとしてではなく、活動をつうじてリーダーから伝えられ、学習してゆくものへとその位置づけを変えた。

4 「ケガはリーダーの注意不足」

——社会的認知の増大と安全管理をめぐる制度的対応

4.1 参加者の安全管理の責任を負うリーダー

年林業体験講座」の受講経験者を中心に結成された。

森づくりフォーラムがNPO 法人格を取得し、ネットワークの範囲を東京近郊から全国に広げるようになった 2000 年前後には、「〔参加者の〕ケガはリーダーの注意不足」という安全観がみられるようになる。この認識は、たとえば、日の出町で活動するグループ「花咲き村¹²」のメンバーで、当時森づくりフォーラムの副代表理事でもあった園田安男によって示されている¹³。

この種の活動では、ケガはリーダーの注意不足とっていい。ケガを防ぐには、何より危険を意識することだ。ケガをしやすい状況の時、注意を促すことができればケガは減る。経験の少ない人がほとんどのこの種の活動では本人の自覚という問題ではない。リーダーの問題とっていい。(55 号 2000 年 4 月 5 日)

こうした認識は、安全な作業をめざしてリーダー養成を課題としたことの帰結であり、前節でみた、森づくりフォーラムの下草刈り大会での対応や奥多摩・山しごとの会にみられる安全観とさして変わらないといえるのかもしれない。しかしながら、この安全観にたいする反発の声に注目すると、参加者の安全管理の責任という点で、わずかながら認識の変化をみてとれる。

たとえば、西多摩地域の森林ボランティア団体の若手の集まりである「Ohnami の会¹⁴」では、つぎのような声があがったという。

山仕事だって、本来は遊びの要素をいっぱい含んだもの（もちろん危険性も）。なの

¹² 「花咲き村は、もともと福祉ボランティア活動をしており、1986 年の雪害をきっかけにして、東京都の西多摩地域で人工林の育成管理を行うようになった」(佐藤 2003: 42)

¹³ 園田は、任意団体設立当初から森づくりフォーラムの代表を務め、事務局スタッフとして業務にかかわっていた。2000 年の NPO 法人格取得を契機に副代表理事となって以降も引き続き事務局スタッフを務めていたが、2001 年末で事務局スタッフを退任した。なお、森づくりフォーラムが NPO 法人格を取得してからは、これまで一貫して哲学者の内山節が代表理事を務めている。

¹⁴ Ohnami の会（森から生まれる大波ネットワーク）は、西多摩地域の既存の森林ボランティア団体の若手の有志が集まった会で、2001 年に結成された。

に……ちょっとした怪我にも神経質になっているから、つまらないと感じてしまう。怪我に関していえば、山には危険な要素がたくさんあるのだから、少々の怪我は予測のうちです。大事なのは、いかに大きな怪我をしないか、させないかということであるのに、相手が十分に大人で自己責任がとれると判断できたら、チェンソーを使う簡単な仕事をあてがっていいと思います。そうしていくうちにやがて、木の伐り方だけではなく、自分の身体を守るということを感じる。(68号 2001年5月5日)

ここでは、指導を受けた参加者の学習効果が認められるばあいに、参加者の身体をコントロールする責任を、徐々に参加者自身に委ねるべきことが主張されている。それは、「怪我と弁当は手前持ち」という認識のうちの、みずからの身体を自由にコントロールするなかで見いだす楽しみの側面を強調するものである。

これにたいして、「ケガはリーダーの注意不足」という認識のもとでは、参加者の身体をコントロールし、安全管理をする責任主体は、つねにリーダーにある。「経験の少ない人がほとんど」という状況認識にあって、先にみた、参加者が活動における責任を引き受けられるよう徐々に学習するという発想はとられていない。

こうした活動の枠組みのもとで、リーダーは「ちょっとした怪我にも神経質に」ならざるをえず、参加者はみずからの身体をコントロールする主体となりえない。そのような活動は、「遊びの要素」をもたず、従来からの参加者に「つまらない」と評される。

ではなぜ、こうした「ケガはリーダーの注意不足」という認識が明示されることになったのだろうか。参加者の安全管理の責任主体をつねにリーダーと措定して、制度的に対応しなくてはならなくなったのはなぜか。そこにはどのような意図があるのだろうか。

4.2 作業内容の高度化

要因のひとつとして挙げられるのは、作業内容の高度化である。1986年の雪害対応に端を発する西多摩地域の森林ボランティア活動は、10年を超す時を経て、作業環境の変化に直面した。具体的には、1986年の雪害後の植林地に必要な作業だった下草刈りが、植林から10年が経って「下草刈り〔の必要な時期〕をぬけるほどの年齢」となったことで、下草刈り大会の有効性が薄れつつあった。そして、地域全体でも再造林地が減少していることと相俟って、1997年にはその規模縮小が議論されるようになっていた。

下草刈りは結果の出せる作業であり、この種の体験も含めたボランティア活動としては貴重な作業でもある。しかし、下草刈りする場所は減っている。木を伐らないからだ。特に再造林するために木を伐ることが少なくなっている。いまやっている下草刈りの現場はたいがい10年前、東京の山をおそった雪害の後、植林したものだ。そろそろ下草刈りをぬけるほどの年齢になっている。(25号 1997年10月5日)

フィールドで求められる作業の中心は、下草刈りから枝打ちや間伐などに変わり、森づくりフォーラムも、それに対応するかたちで、下草刈り大会に代わりうる初心者向けの体験イベントとして、あらたに「春の森づくり体験活動¹⁵」を同年冬から催しはじめた。森づくりフォーラムが団体会員の各団体との共催で実施する、炭焼き、森林・住宅の見学会、枝打ち、間伐などの体験イベントである。

この変化は、新規参入者の体験する作業の水準が相対的に高度化して、予期すべき危険が増加し、身につけるべき知識・技術も増大することを意味していた。森づくりフォーラムは、リーダーの指導に力を入れることで、こうした作業環境の変化に対応してゆくこととした。森づくりフォーラム事務局長の坂井武志は、1998年の下草刈り大会の参加者にたいして、「ボランティア技術者」養成の必要性をつぎのように語ったという。

下草刈りなら素人でもできる。しかし、その次のステップである枝打や間伐となると、きちんとした知識と技術がいる。だから、いかに今後ボランティア技術者を育てていくかが問題になる。(36号 1998年9月5日)

4.3 社会的認知の増大にともなう制度的対応の要請

リーダーを介した安全の制度的対応が強調された要因のいまひとつは、森林ボランティア活動が広まり、社会的影響力をもつようになったことである。

森づくりフォーラムは、2000年のNPO法人化にさいして、その社会的役割や社会的責任を意識するようになっていた。たとえば、奥多摩町の林業家で、当時森づくりフォーラ

¹⁵ 1997年は、名称を「冬の林業体験イベント」としていた。

ムの運営委員だった原島幹典は、森林ボランティアが社会的認知を受けるようになったと認識すると同時に、活動の社会的な役割を意識しなければならないとして、あらたな森林管理システムを創造する流れを作りだすことに、その活路を見いだしている。

マスコミも盛んに森づくり活動を取り上げ、行政も森林ボランティアを高く評価し、国の森林政策にも盛り込まれるに至れば、この市民参加の森づくり運動は社会の承認を得たといってもいいでしょう……社会的認知を受けたからこそ、その役割を認識してください……英知をあつめ、行動し、新たな森林管理システムを創造する流れを作ることがいま、すべてに優先する課題なのです。(51号 1999年12月5日)

原島は、社会的認知を受けてマスコミや行政から影響力をもつ存在として認められたという意味での森林ボランティア活動の制度化(寺田良一 1998; 長谷川公一 2000)への対応策として、都市住民である市民による活動を、地域住民・行政との協働によって、あらたな森林管理システムを創造するようなものへと展開すべきという展望を示している。すなわち原島は、森林ボランティア活動が、個別のフィールドの範囲を超えて、セクター水準での動きに展開していくべきことを主張している。

こうした文脈において、森林ボランティアは、たんに個別のフィールドでの山林所有者との地域住民との関係を意識して活動を展開すればよいのではなく、マスコミや行政との関係、社会との関係を視野に入れた活動の展開を模索することとなる。

そして、社会との関係を視野にいれたセクター水準において、安全管理は、活動の存続可能性にかかわる重要な課題として認識される。つまり、「ルール違反による大怪我は森林ボランティア全体の土台を揺るがしかねない」(47号 1999年8月5日)のである¹⁶。活

¹⁶ 「TEAM FOREST FREAK」代表の緒方秀行が、奥多摩で間伐作業中に事故死した林業作業員の死の報せを受けて森づくりフォーラム機関誌に寄せた、「緊急提言『安全あつてこそ』のボランティア」より。緒方は、「ボランティアにとって『けがと弁当は自分持ち』だが」と断りつつも、直後に「ルール違反による大怪我は森林ボランティア全体の土台を揺るがしかねない」と述べている。すなわち緒方は、個別の活動者がみずからの身体をコントロールしつつフィールドにはたらきかける楽しみを重視しながらも、同時に、安全管理のために活動者間で共有され、外部のアクターにたいして正当性をもつルールが定めら

動における安全管理はここで、個別の活動者や活動体の文脈を超えて、マスコミや行政、社会との関係を視野に入れ、森林ボランティアセクター全体のことを考えてなされる必要がある。

具体的に避けられるべきなのは、ルール違反とそれにとまなう大怪我である。個別の活動者がみずからの責任で安全管理をすることよりも、活動体やセクター水準で「作業にとまなうリスクを最小に抑える仕組み」(松村 2007: 144)としてルールを備え、それにしたがって活動者が作業に取り組むかたちで安全管理がなされることが志向されている。すなわち、安全管理の主眼は、ここにいたって、リスクの最小化(松村 2007)におかれたのである。こうした認識のもとで、リーダーは、活動者がルールにしたがって安全に作業に取り組んでいることに注意を向け、リスクの最小化に向けた具体的な責任を負うことになった。活動では、「大怪我」のみならず、「1 歩間違えば命取りになるようなケガ」(羽鳥 2001: 30)も未然に防ぐ必要があるし、「ちょっとした怪我にも神経質」(68 号 2001 年 5 月 5 日)になって、「大怪我」につながりうるものとして回避されなければならない。

5 作業方法に注目する安全管理——技術認定制度と活動者の実践

5.1 技術認定制度の検討

活動の安全管理を考えるさいに、個別のフィールドでの活動においてむすばれる関係を超えて、外部の社会との関係や森林ボランティアセクターとの関係が視野におかれるようになるなかで、森づくりフォーラムは、安全管理の制度的な対応策として、「技術認定制度」を設けた。これは、同時期に作成された「森林施業ガイドライン」とあわせて、森林ボラ

れるべきことに目を向けている。

なお、神奈川県厚木市を中心に活動を展開する TEAM FOREST FREAK は、1997 年に結成された。森林施業計画を作成して施業を手がけ、造林補助金等を得ることで経費を捻出している点に特徴がある(87 号 2002 年 2 月 5 日)。2010 年 3 月には NPO 法人格を取得した(フォレストフリーク 2017)。

ンティアによる作業が、フィールドの適切な管理によって成果を生みだし、社会的に意義をもつことを制度的に担保しようとするものだった。

技術認定制度にかんする最初の提案は、2002年2月に広島で開催された第7回森林と市民を結ぶ全国の集いでなされた。「指導者の養成・確保」や「安全確保」という活動の基盤を固めることにつながるような、あらたな人材育成システムを要望する声があがったのである（96号 2003年9月5日）。さらに、2003年2月の「市民参加の森づくりシンポジウム」を経て本格的な検討がはじまり、2006年4月に制度の運営を担う「森づくり安全技術・技能全国推進協議会」が設立された。森林施業ガイドラインも同時期に検討され、2006年に完成にいたった。

技術認定制度は、「安全管理水準の向上」「指導水準の向上」「管理水準の向上」を主目的に、「誰でも安全で楽しく参加できる基盤」の整備をめざすものである（96号 2003年9月5日）。制度の構築にあたってとくに重視されていたのは、森づくり安全技術・技能全国推進協議会の発起人総会についての説明にみられるように、「社会の信頼」や「社会全体の支持・支援」を得ることである。

この制度は「日本の森林を社会全体で守り育てる」ためのリードオフマンともいえる森林NPOや森林ボランティアが無事故で活躍することで、社会の信頼を確固たるものとし、社会全体の支持・支援をいただける基盤になるものと思っています。（113号 2006年3月1日）

2003年2月のシンポジウムでかわされた議論によれば、認定制度の資格は、具体的には、森林所有者・林業関係者・行政や財団といった関連する諸アクターにたいして、活動者が安全管理や作業技術について、一定の水準を有することを示すためのものと位置づけられていた。

森づくりフォーラム事務局長の坂井は、東京都からの委託事業として西多摩地域の各地で体験イベントを開催する「多摩の森・大自然塾¹⁷」を2002年度から手がけるなかで、指導者養成の必要性をあらためて認識したとを述べている。坂井は、森林所有者からのフィールド提供や、ボランティア活動参加者の受け入れにあたっては、指導者が不可欠だとい

¹⁷ 多摩の森・大自然塾の概要については、第5章註4参照。

う認識を示している。そして、安全管理のみならず、作業成果にかかわる一定の技術について責任をもつ存在として、指導者を位置づけている。

昨年、森づくりフォーラムは「大自然塾」という事業を東京都内で始めたが、フィールドが増えたことで指導者の不足が身にしみている……指導者がいなければ山の管理・整備に力を貸したいという人々を受け入れることもできない。従って、早く指導者を育てたい。もうひとつ、指導者に基本的な技術をきちんと身に付けてもらいたい。そのためには「この人はこの程度の山仕事ができる」という判断ができる基準のようなものが必要だろう。(92号 2003年5月5日)

大分県の林業家で森林ボランティアの受け入れをおこなう、森づくりフォーラム理事の田島信太郎は、技術認定制度で求められる森林ボランティアの作業技術の水準について、プロの目にかなう水準で作業をこなせるボランティアの養成を期待する見解を示している。

誰がボランティアを必要としているかといえば、森林所有者をはじめとする林業関係者だ。よって林野庁および、その外郭団体、森林組合連合会及び林経協等森林所有者団体がランキングに参加しなければ、現実には機能しないのではないか……元来プロの技術者が少ないのだから、プロを養成しなければならない。ボランティアの養成と、プロの養成を区別する必要はないと思う。(93号 2003年6月5日)

林業者からすれば、森林の管理を手がけるという点で林業のプロとボランティアは共通するのであり、おなじ水準で作業の成果を上げられることが、ボランティアに作業を任せるにあたっての判断材料となる。

また、技術認定の制度化は、活動助成を申請する対象の財団や行政にたいしても、作業技術や安全管理の責任をもつ指導者がいることを説明する材料になりうるという指摘もみられた。

財団や基金などに助成金の申請をする場合、指導者の人数を書く欄があるが……林業系の技術認定をした資格が必要なのではないかという話に発展した経緯がある。(92号 2003年5月5日)

このように、技術認定制度は、森林所有者・林業者・行政・財団といった諸アクターとの関係において、個別の森林ボランティア活動が、セクター水準で合意された技術にしたがって、適切な手続きを踏んで活動に取り組み、森林管理の成果を出すことを制度的に担保するねらいがあった。

5.2 安全の優先に独自性を見いだす森林ボランティア

こうした、外部の諸アクターとの関係を視野に入れた安全管理をめぐる制度的対応策が、手続きの正当性と作業の成果に注目する一方で、個別の活動者がフィールドの自然との関係に見いだされる楽しみに注目する視点は、なおもみられた。

2000年に「ケガはリーダーの注意不足」という安全観を示していた園田は、2002年末の森づくりフォーラムの事務局スタッフ退任後、つぎのようなエッセイを寄せている。

「森林ボランティア」が目先の効果を言い過ぎている。いわば意味付与することが多すぎやしないか、ということだ。

10数年前に花咲き村で放置林での整備を始めたときは、社会的な意味や環境のため、などという能書きは何も持たなかった。果たした結果に意味付与したに過ぎない。森林ボランティアが「環境保全」とか「社会貢献」として強調され過ぎるのは、どことなく落ち着かない。いや、俺だって、どこぞで講師などに呼ばれて話すときには、こういう類のことを大声で言うのだが……。

意味づけは活動の社会性を表現し、多くの人を誘う入り口にはなり得るが、意味づけだけでは活動は持続しない。森林を育て、つくりあげる楽しさを感じ取れる身体感覚と社会的意味をうまくつなげる工夫がいる。

森林ボランティアの底辺の広がりや、日常の暮らしにある森林、暮らしに結びついた森林とつきあえる社会環境を創造できたらいい。そして、ここが重要なのだが、その社会環境は「森林を感じる身体」が基礎となる。「身体が共鳴する森林ボランティア」である。(99号 2003年12月5日)

園田は、活動の社会的意義を強調する意味づけが、対外的に活動の正当性を説明し、新

規参入者を動員するためのフレーミング (D. Snow et. al. 1986; 本郷正武 2007) として効果をもつことを認めている。しかし他方で、活動者が継続的に活動に取り組む鍵は、個別の活動者がフィールドの森林との関係で形成する、「森林を育て、つくりあげる楽しさを感じとれる身体感覚」にある。そのため、個別の活動に先だって「環境保全」や「社会貢献」といった社会的意義を強調することが、その身体感覚を得ることの価値を見失わせてしまいかねないことを、園田は懸念しているのである。そこで園田は、個別の活動者が活動で見いだす楽しさと、活動の社会的意義づけのバランスをとって接続をはかることの必要性を提言している。

安全管理についての議論に引きつけていえば、対外的な諸アクターへの説明に力点をおくあまり、個別のフィールドにおける活動者が安全管理の責任を負うことに見いだされるはずの楽しさが看過されてしまうことに、園田は目を向けているといえる。

この点について、森林ボランティアの活動者の実践についての発言に目を向けてみると、対外的に要請されるリスクの最小化と、みずからの身体をコントロールする責任の引き受けという課題を両立させようとする活動者の姿が浮かび上がってくる。

たとえば、「2001 年春の森づくり体験講座」の参加者は、ノコギリと手斧を使った間伐作業体験の感想として、作業の過程でフィールドとむすぶ関係に注目し、そこに時間をかけることに意味を見いだしたことを記している。

プロならばチェーンソーを使ってグイーンと一気にやってしまうところだが、そこは「林業体験」。時間をかけることに意味がある。(68号 2001年5月5日)

この語りは、森林ボランティア活動がプロの林業者による活動とは性質を異にすると活動者に感じられたことを示す。そして、こうした発想のもとで、リスクを最小に抑えて安全を最優先して活動に取り組むことは、効率を優先するプロの林業者の方法に対置される、森林ボランティア活動に特有の方法だと位置づけられている。

林業者に教わった方法を身につけることに重きをおく団体であっても、活動者の能力を推し量って、安全を優先するという発想をとることで、林業者のもちいる方法とは別の手法を導入することがある。

たとえば、ナタによる枝打ちをやってきた「そらあけの会¹⁸」は、会員の増加を受けて、ノコギリ（ノコ）を使った枝打ちを導入するようになった。効率を重視するプロの林業者がもちいるナタでの作業にたいして、ノコギリによる作業は安全を重視するものと位置づけられ、両者を使いながら折り合いを模索してゆくというかたちで、ひとまず受け入れられている。

〔「そらあけの会」の〕会員は枝打ちが大好きです。ところが外のイベントに参加した時、「ナタで枝打ちはしない。ノコだ」と聞きました。たしかにナタだと木を痛めることも多々あり、早く腕を上げなければ木に、〔指導をしてくれる〕勇さんに、〔山主の〕池谷さんに申し訳がありません。"任される"という森厳さも味わわせていただきました。近頃は会員が増え、ナタとノコの両方でやっています。山主さんにとって、木にとって、安全と効率をどう折り合わせていくか。まだまだ研鑽は続きます。（116号 2006年9月1日）

このように、実践において森林ボランティアは、リスクの最小化という課題にたいして、林業者に漸近したり、セクター水準で標準化された方法をもちいたりするのではなく、林業者に対置される森林ボランティアの特有性として安全の優先を位置づけ、個別の参加者の力量やフィールドの状況に応じた作業方法を取り入れることで対応した。

そして、安全管理の責任をリーダーに帰すのではなく、個別の参加者の力量に応じた作業方法の取り入れというかたちで制度的な対応をとることは、活動体の水準では、リスクの最小化のための取り組みと評価される。そして、活動者の水準では、活動者自身がみずからの身体をコントロールする責任主体となる余地をもつものだった。

6 おわりに

本章はここまで、森林ボランティア活動の安全管理についての認識の変遷を追うことで、活動者や活動体が、活動をどのように意味づけ、関係するアクターの期待にどのように対

¹⁸ あきる野市で活動する「そらあけの会」は、1999年4月に結成された。

応してきたのかをみた。

活動の初期にみられた、「怪我と弁当は手前持ち」といって活動における責任をみずから引き受けると表明することは、みずから身体をコントロールする主体としてフィールドにはたらきかける楽しみという、継続的な活動参加を導く活動者にとっての効用を表現するものだった。そして、それは同時に、山林所有者や地域住民からの期待に応えるための表現でもあった。

しかし、森林ボランティア活動が社会的認知を受けるなかで、活動者や活動体が関係するアクターは個別のフィールドを超えて広がり、安全管理も制度的な対応が求められてリスクの最小化が課題となった。これにたいする活動体や森林ボランティアセクター水準での制度的な対応は、個別のフィールドの文脈を超えた社会的な期待に対応するものだったが、反面、活動者がフィールドの自然と結ぶ関係のなかに見いだす活動の楽しみを看過しかねないものだった。この点について、活動者からは反発の声があがった。つまり、森林ボランティアは、安全管理をめぐって、リスクの最小化という社会的期待に応えることと、個別の活動者がみずからの身体をコントロールする主体としてフィールドにはたらきかけることという、ふたつの課題の両立に直面していたのである。

これにたいして、安全管理についての意識の高まりを背景に登場した、効率優先のプロの林業者にたいする、森林ボランティア活動の独自性として安全の優先を掲げる認識は、この両立を導いた。安全の優先を森林ボランティア活動の独自性とおくことで、活動体は、個別の活動者の力量に応じて、プロとは異なる独自の作業方法を部分的に導入するという制度的な対応をとりつつ、個別の活動者は、みずからの身体をコントロールする主体としてフィールドの自然にはたらきかける楽しみを享受する可能性をもったのである。

このように、本章では、森林ボランティアの安全管理をめぐる議論のアリーナにおいて、一方で、社会的認知の増大にともなって個別のフィールドの水準を超えた社会との関係において制度的な対応が求められるようになり、他方で、活動者は、みずからの身体をコントロールする主体として、目前で相対するフィールドの自然にはたらきかける楽しみの享受を重視していることをみた。5章・6章ではさらに、2002年から東京都西多摩郡奥多摩町で活動をつづける鳩ノ巣フィールドの活動を事例に、具体的なフィールドの実践に定位して、活動者が社会的意義や安全管理をめぐる意味づけをどのようにとらえ、活動に取り組んでいるのかをくわしく検討する。

第5章 ボランティアによる継続的な森林資源管理の可能性 ——管理の責任と自由な関与を両立させるための規則 としての「鳩ノ巣流」の作業方法

1 はじめに

近年のボランティア活動の重要な課題のひとつは、序論でみたように、メンバーの確保や世代を超えた活動の継続である。全国社会福祉協議会の実施する「全国ボランティア活動実態調査」では、メンバーの高齢化や新規活動参加者の不足を活動上の困難として挙げるボランティア活動団体の増加が指摘されている（全国ボランティア・市民活動振興センター 2010: 95）。環境ボランティア活動の分野においても、世代を超えた活動の継続は、活動団体の課題と認識されている（小野奈々 2013）。

森林ボランティア活動も同様の課題を有している。第4章でみたように、森林ボランティア活動は、1980年代なかば以降、手入れ不足による森林の劣化・変容の問題に対応する地域外の都市住民による、人工林や里山林の維持・管理の取り組みとして注目を集め（内山節編 2001; 山本信次編 2003）、2000年代にかけて活動団体数を大幅に増加させてきた。しかし、活動団体数は2010年代に入って減少傾向にある。全国の森林ボランティア活動団体を対象に1997年より3年ごとに実施されている「森づくり活動についての実態調査」によれば、1997年に277だった団体数は、2000年代にかけて増加の一途をたどり、2012年に3,060を数えるまでになった。しかし、2015年には3,005となり、わずかながら減少傾向にある（第4章表4.1参照）。

表 5.1 2015 年調査における活動で苦勞している点上位 3 項目の回答推移 (MA)

活動で苦勞している点		調査年度						
		1997	2000	2003	2006	2009	2012	2015
参加者の確保	回答数	76	144	406	595	316	350	823
	比率 (%)	52.4	44.7	48.7	55.1	28.6	67.4	70.0
活動資金の確保	回答数	67	176	473	661	817	335	778
	比率 (%)	46.2	54.6	56.8	61.2	73.9	64.5	66.2
スタッフの確保	回答数	-	-	-	-	372	197	432
	比率 (%)	-	-	-	-	33.7	38.0	36.8
回答団体数		145	322	833	1,080	1,105	519	1,175
1 団体あたり平均回答数		2.3	2.2	2.5	2.6	3.0	3.5	3.4

註：2015 年度調査で上位 3 位の項目について示した。-は選択肢に項目なし。2006 年度調査までは主なもの 3 つ以内を選択し、2009 年度調査からはあてはまるものすべてを選択。選択肢のうち、「参加者の確保」は、2015 年度調査のみ「会員・参加者の確保」というワーディングをもちいている。

出典：林野庁（2001, 2004, 2007, 2010, 2013）、森づくりフォーラム（2016）

森づくり活動についての実態調査の結果をさらにみてみると、参加者の確保や高齢化が活動団体にとっての課題と認識されていることが明らかになる。すなわち、活動で苦勞している点としてもっとも多く挙げられているのは「参加者の確保」であり（70.0%）、その比率の推移は上昇傾向にある（表 5.1）。また、自由回答で「ボランティアの高齢化」を課題に挙げる団体は、2003 年には全体の 0.8%とごくわずかだったが、2010 年代に増加傾向を示すようになり、2015 年には全体の 6.8%を占めるにいたっている（表 5.2）。

表 5.2 活動や支援制度の問題点, 課題, 意見 (FA・主要項目)

主な問題点, 課題, 意見		調査年度				
		2003	2006	2009	2012	2015
財政的な制度・支援措置の拡充	回答数	38	119	134	108	156
	比率 (%)	4.3	10.6	11.1	19.9	12.7
ボランティアの高齢化	回答数	7	25	16	26	84
	比率 (%)	0.8	2.2	1.3	4.8	6.8
制度や支援措置の利用の申請・手続きが面倒	回答数	10	13	35	7	51
	比率 (%)	1.1	1.2	2.9	1.3	4.1
人材の育成, 指導者の育成が不足	回答数	18	49	10	18	40
	比率 (%)	2.0	4.4	0.8	3.3	3.2
制度・支援措置の拡充	回答数	79	73	92	27	33
	比率 (%)	8.9	6.5	7.6	5.0	2.7
普及啓発, 広報活動の充実	回答数	18	39	12	26	33
	比率 (%)	2.0	3.5	1.0	4.8	2.7
行政の積極的な参加	回答数	9	57	26	61	31
	比率 (%)	1.0	5.1	2.2	11.2	2.5
活動のための支援制度, 活動状況の情報摘要が不足	団体数	12	36	24	36	10
	比率 (%)	1.4	3.2	2.0	6.6	0.8
回答団体数		-	-	-	-	530
(調査全体の) 有効回答数		883	1,125	1,205	543	1,232

註：各調査年度で上位 3 位に入ったことのある項目にかぎって示した。2015 年度調査以外の回答団体数が不明だったことから、調査全体の有効回答数にたいする比率を示した。

出典：林野庁（2004, 2007, 2010, 2013）、森づくりフォーラム（2016）

高齢化の傾向は、活動団体の会員の年齢構成の変化に如実に示されている。2015 年度調査を、会員数が最多となる年齢階層を尋ねた 2003 年度調査と比較してみると、2003 年は、40 代 20.0%、50 代 43.8%、60 代以上 23.6%という構成だったが、2015 年は、40 代 8.0%、50 代 13.3%、60 代 48.8%、70 代以上 19.8%という構成へと変化している（表 5.3）。60

代以上の会員が最多の団体が2/3以上を占めており、主力となる活動者の高齢化の傾向が示される。また、主力の活動者が入れ替わらずに、年齢を重ねている傾向も示唆される。

さらに、年齢構成についての各団体の回答から会員数の合計についての推計を算出した2009年調査との比較では、若年層の活動者の減少が示唆される。2009年は、18歳以下13%、19歳から29歳10%だったのにたいして、2015年は、18歳以下5%、19歳から29歳4%で、その比率が大きく減少しているのである（表5.4）。代わって、40代以上の会員の比率が高まっている。

表 5.3 調査年度別会員数最多の年齢階層

年齢階層	2003 年度調査		2006 年度調査		2015 年度調査	
	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)
～18 歳	26	3.3	22	2.1	29	2.5
19～29 歳	16	2.0	10	1.0	31	2.6
30～39 歳	58	7.3	32	3.1	58	4.9
40～49 歳	159	20.0	141	13.7	94	8.0
50～59 歳	349	43.8	410	39.7	156	13.3
60～69 歳	188	23.6	417	40.4	573	48.8
70 歳～					233	19.8
合計	796	100.0	1,032	100.0	1,174	100.0

出典：林野庁（2004, 2007），森づくりフォーラム（2016）より筆者作成

表 5.4 調査年度別年齢階層別合計会員数の構成比 (単位：%)

年齢階層	調査年度		
	2009	2012	2015
～18 歳	13	5	5
19～29 歳	21	6	4
30～39 歳	10	9	10
40～49 歳	10	11	16
50～59 歳	17	18	29
60～69 歳	29	51	25
70 歳～			11
合計	100	100	100

出典：林野庁 (2010, 2013), 森づくりフォーラム (2016)

このように、活動団体を立ち上げた都市住民自身が高齢化し、活動者の入れ替わりを果たせないなかで、都市住民による活動は、継続的展開という点で困難に直面している。

こうした状況にたいして、既存の森林ボランティア活動研究のうち、活動参加や満足度を規定する要因を検討する研究は (重松敏則 1990; 栗山浩一・酒井功 1997; 青柳かつら・佐藤孝弘 2007a, 2007b; 松川太一 2013), 新規参加者確保という課題に応える知見を示してきたといえるかもしれない。しかし、既存参加者の活動の継続や世代を超えた活動の継続を視野に入れた検討は、ほとんどみられない。

そこで本章は、東京都西多摩郡奥多摩町の「鳩ノ巣フィールド」の活動を事例に取り上げて、森林ボランティア活動の参加者である都市住民の長期にわたる継続的な活動展開はいかにして可能なのか、またそもそも、活動を継続することの意義を活動者自身はどのように見いだしているのかを検討する。

具体的に注目するのは、鳩ノ巣フィールドの活動者に明示的に共有される規則としての、「鳩ノ巣流」の作業方法の統一である。これは、鳩ノ巣フィールドにおける安全管理を担保するための方策となっている。すなわち、森林ボランティア活動のセクター水準での安全管理をめぐる活動者の認識やねらいと外部のアクターからのまなざしへの対応のしかたをみた第 4 章の分析を踏まえて、本章は、具体的に活動が展開するフィールドの水準で、安全管理をめぐるリスクの最小化と活動者の自由の両立がどのように担保されようとして

いるのかと、それを活動者がどのようにとらえているのかをとらえる。

2 先行研究と分析視角

2.1 先行研究

既存の森林ボランティア活動研究のうち、森林ボランティア集団の持続的な自立方策を検討する栗本修滋（2004）は、既存の活動者の活動参加の持続性に焦点をあてている。栗本は、集団において発揮される共同性にとくに注目し、成員が相互に目的を共有して目的達成のために活動する「道具的共同」のみならず、感情や意識をめぐる成員間の相互作用やその結果を示す「表出的共同」や、機会と地理的空間としての場所を共有して共同活動することを意味する「場所の共同」が、活動者の持続的な参加に寄与することを明らかにした。栗本は、森林ボランティアの活動者が多様な認識にもとづいて活動に取り組み、活動体の掲げる目的との関連でのみ参加しているわけではないことを指摘したうえで、活動者相互の関係や活動者と活動体との関係を検討することの重要性を示しており、本章に示唆を与える。

しかし、活動者の継続的参加を導く論理として注目される共同性は、栗本自身が警鐘を鳴らすように（栗本 2004: 28）、それが集団内部の閉じられたものであるとき、活動体外部の都市住民の支持や活動への参入を妨げ、かえって活動の持続性を阻害する要因となりかねない。地域環境ボランティアグループを事例に取り上げる小野奈々（2013）も同様に、メンバー間の「相互鑑賞欲求」を参加動機とするグループが、メンバーシップを固定化させて対外閉鎖的となり、新規参加者を得られず世代を超えて活動を継承できない状況を生じさせていると指摘している。

すなわち、活動者によって意味づけや関与の度合いが多様でありうる森林ボランティア活動の持続的な組織のされかたを検討するにあたっては、既存の活動者の継続的な参加の論理に注目するだけではじゅうぶんではない。活動体外部からの新規活動者の参入や活動者の入れ替わりを視野に入れた、活動体や活動者の論理を検討する必要がある。活動の持続可能性の担保は、一方で既存の活動者の継続的な活動参加によるが、他方で同時に、集団外部からの新規参加者の参入が必要となる。それを可能にする活動体の構成とはどのよ

うなものなのか。

2.2 分析視角

活動体の掲げる目的や活動において醸成される共同性に代わる、活動の継続的展開を担保する論理とはなにか。本章はそれを、コモンズ論に示唆を得て、活動体における規則の共有に求めたい。

既存のコモンズ論はおもに、共同性を基盤とし、比較的メンバーシップの限定された、地域共同体における自然資源管理を事例としてきた (E. Ostrom 1990; 多辺田政弘 1990; 鳥越皓之 1997, 2014; 井上真・宮内泰介編 2001; 室田武・三俣学 2004; 井上真 2004; 宮内泰介編 2006; 井上真編 2008; 室田武編 2009; 三俣学編 2014)。そうした対象において、資源利用・管理の担い手の供給基盤は地域共同体に求められ、持続可能性の問題は議論の射程外におかれている。都市住民による共同利用資源 (common-pool resource) の利用・管理を考察する高村学人 (2012) もまた、土地の共同を基盤とする住民自治組織を資源管理の一義的な担い手とする対象を事例に取り上げることで、持続可能性の問題に抵触せずに議論を展開している。さらにまた、過少利用状態にある資源の利用・管理を対象とした議論では、資源管理活動に参入する地域外の都市住民のボランティアは、持続的な関与という点で懐疑的にみられている (飯國芳明 2012; 山本 2014)。

しかし、過少利用資源の利用・管理の課題が資源の利用者・管理者の拡大にあるならば (飯國 2012)、限定的にでも参入する地域外の都市住民が持続的に活動に取り組みうる条件を検討することがあってもよいのではないか。それは、活動に先立つ共同性を前提としないときに、それに代わってコモンズの利用・管理の持続性を担保するものがなにかを問うことにつながる。地域住民が利用・管理するコモンズに参入する都市住民ではなく、地域住民や所有者が積極的に関与しない森林資源を自主的に管理する都市住民を対象に、本章が検討するのはこの点である。

それにあたって、本章がコモンズ論で注目するのは、資源の利用・管理にかかわる規則の共有が、異なる利害を有しうる利用者間の協調行動を生みだし、持続的な利用・管理を導いてきたという知見である (Ostrom 1990; 室田武・三俣学 2004; 高村 2012)。既存のコモンズ論は、あらかじめ存在する共同性を基盤として創発される、規則を共有する協調行動をとらえてきた。これにたいして本章は、規則を共有することが協調行動を創発し、

活動における共同性や持続可能性につながりうるとみて、この知見を援用する。すなわち、既存のコモンズ論と異なり、共同性を基盤とせずとも、規則を共有することがコモンズ形成につながるとみる立場をとる。それによって、居住地の異なる都市住民による活動を、コモンズ論の射程に収めることをめざす。つまり、本章は、地域外の都市住民の新規参入を導く論理との関連で、どのような規則が活動者に共有されているのかを問い、また、活動者がどのようにして規則を共有しているのかを問うために、コモンズ論を援用する。これによって、持続可能性を担保する都市住民の森林ボランティア活動はいかに構成されるのかを明らかにする。

2.3 分析対象

以上の整理を踏まえ、次節以降、東京都西多摩郡奥多摩町の私有林地「鳩ノ巣フィールド」における森林ボランティア活動を事例に取り上げて、検討をすすめる。

鳩ノ巣フィールドを事例に取り上げるのは、2002年に活動を開始し、参加者を公募で募る月例イベントを中心に展開するなど、都市住民による森林ボランティア活動の典型のひとつといえ、そのなかでも、活動の継続的展開を視野に入れた比較的成功した活動だといえるためである。

先に取り上げた森づくり活動についての実態調査（平成27年調査）の分析によれば、森林ボランティア活動団体は、特徴別に、①都市部にある任意団体・NPO（大都市型団体）、②都市部と農山村の中間的な特徴をもつ任意団体・NPO（都市近郊型団体）、③農山村にある任意団体・NPO（農山村型団体）、④漁業者による活動（漁業者団体）¹、⑤企業など

¹ 漁業者による活動は、「森林の多様な機能や水の『循環』に注目した下流部の漁業者が上流部に植林を行い、流域環境を守ろうとする……山から海までを一体のものとして捉える『流域管理』の理念に裏打ちされた」（帯谷博明 2004: 109）活動である。都市住民による森林ボランティア活動とは出自を異にするが、1980年代後半に先駆的な活動がはじまり、1990年代以降全国に拡大していく点で軌を一にしている。代表的な活動としては、1988年に北海道漁業協同組合婦人部連絡協議会がはじめた「お魚殖やす植樹運動」（柿澤宏昭 1994; 斉藤和彦 2003; 小泉聡美 2013）や、1989年に宮城県唐桑町の養殖業者を中心にはじまった「森は海の恋人」運動（帯谷博明 2004; 畠山重篤 2006）がある。

の事業体による活動（事業体）の5つに大別できる（富井久義 2016）²。このうち、大都市型団体は、年間活動日数こそ 38.04 と都市近郊型団体や農山村型団体と同程度であるものの、作業内容実績に挙げる項目数の平均が 4.79 と、相対的に多岐にわたる活動を手がけており、また、平均年間のべ参加者数が 660.87 と多い（表 5.5）。ここから、大都市型団体の典型像は、参加者を公募するイベント型の活動を中心に活動に取り組むというものと推測できる³。また、活動開始年の分布をみても、大都市型団体では活動開始が 2001 年から 2005 年のあいだの団体が 36.0% ともっとも多く（表 5.6）、鳩ノ巣フィールドはこれにあてはまる。

表 5.5 団体類型別年間活動日数・作業内容実績回答数・年間のべ参加者数の平均

団体類型	年間活動日数 (日／年・平均)	作業内容実績回答数 (個／団体・平均)	年間のべ参加者数 (人／年・平均)
大都市型団体	38.04	4.79	660.87
都市近郊型団体	37.58	4.20	372.14
農山村型団体	38.42	3.62	243.62
漁業者団体	28.28	3.94	254.51
事業体	12.58	3.05	231.17
その他	24.04	3.48	328.47
全体	33.65	3.98	356.51

出典：森づくりフォーラム（2016）より筆者作成

² 団体の類型化は、まず、活動目的に「魚付き林の整備・漁場の保全」を挙げる団体を④「漁業者団体」とし、つぎに、組織形態が「事業体」である団体を③「事業体」とした。そして、任意団体・NPO を事務所所在地によって分類した。事務所所在地が大都市のばあいには①「大都市型団体」、大都市以外の市のばあいには②「都市近郊型団体」、町村のばあいには③「農山村型団体」とした。なお、大都市の定義は国勢調査にならい、20 の政令指定都市および東京都特別区部とした。この類型化は、調査項目の制約という条件下、各類型——とくに大都市型団体と農山村型団体——の動向を大枠で把握するためにとったものであり、精緻化が今後の課題として残る。

³ 広報活動の実施比率が 81.5% と、全体の平均 67.8% より高いことは、これを傍証する。

表 5.6 団体類型別活動開始年の分布

団体類型		活動開始年					合計
		～1995	1996～ 2000	2001～ 2005	2006～ 2010	2011～	
大都市型団体	回答数	9	21	41	23	20	114
	比率 (%)	7.9	18.4	36.0	20.2	17.5	100.0
都市近郊型団体	回答数	40	93	138	165	146	582
	比率 (%)	6.9	16.0	23.7	28.4	25.1	100.0
農山村型団体	回答数	15	25	37	54	49	180
	比率 (%)	8.3	13.9	20.6	30.0	27.2	100.0
漁業者団体	回答数	9	8	15	9	7	48
	比率 (%)	18.8	16.7	31.3	18.8	14.6	100.0
事業体	回答数	9	5	12	51	42	119
	比率 (%)	7.6	4.2	10.1	42.9	35.3	100.0
その他	回答数	14	13	17	16	23	83
	比率 (%)	16.9	15.7	20.5	19.3	27.7	100.0
合計	回答数	96	165	260	318	287	1,126
	比率 (%)	8.5	14.7	23.1	28.2	25.5	100.0

出典：森づくりフォーラム（2016）より筆者作成

鳩ノ巣フィールドが大都市型団体の特徴と異なるのは、活動者の年齢構成である。表 5.7 に示されるように、大都市型団体の年齢構成比の平均をみると、60 代（42.3%）や 70 代以上（27.8%）の比率が高い。しかし、2016 年度の鳩ノ巣フィールドの活動参加者は、平均年齢が 37.9 歳で、相対的に若年層の参加者が多い構成になっている。具体的には、2016 年にはじめて参加した参加者の平均年齢が 29.7 歳で、10 代（41.1%）の参加者が多い点に大きな特徴がある。2015 年以前からの継続的な参加者にかぎってみても、50 代（22.4%）や 60 代（24.1%）が多く、平均年齢は 52.6 歳で、大都市型団体の構成比の平均に比してやや若い年齢構成となっている。相対的に若い参加者が継続的に活動に参入し、定着していることを示しており、鳩ノ巣フィールドの活動は、都市住民による森林ボランティア活

動の典型例のなかで、これまで比較的成功してきた活動だということができる。

表 5.7 鳩ノ巣フィールド（大自然塾）活動参加者の年齢構成（2016 年度・大自然塾）

年齢階層	鳩ノ巣フィールド活動参加者（2016 年度）						森づくり活動について の実態調査（参考）	
	初参加者		継続的参加者		合計		大都市 型団体	全体
	人数	比率 (%)	人数	比率 (%)	人数	比率 (%)	比率 (%)	比率 (%)
10 代	39	41.1	0	0	39	25.5	1.8	1.8
20 代	15	15.8	4	6.9	19	12.4	1.8	3.4
30 代	10	10.5	4	6.9	14	9.2	5.3	7
40 代	7	7.4	9	15.5	16	10.5	8.2	10.5
50 代	8	8.4	13	22.4	21	13.7	12.9	16.6
60 代	6	6.3	14	24.1	20	13.1	42.3	38.9
70 代	2	2.1	4	6.9	6	3.9	27.8	21.8
不明	8	8.4	10	17.2	18	11.8	-	-
合計	95	100.0	58	100.0	153	100.0		
平均年齢	29.7（歳）		52.6（歳）		37.9（歳）			

註：「初参加者」は、2016 年度にはじめて活動に参加した活動者を指す。「継続的参加者」は、2015 年度以前に参加経験のある活動者を指す。また、森林づくり活動についての実態調査のデータは、参加者ではなく、会員数の構成比を示し、「10 代」は 18 歳以下、「20 代」は 19 歳以上 29 歳以下、「70 代」は 70 歳以上を指す。各団体の構成比の平均を示しており、森づくりフォーラム（2016）とは算出方法が異なる。そのため、表 5.4 の数値とは一致しない。

出典：鳩ノ巣フィールド資料・森づくりフォーラム（2016）より筆者作成

こうした性格をもつ鳩ノ巣フィールドの事例を取り上げることで、本章は、参加者を公募するイベント型の活動を中心とする都市住民による森林ボランティア活動が、どのように継続的に展開しうるのかを検討する。

具体的には、まず3節では、鳩ノ巣フィールドの活動の特徴を、山林所有者との関係や都市住民の活動参加の位置づけに注目して明らかにする。「あらゆるひとたちがいつでも参加できる」と標榜し、新規活動者の参入を強く意識して活動体を構成していることが、最大の特徴である。つぎに4節では、鳩ノ巣フィールドにおいて共有される規則に目を向け、そのもつはたらきを明らかにする。具体的には、「鳩ノ巣流」の作業方法の中心的なアイデアを出した H12 さんの語りから、経験をもたない都市住民による森林資源管理の担保というねらいを明らかにする。そして5節では、新規活動者の参入を強く意識する活動体の構成が、継続的な活動者にどのように経験されているかを論じる。鳩ノ巣フィールドの既存の活動者の継続性は、規則にもとづきくりかえし活動に取り組むなかでの、ボランティアに特有の方法でフィールドを維持・管理しうることへの気づきに支えられている。その論理において新規参入者は、活動の価値をあらたに見いだすポテンシャルをもった存在として歓迎されている。すなわち本章は、鳩ノ巣フィールドにおける活動の継続性が、新規活動者の参入を積極的に受け入れる論理と、既存活動者の活動の継続性の重要性への気づきに支えられていることを示す。

3 都市住民による森林資源システムの維持・管理のしくみ

——鳩ノ巣フィールドの活動形態と活動参加者の動向

鳩ノ巣フィールドは、東京都西多摩郡奥多摩町に位置する、植栽後に手入れのすすまなかつた人工林地や人工林の伐採跡地からなる約8haの私有林地である。現在では伐採跡地の一部は整備されて広葉樹の植栽地となり、残りは天然更新の二次林地として利用・管理されている。東京都産業労働局主催事業「多摩の森・大自然塾」⁴で森林ボランティア体験

⁴ 「多摩の森・大自然塾」は「西多摩地域の森林をフィールドに、青少年や都民のみなさんが自然のしくみを学び、また森林の保全作業を体験することを通じて健全な心身を育み、東京の自然と森林を守る活動に自主的・自立的に参加するための支援・推進をする事業」（森づくりフォーラム 2003: 8）であり、2002 年度から 2007 年度にかけて実施された（2004 年度以降は都環境局主催）。西多摩地域のネットワーク組織として当初設立された森づくりフォーラムが事業の受託者となり、西多摩地域の各市町村にある私有林地のフィ

講座を実施するために、事業受託者のNPO法人「森づくりフォーラム」⁵が山林所有者と協定を締結したことをきっかけに、2002年10月以来、都市住民による自主管理型⁶の森林ボランティア活動がおこなわれている（図5.1）。

本節では、鳩ノ巣フィールドの活動の概要を、山林所有者との関係と、都市住民の活動参加の位置づけに注目して整理する。山林所有者との関係で森林の健全育成の責任を負いつつも、個別の活動者の水準では関与の度合いを自由に決められるのが、鳩ノ巣フィールドの活動の特徴である。

ールドで、一般公募によって参加者を募る「体験講座」を年のべ40回程度実施するものである。参加者の指導など、フィールドでの講座の具体的な運営には、各地で活動する個別の団体があたった。鳩ノ巣フィールドは、大自然塾事業実施にさいしてあらたに設置されたフィールドで、大自然塾開催フィールドのなかで唯一、体験講座を毎月開催するフィールドであった。

なお、ここで西多摩地域とは、青梅市、あきる野市、日の出町、奥多摩町、檜原村、八王子市を指す。山本は、1980年代後半から2001年前後までの東京都西多摩地域の森林ボランティア活動の展開を整理している（山本編 2003: 128-39）。

⁵ 森づくりフォーラムは西多摩地域のネットワーク組織として設立され、1995年に任意団体となった。2000年のNPO法人格取得を機に、全国ネットワーク組織を標榜するようになっている。佐藤岳晴（2003: 41-5）は、NPO法人設立までの森づくりフォーラムの活動を整理している。また、吉村妙子（2010）は、事務局員の立場から、2007年までの活動の変遷を整理している。

⁶ 山本は、山林所有者との取り決めに注目して、森林ボランティア活動を、①請負契約で作業をおこなう作業請負型、②所有者との信頼関係で森林施業に参加するボランティア型、③林地を借り受けて造・育林をおこなう自主管理型の3つに分類している（山本編 2003: 129-33）。所有権に注目して山本の分類を援用すれば鳩ノ巣フィールドの活動はボランティア型といえるが、本章では利用・管理計画の作成主体に注目して援用し、自主管理型とした。



図 5.1 鳩ノ巣フィールド遠景

出典：筆者撮影（2016 年 1 月 10 日）

3.1 鳩ノ巣フィールドの活動形態

森づくりフォーラムと山林所有者が毎年締結する協定には、山林所有者がフィールドを無償で提供する一方、活動にかかる経費をボランティアが負担すること、森林や植物についての権利は山林所有者に帰属することが定められている。そのため、ボランティアによる活動の結果発生する間伐材等は、原則フィールド外に搬出せず、道づくり用材などとして、フィールド内で使用される。

E. Ostrom (1990) は、共同利用資源 (common-pool resource) を「潜在的な受益者とその利用による便益の享受から排除するためには（不可能ではないが）多大なコストを要するほどに規模の大きな自然あるいは人工の資源システム」(Ostrom 1990: 30) と定義し、さらにそれを、利用のために良好な状態に保たれるべきストックとしての資源システム

(resource system) と、資源システムからの個人の利用物として消費されるフローとしての単位資源 (resource units) にわけてとらえる視座を提示した⁷。それにしたがって整理すれば、鳩ノ巣フィールドにおいて都市住民は、森林資源システムを維持・管理するためにフィールドにアクセスする権利を有して、活動に取り組んでいる。しかし都市住民は、活動に取り組んでも直接的な単位資源の収益権を有さない。活動は、山林所有者に帰属する所有権や単位資源の収益権とのかかわりから切り離されたものと位置づけられている。とはいえ、都市住民による活動の成果は、森林の単位資源の効用を左右し、山林所有者の収益権や所有権と密接にかかわる。そのため、森林の健全育成という点で、都市住民の活動者は山林所有者にたいする責任を有する⁸。

⁷ Ostrom (1990) は、共同利用資源で生じる単位資源の利用と資源システムの管理それぞれの問題を解消するような、単位資源利用者 (appropriator) 間の協調行動を創発する自己組織化がどのようななされているのかを検討している。

⁸ 金銭の介在の有無や指揮命令関係の有無という点では大きなちがいがあがあるが、権利関係上の都市住民の活動者の位置づけは、山林所有者から保育作業を請け負う林業労働者に一見相似するといえる。

東京の自然と森林をもっと身近に！

『多摩の森・大自然塾』奥多摩・鳩ノ巣フィールド

東京の面積の約30%が森林です(島しょを除く)。その多くが多摩地域に存在しています。

森林は水を蓄えたり、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の吸収源であるといった公益的機能を持っています。

しかしながら、多くの森林は、手入れ不足や食害などで元気がなく、その力を十分に発揮できていません。

この現状を打開する原動力のひとつとして、森林ボランティアへの期待が高まっています。まずは、森林ボランティアを体験することで、森林をもっと身近に感じてください。

最新情報をホームページで公開中
<http://hatonosu.blog39.fc2.com>



奥多摩・鳩ノ巣フィールド

詳細はこちらから

※作業内容は変更になる場合があります。

スケジュール	作業内容	10/15(日)	11/19(日)	12/17(日)	1/21(日)	2/18(日)	3/18(日)
4/16(日)	間伐・枝打ち・キノコ作業	道づくり・下刈り	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業
5/21(日)	道づくり・下刈り・ワサビ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業
6/18(日)	道づくり・下刈り	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業
7/16(日)	道づくり・下刈り	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業
8/20(日)	道づくり・下刈り・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業
9/17(日)	道づくり・下刈り	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業	間伐・枝打ち・キノコ作業

※初めて鳩ノ巣フィールドに来られた方には、フィールド案内及び道具の使い方を指導します。

主催 特定非営利活動法人 森づくりフォーラム
 後援 東京都環境局
 協賛 コープみらい・BESSフォレストクラブ
 事務局 認定特定非営利活動法人 JUON (樹恩) NETWORK

『多摩の森・大自然塾』森林ボランティア体験講座とは？

森林が元気になるためには、何十年もの長期的かつ継続的な手入れが必要となります。四季を通して、以下のような作業を行なっています。森林ボランティアの体験を通じて、森林を今よりも身近に感じてもらい、これから自分は、森林のために何ができるのか考えるきっかけづくりをしています。

作業の目的や方法は、作業をはじめる前に説明します。予備知識がなくても気軽に参加していただけます。ただし、下欄に記してある服装や持ち物は必ず守ってください。自分の体力とも相談し、「安全に、楽しく」作業をしましょう。

冬

地植え
苗木を植え付けやすいように、根元枝や雑草などを整理します。

春

補植
クワで穴を掘って苗木を植えつけ、土を覆い被せて踏み固めます。

夏

下刈り
苗木が雑草に埋もれない様に雑草を刈り払い、苗木の生長を促します。

秋

枝打ち
木材としての価値を高め、林形を整えるため、枝を払い落とします。

冬

間伐
生長不良木や混み合った木の根を間引いて、活力ある森林を育てます。

持ちもの
 参加費：200円
 森の中で活動できる服装(長袖・長ズボン・靴)、滑り止め付草鞋、タオル、昼食、飲み物、筆記用具、雨具、お弁当を入れ両手をあけて歩けるかばん(リュック等)

申込方法・問合せ先 ●申込締切 イベント10日前(必着)

『多摩の森・大自然塾』奥多摩・鳩ノ巣フィールド事務局
 〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22 大学生協杉並会館内
 JUON NETWORK 気付
 Tel: 03-5307-1102 / Fax: 03-5307-1091 / E-mail: hatonosu-juon@univcoop.or.jp
 下記の申込用紙に必要事項をご記入の上、上記事務局に郵送・FAX・メールでお申し込みください。
 ※森づくりフォーラムのホームページ <http://www.moridukur.jp> から web の申込みはできません。

※1回に複数のイベントへお申込みいただいても構いません。
 ※いただいた個人情報は、事業などの緊急の事態に際した場合や各種の案内の送付に際して使用させていただきます。JUON NETWORKにて厳重に管理いたします。また、ご本人より停止等のご連絡をいただいた際には、速やかに必要な手続きをお取り扱いします。
 ※初めてイベントにお申し込みをされた方で、お申込みをいただいて10日経過後にも事務局からご連絡が行かない場合は、お手紙をお送りいただけますが電話での対応はございません。

「多摩の森・大自然塾」奥多摩・鳩ノ巣フィールド申込用紙

申込日	年	月	日									
お名前	姓	名	性別									
住所	〒 E-MAIL											
参加希望日	4/16	5/21	6/18	7/16	8/20	9/17	10/15	11/19	12/17	1/21	2/18	3/18
学校名または所属名	自宅TEL ※			携帯TEL ※			FAX					
交通手段	電車・車・その他()			鳩ノ巣フィールドは？			初めて			初めてではない		

図5.2 「『多摩の森・大自然塾』奥多摩・鳩ノ巣フィールド」募集案内チラシ
 出典：JUON NETWORK (2017)

鳩ノ巣フィールドの具体的な活動はおもに、それぞれ月例で実施される、森林ボランティア体験講座「多摩の森・大自然塾 奥多摩・鳩ノ巣フィールド」(以下大自然塾)と(図5.2)、運営2団体のメンバーによる各種の自主活動である⁹⁾。活動の柱である大自然塾は、一般公募で募った参加者が4〜5班にわかれて、ときどきにフィールドの利用・管理に必要な作業に取り組むイベントであり、参加者への指導にあたるスタッフを、運営団体の「森

⁹⁾ 自主活動には、森林インストラクター東京会・JUON NETWORKそれぞれの自主活動と、有志からなる「作業部会」による自主活動がある。それぞれ毎月実施され、体験イベントでカバーできない部分のフィールドの整備や、各団体の関心に応じた活動がなされている。さらに、東京都環境局「多摩の森・大自然塾 基礎講座」や企業・団体の体験活動の受け入れもおこなわれている。

林インストラクター東京会」¹⁰や認定 NPO 法人「JUON NETWORK」¹¹のメンバーが中心となって務めている¹²。

これらの具体的な活動をつうじた、フィールドの森林資源システムの維持・管理の責任を負い、活動の調整・計画や作業内容・方法の管理の任にあたるのは、「鳩ノ巣連絡協議会」である。鳩ノ巣連絡協議会とは、森づくりフォーラム・森林インストラクター東京会・JUON NETWORK のメンバーを中心とする、活動者の有志による月例の運営協議の場である。長期ビジョン・5 か年計画・年度計画・毎回の具体的な活動計画を定めるほか、鳩ノ巣フィールドで実施された活動内容の報告が集約される¹³。すなわち、フィールドでの

¹⁰ 森林インストラクター東京会は、東京圏に在住する森林インストラクターによって構成される任意団体で、「東京および近郊の野外フィールドで一般市民を対象とした自然観察、林業体験等の活動を行って」（森林インストラクター東京会 2015）いる。森林インストラクターとは、「全国森林レクリエーション協会」が実施する資格試験に合格し、認定された者を指し、「森林を利用する一般市民に対して森林や林業にする知識を与え、森林の案内や森林内での野外活動の指導」（森林インストラクター東京会 2015）をすることをおもな役割としている。

¹¹ JUON NETWORK は、「都市と農山漁村の人々をネットワークで結ぶことにより環境の保全改良，地方文化の発掘と普及，過疎過密の問題の解決に取り組み，自立・協力の志で新しい価値観と生活様式を創造していくことを目的」（JUON NETWORK [1999] 2006）とし、森づくり体験プログラム「森林の楽校」や「森林ボランティア青年リーダー養成講座」の開催，間伐材製割り箸「樹恩割り箸」の普及促進事業の展開など，全国各地で活動を展開する認定 NPO 法人である。「全国大学生生活協同組合連合会」を母体として 1998 年に設立され，1999 年に NPO 法人格を取得，2011 年には認定 NPO 法人となった。

なお，森林インストラクター東京会や JUON NETWORK は，鳩ノ巣フィールドの運営団体となることで，はじめて西多摩地域に自分たちのフィールドを得ることとなった。

¹² スタッフは，5 名前後の参加者を受けもつ班長・班長補佐や，巡回指導責任者，指導責任者，統括責任者といった役割をそれぞれ担っている。スタッフには，鳩ノ巣フィールドの活動に継続的に参加する一般参加者であったひとや，他団体所属のメンバーもあり，そのメンバーシップは運営団体のメンバーのみにかぎられていない。

¹³ 計画にはほかに，「長期活動方針」「5 か年計画」がある。活動報告は，後援の東京都や

具体的な活動は、鳩ノ巣連絡協議会が定める森林資源システムの維持・管理の計画に資するよう、内容や方法が協議会であらかじめ確認・調整されている（図 5.3）。

〔第三次五ヵ年計画運営体制〕

1. 「鳩ノ巣協議会」について

- ①山林所有者の意向を受け、主催者（森づくりフォーラム）と事務局（樹恩ネットワーク）のもとで「鳩ノ巣協議会」は継続する。
 - ◇構成メンバー：森づくりフォーラム・樹恩ネットワーク・森林インストラクター東京会員・樹恩ネットワーク会員・一般有志
 - ◇座長：協議会メンバーによる互選
 - ◇事務局：樹恩ネットワークより派遣
 - ◇役割：第三次五ヵ年計画に基づきフィールド活動全般を総合的に推進。
 - ◇次世代を担う、人材の育成に重点を置く。そのために定例活動など通じて研修する。

②「鳩ノ巣連絡協議会」定例会

- ◇日時：毎月第 1 日曜日 18:30～20:30
- ◇場所：大学生協会館内
- ◇議題：事務局（樹恩ネットワーク）からの依頼案件
 - 年度活動計画書&報告書の作成
 - イベント運営管理（作業内容・班編成等）
 - イベント時の安全管理
 - 必要とされる毎木調査・植生調査・生物調査等
 - 作業部会活動・自主活動・企業等からの依頼活動、等

2. 多摩の森・大自然塾「鳩ノ巣イベント」について

①イベント実施要領

- ◇日時：毎月第 3 日曜日
- ◇主催：森づくりフォーラム
- ◇後援：東京都環境局・山林所有者（対応は森づくりフォーラムが担当）
- ◇事務局：樹恩ネットワーク
- ◇協賛：コープみらい、BESS フォレストクラブ（対応は樹恩ネットワークが担当）
- ◇運営：鳩ノ巣イベント運営委員会
（樹恩ネットワーク・指導顧問・安全管理/調査記録担当）
- ◇運営協議機関：鳩ノ巣協議会

②鳩ノ巣イベント運営体制（2013 年 4 月～2018 年 3 月）

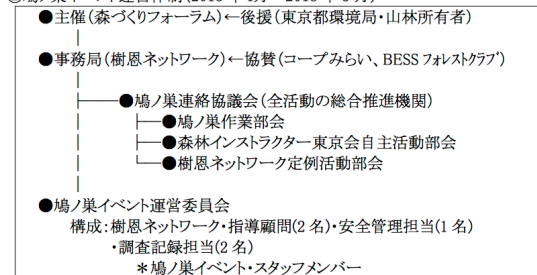


図 5.3 鳩ノ巣フィールドの運営体制

出典：鳩ノ巣連絡協議会（2013: 3）

3.2 活動参加者の位置づけと動向

協賛団体にも報告されている。協賛団体は、「コープとうきょう」（2008 年度より、2013 年度以降は「コープみらい」と「BESS フォレストクラブ」（2012 年度より）である。

このように、鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動は、山林所有者や地域住民にたいし、森林の健全育成という点で責任を有している。他方、都市住民の活動参加のしくみにおいては、参加障壁をできるだけ低くすることが意識されている。そこでは、活動が負うはずの森林の健全育成の責任は後景におかれ、個別の都市住民は、活動に参加するかどうかをその都度選択することができる。すなわち、鳩ノ巣フィールドは、社会との関係で引き受けることを求められる責任を活動体の水準に据えることで、活動者が社会との関係を相対的に後景において活動をとらえることができるようにしている。それによって、H11さんがいうように、関心をもつ「あらゆるひとたちがいつでも参加できる」ことを標榜し、活動にあたってメンバーシップをかぎらず、参加障壁を低くして、活動へのアクセス権を広く都市住民に開こうとしているのである。具体的には、鳩ノ巣フィールドにかかわるメンバーシップを定める会則や会員制度は存在しないことが強調されている。

鳩ノ巣フィールドというのは、鳩ノ巣フィールドをなんとかする会というのはありませんと。会はないでしょ。会則もない。入会金とか会費もない。だれでもが参加できる市民の森づくりということを標榜してる。だからだれでも参加できる……あらゆるひとたちがいつでも参加できるフィールドっていうこと。¹⁴

先にみたように、鳩ノ巣フィールドには森づくりフォーラム・森林インストラクター東京会・JUON NETWORKの3団体がかかわり、大自然塾で指導にあたるスタッフや鳩ノ巣連絡協議会の出席者は、実態としてはおおむねこれらの団体のメンバーである。しかし、大自然塾は、事前の申し込みと参加費の支払いをすることでだれでもが参加できる一般公募のイベントであり、継続的な活動者やスタッフも毎回事前申し込みによって参加を表明し、参加費を支払うしくみをとっている。この点に注目していえば、鳩ノ巣フィールドの各回の活動参加者は、既存の活動者を含む個別の都市住民がそれぞれ参加するかどうかをその都度選択した結果として定まる。参加意思をもつ都市住民の一時的な集まりの積み重ねとして、鳩ノ巣フィールドの活動は成り立っているのである。こうした活動のしくみにおいて都市住民は、活動への参入も容易だが離脱も容易という状況にあり、つねに活動に参加

¹⁴ 2013年6月7日におこなったH11さんへの聞き取り。H11さんは鳩ノ巣フィールドの活動に当初からかかわり、長く統括責任者を務めている。

するかどうかの選択肢をもつ。活動に「あらゆるひとたちがいつでも参加できる」というのはこの意味である¹⁵。鳩ノ巣連絡協議会もまた、興味があればだれでも参加できることが活動参加者に周知されており、同様の論理をもつ。

こうした活動のしくみは、あらたな参加者が不断に活動に参入し、既存の活動者の参加頻度に幅があるという活動参加の実態を導いている。

2016 年度の実績によれば、大自然塾の年間単位での全参加者数は 153 人で、このうち 62.1%にあたる 95 人が初参加者である（表 5.7）¹⁶。毎回の活動単位でみれば、平均参加者数は 42.2 人で、内訳は、初参加者 7.9 人、複数回参加者 18.1 人、スタッフ 16.1 人である（表 5.8）。このように、鳩ノ巣フィールドの特徴のひとつは、不断にあらたな都市住民が活動に参入することである¹⁷。1 回かぎりの活動参加者が多数を占めるが、このうち年間で数人が継続的な活動参加者となることで、鳩ノ巣フィールドの活動はこれまで活動の規模を維持してきている¹⁸。

¹⁵ なお、鳩ノ巣連絡協議会で策定された「長期ビジョン」は、活動をつうじた「豊かな美しい森＝多様性のある森」の創出をうたい、さまざまな水準での多様性を具体的に列挙しているが、これは都市住民が多様な関心にもとづいて活動に参加することを歓迎し、それに応える側面をもっている。具体的には、将来めざす森の姿である「フィールドのあるべき姿」として、①生物の多様性、②資源の多様性、③森林形態の多様性が挙げられ、また、「活動のあるべき姿」として、①活動メニューの多様性、②森林施業の多様性、③参加者の多様性が挙げられている（鳩ノ巣連絡協議会 2008）。

¹⁶ 女性比率は、2016 年度の全参加者でみれば 47.1%を占める。初参加者の 58.9%を占めることが要因として大きい。継続的参加者では 27.6%であり、森づくり活動についての実態調査における女性の構成比の平均値 22.9%を若干上回る程度である。

¹⁷ 広く都市住民に活動へのアクセス権を開くための条件のひとつに、JR 青梅線鳩ノ巣駅から徒歩 10 分と駅に近く、都市住民にとって物理的にアクセスしやすい場所にフィールドが位置するという地理的条件のよさがある（2014 年 10 月 17 日におこなった F38 さんへの聞き取り。F38 さんは森づくりフォーラムで大自然塾事業の担当をしていた）。

¹⁸ 運営団体がそれぞれ独自にあらたな活動の担い手を得る回路を有している点も注目される。JUON NETWORK は毎年冬に開催する「森林ボランティア青年リーダー養成講座」をつうじて、森林インストラクター東京会は毎年の森林インストラクター試験合格者の入

表 5.8 鳩ノ巣フィールド（大自然塾）年度別各回平均参加人数（単位：人）

	活動年度							2010～2016
	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	年度平均
初参加者	6.7	5.3	5.4	4.1	5.8	5.9	7.9	5.9
複数回参加者	22.2	19.1	19.4	15.3	22.0	17.4	18.2	19.1
スタッフ	20.9	17.1	17.5	16.4	14.8	17.3	16.1	17.1
参加者総数	49.8	41.4	42.3	35.8	42.7	40.6	42.2	42.2

註：「複数回参加者」とは、大自然塾の参加経験が2回以上の活動者を指す。

出典：筆者作成

また、2016年度の年間活動参加回数別の参加者比率をみると、1回のみが61.4%、2・3回が11.8%、4～9回14.4%、10～12回12.4%で、活動者の参加頻度には幅があることがわかる（表5.9）。とくに既存の活動者には、毎回のように参加する活動者と、都合のつくときのみ参加する活動者がいる。これは、個別の活動者のレベルでは、森林の健全育成の責任を意識せず、自身の関心やライフスタイルに応じて参加の頻度を選択することができるためである。2003年より活動に参加し、長くスタッフとして活動に取り組むH15さんがいうように、初参加者のみならず、既存の活動者も「いきいたいときだけいけ〔て〕… …気軽に参加でき……自分のライフスタイルにあわせてなにかができる」¹⁹活動のしくみが、「あらゆるひとたちがいつでも参加できる」と標榜する鳩ノ巣フィールドの活動の特徴である。

会をつうじて、新規入会者が定期的に入ってくるしくみを有しており、大自然塾スタッフの主要な供給源となっている。

¹⁹ 2016年5月25日におこなったH15さんへの聞き取り。

表 5.9 参加者類型別 2016 年度鳩ノ巣フィールド（大自然塾）参加回数

		2016 年度参加回数（回）				合計
		1	2～3	4～9	10～12	
初参加者	人数	86	7	1	1	95
	比率（％）	90.5	7.4	1.1	1.1	100.0
継続的参加者	人数	8	11	21	18	58
	比率（％）	13.8	19.0	36.2	31.0	100.0
合計	人数	94	18	22	19	153
	比率（％）	61.4	11.8	14.4	12.4	100.0

出典：筆者作成

4 経験をもたない都市住民による森林資源システム管理を担保する規則 ——「鳩ノ巣流」の作業方法

前節では、鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動は、活動体の水準で山林所有者との関係において森林の健全育成の責任を負うが、他方で個別の都市住民の参加者の水準では、あたかもその責任を後景に退けたかのようにして、自身の関心やライフスタイルに応じて活動への参加頻度を自由に決められることをみた。では、一見相反するようにみえる、森林の健全育成の責任と個別の活動者の参加の自由は、どのように両立しているのか。

本節で注目するのは、実際の活動の場面で活動者に共有される、「鳩ノ巣流」の作業方法の使用という規則である。この規則の共有が、森林の健全育成の責任と個別の活動者の参加の自由を両立するはたらきをもつことを明らかにする。

4.1 安全管理のための「鳩ノ巣流」の作業方法

前節でみたように、個別の都市住民にとって、鳩ノ巣フィールドの活動への参加障壁は低く設定されている。しかし、大自然塾で実際に活動するにあたっては、共有すべき規則がある。それは、指導責任者によって班ごとに割り当てられた作業に「鳩ノ巣流」の作業方法をもちいてあたることである。「鳩ノ巣流」の作業方法をもちいることの要請は、具体

的には、作業場面でのスタッフから参加者への指導のほか、大自然塾の初参加者が、複数回参加者とは別に班を編制し、半日かけて鋸・鉋・ロープといった手道具の「鳩ノ巣流」の使いかたのレクチャーを受ける場面で確認できる。季節の変わり目には、草刈りで使う大鎌の扱いかた、間伐・枝打ちの手順や方法を、指導責任者が活動者全員の前で実演し、レクチャーする機会もある。また、基本的な「鳩ノ巣流」の作業方法はマニュアルにまとめられ、スタッフに共有されている(図5.4)。

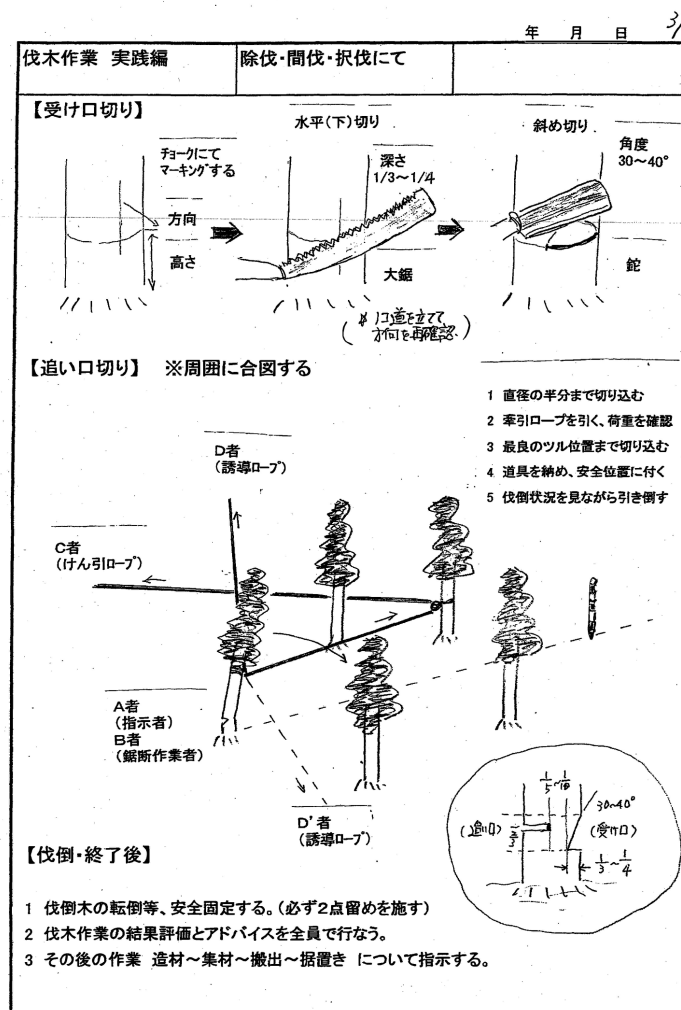


図5.4 伐木作業についてのマニュアル

出典：鳩ノ巣連絡協議会 (2015: 22)

この方針の一貫性は、他のフィールドで作業経験があっても、鳩ノ巣フィールドの活動がはじめての参加者にたいして、他の初参加者とともに手道具の使いかたのレクチャーを受けるよう求めることにあらわれている。森林整備の作業方法は、過去の経験やだれに教わったかによって異なりうるため、他の参加者とともに具体的な作業に取り組む前に、すべての参加者が「鳩ノ巣流」の作業方法をなろうことを求められる。

活動でもちいる作業方法を「鳩ノ巣流」に統一することは、経験をもたない都市住民による森林資源システムの維持・管理を具体化する重要な手段である。「鳩ノ巣流」の作業方法の中心的なアイデアを出し、活動開始当初から指導責任者を務める H12 さんの説明からは、作業方法を統一するねらいをふたつみてとれる。

ひとつは、活動における安全管理の徹底である。H12 さんによれば、「鳩ノ巣流」の作業方法は、作業者の安全確保を優先して定められている。木を伐るときに必ず伐倒木にロープをかけるという具体的な判断を例に、ボランティアによる作業方法は、林業にたずさわる「プロ」の方法とは異なることを、H12 さんは強調する。

おれは基本的に、こんな小さいやつでも大きいやつでも、とにかくロープをかけて倒す……ボランティアっていうのはすべて、なんでもそうだけど、やっぱりそういう考えじゃねえとだめなんだ。プロっていうのは、ここからここは〔ロープをかけて〕やる必要はないと〔判断することがある〕。それは効率を考えるからそうだと。²⁰

H12 さんは、ボランティアが木を伐るさいには、木の太さにかかわらず、「小さいやつでも大きいやつでも、とにかくロープをかけて倒す」べきだという。それは、林業にたずさわる「プロ」からみれば、「ロープをかけるなんて腕が悪いんだ」²¹と評価されかねないやりかたである。しかし、H12 さんによれば、林業にたずさわる「プロ」とボランティアとでは作業にたいする考えかたが異なり、両者をおなじ基準で評価することは妥当ではない。「プロ」が作業にあたって効率を考え、ロープをかけるといった余計な手数をかける必要性をときどきに判断するのにたいして、効率を考える必要のないボランティアはむしろ、

²⁰ 2014 年 7 月 26 日におこなった H12 さんへの聞き取り。H12 さんへの聞き取りはこれまでに 3 回実施した。

²¹ 2014 年 7 月 26 日におこなった H12 さんへの聞き取り。

「1 本ぱっとうやって〔ロープを〕かけるだけで、絶対にこっちにはこないっていう安全策〔を〕考えられる」²²ようにし、確実に作業に取り組むことがまず優先される(図 5.5).



図 5.5 鳩ノ巣フィールドでの伐木作業のようす

出典：JUON NETWORK 提供

鳩ノ巣フィールドでは、事故の発生が活動関係者の責任問題を生じさせ、ひいては活動の存続をおびやかしようという認識が共有されている。そのため、安全を担保するための組織的な対応をとるための体制がととのえられている²³。安全管理を徹底し、重大な事故

²² 2014 年 7 月 26 日におこなった H12 さんへの聞き取り。

²³ 事前に事故発生時のフローチャートを準備し、活動後に事故事例やそれに直結する可能性のあった「ヒヤリハット」事例を共有するなどのそなえのほか、安全についての言及がくり返しみられることが、鳩ノ巣フィールドの安全管理の取り組みの特徴である。大自然塾の開塾式や閉塾式では、毎回必ずといっていいほどに、統括責任者が「きょうも安全に

を起こさないために最善を尽くすことは、不特定多数の都市住民の参加を想定した森林ボランティア活動が、フィールドで継続的に活動をして森林資源システムの維持・管理を担おうとするにあたって、基盤となる重要な課題である。作業方法の統一という規則の導入は、安全を担保し、フィールドの維持・管理の責任を担うための方策のひとつである。統一的な作業方法をもちいることで、活動参加者が「正しく」安全に配慮した作業に取り組んでいるかどうかを判断する、共通認識となる基準を設けることができるのであり²⁴、それが機能しているかぎりにおいて、活動者と活動体、あるいは活動体と社会のあいだで生じる責任をめぐる関係は、後景化されるのである。

4.2 アクセス権を保障するための「鳩ノ巣流」の作業方法

「鳩ノ巣流」の作業方法はまた、経験をもたない都市住民のボランティアが、フィールドで具体的に活動に取り組めるようなふるまいやフィールドの見かたを身につけられるよう導く。これが、「鳩ノ巣流」に作業方法を統一するいまひとつのねらいである。

H12さんは、自身のもちいる作業方法の「原点」を、幼少期に「おふくろ」から山仕事にかかわる道具の使いかたを教わった経験に求めて説明している。それは商売として「力でやる」「男の山仕事の流儀」ではとらえられない見かたであり、「力がなくても、道具をうまく使えばできる」方法だという。

男がやる山仕事の流儀じゃない。おれが教えられたのは、おふくろから教えられたんだ。力のないひとがいかにしてこの大きい木とたたかうか。それはね、道具をうまく使わないとだめでしょ。力じゃないよ。だから、いまの本業としてるひとは力でや

気をつけてやりましょう」「きょうも事故なく安全に作業できました」とあいさつする（たとえば2015年5月17日のフィールドノート）。

²⁴ 2015年5月17日におこなったH14さんへの聞き取り。なお、この安全への配慮の徹底と作業方法の統一は、もともと、森づくりフォーラムが大自然塾事業開始にあたって、各地域の体験講座のスタッフに要請したものである。しかしながら、各地の運営団体は、それぞれに少しずつ異なる作業のノウハウを有するために、大自然塾事業のために推奨された方法が西多摩地域全体に浸透することはなかった。

るでしょ。商売だから。そうじゃない。そこの理屈じゃない。そこがちがうんだよ…
…おふくろは技も力もなかったけども、やっぱ苦労して苦労して、「あ、こうすれば力がなくても、道具をうまく使えばできるな」っていうのをね、子どもの時分におれに教えたような気がするよと……そういうおれは原点があるから。²⁵

幼少期に自身が教わった作業方法を H12 さんがこのように積極的に評価するのは、自身が森林ボランティア活動にたずさわって、西多摩地域の人びとから作業のやりかたを教わるなかで、「子どものころからいろんな、まわりから教わったことが、裏づけられた」と感じたためである²⁶。H12 さんは、自身の教わった作業方法が、「力がなくても、道具を使えばうまくできる」という意味で「基本」となるやりかたであることを見だし、これを自身の「流儀」とするのである。

このように、「おふくろ」にならった経験に仮託する H12 さんのアイデアをベースとする「鳩ノ巣流」の作業方法は、「力がなくても、道具を使えばうまくできる」ことをめざしている。そしてそれは、男性が大多数の林業関係者に限定されない、経験がなく技や力をもたない女性を含む都市住民のボランティアをフィールドに導き、活動に取り組めるように導くツールとなっている。「鳩ノ巣流」の作業方法は、森林での作業の「素人」である活動参加者にとって、みずから危険をコントロールし、安全に森林とかかわることを媒介する。

たとえば、2013 年から活動に参加する一般参加者の H25 さんは、ほかのフィールドでは考えられないような急斜面で²⁷丸太を運ぶ鳩ノ巣フィールドの活動を、「素人がいていいの？」と思える「けっこうレベルの高い山仕事」であると考えていた。しかしながら、「まず安全から入る」かたちで指導を受け、実践することで、そのような「過酷な世界でついていく」ことができるようになったと感じている。

でもほんとにやればやるほど、怖いつてときありますよね。最初のころよりも、や

²⁵ 2014 年 7 月 26 日におこなった H12 さんへの聞き取り。

²⁶ 2014 年 7 月 26 日におこなった H12 さんへの聞き取り。

²⁷ 鳩ノ巣フィールドの平均斜度はおおよそ 30° であるという（2012 年 11 月 17 日のフィールドノート）。

「やっぱり、作業してて怖さっていうのが見えてくるっていうんですか。」²⁸

このように語る H25 さんは、「鳩ノ巣流」の作業方法によって活動に取り組むなかで、当初は見過ごしていた危険な状況に目を向け、安全を確保するためのフィールドでのふるまいと見かたを身につけられたと実感している。「素人」であった都市住民の B さんは、「鳩ノ巣流」の作業方法を媒介に、フィールドの状況に呼応しながらみずから森林に身体的にはたらきかける術を身につけ、森林資源システムの維持・管理活動に取り組むことに習熟するようになったのである。こうして、鳩ノ巣フィールドの活動者は、「鳩ノ巣流」の作業方法を媒介に、フィールドで相対する自然との関係を結んでいる。

5 継続的な活動参加者にとっての規則の共有と活動に取り組む意義

前節では、「鳩ノ巣流」の作業方法が、経験をもたない不特定多数の都市住民が森林資源システムの維持・管理作業を担うための責任を担保する側面をみた。活動の有する責任は、作業方法の統一という活動体のしくみの水準で担保される。このように、鳩ノ巣フィールドで共有される規則は、不特定多数の都市住民の参入を踏まえて活動を組み立てるうえで、重要な役割を果たしている。

しかし、このような形態の活動は、見かたを変えれば、指導責任者の指揮のもと、「決められたことしかできない」²⁹ 自由度の低い活動と映りかねない。規則を共有するかぎりでは個別の活動者の関心は尊重されるとはいえ、思い思いにフィールドの将来を構想して具体化したり、毎回の活動内容や作業場所を選んだりして、個別の活動者の企図を汲んでいく余地は、たしかに少ないように思える (cf. 松村正治 2007)。

ではなぜ、継続的な活動者は、こうした活動体の規則を共有しているのか。また、継続的に活動に参加するのはなぜか。本節は、継続的な活動者の語りから、鳩ノ巣フィールドで共有される規則のもつ意味をさらに検討し、個別の活動者や活動体の継続性との関連を

²⁸ 2015 年 2 月 4 日におこなった H25 さんへの聞き取り。

²⁹ H11 さんが聞いた、鳩ノ巣フィールドの活動から離れた活動者による評価 (H11 さんへの聞き取り)。

明らかにする。

5.1 継続的な活動者にとっての規則の位置づけ

活動に初期からたずさわる H14 さんは、指導責任者に活動内容や編制を一任し、他のスタッフや参加者が「黙ってサポートする」ような、鳩ノ巣フィールドの活動のしくみを肯定的にとらえている。

鳩ノ巣のいいところっていうのは……〔指導責任者が〕責任をもって、そのイベントの活動内容とか、場所とか、編制とかやると、それを、その決まったことを周りのスタッフ、それから協議会に出てるメンバーが黙ってサポートすると、あたりまえのように……細かいことでいろいろいうと、こっちのほうがいいとかあっちのほうがいいとかってあるんだろうけれど、でも、そういうことでなんか議論するっていうこと、俗につまらない、むだなことはしないわけよ、みんな、うん、任してるの。³⁰

鳩ノ巣フィールドの活動のしくみを H14 さんが評価するのは、活動体の水準で定める活動方針をめぐって「つまらない、むだな議論」をせずに済むためであるという。H14 さんによれば、「われわれがやっている自然っていうのはもっと大きなもので、どうにもならないんだから」³¹、その議論に時間をかけることは有益ではない。活動者がその方向性をおおむねおなじくできればじゅうぶんである。そのように考える H14 さんは、活動についての決定を指導責任者などの役割を担う活動者に一任することで、活動方針や活動をめぐる責任を自身の認識の水準で後景においている。それでも、ふるまいの水準では、決められた方針にしたがって活動するという規則を共有することで、他の活動者と相互に協調して活動に取り組み、活動体の有する森林の健全育成への責任を果たすことに貢献しているのである。

H14 さんにみられるように、鳩ノ巣フィールドの活動者は、ふるまいの水準でみれば、決められた方針にしたがって統一的に行動している。しかしそれは、個別の活動者の自由

³⁰ H14 さんへの聞き取り。

³¹ H14 さんへの聞き取り。

度の低さを意味しない。むしろ、個別の活動者は、ふるまいの水準で規則を共有し、求められる役割を果たすかぎり、認識の水準で、活動体の掲げる活動方針や活動体の有する責任を後景におくことができるのである。それによって活動者は、個人の関心やライフスタイルに応じて自由な関心にもとづいて活動に参加することができる（J.-C. Kaufmann 1995=2000）。鳩ノ巣フィールドの活動者が規則を共有して、決められたとおりに活動に取り組むのは、このためである。

5.2 活動に見いだされる多元的な価値の共有

とはいえ、活動者が鳩ノ巣フィールドの活動に継続的に参加するのは、たんに、個別に有する特定の関心を満たすことができるからというわけではない。活動者は、活動に取り組むなかで、関心の幅を広げ、自然についての認識を豊かにし、ひとつのフィールドで活動を継続するからこそ見えてくる活動のおもしろさに気づくことで、さらに自身が継続的に活動に参加する意義を見いだしている。

活動者が関心の幅を広げるのは、ひとつに、他の活動者の関心にふれることによってである。たとえば、2007年から活動に参加するH27さんは、他の活動者の関心にふれて森林とのかかわりかたについて「目を広げ」た経験を、つぎのように語っている。

〔参加者どうして活動の魅力を話し合うことは〕正面からはないけども、たとえば、Xさんなんかは、やっぱり自然、虫とかとっても興味をおもちですね。こういう楽しみかたもあるんだとか、そういうなにげない会話がね、刺激になったりはしますけどね……やっぱり「そうなんだ」と目を広げることができますよね。³²

活動の方針ややりかたをめぐる議論をする機会は少なくとも、規則を共有してともに活動に取り組むなかで、H27さんは、他の活動者の関心やこだわりにもふれている。すなわち、活動に不断に新規参加者がいて「いろんな思いやきっかけの人が入ってくる」³³ことは、既存の活動者にとって、活動やフィールドの見かたについて「目を広げる」よい機会

³² 2015年6月17日におこなったH27さんへの聞き取り。

³³ H27さんへの聞き取り。

となっている。継続的な活動参加者は、規則を共有して指導責任者に割り当てられた役割を果たすかたちで活動に取り組むなかで、他の活動者の関心にふれ、活動に多面的な価値があることを実感し、自身の関心の幅を広げていつている。

活動者はまた、活動をつうじたフィールドとの関係で、その変化を長期にわたって目の当たりにすることによっても、自身の関心の幅を広げている。たとえば H14 さんは、みずからの活動でのフィールドの自然へのはたらきかけにたいして、フィールドの自然が示す反応に目を向けるようすを、つぎのように語っている。

森全体が生きていて、それがかれらの自然の力で、「おれたちはこう生きたい」とかっているのをいつているわけよ。で、われわれはちょっとこう、「きみたちはそれでいいんだけど、ぼくたちの人生そんなに長くないから、もうちょっと早く変わってほしいな」なんて思っていて、〔手を〕かけるわけよ。そうすると、「そうか、わかった」って応えてくれることもあれば、「おまえたち、そんなかつてなこといつたって、おれたちはおれたちの人生だよ」っていつて、生きていくのもあるわけだ。そのへんもやりながら、いろいろ気づかされたりしているっていつうのもなんとなく感じるんだよね。

34

活動をつうじたフィールドの自然との相互作用のプロセスで、自然の反応から教えられ、「気づかされ」ることで、H14 さんは、自然についての認識を豊かにしていつている。H14 さんは当初、「ちゃんとした技術を身につけたいという思い」をもって活動に参加したが、森林インストラクター東京会のメンバーが、「森づくりについていろいろな基本的な考え方、フィールドの成り立ち、いろいろなことを話してくれ〔たことで〕……技術以外のことも上手に伝えていけたら楽しいだろうなという思い」を抱くようになった。そして、当初よりも関心を広げて活動に取り組むなかで、フィールドの自然との相互作用のプロセスに魅力を見いだすようになっていつている。H14 さんは活動をつうじて、「世界も広がるし、自分の見えかたとか、ものの見えかたとか、そういうものがちがってくる」経験をしている。そしてそれは、「このフィールドにいるからこそ気づく」ことである。すなわち H14 さんは、他の活動者の関心に学んで、フィールドの自然との相互作用の過程をとらえること

³⁴ H14 さんへの聞き取り。

に活動のおもしろさを見いだしている。そして、いまではその活動のおもしろさを他の参加者に伝えているのである。

つづけることによって、いろいろな楽しみが広がってきたって、ぼくのばあいはね、ものすごい広がって。だから、JUONのあなたがたにもいうけど、とにかくつづけているとおもしろいよと。なにがおもしろいかっていうのはひとそれぞれだけど、少なくともぼくのばあいは、全然最初はあまり見ようとしなかったものが見えてきたと。

35

このように、一見、ふるまいの水準で指導責任者に割り当てられた役割に徹するかたちで統一的に取り組んでいるように映る鳩ノ巣フィールドの活動で、個別の活動者は、フィールドの自然との関係についての認識を豊かにすることで、継続的に活動に取り組んでいる。すなわち、継続的な活動者にとって、鳩ノ巣フィールドの活動は、森林の健全育成の責任を果たすために組織されたトップダウンの活動なのではない。むしろ、規則の共有を契機として、活動者の見いだす多元的な価値を相互に共有しながら、活動をつうじたフィールドの自然との関係についての認識を豊かにすることのできる活動なのである。その積み重ねが、結果として、森林の健全育成の責任を果たすことにつながっている。

活動者は、「鳩ノ巣流」の作業方法を媒介に、活動におけるふるまいに習熟するとともに、他の活動者やフィールドとの相互作用をつうじて自身の関心とは異なる認識に出会うことで、森林との関係についての認識という点でも習熟してゆく。活動者は、ふるまいの水準と認識の水準の双方で、活動者間で相互に関心の幅を広げ、フィールドの自然との関係についてのふるまいかたと認識を豊かにしていっているのである。

6 おわりに

本章は、過少利用状態にある森林資源システムの維持・管理に取り組む都市住民の活動の持続可能性がいかにして担保されうるのかを、鳩ノ巣フィールドを事例に取り上げて明

³⁵ H14 さんへの聞き取り。

らかにしてきた。

不特定多数の都市住民の参加の任意性を重視する鳩ノ巣フィールドでは、「鳩ノ巣流」の作業方法を持ちいるという規則が、活動体の水準で森林の健全育成の責任を担いつつ、個別の活動者の水準で関与の度合いを自由に決められるという活動を展開する鍵となっていた。活動者にとっては、ふるまいの水準で作業方法をおなじくして活動に取り組むことで活動体の有する森林の健全育成の責任を果たしつつ、認識の水準では、その責任を後景において、個別の関心にもとづいてフィールドの自然との関係に目を向けて活動に取り組んだり、他の活動者の関心にふれて関心の幅を広げていったりすることができる。そして、こうした活動のしくみをもつ鳩ノ巣フィールドにおいて、1回かぎりの活動参加者は、継続的な活動参加者の活動の基盤のうえに立つフリーライダーとしてではなく、継続的な活動参加者にたいして活動のもつあらたな価値をもたらしうる存在として歓迎されることとなる。鳩ノ巣フィールドはこうしたしくみを活動の展開のなかで形成することで、メンバーの入れ替わりを織り込み、特定のメンバーがかかわりうる期間を超えて、都市住民が継続的にフィールドを利用・管理していく可能性を担保している。

付言しておけば、こうしたしくみが活動の継続性を担保することは、活動開始当初から活動者に実感されていたわけではない。不特定多数の都市住民がフィールドの維持・管理を継続的に担いうることは、活動の試行錯誤の過程を経るなかで、次第にリアリティをもつものとして活動者に感じられるようになったものである。

H12 さんによれば、鳩ノ巣フィールドの活動開始当初、手入れの遅れた人工林の整備に取り組むことに主眼をおき、みずからの活動を、林業を支えるための一時的で限定的な活動ととらえていたという³⁶。しかし、活動の進展によってフィールドの手入れが行き届くことで、その活動は、山林所有者や林業者に代わり、ボランティアが主体となって長期的に維持・管理を手がける性格を帯びてきた。また、森林が成長することで、求められる作業内容も次第に高度化するようになる。これにたいして、H12 さんたちは、たとえば伐倒作業時にかけるロープを1種類から2種類に増やすといったかたちで「鳩ノ巣流」の作業方法への部分的な変更をくわえるなど、ボランティアが森林資源システムの維持・管理作業を継続できるような対応を具体化してきた。「鳩ノ巣流」の作業方法は、「プロ」の方法とは異なる独特のやりかたで、都市住民が森林資源システムの維持・管理を担う方法とし

³⁶ 2016 年 1 月 17 日におこなった H12 さんへの聞き取り。

て確立されてきた。

こうした経験を経ることで、H12さんは、「力がなくても、道具を使えばうまくできる」「より安全な手法」という自身の「流儀」がより広い場面でも通用することに気づき、「鳩ノ巣流」の作業方法をもちいることで、都市住民によるボランティアが、森林資源システムを維持・管理する責任を担いうる可能性を感じるようになったのである³⁷。

東京都主催での大自然塾の実施は、当初から5年とかぎられていたが、このようにして鳩ノ巣フィールドの活動者たちは、都市住民を公募するイベントをつうじて、継続的にフィールドの維持・管理の責任を引き受けられることを実感し、主催者を森づくりフォーラムに代えて活動を継続することとなった。

事例から導き出される知見をやや一般化していえば、不特定多数の都市住民による資源システムの維持・管理を構想するにあたっては、排除性を低くして一時的な参加者を不断に動員するしくみを有し、活動者が共有するふるまいの規則の水準で活動の有する責任を担保することで、参加の頻度にかかわらず活動の場を共有できることが重要である。都市住民の活動者は、相互に有する多様な関心を共有し、フィールドの自然と結ぶ関係に目を向けて、その認識についての関心の幅を広げながら活動に取り組むことに、自身の継続的な参加の意義を見いだしているのであり、活動の継続性を担保する共同性は、活動に取り組むただなかに見いだされるものである。

この点は、比較的固定的な利用者や管理者を想定する既存のコモンズ論では看過されていた点だが、都市住民が農山村住民と協働するタイプのコモンズを論じるにあたっても重要な論点なのではないか。

³⁷ ただし、こうしたことがいえるのは、鳩ノ巣フィールドの活動が現在までのところ、保育作業にとどまっていて、主伐や材の搬出を手がけていないためであることには留意しなくてはならない。そうした作業段階になれば、求められる技能はさらに高度化し、ボランティアの力だけでは手がけることができないという判断がなされる可能性はじゅうぶんにある。そのためこの点については、今後の展開を追うなかで、さらに検討される必要がある。

第6章 森林ボランティア活動における社会的意義の語られかた ——都市住民が形成するコモンズとしての鳩ノ巣フィールド

1 はじめに

森林ボランティア活動研究は従来、活動の社会的意義を中心に検討してきた。しかし、果たして現に活動に取り組む活動者はそれをどれほど意識しているのだろうか。こうした関心から、本章は、都市住民がどのように森林ボランティア活動に取り組んでいるのかを、鳩ノ巣フィールドの活動者による、活動の意義の語りかたを手がかりに検討する。

前章では、作業方法の統一というふるまいの水準で共有される明示的な規則を取り上げたが、本章で取り上げるのは、活動をめぐる語りの「型」という認識の水準で共有される非明示的な規則である。具体的には、社会的意義から距離をはかるようにして自身が活動に取り組む意味を語るという語りの「型」である。鳩ノ巣フィールドの活動者は、社会的意義というかたちで向けられる外部の社会からのまなざしとどのように折り合い、自身が活動に取り組むことの意味づけをしているのだろうか。

1.1 森林ボランティア活動研究の動向

都市住民を主要な担い手とする森林ボランティア活動の主要な既存研究領域のひとつは、主として森林政策学者による、都市から農山村までを含んだ広域の森林や自然資源管理を念頭におき、森林ボランティア活動の社会的意義や可能性をとらえる議論である。第4章でもみたように、活動に参加する都市住民は、当初林業者に代わる森林管理の作業主体あるいは労働力の担い手と期待されたが（重松敏則 1990, 1991, 1992; 中川重年 1996）、のちに地域住民と協働して森林管理に参加する、新しい市民活動の担い手として果たす役割に力点をおかれて議論が展開されるようになった（柿澤宏昭 1996, 2001; 山本信次編 2003; 柿澤ほか 2006）。

議論の背景には、森林ボランティア活動の直接の手入れによる森林の維持・管理は、日本の森林全体の自然資源管理という水準からみるとわずかな範囲でしか役割を果たせず限

定的だという認識がある。活動を森林管理の「安価な労働力」の担い手とみるまなざしへの強い警戒感もある（山本編 2003）。森林ボランティア活動の思想的な課題は、森林の荒廃の背景にある、戦後の都市型社会への急激な移行による農山村と都市との関係のひずみの是正にあり、その課題に取り組む具体的な方法は、農山村住民のローカルな世界の固有のまなざしを共有して、林業従事者や農山村住民が森林とかかわりをもちつづけることに寄与する実践である（内山節 2003）。

これらの既存研究は、森林や農山村の抱える問題についてのまなざしを当該地域の住民と共有してその課題解決に貢献する市民社会論的な市民を、活動者のモデルとしてきた。そして、広域の森林・自然資源管理という問題系における森林ボランティア活動の社会的意義を評価するために、主として活動者の集合的行為の作用に注目する視角をもつ¹。

しかしながら、広域の自然資源管理ではなく、現に森林ボランティア活動がおこなわれるかぎられた範囲のフィールドの管理に照準して、個別の活動者の認識に目を向けてみると、その取り組みかたは、必ずしも活動をつうじた他のアクターや社会全体への貢献というモデルに適合的ではないことがわかる²。たとえば、環境社会学者の松村正治（2007, 2009）は、都市近郊の雑木林での里山ボランティア活動を対象に、個別の活動者の参加動機が、社会的意義とのかかわりにかぎらず多様であることを明らかにしている。松村は、多様な考えをもって活動に取り組む個別の活動者の認識を評価する立場をとり、その取り組みを「人と里山との関係を豊かに描き直そうとする運動」（松村 2007: 152-3）ととらえている。活動をつうじた他のアクターや社会との関係における貢献としてではなく、活動者自身が目の前の環境との関係で共生のありかたを模索する方策として、森林ボランティア活動を評

¹ 森林ボランティア活動が林家に与える影響を明らかにする嶋田俊平（2003, 2005）や、市民と研究者による森林調査「森の健康診断」を、山仕事の愉しさと森林整備の必要性を「素人山主」と都市住民に伝え、林業労働の条件改善を世論に訴えるあらたな森林ボランティア活動の一形態として評価する丹羽健司（2006）も、同様の視角をもつ既存研究に挙げられる。

² 市民社会論的視角から評価される活動に参加する人びとが、必ずしも市民社会論的なメンタリティを有するわけではないという問題意識は、環境社会学の既存研究にもみられる（たとえば荒川康 2002）。

価しているのである³。

個別の活動者の認識に注目し、活動者が目の前の自然と結ぶ関係に焦点をあてて活動を評価する松村の議論は、活動者の視点から活動の社会的意義とのかかわりをとらえようとする本章に重要な示唆を与える。ただし、この議論の延長で、森林ボランティア活動のとりべき実践的な森林管理の方法として松村が提案する、順応的管理モデルには疑問が残る。それは、活動者がみずからめざす里山との関係性について目標を立てて結果を評価するというものだが、活動体の水準でどのように活動を維持し、森林管理をしていくかについても、モデルの提示ではなく、具体的な活動の実践を事例として明らかにできることがあるのではないか。また、それにあたっては、活動において個別の活動者の認識と行為、そして活動の社会的意義との関係が現にどのようなものであるかを問うことができるのではないか。

ボランティア活動の既存研究に目を転じれば、小野奈々（2003）が活動体の水準で設定される理念と活動者との関係を論じている。小野は、緊急性・柔軟性が強く求められる国際的な NPO/NGO を事例に、組織理念が単純化された形で発動された形態である「単純化されたイデオロギー」の機能を分析している。「単純化されたイデオロギー」には、イデオロギーの厳密度の低さゆえに、個人の裁量権・判断権を確保させ、活動者自身の価値観や使命感を結びつけて判断させる側面があり、組織の官僚制化や経営体化といった運動の制度化（寺田良一 1998）の負の側面にたいして、現場に即応した創造性を発揮させる機能があることを明らかにしている（小野 2003: 110）。

小野の議論は、活動体の理念にたいする活動者の解釈と、その解釈が活動体にもたらす効果の双方をとらえて分析を展開しており、本章の議論の展開にあたって示唆に富む。本章が扱う事例は、小野の取り上げた事例とは性質が異なり、活動体の掲げる理念は達成されるべき目標とされているわけではない。また、活動者は、そうした理念から距離をはかるようにして、自身の活動への取り組みを語っている。しかし、本章では、そのような活

³ 活動者の多様な参加動機に目を向け、活動の道具的機能に対置される表出的機能の側面に注目して活動体の運営のようすを明らかにする既存研究は、ボランティア活動研究にもみられる（西浦功 1997・小野奈々 2008）。なお、同様の問題意識をもつ栗本修滋（2004）は、森林ボランティア活動を対象に、場所の共同を基盤とした道具的共同と表出的共同という重層的な共同性が、活動の継続性に寄与することを指摘している。

動体のありかたを、活動者の裁量権を確保し、かれらにとって意味ある活動を形成する別の組織化のありかたととらえ、小野の視角を援用して分析をすすめる。具体的には、①活動者は、活動の社会的意義との関係を意識しつつも、活動で相対する目の自然との関係をより重視して自身にとっての活動のもつ意味を語り、②活動体の水準の理念の設定は、個別の活動者の動機づけを考慮に入れながらなされるという、ふたつの調整のプロセスに着目して検討をすすめる。

1.2 過少利用資源の継続的な利用のしくみへの注目

ところで、第5章でもみたように、都市住民による森林ボランティア活動は、森林資源の過少利用という、近年の日本の森林資源管理の問題を回避する、適切な利用の方策のひとつと位置づけられる(山本 2014)。これを踏まえていえば、活動体の水準で森林ボランティア活動がどのように継続的に展開しているのかを明らかにすることは、過少利用資源がどのようにすれば共同利用されうるのかの検討につながる。

コモンズ論に引きつけていえば、過少利用状態にある日本の森林資源管理の現状は、M. Heller (1988) のいう「アンチ・コモンズの悲劇」の状態にある。アンチ・コモンズの悲劇とは、稀少資源にたいする排他的権利が過剰に分割化・細分化された結果、だれひとり効率的な利用をはかれず、資源の過少利用状態に陥ってしまうことを指す(Heller 1998; 高村学人 2014)。そこでは、資源の排除性の過剰な高まりによる過少利用と効用の低下が問題となるため、その解消には、権利の集約化などによって資源の排除性を低くして、利用をうながすことが求められる。

資源をめぐる制度的な権利に注目する Heller の立論からいえば、アンチ・コモンズの悲劇の解消の条件は、所有権に注目し、資源にたいする権利の集約化をはかることである。林野庁は現に、2012年に導入された森林経営計画制度にみられるように、零細な所有規模の私有林における効率的な施業の困難を課題に挙げ、施業の集約化を推進している(林野庁 2017: 102-4)。

しかしながら、相互作用水準の権利と規則に照準し、メンバーシップの限定と利用規則によって各人の協調行動を生み出して持続的な利用・管理をはかる共的管理のメカニズムを明らかにしてきた、既存のコモンズ論の知見を踏まえれば(E. Ostrom 1990; 室田武・三俣学 2004; 高村 2012)、アンチ・コモンズの悲劇の解消に向けた方策を検討するにあ

たっても、資源のあらたな利用・管理や活動の維持のために成員間の相互作用の過程で共有される、利用規則に注目することができるのではないか。いいかえれば、排除性を低くして利用をうながすことによる資源の過少利用状態の解消は、権利の集約化に照準して利用しやすい状態をつくる方策とは別に、利用されつづけるしくみの形成という水準に照準することで見いだされる方策があるのではないか⁴。

こうした関心から本章では、社会的意義づけとの関連で、多様な関心をもつ活動者による森林ボランティア活動がどのように組織され、継続的に活動を展開しているかに注目する。前項との関連でいえば、本章は、都市住民の集合的行為の作用や認識を取り出して評価するのではなく、ごくかぎられた範囲で森林ボランティアが継続的に森林管理主体でありつづけることを評価する立場をとり、それを可能にするしくみを明らかにする。

具体的には、冒頭でも述べたように、本章は、事例に取り上げる鳩ノ巣フィールドにおいて、活動者自身が社会的意義を語ることをあたかも避けているように映ることに目を向ける。活動者の語りで代わって注目されるのは、自身の森林との関係に関心を向ける語りである（2節）。本章は、こうした活動の語りの「型」を、活動を維持してゆくために共有される非明示的な規則ととらえて考察をすすめる。この語りの「型」は、参加障壁を低くする運営のしくみと相俟って、社会的意義にかぎらず多様な関心をもつ人びとの参加を容易にする効果をもつ。これによって、所有権上は私有林地にすぎない鳩ノ巣フィールドは、活動者に共有される認識のうえで、広く都市住民に開かれたコモンズとしての性格づけがなされている（3節）。また、活動者自身がみずからの経験にもとづく内在的な意味づけによって活動を語れるようになることは、メンバーシップによる拘束のない鳩ノ巣フィールドの活動において、継続的に活動に参加する契機となっている（4節）。すなわち、鳩ノ巣フィールドの活動は、社会的意義から距離をはかつて活動を語るという「型」を共有し、活動者が活動で直面する自然との関係にもとづいて内在的な意味づけを個別に語ることの

⁴ 既存の森林ボランティア活動研究は、地域社会や流域社会といった広域の範囲を指してコモンズ概念を援用することで、都市住民を議論の射程におさめて議論を展開している（山本 2014；三井昭二 1997）。これにたいして本章は、資源の過少利用が課題となるフィールドでは、利用規則が資源の排除性を低くして利用をうながす協調行動を生みだしようとみて、コモンズ概念を援用する。それによって、特定の小規模の範囲における都市住民による森林の利用・管理を対象とした議論をすすめる。

できる環境を整えることで、都市住民を主体とした継続的なフィールドの利用・管理をこれまでおこなってきたことを、本章は明らかにする。

2 鳩ノ巣フィールドにおける活動の語られかた

鳩ノ巣フィールドは、いま一度確認しておけば、東京都西多摩郡奥多摩町に位置する、人工林地や伐採跡地からなる約 8ha の私有林地である。2002 年の活動開始以来、管理放棄されて過少利用による劣化・変容の危機にあった林地を、町外在住の所有者と協定を締結した都市住民が共同で利用・管理している。活動の柱は、定員 30 名の一般参加者を募る毎月開催の定例イベント「多摩の森・大自然塾 奥多摩・鳩ノ巣フィールド」での、手道具を使った森林ボランティア体験活動である。定例イベントに応募した参加者は毎回 5 名前後の班にわかれて、スタッフとして登録された活動者の指導のもと、間伐、枝打ち、道づくり、下刈り、植栽といった、ときどきに必要な森林の保育作業を手がける。参加者はそのほとんどが、1〜3 時間かけてフィールドにやってくる東京都、神奈川県、埼玉県などに住む都市住民である（表 6.1）。運営管理にかんする決定は、有志のスタッフが出席して毎月開催される「鳩ノ巣連絡協議会」でおこなわれてきた。

鳩ノ巣フィールドの活動者に話を聞いていて気づくのは、かれらが、自然保護や環境問題といった社会的意義をもつ実践という解釈から距離をとったかたちで、自身の取り組みを語ろうとしていることである。それは、個人の水準での動機の語りかたについても、活動体水準での理念のとらえかたについてもみられる。

表 6.1 鳩ノ巣フィールド（大自然塾）活動参加者の居住地（2016 年度）

居住地	人数	比率 (%)
東京都 特別区	64	41.8
その他多摩地域	35	22.9
西多摩地域	12	7.8
神奈川県	14	9.2
埼玉県	10	6.5
千葉県	4	2.6
茨城県	3	2.0
秋田県	2	1.3
不明	9	5.9
合計	153	100

註：ここで「西多摩地域」とは、青梅市・あきる野市・福生市・羽村市・瑞穂町・日の出町・奥多摩町・檜原村・八王子市を指し、「その他多摩地域」とは、特別区と西多摩地域、島嶼部をのぞく東京都の市町村を指す。なお、居住地が奥多摩町の参加者はいなかった。
出典：筆者作成

2.1 個人の水準における活動の語られかた

定年退職後の 2007 年に活動に参加するようになった H27 さんは、活動参加の動機として、それまでの長年にわたる山登りの経験のなかで、「荒れてる森の状況を勉強してみようとか、なにかできることがあればやってみたいなと」思うようになったことを挙げる。しかし、「いままでやってきたことの延長」として活動に参加していると語ることで、自身の取り組みが自然保護や環境問題への関心にもとづくという見かたから距離をとろうとしている。

命題というか、大きな課題を意識してこういう活動に参加したんではないんですよ。自然保護だ、環境なんかだ。それを意識してそっから入ったんじゃないくて、まあなんとなくいままでやってきたことの延長で気になってたことから足を踏み入れた

っというか。⁵

2014年から活動に参加するH17さんも、自身が自然とのかかわりをもつことに重きをおいていると語り、それを「ふつうのひととちがうかもしれない」と評す。H17さんはそれによって、活動をつうじて他者に貢献するという意味での森林ボランティアをやるために鳩ノ巣フィールドにやってきたという見かたを避けようとしている。

森林ボランティアをやろうと思って入ったわけじゃないんですよね。自然とかかわってたいみたいな感じですかね。ちょっとだからふつうのひととちがうのかもしれない。⁶

このように、鳩ノ巣フィールドの活動者は、自然保護や環境問題といった社会的意義をもつ実践という解釈から距離をとって活動を語ろうとしている。代わりに語られるのは、自身が森林や自然とかかわって関係を結ぶことへの関心である。双方は、一貫したものでなく、切り離されたものとして理解され、語られている。

2.2 活動体の水準における活動の理念の位置づけ

鳩ノ巣フィールドの活動の理念は、2003年5月に鳩ノ巣連絡協議会で定められた「長期ビジョン」にみられる。それは、「委託された現在の鳩ノ巣・棚沢地区の森を『豊かな美しい森＝多様性のある森』として創出し、奥多摩町の活性化に寄与すること」である（図6.1）。活動の「5か年計画」や「年間計画」は、この長期ビジョンをもとに、計画時点でのフィールドの状況を勘案して策定され、所有者や協賛団体⁷に活動報告がなされている（図

⁵ H27さんは70代男性で、2007年より活動に参加している。聞き取りは2015年6月17日におこなった。なお、年齢は聞き取り時。以下おなじ。

⁶ H17さんは50代女性で、2014年より活動に参加している。現在は定例イベントでスタッフを務めている。聞き取りは2016年7月15日におこなった。

⁷ 協賛団体は「コープみらい」（2008年度から、2012年度までは「コープとうきょう」と「BESS フォレストクラブ」（2012年度から）の2団体である。

6.2). 定例イベントの活動内容も、これらの計画にもとづいて定められている。

大自然塾「鳩ノ巣フィールド」第一次五ヵ年活動計画

【はじめに】

平成 14 年秋にスタートした大自然塾「鳩ノ巣フィールド」の森林再生活動は 15 年 3 月の第一回植樹祭を経て、以下の「第一次五ヵ年活動計画」をベースに、平成 15 年 4 月より、東京都の大自然塾事業として本格的な始動に入った。

【鳩ノ巣フィールド森林再生活動の運営体制と長期活動方針】

大自然塾・事務局である NPO 法人「森づくりフォーラム」の指導により、平成 15 年 5 月に関連団体 4 グループによる運営管理機関「鳩ノ巣連絡協議会」を発足させ、鳩ノ巣フィールドの「長期ビジョン」「フィールド及び活動のあるべき姿」「将来像」を定め、これをもとに「第一次五ヵ年計画」作成し、以後の活動はこれを軸として展開した。

【鳩ノ巣連絡協議会】

- ◇関連団体:発足時は4団体による運営だったが、平成 16 年度より樹恩ネットワーク・森林インストラクター東京会の 2 団体の運営となる。
- ◇運営方法:座長と事務局を置き、月 1 回の定例会における協議決定により運営する。定例会参加者は任意とする。
- ◇活動内容:月 1 回の「大自然塾」イベントの運営を柱とし、長期ビジョンのもとでの活動計画を実行する。

【活動方針】

- ◇長期ビジョンを始めとする活動方針を以下とする。 *2003.5.12 作成
 - 長期ビジョン
委託された現在の鳩ノ巣・棚沢地区の森を「豊かな美しい森＝多様性のある森」として創出し、奥多摩町の活性化に寄与することで、東京都「大自然塾」活動のモデル・フィールドとする。
 - フィールドのあるべき姿
“多様性”をキーワードとし、将来の森の“姿”として以下を目指すものとする。
 - ①生物の多様性 ②資源の多様性 ③森林形態の多様性
 - 活動のあるべき姿
“多様性”をキーワードとし、市民ボランティアを含む多くの協力者とともに、以下を活動のあるべき“姿”として展開する。
 - ①活動メニューの多様性 ②森林施業の多様性 ③参加者の多様性
 - フィールドの現状と目指す将来の姿

フィールド	平成 14 年(2002 年)の状況	将来の姿
①	2000 年に皆伐した跡地	落葉広葉樹林
②	1999 年に皆伐した跡地 2003 年 3 月、中間部にスギ・ヒノキを植栽	上部:落葉広葉樹
		中間:スギ・ヒノキの針葉樹林
		下部:花咲く樹木林
	1994 年に皆伐した跡地	天然更新による二次林

図 6.1 第一次五ヵ年活動計画に示される「長期ビジョン」

出典：鳩ノ巣連絡協議会（2003）

2016 年度 大自然塾「鳩ノ巣フィールド」活動計画

—鳩ノ巣連絡協議会—

【はじめに】

2002 年秋から始めて 14 年目に入った。「市民が主体の 100 年の森づくり」を将来に繋いでいくことを目指し、市民ボランティア・スタッフ・地元住民・山林所有者・協賛団体の協力とともに展開している。第三次五ヵ年計画を策定・推進し、今年はその 4 年目になる。2016 年度の計画は以下の通りである。

【2016 年度活動計画】

1. 活動方針

「運営体制の強化と次世代に向けた人材発掘と育成」

2. 活動の基本内容

(1) 多摩の森・大自然塾

月 1 回の「多摩の森・大自然塾」イベント(主催:森づくりフォーラム、事務局:JUON NETWORK、協賛:コープみらい、BESS フォレストクラブ)の運営をイベント運営委員会のもと、サポートし、中長期ビジョンのもとでの活動計画を実行する。

(2) 鳩ノ巣連絡協議会

月例の「鳩ノ巣連絡協議会」を開催し、定例のイベント運営の内容及び中長期ビジョンとの整合を図る。体制については、関連団体からの新たな人材登用を含め、他団体及び個人参加ボランティアとの交流を促進し、イベント運営体制の強化を図る。

(3) 安全管理

イベントでは安全担当を置く。また、定例イベントだけでなく、自主活動での安全管理体制の徹底と強化を図る。また、安全管理の講座・実習を適宜実施する。

(4) 調査活動

常に調査を行い管理し、その結果を記録する。記録した調査を鳩ノ巣のフィールド活動に活用する。

(5) 関連団体自主活動

「森林インストラクター東京会」「樹恵ネットワーク」「作業部会」は定例イベントとは別に、自主活動日と設け、目標とする作業計画の達成に努める。

◇活動日:毎月第1日曜日 作業部会活動

※ 第2土曜日 樹恵ネットワーク定例活動

※ 第2日曜日 森林インストラクター東京会自主活動

(6) 地元住民との交流

地元住民との各種活動を通じた交流を促進するとともに、地元における林業文化の伝承や新たな林業事業化の方向を共に、考える基盤を作る。

(7) ワサビ栽培活動

近隣の使われなくなったワサビ田を地元の清水さんから提供を受け、一昨年度まで別で行われたが、ブ

2016 年度 大自然塾「鳩ノ巣フィールド」活動報告

—鳩ノ巣連絡協議会—

【はじめに】

2002 年秋からスタートした活動は、14 年目に入った。「市民が主体の 100 年の森づくり」を将来に繋いでいくことを目指し、市民ボランティア、スタッフ、地元住民、山林所有者、東京都環境局、コープみらい、BESS フォレストクラブ、かんぽ生命保険、林野庁(森林・山村多面的機能発揮対策交付金)等の協力のもと、展開している。なお、本年度は第三次五ヵ年計画の 4 年目であった。以下は 2016 年度の計画に対する報告である。

【2016 年度活動報告】

1. 活動方針

「運営体制の強化と次世代に向けた人材発掘と育成」

2. 活動の基本内容

(1) 多摩の森・大自然塾

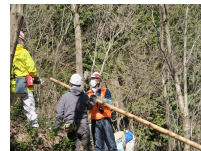
毎月第3日曜日開催の「多摩の森・大自然塾」イベント(主催:森づくりフォーラム、事務局:JUON NETWORK、協賛:コープみらい、BESS フォレストクラブ)の運営をイベント運営委員会のもと、サポートし、中長期ビジョンのもとでの活動計画を実行する。

—[実績]—

2016 年 4 月～2017 年 3 月において 12 回の定例イベントを実施したが、延べ 510 名の参加ボランティア(スタッフ含む)に対して、森林再生の意義と必要性を伝えるとともに、年間計画のもとで各フィールドの作業を行った。今年度のトピックスとしては、学生など多くの若者が参加したことが挙げられる。また、きのこの駒打ちや、柴薪集材など、様々な作業を行うことができた。なお、「多摩の森・大自然塾」イベント実績は別紙資料 1 になる。



4 月 17 日きのこの駒打ち作業の様子



2 月 19 日柴薪集材作業の様子

図 6.2 2016 年度大自然塾「鳩ノ巣フィールド」活動計画・活動報告

出典：鳩ノ巣連絡協議会（2016, 2017）

しかしながら、そこに示される活動体のもつ理念は、活動者に積極的に共有されるべきものとは位置づけられていない。活動開始当初から鳩ノ巣フィールドでの活動に参加し、イベント時の指導責任者や鳩ノ巣連絡協議会の座長を長く務めた H14 さんがいうように、それは、活動者が有する多様な関心を「最大公約数」的にとらえるものと考えられている。

組織があつて個人があるんじゃないんだ。ひとりひとりがそういう自覚した人たちがいて……お互いやっていることを共有する、確認する場……基本的な、どっちを向こうかなというようなことを方向づけするようなものが、たとえば鳩〔ノ巣連絡〕協議会〕みたいなものかもしれないね。だから、それをがんじがらめに、ぎすぎすしたものじゃなくて、計画だっけっこうおおざっぱじゃない。⁸

⁸ H14 さんは 60 代男性で、2002 年の活動開始当初より活動に参加している。聞き取りは 2015 年 5 月 17 日におこなった。

H14 さんが示すのは、活動体のもつ理念や計画には、個々の活動者による解釈の余地がじゅうぶんであり、活動体の理念を実現するために、活動者が集まっているわけではないという見かたである。H14 さんは、多様性や継続性、計画性を、活動者に共有されるべき「大事にすること」に挙げているが、それは、解釈に幅のある、継続的な活動展開にあたっての基本的な方向性を示す組織運営上の原則であり、環境問題にたいする実践としての目標とは異なる。H14 さんは、活動に先だってそのもつ社会的意義を議論することよりも、実際に動いて活動に取り組むことにこそ意味を見いだしている。

たとえば、そういう〔活動の意義についての〕議論をするのであれば、最大公約数みたいなものをそこで見つけて、それをやるんだと……そこからみんなでそこで見つけたことを、上手に軌道修正するなり、広げていくなりすれば動くんだよね。動かなきゃ、議論したってなんの意味もないんだよ。⁹

2003 年から活動に参加し、長くスタッフとして活動に取り組む H15 さんもまた、「100 年先を見据え」た森づくりを謳って計画を立てるという鳩ノ巣フィールドの方針について、それは現に活動にかかわっている人びとにとってのイメージに過ぎず、将来実際にどうするのかは、そのときどきにかかわる人びとが考えればよいという見かたを示している。H15 さんもまた、計画には個々の活動者による解釈の余地がじゅうぶんあることを強調している。

いいんだよ。どうなっても、それはそのときそのときのさ、手を考えればいいんだよ。われわれは「100 年先」っていつてるけどさ、それはあくまでもわれわれの妄想というかさ、イメージであってさ。そのときそのときのひとたちが考えればいいわけで……そういうひとたちがさ、楽しむスペースみたいなのを残しといたほうがいいし。

10

⁹ H14 さんへの聞き取り。

¹⁰ H15 さんは 50 代男性で、2003 年より活動に参加している。聞き取りは 2016 年 5 月 25 日におこなった。

このように、鳩ノ巣フィールドの活動は、個人の水準では自然保護や環境問題といった社会的意義をもつ実践という解釈から距離をはかって切り離されたものとして語られ、活動体の水準でも、活動体が掲げる理念や計画には、個別の活動者にとっての解釈の余地がじゅうぶんにあることが強調されている。ではなぜ、鳩ノ巣フィールドではこのように、社会的意義をもつ実践という解釈や活動体の掲げる理念にたいする実践という解釈とは距離をはかるかたちで、活動が語られようとしているのだろうか。次節では、鳩ノ巣フィールドの運営のしくみから、この点を明らかにする。

3 鳩ノ巣フィールドの運営のしくみ

3.1 都市住民にとっての参加のしやすさを重視した活動体の構成

鳩ノ巣フィールドは、先に述べたように、一般参加者を公募する毎月開催の定例イベントを活動の柱として、フィールドの維持・管理をおこなってきた。第5章でもみたように、このような運営のしくみがとられたのは、鳩ノ巣フィールドが、東京都産業労働局主催事業「多摩の森・大自然塾」で森林ボランティア体験講座を実施するにあたって、あらたに設けられたフィールドであることに由来する¹¹。多摩の森・大自然塾事業の目的は、青少年や都民の参加によって東京の森林を守る「都民参加の森林づくり」にあったことから（森づくりフォーラム 2003）、この事業の一環として定例イベントを開催することとなった鳩ノ巣フィールドでは、設置・運営にあたって、事前に活動経験のない都市住民にとっての参加のしやすさが重視されることとなった¹²。

その特徴の第一は、フィールドの立地にある。鳩ノ巣フィールドが森林ボランティア体験講座を実施するフィールドとして選ばれた理由のひとつは、JR 青梅線鳩ノ巣駅から徒

¹¹ 第5章註4参照。

¹² 第5章でもみたように、鳩ノ巣フィールドの活動には毎回平均5.9人の初参加者が参加し（第5章表5.8）、年間でみれば参加者のおよそ6割を初参加者が占めている（第5章表5.9）。

歩 10 分という、活動者にとっての交通の便のよさである（図 6.3）¹³。それは、他のフィールドと比べたときの鳩ノ巣フィールドの特異な点であり、現在に至るまで活動者にとっての利点と認識されている¹⁴。



図 6.3 鳩ノ巣フィールド周辺 MAP

出典：JUON NETWORK（2012）

特徴の第二は、メンバーシップをかぎらずに参加者を募り、「あらゆるひとたちがいつでも参加できる¹⁵」と標榜していることである。活動体の水準で強調されるのは、鳩ノ巣フィ

¹³ F38 さんへの聞き取り。F38 さんは 30 代男性で、森づくりフォーラムで大自然塾事業の担当をした経験をもつ。聞き取りは 2014 年 10 月 17 日におこなった。

¹⁴ H15 さんは、鳩ノ巣フィールドでの活動を他のフィールドではみられない「駅前作業」と呼び、一般参加者を募って活動をするにあたっての大きなメリットだと述べている（H15 さんへの聞き取り）。

¹⁵ H11 さんへの聞き取り。H11 さんは 70 代男性で、鳩ノ巣フィールドの活動に当初より

ールドの活動は会員制をとらず、会則もなく入会金や会費もないということである¹⁶。定例イベントは、事前の申し込みと参加費の支払いをすればだれもが参加できるしくみとなっており、各回の活動者は、参加するか否かを個別の都市住民がその都度選択した結果として定まる。すなわち、鳩ノ巣フィールドの活動は、1 回ごとの定例イベント・協議会の積み重ねによって成り立っているものと認識されていて、活動体はつねに一時的で流動的なもので、特定のメンバーによるものではないとみなされている。

もちろん現実的には、定例イベントで一般参加者に指導するスタッフや鳩ノ巣連絡協議会に出席するスタッフの多くは、フィールドを利用する運営団体の「森林インストラクター東京会」や認定 NPO 法人「JUON NETWORK」のメンバーである。また、所有者との協定締結者や定例イベントの主催者は、NPO 法人「森づくりフォーラム」である¹⁷。さらに、毎回の定例イベントの具体的な作業内容は、当日の指導責任者を中心とした鳩ノ巣連絡協議会での協議で定まり、定例イベントの参加者は、スタッフの指導のもと割り当てられた作業に取り組む。そのため一見、フィールドの運営の担い手は、これらの団体の所属メンバーや、鳩ノ巣連絡協議会であるように思える。

しかしそれにもかかわらず、先に H14 さんが述べていたように、鳩ノ巣フィールドの活動はあくまでも有志の個人が集まることで成り立っていると活動者には認識されており、鳩ノ巣連絡協議会はいくまでお互いやっていることを共有・確認する場とされている。活動者とフィールドとの関係において、活動体の存在は後景化されようとしている¹⁸。

3.2 一時的な集まりとして活動体を構成することが導く都市住民の継続的な活動参加

かわり、長く統括責任者を務めている。聞き取りは 2013 年 6 月 7 日におこなった。

¹⁶ H11 さんへの聞き取り。

¹⁷ 定例イベントの主催者は、多摩の森・大自然塾事業の枠組みでおこなわれていた 2007 年 3 月までは東京都だったが、2008 年 4 月から森づくりフォーラムに代わった。

¹⁸ 他方で、活動中に事故が起きたばあいには、このような役職を担う人びとや定例イベントのスタッフがその責任を負う可能性も認識されている（H11 さんへの聞き取り）。かれらは、そうした事態によって活動体の存在やスタッフの責任が前景化することのないよう、活動中の安全管理を徹底している。第 5 章 4.1，註 23 参照。

このような鳩ノ巣フィールドの活動体の構成は、具体的な活動の場面において、活動者に活動への強いコミットを求めないことを意味する。そのような活動体の構成は、H17さんがいうように、都市住民にとっての参加のしやすさにつながっている側面がある。

大自然塾もすごくいいなと思ったのは、すごくしつこく誘ったりしないじゃないですか。「つき絶対きてください」とか……そういうのがないっていうか、さらっとしてるじゃないですか……自分たちでかたまってる、「よそ者がきた」みたいな感じだときにくいじゃないですか、なんか、そういうのがほとんどないので、すごくきやすかったです……あんまりみんな、いろんなこと聞かないけども、みんな親切に教えてくれたりとか、すごく雰囲気がいいなあと思いました。¹⁹

それは、地域の「よそ者」であり、流動性が高く凝集性の低い都市住民が、鳩ノ巣フィールドの利用・管理を、「ヘルメットしてるときだけのつきあい」である、一時的な集まりによって継続的に担うためのしくみである。H17さんはつぎのようにも述べている。

作業終わったらすぐ帰るじゃないですか……ヘルメットしてるときだけのつきあいじゃないけど、そんな感じもするっていうか……ヘルメットはみんな名前がついてるけど、とっちゃうともうわからなくなっちゃうみたいな……都会のいっぱいひとがいるなかで、ヘルメット作業してるときはすごい知り合いだけど、とっちゃうと、雑踏にまぎれてわかんなくなっちゃうみたいな。そんなつきあいでいられるみたいな。²⁰

すなわち、鳩ノ巣フィールドでは、活動の場面において、活動者は名前を見知った人格的な関係を形成し、作業について「親切に教え」あうことで、共同性を発揮して作業に取り組む。しかしながら、作業中でも活動外のことについて「あんまりみんな、いろんなこと聞かない」ことで、その関係と共同性は活動の場かぎりの一時的なものとされ、活動後まで持ち越されない。活動中に築かれる関係性は、活動が終わってヘルメットを「とっちゃうと、雑踏にまぎれてわかんなくなっちゃう」ようなものであり、あくまで都市生活の

¹⁹ H17 さんへの聞き取り。

²⁰ H17 さんへの聞き取り。

匿名的な関係性のなかでの、一時的な集まりとして、活動中の関係は形成されているのである（図 6.4）。



図 6.4 定例イベントの集合写真

出典：JUON NETWORK 提供

こうした形態をとる鳩ノ巣フィールドの活動は、つねに「よそ者」どうしの一時的な集まりとして展開される。それには、参加にあたってメンバーシップを得るプロセスを介在させないために、活動への新規参入者にとっての参加障壁を低くする効果がある。鳩ノ巣フィールドの活動へのアクセス権は、現に活動に取り組む活動者にかぎらず、広く都市住民に開かれている。

活動者どうしの共同性を手がかりとした凝集性を高めるのではなく、むしろ、共同性が内包しうる拘束力を限定的なものとするのは、都市住民の継続的な活動者を得ることにもつながっている。毎回の活動に容易に参加し、容易に離脱することができるからこそ、活動参加をめぐる負荷を感じることなく、活動者は各回の活動に参加するかどうかを自発

的な意志にもとづいて選ぶことができるのである。その「さらっとした」関係の気軽さが、継続的な活動者を得ることにつながっている²¹。H15さんは、都市住民が自分のライフスタイルにあわせて気軽に参加できることを、鳩ノ巣フィールドの運営のしくみの特徴に挙げている。

いまの形態を維持するのは、すごくたいへんだと思うんだけど、そのぶん誇れるっていうかね……毎月こう、募集されて、いけるときだけ、いきたいときだけいけるっていうことは、参加者にとってはすごくいい選択肢。気軽に参加できると、で、気に入れば毎月がんばって……今月だめでも来月いける。自分のライフスタイルにあわせて、なにかができる。というのはとてもいいと思う。ある意味理想的なんだと思うね。いまのやりかたみたいなのは、だからそれはぜひ、継続させていきたいなというのはあるね。²²

鳩ノ巣フィールドではこのようにして、流動性の高い都市住民を主体として、継続的な森林の利用・管理がなされている。

鳩ノ巣フィールドは、2002年の森林ボランティア活動開始後も、所有権上は私有林地で

²¹ こうした活動体の構成は、Z. Bauman (2000=2001) が「クローク型共同体」と呼ぶ共同体の特徴に重なる。固体的近代に対置され、個人化・流動化を特徴とする流体的近代に特徴的な共同体であるクローク型共同体は、「ばらばらな個人の、共通の興味に訴える演目を上演し、一定期間、かれらの関心をつなぎとめ」るもので、そこで「人々の他の関心……は一時的に棚上げされ、後回しにされ、あるいは、完全に放棄される」(Bauman 2000=2001:258)。しかしながら、そこに集まる人びとの「関心はただ集められるだけで、新しい特性を獲得することもなく、演目がつくりだす共通の幻想は、公演の興奮がさめると雲散霧消する」(Bauman 2000=2001: 258)。このような特徴をもつクローク型共同体は、「人間の孤独を永久化する」(Bauman 2000=2001: 260) ものとして Bauman には否定的にとらえられている。しかし、鳩ノ巣フィールドにおいては、「個々の関心を融合し、混ぜあわせ、『集団的関心』に統一するようなことはない」(Bauman 2000=2001:258) ことが、むしろ、肯定的な特徴にとらえられている。

²² H15さんへの聞き取り。

あることに変わりはない。しかしながら、このように活動者に共有される認識のうえで活動へのアクセス権を広く都市住民に開くことで、「あらゆるひとたちがいつでも参加できる」都市住民にとってのあらたなコモンズとして性格づけがなされている。過少利用の状態にあった鳩ノ巣フィールドの森林資源は、現に活動に参加している人びとにかぎらず、広く都市住民にたいしてアクセス権を保障することで、その適正利用がはかられようとしているのである。

こうした運営のしくみを踏まえれば、活動体が掲げる理念や計画に個別の活動者にとっての解釈の余地がじゅうぶんあることが強調されていたり、そもそも活動体が一時的な集まりの蓄積ととらえられていたりすることは、活動体の存在を活動者にたいして前景化させないためのくふうだといえる。それは、いいかえれば、活動者の多様な関心を受けとめて、活動への参加のしやすさを担保しようとするくふうである。活動体の理念やその社会的意義について距離をはかった語りかたの可能性を示すことは、活動の位置づけや解釈を個別の活動者に委ね、その多様な関心にもとづく活動参加を導こうとするものである。

付言しておけば、このような活動体の構成がとられる背景には、継続的にフィールドの自然とかかわるなかで得られた自然にたいする信頼感がある。H15 さんがいうように、活動をつうじたはたらきかけにフィールドの自然がうまく対応してくれると信頼しているからこそ、「目的もちがえば、この山の整備するイメージがちがうひととたくさんいる」ことを許容し、活動者が自身のもつ個別の関心を語ることを歓迎することができている。

やりながら感じたことは、自然っていうのはタフだからさ、われわれがやったら、かってに自分の都合のいいようにする。そんなに脆弱じゃない……けしてその、やりすぎなければ、自然破壊にならない。そんななかでこう、好きなようにやってるんだよ。自然も好きなようにやってるけど、われわれも好きなようにやるよっていうところもあるな。²³

4 活動者が社会的意義との距離を語ることのもつ意味

²³ H15 さんへの聞き取り。

では個人の水準で、自然保護や環境問題といった社会的意義にたいする実践という解釈から距離をはかり、自身の森林や自然とのかかわりへの関心が強調されるのはなぜか。前節の議論を踏まえていえば、それは、活動体の水準で活動目標が前景化されないために、活動者が個別の関心に応じて自由に活動を意味づけられるためである。しかしながら、そのような活動体での活動にあたっては、むしろ、社会的意義をもつ実践として活動を意味づけることがみられてもよいはずである。それにもかかわらず、そうした解釈からは距離をはかろうとする語りがめだつてみられ、あたかもそれが鳩ノ巣フィールドの活動参加にあたって共有される利用規則となっているように映るのはなぜか²⁴。本節ではこの点を、活動者の活動についての語りかたをさらにくわしく検討することである。

鳩ノ巣フィールドでの活動について活動者が具体的に語るのは、自身が作業をつうじてフィールドとかかわることの魅力である。たとえばそれは、作業におけるフィールドの自然との相互作用である。山での「作業そのものがやっぱりおもしろいよね」という H15 さんは、間伐作業を例に、伐倒する木や周囲の状況に応じて、みずから考え「戦略」を立てて作業に取り組むことでフィールドの自然にはたらきかけるプロセスのおもしろさを、具体的な作業の場面を想定しながら語っている（図 6.5）。

作業そのものがやっぱりおもしろいよね。山で作業をするということがね……技術がいるじゃない。間伐なんかさ。戦略とかさ。あれおもしろいよね……戦略で倒すんだという。まずここにいつて〔わざと枝に幹を〕かけて、こっちに〔あらかじめ

²⁴ 筆者がこのように判断するのは、これまで示してきた語りのほかに、聞き取りにおいて活動者が森林ボランティア活動の社会的意義を語ったとしても、それを鳩ノ巣フィールドの活動とは切り離されたものとしてとらえるようすがみられたためである。たとえば H25 さんは、自然との共存を可能にするための実践的方策についての構想を語ったが、「鳩ノ巣はほんとにいいと思うんですよ。〔安全な作業方法を〕勉強するグラウンドとしていいんじゃないかなあと、そこから派生した人たちがなんかあたらしいことを考えていかなきゃいけないんだと思うんですけど」と述べて、みずからの構想を鳩ノ巣フィールドの活動に持ち込むことを考えておらず、切り離してとらえている。

H25 さんは 50 代男性で、2013 年より活動に参加している。聞き取りは 2015 年 2 月 4 日におこなった。

かけてあったロープを] 引っぱってくれと、でこう〔枝がかりをはずして〕やったところでこっちにぐっとう〔牽引ロープを〕引っぱると倒れてくるいう。²⁵



図 6.5 間伐作業でロープを引く作業者のようす

出典：JUON NETWORK 提供

作業をつうじて自然と関係をつくることの魅力は、都市における日常生活との対比によっても語られる。たとえば H17 さんは、日常の生活とは対比的な非日常的な空間で、「頭がからっぽになって」自然に向きあい、作業に取り組めることを、活動の魅力として語っている (図 6.6)。

枝打ちをやったとき、7, 8 本やったのかな。ひとりで、すごい楽しかったのそれ。がーっと切って行って頭が真っ白になって、「いやあ、楽しいな」っていう。すごい楽

²⁵ H15 さんへの聞き取り。

しかったです。頭がからっぽになるっていうか、爽快感があるっていうか。²⁶



図 6.6 枝打ち作業のようす

出典：JUON NETWORK 提供

活動者はこのように、みずから経験した活動のプロセスでフィールドの自然と関係を経ることのなかに見いだされる魅力をとらえ、語っている。内在的な意味づけを見いだすことは、都市住民にとって当初は非日常的なものとして経験された森林ボランティア活動に日常性を見いだすことにつながる。そのようにして、活動をみずからの手になるものとする中で、活動者は、鳩ノ巣フィールドにおいて日常的に継続的に活動に取り組む意味を見いだしている。すなわち、活動をつうじてフィールドの自然と関係をもつことの意義は、活動に先駆けてあるのではない。みずからの経験に根差して発見されるべきものとして立ち現れる。それはたとえば、H27 さんや H14 さんにみられるように、森林での作業

²⁶ H17 さんへの聞き取り。

と都市における日常生活との往還関係のなかで見いだされる、豊かな自然とかかわりをもつ意義として語られる。

ほんと大きく、話の勢いでいえば、文明っていうか、ひとと自然とのかかわりがいろんなところで問われていると、だから、森の作業でもまたちがう、ある側面からそれを見ることになるし……そういう意味で、森の作業をしながら、教えてもらった大事なものの見かたのひとつはやっぱり、長期的なスパンでものをみる。ね、自分のなかにはそれがありますよね……短期的なものの見かただけで、考えられない。もっと大きく、自然とのかかわりのなかで考えないといけないなんて感じています。²⁷

もっと森とかこういうところにくると……自然界の動植物の生きかたとか、そういうものがぼくらに教えてくれているようなものがたくさんあって、いくらぼくたちが、人間が、「おれたちはこうだから」っていったところで、この豊かな自然がなければ生きていけないんだと〔教えてくれるような気がする〕……ぼくたちの生きる源はきっとこういうところにあるんじゃないのなんて思うし。ぼくたち、こういうところに来りゃ、みんな元気でしょう？²⁸

こうした語りは一見、近代化にともなう自然と人間の関係変容という思想的課題にたいする実践として森林ボランティア活動の社会的意義を評価する見かたと同型であるように思える。しかしながら、H27さんやH14さんは、活動に先立って語るができるような外在的な意味づけとしてではなく、みずからの自然とのかかわりをつうじた固有の経験にもとづいて活動の意味づけを語り直すことで、自身が継続的に活動に取り組む意義にリアリティをもたせている。活動者は、社会との関係においてではなく、フィールドで相対する自然との差し向かいの関係において、自身が活動に取り組む意義を語るのである。

つまり、鳩ノ巣フィールドの活動者は、自身の活動参加の継続性を担保する重要な契機として、みずからの経験に根差してフィールドの自然と結ぶ関係において活動を語る実践をおこなっているものであり、その実践のためにこそ、外在的な意味づけとしての社会的意

²⁷ H27さんへの聞き取り。

²⁸ H14さんへの聞き取り。

義を評価する解釈から距離をはかっているのである。活動への継続的な参加が自発的な意志にかかるような活動のしくみであるからこそ、鳩ノ巣フィールドにおいては、内在的な意味づけを語れるようになることが重要性を帯びる。

5 おわりに

本章は、鳩ノ巣フィールドを事例に、森林ボランティア活動がどのように語られているのかを明らかにすることをつうじて、活動の社会的意義と活動者との関係をみた。

鳩ノ巣フィールドにおいて、環境問題にたいする実践といった社会的意義から距離をはかって活動を語るという語りの「型」は、活動体の水準で、活動をつうじたフィールドへのアクセス権を広く都市住民に開く役割を果たし、個人の水準では、継続的な活動参加の重要な契機として意味をもっていた。鳩ノ巣フィールドでは、社会的意義から距離をはかって、フィールドの自然と結ぶ関係を手がかりに、活動者自身のことばで活動をとらえて語ることが、都市住民に広くアクセス権の開かれたコモンズを形成し、森林の適正利用・管理をはかるための重要な鍵となっている。

このような鳩ノ巣フィールドの活動は、「人と里山との関係を豊かに描き直そうとする運動」(松村 2007:153) のひとつである。しかしその実践は、個別の活動者の意味づけは多様でありながら、ふるまいの水準では活動体の理念・計画のもとで活動に取り組んでいると映る点で、松村の構想したような活動のありかたとは異なる。活動者は、ふるまいの水準で、活動体が設定する理念や計画にもとづいて活動に取り組み、その結果として森林の適切な利用・管理をおこないえていることに仮託することで、個別の多様な認識にもとづいて活動を意味づけることができている。またその活動は、場所の共同(栗本修滋 2004)によって成り立っている側面があるものの、活動の継続性を担保するのは、みずからの経験に根差して活動を語ることができるという意味での自発性であり、そのため、共同性はむしろ、毎回の活動の場かぎりの限定的なものとして位置づけられていた。

まとめれば、都市住民を主要な担い手とする森林ボランティア活動には、森林・林業・農山村地域の課題や環境問題の解決に向けた実践という大義のために組織されているものでも、個別の動機にもとづく構想を具体化するものでもなく、両者の中間的な形態として、理念が定められ計画にもとづいて展開する活動体において、活動者が個別の意味づけを見

いだしていく活動として実践されるものがあるということである。そこでは、個別の活動者が安易に社会との関係で見いだされる大義にもとづいて活動を語らないことによってこそ、結果として社会的に意義のある活動が展開されている。このような活動をめぐる意味づけの重層性をとらえていくことが、「直接的な対象が多くの場合、自然的環境や文化・歴史的環境のひとつであるため、人間ではなくモノである」（鳥越皓之 2000: 14）ために、そのもつ意味が多様でありうる環境ボランティア活動の組織のされかたをとらえるにあたって重要なのではないか。

結論

1 本研究の知見——ふるまいと認識の二重性にもとづく活動参加

本研究はここまで、2部6章にわたり、活動者に向けられるまなざしの強度という点で対極的なふたつの事例を取り上げて、現代的なボランティア活動への参加のありかたをとらえるために、活動における活動者のふるまいをめぐる社会的意義づけと活動者の認識の二重性に着目した考察を展開してきた。

本論で明らかにした知見を整理しておくならば、まず、第1部で取り上げたのは、活動をめぐる諸アクター間の贈与関係の構図を活動体が明示的に規定するあしなが運動である。それは、活動体が活動にかかわる解釈枠組みを提示し、理念への共鳴にもとづく活動者の動員をはかつており、活動者の表明する認識が規範的に明示されている点で、従来の社会運動論の動員論が対象としてきた活動に重なる。

しかしながら、その関係規定の構図において「運動の主演」とされる、あしなが育英会大学奨学生たる遺児学生の活動への取り組みかたは、従来の社会運動論が想定していたものとは異なっていた。遺児学生は、ふるまいの水準では期待される役割に徹しているように映るが、認識の水準では関係規定の構図から役割距離をとっていると言語することで、活動に取り組んでいた。具体的には、遺児学生は、寄付者や後輩遺児との想像力における贈与関係や、遺児問題の当事者として活動に取り組むという論理を体現するふるまいを見せながらも、活動をめぐる認識の規範から離れた動機づけを語ることのできる場面において、寄付者と後輩遺児との贈与関係を媒介する立ち位置や、「アツイ」想いをもち他の遺児学生のフォロアーとしての立ち位置を取っていることを表明していた。活動者はみずからの存在を、活動をめぐる関係規定の構図のなかで相対的に後景におく関係認識をとっていたのである。このように、あしなが運動の活動者は、活動体の掲げる理念への共鳴というよりもむしろ、理念が求める期待にたいして適切な役割距離をはかっていることを表明することで、結果として、活動に継続的に取り組んでいた。

第1部の考察をつうじて導き出される知見は、ボランティア活動は、活動の非日常的な側面をとらえて行動を喚起する、社会的意義をめぐる議論によってのみ成り立つのではない

く、活動の日常的な側面をとらえて、社会的意義を語ることもつ負荷を調整する、活動者自身の相補的なはたらきによっても成り立っているということである。活動者は、活動の関係規定の構図によって求められる役割にたいして距離を表明することによって、認識の水準で自身の参加の論理を維持しつつ、同時に、ふるまいの水準で、活動の関係規定の構図を維持していた。

つづく第2部で取り上げたのは、活動をめぐる社会的意義が多様な水準で議論され、個別の活動者の関心や認識の多様性が尊重される、森林ボランティア活動である。それは、活動者の認識の一致を前提としない活動である点で、従来の社会運動論の議論の射程ではじゅうぶんとらえられてこなかった、現代的な活動のひとつである。

東京都西多摩郡奥多摩町の鳩ノ巣フィールドの活動を事例に取り上げることで明らかになったのは、森林ボランティア活動の社会的意義をめぐる議論が、社会との関係で活動をとらえようとするのにたいして、活動体や活動者は、目の前の自然との関係で活動をとらえて動機づけを語ろうとしていることだった。鳩ノ巣フィールドの活動者は、安全管理や森林の利用・管理の責任をめぐる社会的期待が活動に向けられるのにたいして、作業方法の統一という規則を共有することで、ふるまいの水準で社会的期待に応じてみせつつ、その規則を活動者とフィールドの自然との関係を媒介する重要なツールと読み換えることで、認識の水準では、社会との関係ではなく、自然との関係に力点をおいて活動を語ろうとしていた。個別の活動者は、自身の身体を媒介とした自然との関係を前景化させて活動の動機づけを語っており、それによって、みずからの取り組みに社会的意義を見いだそうとするまなざしを回避し、活動体や社会との関係を後景におこうとしていた。

第2部の考察をつうじて導き出される知見は、ボランティア活動を社会との関係で評価する見かたが、継続的に活動に取り組む活動者が見いだす活動の特有の意義をとらえそこねるばあいがあるということである。森林ボランティア活動の社会的意義をめぐる既存の議論は、活動者が、活動で相対する自然を媒介に、地域住民や社会全体を対象とした活動を展開するというモデルや、地域外部の都市住民である活動者が、地域住民と自然との関係を結ぶ媒介者として位置づくというモデルにもとづく議論を展開していたが、活動者にとっては、目前で相対する自然こそが活動ではたらきかける対象であり、自身が主体となってその自然との関係をいかに形成してゆくかを、主要な動機の語彙として語ろうとしていた。いいかえれば、社会的意義をめぐる議論が、活動者が活動において直面する自然との関係から離れた、社会との関係を重視するのにたいして、活動者は、目の前の自然との関

係にこだわって活動を語っていたのである。

活動者が、社会との関係ではなく、活動で相対する対象との関係形成に焦点をあてて活動を語ろうとすることは、直接的な対象が人間である福祉や災害を対象とするボランティアを事例に取り上げる既存研究ですでに指摘がある（原田隆司 2000, 2010; 三井さよ 2004; 西山志保 2003, [2005] 2007; 似田貝香門編 2008; 佐藤恵 2010）。しかし、森林ボランティア活動の社会的意義をめぐる従来の議論においては、この点が看過される側面があったといえる。これは、活動の対象として地域住民などの受け手となる人間を措定しようとする視座をとるがゆえのことだと考えられる。

しかしながら、森林ボランティア活動は、「直接的な対象が多くの場合、自然的環境や文化・歴史的環境のひとつであるため、人間ではなくモノである」（鳥越皓之 2000）環境ボランティア活動のひとつであり、第2部で明らかにしたように、少なくとも鳩ノ巣フィールドの活動者は、自身と自然との関係の結びかたを主題化して活動に取り組んでいた。これを踏まえれば、森林ボランティア活動を論じるにあたっては、社会との関係という観点から活動者の取り組みを規範的に評価してしまうのではなく、活動者が自然との関係や社会との関係をフィールドでの経験においてどのようにとらえているのかに即して議論を展開することが求められるのではないか。そこでは、自然との関係のみならず、地域住民や社会との関係もまた、活動に先立って規範的に設定されるものとしてではなく、活動者がフィールドで経験するリアリティに即したものとして、活動ごとに個別に位置づけが検討される必要があるだろう。森林ボランティア活動を「人と里山との関係を豊かに描き直そうとする運動」（松村 2007: 152-3）と評価しようとする松村正治の視座は、そのような議論の可能性を拓くものだといえる。

2 本研究の社会学的意義

ボランティア活動をめぐる社会的意義と活動者の参加の論理の二重性に着目する本研究は、このように、性質の大きく異なるふたつの事例を取り上げて考察を展開してきた。本節では、ふたつの事例を取り上げたことの含意の検討をつうじて、本研究の社会学的意義を明らかにする。

それにあたっては、N. Elias（1983=1991）の議論を下敷きに、「没頭」と「距離化」と

いう概念をもちいて現代社会を論じた奥村隆（[2004] 2017）の議論を導き糸としたい。Elias（1983=1991）は、社会にたいする距離化が低水準の段階における社会科学者の機能が、社会への距離化した態度を持ち、社会への知識を生むことにあると論じたが¹、これにたいして奥村は、現代社会を「つねに同時に『距離化』する態度を身につけている」（奥村 [2004] 2017: 41）「没頭を喪失した社会」ととらえたうえで、「距離化への距離化」の回路の自動昂進を回避し、「距離化」からの「距離化」を達成するような契機に注目することの重要性を指摘した。この議論に引きつけていえば、本研究は、「距離化」の態度を常態とする現代社会において、「距離化」の態度から距離をはかり、反転して「没頭」へと向かう方法を、ボランティア活動の領域において模索する事例研究と位置づけられる。

2.1 現代社会におけるボランティア活動への参加の論理

本研究が取り上げたふたつの事例は、ふるまいの水準では社会的意義や活動体の理念が期待する役割に徹するが、認識の水準では社会的意義や活動体の理念とは異なる認識をもつと表明する点で共通していた。しかし、社会的意義や活動の理念にたいする態度という点では大きく異なっていた。あしなが運動の遺児学生は、一方で、役割期待から距離をはかることで、活動における贈与関係のアクターとしてまなざしを向けられることの負荷を回避して活動にのぞむことを志向していたのであり、そうした活動者の戦略は、社会的意義と活動者の関心の並立をはかる相補的なものだった。他方で、鳩ノ巣フィールドの森林ボランティアの活動者は、社会的意義づけでは看過される、活動で相対する自然との関係を活動者自身が結ぶことをとらえるために、活動体や活動者はみずからの関心に沿った読み換えをはかることに主眼をおいていた。活動者は、社会的意義づけとは対抗的なかたち

¹ 具体的には、Elias は、「いま自分が置かれている状況やそれに由来する感情に『巻き込まれている (involved)』ことと、それから『距離をとっている (detached)』こと」のうち、「後者の態度からはじめて知識や科学が生まれ、知識や科学によって状況を制御できるようになることで『距離化』の態度が可能になるという循環……が存在する」と指摘したうえで、「社会」に対する「距離化」が低水準にある「参加と距離化」の段階における「社会科学者の機能」が、「『社会』への『距離化』した態度を持ち、社会への知識を生むことにある」という議論を展開した（奥村 [2004] 2017: 36; Elias 1983=1991）。

で、目の前の自然と相対することの意義を活動に読み込んでいた。

これを、奥村のもちいた「没頭」と「距離化」というふたつの概念をもちいて整理し直せば、あしなが運動の事例では、活動体が理念にたいする共鳴を期待し、「没頭」を求めるのにたいして、遺児学生は、それに「距離化」の態度を示して活動に継続的に取り組んでいた。それは、たんに活動の関係規定の構図に共鳴して「没頭」するのも、「距離化への距離化」の回路の自動昂進によって活動参加を忌避するのでもなく、認識の水準で「距離化」の態度を示しながら、結果として、ふるまいの水準では活動に「没頭」してみせるという参加の論理だった²。遺児学生は、単純な「距離化」でも「没頭」でもない境界的な立ち位置を戦略的にとることで、活動において贈与関係のアクターに位置づく負荷を回避し、みずからの選択として活動に取り組んでいたのである。

対照的に、鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動の事例では、社会的意義をめぐる議論が、フィールドで相対する自然との関係ではなく社会との関係で活動をとらえるという意味での「距離化」を要請するのにたいして、活動者はむしろ、それを拒んでフィールドで相対する目の前の自然との関係に「没頭」する姿勢をみせていた。ただし、それは、単純な「没頭」というわけではなく、Z. Bauman (2000=2001) が「クローク型共同体」と呼んだような、時間・空間の限定された一時的な集まりとして組織された活動の場面に限定された「没頭」である点に特徴がある。

このように、本研究がとらえたボランティアの活動者は、「没頭」を要請する活動においては「距離化」をはかり、「距離化」を要請する活動においては「没頭」の契機を見いだすことで、社会的意義や活動の理念との関係を調整して、それぞれ継続的に活動に取り組んでいた。「距離化」を選択するか「没頭」を選択するのかは、活動の性質の函数という側面があるが、活動者はいずれも、活動体への単純な「没頭」を回避し、「距離化」をはかつていつでも離脱可能な境界的で流動的な立ち位置を確保しつつ、それによって、活動に参加していた。これが、本研究が明らかにした現代的なボランティアへの活動参加のありかたの特徴である。

² こうした遺児学生の参加の論理は、「意識のレベルでは、対象に対してアイロニカルな距離を取[り]……行動から判断すれば、その対象に等しい状態にある」(大澤真幸 2008: 233)という、大澤真幸のいうところの「アイロニカルな没入」という行動の態様をとっているという位置づけることもできる。

2.2 ボランティアの「自発性」の語りかたと社会との関係の結びかた

ではなぜ、本研究で取り上げた事例の活動者は、境界的な立ち位置をとって活動に参加していたのか。また、活動者の「距離化」と「没頭」の対象とはなにか。

ふたつの事例はそれぞれ、あしなが運動においては活動理念からの「距離化」に、鳩ノ巣フィールドにおいては自然との関係への「没頭」にそれぞれ力点がおかれるために、その「距離化」と「没頭」の対象には一見大きなちがいがあのように思われる。しかしながら、抽象化してとらえるならば、ふたつの事例の活動者はどちらも、社会との関係において活動の意義をとらえる語りから「距離化」をはかり、活動で直面する目の対象との関係に限定的に「没頭」するかたちで、自身の参加の論理を語っていた。

具体的には、あしなが運動の遺児学生は、想像力において社会からの「恩」を受けた遺児として社会へ「恩」を返すという、「恩返し運動」の論理にもとづいて活動に取り組むという見かたを退けて、自身にとって可視的な、育英会との交換関係や「アツい想い」をもった他の遺児学生との関係において、自身が活動に取り組む動機づけを語っていた。また、鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動における活動者は、地域社会や社会全体としての意義という観点から活動を評価する見かたを退けて、活動者自身の身体を介して相対する目の自然との関係を豊かにするという観点から、活動の参加の論理を語っていた。

すなわち、活動者は、市民社会形成への意志というよりも、活動におけるみずからの経験にもとづく、目の他者や自然との関係形成をみずから選択したという意味で、活動参加の「自発性」を語っていたといえる。

ボランティア活動の特質のひとつとされる自発性(中野民夫 2012)は、佐藤慶幸([1982] 1994, 2002, 2007)にしたがえば、市民社会形成への意志という性格をもつ。しかしながら、本研究でみたふたつの事例における活動者は、むしろ、社会との関係へと接続することを断ち、社会的評価や期待にもとづく論理や活動体の論理にからめとられてしまうことを回避することに力点をおいていた。それによって活動者は、みずからの選択として活動に継続的に取り組んでいるという意味での「自発性」を発揮していることを語っていたのである。

そのように語られる活動者の「自発性」は、従来のボランティア論で論じられてきた市民社会形成への意志をもつ自発性に比して、ささやかなものだといえるのかもしれない。

しかしながら、活動者は、そのように「自発性」を語ることで、動員論や贈与論による批判に与することなく、みずからの活動での経験に根差した固有の動機づけにもとづいて活動に取り組んでいることを示そうとしていたのであり、この意味での「自発性」を担保することが、継続的に活動に取り組んでいくにあたっての鍵となっていた。

また、そうした活動参加の論理は、活動の社会的意義や理念への共鳴を求める従来の社会運動論の動員論や市民社会論の想定とは大きく異なるが、注目すべきであるのは、そのようにして活動に取り組む活動者は、ふるまいの水準で結果として社会的期待に応じて、社会的意義や理念の実現に間接的に寄与していたことである。いいかえれば、活動者は、社会との関係からの距離をはかることで、結果として社会への貢献を果たそうとしていたのである³。この点を手がかりとすれば、かれらは、活動の理念の実現に間接的ながら貢献する存在ととらえられるのであり、とくに日常的に継続的な展開を見据えて活動者の入れ替わりを視野に入れ、活動者の不断の動員をはかるようなボランティア活動においては、活動の継続的展開を支える重要なアクターと位置づけられる。そのような活動の組織化を構想するにあたっては、こうした活動者の参加の論理を積極的にとらえていくことができるのではないか。本研究がとらえた活動者は、社会的意義や理念への共鳴する「強い個人」たりえない「弱い個人」（西城戸誠 2008）として問題化されるべき存在ではなく、活動の継続的展開を支える重要な存在として位置づけられるべき存在である。

2.3 継続的展開を見据えるボランティア活動の組織化に向けて

以上、本研究は、社会的意義や活動の理念に単純に「没頭」するのではなく、そこから「距離化」する態度を示しながら活動で相対する対象との可視的な関係に「没頭」することで活動に取り組む、ボランティアの活動者の参加の論理を明らかにしてきた。

では、こうした活動者の参加の論理を前に、継続的な活動展開を見据える活動体は具体的にどのように活動の組織化をはかっていくことができるのだろうか。本研究で取り上げた事例の活動の展開に即して、試論的にふたつの方途を挙げておきたい。

³ この点に関連して、荒川康（2002）は、活動をめぐる公共性は、必ずしもその担い手があるべき「市民」となることで担保されるのではなく、活動において築かれる関係者相互の「関係の自由」において生みだされる側面をもつことを明らかにしている。

第一は、あしなが運動の展開にみられるように、活動の論理の転換をはかつて、活動理念に共鳴するような動員対象にアプローチする方法である。

あしなが運動は、本研究の調査後の 2011 年以降、運動の論理を大きく転換した。具体的には、奨学生を対象に実施する宿泊型の研修プログラム「つどい」において、死別経験を共有する時間「自分を語ろう」を設けることを取りやめ、遺児という集合的アイデンティティの引き受けを大学奨学生に求めることを鍵とする「恩返し運動」の論理を、相対的に後景に退けたのである。代わって、海外遺児支援を手がける分野を中心に、あしなが育英会が設けるインターンシップ制度に応募するインターンの(主として海外の)大学生が、運動の担い手としてクローズ・アップされるようになっていく。あしなが運動を率いる社会運動家玉井義臣にかんする近著の表現を借りてころみにいうならば、運動を駆動する理念は、「恩返し」から「志高く WORK HARD」へと変化したといえる(メディアウォッチ 100 2012)。活動者が遺児であること自体よりも、遺児家庭支援を自身の課題として引き受けことが、活動参加の鍵としてふたたび重要性を帯びるようになっていくと考えられる。

これは、もっぱら遺児を動員の対象とする「恩返し」の論理からの組み換えをはかることで、活動の論理に共鳴し、「没頭」してくれるようなインターンの大学生に、動員の対象を拡大する戦略だと位置づけられる。本研究で明らかにした参加の論理にもとづいて活動に取り組む遺児学生の位置づけは相対的に後景に退く。社会運動論のフレーミング分析におけるフレーム転換概念は(D. A. Snow, et. al 1986: 474-6; 本郷正武 2008: 54-5) こうした活動の論理の転換をとらえるものであるが、この方途の有効性については、本研究ではじゅうぶんに検討できていない。今後の研究において実証的に検討すべき課題である。

第二は、鳩ノ巣フィールドの活動にみられたように、活動への「没頭」を求めるのではなく、毎回のアド・ホックな集まりとして活動を構成し、その実績の積み重ねとして活動を位置づける方法である。固定的な共同体を形成してメンバーシップを確定しようとするのではなく、活動者の流動性を織り込んで活動体を一時的な集まりと位置づけるこの方法は、活動体を維持することにもなう負荷や社会的な文脈のもつ負荷が活動者にかかることを回避して、活動者がみずからの選択にもとづいて活動に参加することを導き、しかも同時にいつでもそこから離脱可能であることを担保する戦略である。この方法は、「没頭」する参加者を活動体が明示的に求めるわけではないために、継続性という点で不安を残す方法であるように思われるが、「没頭」しようとする活動者の出現自体は歓迎されており、

同時に、活動体や社会との関係のもつことにともなう負荷を回避しようとする活動者の参加の論理にも適合的なものだといえる。本研究で明らかにした活動者の参加の論理に適合的なのはこちらの方途だが、その有効性についても、今後の展開を追うなかでさらに実証的な検討を重ねたい。

3 本研究の課題

最後に、本研究が残した課題を挙げておく。

第一は、それぞれの個別フィールドにおける事例検討の精緻化である。

あしなが運動については、すでに述べたように、本調査後の 2011 年以降、運動の理念や活動者の活動参加の論理に大きな変化がみられる。遺児という集合的アイデンティティの引き受けを大学奨学生に求めることを鍵とする「恩返し運動」の論理は、仮に「志高く WORK HARD」と名づけられる論理に取って代わり、相対的に後景に退いた。それによって、活動者が遺児であること自体よりも、遺児家庭支援を自身の課題として引き受けることが、活動参加の鍵としてふたたび重要性を帯びようになっている。こうした環境変化にともない、遺児学生の活動参加の論理にはどのような影響があるのか。本郷正武(2011)のいうところの「良心的支持者」として、遺児であるかどうかを問われることなく活動に参加しやすくなったのか、それとも遺児という立ち位置をめぐって異なる課題が生じているのか。そしてまた、こうした活動の論理の転換は、あしなが運動の展開にどのような影響をおよぼしたのか。あしなが運動の展開をさらに追いかけるにあたっの課題となる。

森林ボランティア活動については、西多摩地域においては、鳩ノ巣フィールドの活動にかぎらず、多数の活動体が多様な方針で活動を展開してきた。活動内容や形態、林業者・地域との関係性はそれぞれに異なる。森林ボランティア研究の文脈では、鳩ノ巣フィールドの事例は、特異な位置を占めるものだと想定されるが、その位置づけを実証的に見定める必要がある。2000 年までの展開については山本信次編(2003)が行き届いた整理をおこなっているが、それ以降の展開については整理がなされていない。そのため、今日的展開までを視野に入れた考察が求められる。分析にあたっては、各活動団体を率いた人びとのライフコースを視野に入れたうえで、意図と成果を活動者自身がどのようにとらえているのかに注目したい。

第二は、分析視角の精緻化と他事例への応用である。

本研究では、贈与論と役割理論の視角を援用することで、ボランティアの活動者が、活動理念や社会的意義にもとづく役割期待に一致したふるまいをとりつつ、認識の水準ではそこから距離をはかつて多様な関心にもとづいて活動に取り組んでいることをみた。それによって本研究は、既存研究が依拠してきた市民社会論や社会運動の動員論の相対化をはかってきた。

しかしこれは、具体的な活動の実践の場面において、活動の受け手との関係が非対照的な街頭募金活動や、自然へのはたらきかけを対象とする森林ボランティア活動を事例として導きだされた知見である。福祉分野や災害分野など、活動の受け手との対面的な関係において実践を展開するボランティア活動においては、活動者は、社会的まなざしとの関係のみならず、受け手との差し向かいの関係にも相対しながら活動に取り組むこととなる。既存研究は、受け手との関係を起点におき、その接続に注目することで、活動の社会的意義の検討をはかったが（似田貝香門編 2008; 原田隆司 2000, 2010）、本研究を踏まえて取り組むべきは、活動者が受け手との関係と社会的まなざしとの関係の双方をどのように認識し、ふるまっているかである。今後の調査をつうじて、本研究の見いだした知見の応用可能性を探求していきたい。

参考文献

- 足立原貫・野口伸, 1991, 『山へ入って草を刈ろう——「草刈り十字軍」17年の軌跡』朝日新聞社.
- 青柳かつら, 2012, 「森林ボランティア活動の発展モデル構築の試み——北海道の団体の分類と活動事例調査を中心に」『北海道開拓記念館研究紀要』40: 101-22.
- 青柳かつら・佐藤孝弘, 2006, 「森林所有者と森林ボランティアの連携を進めるには——石狩・網走地方の森林所有者へのアンケート調査を中心に」『北方林業』58(6): 125-8.
- , 2007a, 「森林ボランティアのエンパワーメントの方策とは——『参加者の確保』と『森林所有者との連携』の実現を着眼として」『林業経済研究』53(1): 57-64.
- , 2007b, 「森林ボランティア参加者の満足度を高める運営手法とは——森林ボランティア参加者へのアンケート調査から」『北方林業』59(4): 78-81.
- 荒川康, 2002, 「まちづくりにおける公共性とその可能性——公園づくりを事例として」『社会学評論』53(1): 101-12.
- 新雅史, 2013, 「ボランティアの制度化は〈支援〉の有り様に何をもたらしたか」『福祉社会学研究』10: 39-55.
- Arendt, H., 1958, *The Human Condition*, Chicago: University of Chicago Press. (=1994, 志水速雄訳『人間の条件』筑摩書房.)
- あしなが学生募金事務局, 2011, 「あしなが学生募金」, あしなが学生募金ホームページ, (2011年11月7日取得, <http://www.ashinaga-gakuseibokin.org/>).
- あしなが育英会, 2008, 「第77回あしなが学生募金 母の声 私たちが訴える」『NEW あしながファミリー』102: 4-5.
- , 2010a, 「あしながニュース 2009年活動報告」.
- , 2010b, 「病気遺児・災害遺児・自死遺児のあしなが奨学金(無利子) 大学奨学生予約募集のしおり」.
- , 2010c, 「収支報告」, あしなが育英会ホームページ, (2010年11月12日取得, <http://www.ashinaga.org/about2.htm>).
- , 2016, 「2015年度事業報告」.

- , 2017a, 「活動・収支報告」, あしなが育英会ホームページ, (2017年9月14日取得, <http://www.ashinaga.org/about/index.html>).
- , 2017b, 「奨学金の継続支援『あしながさん』」, あしなが育英会ホームページ, (2017年10月1日取得, <http://www.ashinaga.org/support/ashinaga.html>).
- あしながPウォーク10実行委員会, 2012, 「The 39th Ashinaga Pwalk10 2012年度版パンフレット」.
- 渥美公秀, 2000, 「ボランティア研究の射程——グループ・ダイナミックスの立場から」『ボランティア学研究』1: 57-71.
- , 2001, 『ボランティアの知——実践としてのボランティア研究』大阪大学出版会.
- , 2014, 『災害ボランティア——新しい社会へのグループ・ダイナミクス』弘文堂.
- Bauman, Z., 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity Press. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店.)
- Beck, U., 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt: Suhrkamp. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局.)
- Berger, P. L., and T. Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Doubleday. (= [1977] 2003, 山口節郎訳『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社.)
- Benford, R. D., 1997, "An Insider's Critique of the Social Movement Framing Perspective," *Sociological Inquiry*, 67(4): 409-30.
- Benford, R. D. and D. Snow, 2000, "Framing Processes and Social Movements: An Overview and Assessment," *Annual Review of Sociology*, 26: 611-39.
- Blau, P. M., 1964, *Exchange and Power in Social Life*, New York: John Wiley & Sons. (=1974, 間場寿一・居安正・塩原勉訳『交換と権力——社会過程の弁証法社会学』新曜社.)
- Boulding, K. E., 1973, *The Economy of Love and Fear: A Preface to Grants Economics*, Belmont: Wadsworth Publishing. (=1974, 公文俊平訳『愛と恐怖の経済——贈与の経済学序説』佑学社.)

- Darier, E., 1999, "Foucault and the Environment: An Introduction," E. Darier ed., *Discourses of the Environment*, Oxford: Blackwell, 1-33.
- Derrida, J. (高橋允昭編訳), [1989] 2011, 「時間を——与える」『他者の言語——デリダの日本講演〈新装版〉』法政大学出版局, 59-145.
- Diez, T., N. Dolsak, E. Ostrom and P. C. Stern, 2002, "The Drama of the Commons," E. Ostrom, T. Diez, N. Dolsak, P. C. Stern, S. Stonich and E. U. Weber eds., *The Drama of the Commons*, Washington, DC: National Academy Press, 3-35. (=2012, 茂木愛一郎・三俣学・泉留維監訳『コモンズのドラマ——持続可能な資源管理論の15年』知泉書館, 5-47.)
- Drucker, P. F., 1990, *Managing the Nonprofit Organizations*, New York: Harper Collins Publishers. (=2007, 上田惇生訳『非営利組織の経営』ダイヤモンド社.)
- , 1993, *The Drucker Foundation Self-assessment Tool for Nonprofit Organizations: Participant Workbook*, San Francisco: Jossey-Bass. (=1995, 田中弥生訳『非営利組織の「自己評価手法」——参加型マネジメントへのワークブック』ダイヤモンド社.)
- Elias, N., 1983, *Engagement und Distanzierung: Arbeiten zur Wissenssoziologie I*, Frankfurt: Suhrkamp. (=1991, 波田節夫・道簾泰三訳『参加と距離化——知識社会学論考』法政大学出版局.)
- 遠藤興一・土志田祐子, 1995, 「文化的特質としてのボランティア活動」『明治学院論叢』563: 31-89.
- Fireman, B., and W. A. Gamson, 1979, "Utilitarian Logic in the Resource Mobilization Perspective," M. N. Zald and J. D. McCarthy eds., *The Dynamics of Social Movements*, 8-44. (=1989, 牟田和恵訳「功利主義的理論の再検討」塩原勉編『資源動員と組織戦略——運動論と新パラダイム』新曜社, 93-143.)
- Firth, R., 1959, *Economics of the New Zealand Maori*, 2nd ed., Wellington: R. E. Owen.
- Foucault, M., 1975, *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Paris: Gallimard. (=1977, 田村淑郎訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.)
- フォレストフリーク, 2017, 「フォレストフリークとは」NPO 法人フォレストフリークホームページ, (2017年9月16日取得, <http://forest-freak.com/about>).
- 藤井敦史, 1999, 「NPO 概念の再検討: 社会的使命を軸とした NPO 把握——市民事業組

- 織の構想」『組織科学』32(4): 24-32.
- , 2002, 「社会学者はボランティアをどのように語ってきたのか?」『ボランティア研究』11: 13-28.
- 藤村正之, 1999, 「民間福祉財源としての「あしながおじさん」制度」『福祉国家の再編成——「分権化」と「民営化」をめぐる日本的動態』東京大学出版会, 199-223.
- 古市憲寿・本田由紀, 2010, 『希望難民ご一行様——ピースボートと「承認の共同体」幻想』光文社.
- Glass, P. 2010, "Everyday Routines in Free Spaces: Explaining the Persistence of the Zapatistas in Los Angeles," *Mobilization*, 15(2): 199-216.
- Godelier, M., 1996, *L'énigme du don*, Paris: Librairie Athéme Fayard. (= [2000] 2014, 山内昶訳『贈与の謎〈新装版〉』法政大学出版局.)
- Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday. (= 1974, 石黒毅訳『ゴッフマンの社会学 1 行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房.)
- , 1961, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Indianapolis: Bobbs-Merrill. (= 1985, 佐藤毅・折橋徹彦訳『ゴッフマンの社会学 2 出会い——相互行為の社会学』誠信書房.)
- , 1963a, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York: Free Press of Glencoe. (= 1980, 丸木恵祐・本名信行『ゴッフマンの社会学 4 集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房.)
- , 1963b, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall. (= 1980, 石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- , 1967, *Interaction Ritual: Essays in Face-to-Face Behaviour*, New York: Anchor Books. (= 1986, 広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学』法政大学出版局. (再録: 2002, 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学〈新訳版〉』.))
- , 1974, *Frame Analysis, An Essay on the Organization of Experience*, New York: Harper & Row.
- , 1983, "The Interaction Order: American Sociological Association, 1982

- Presidential Address," *American Sociological Review*, 48(1): 1-17.
- Goodwin, J. and J. Jasper ed., 2003, *Rethinking Social Movements: Structure, Meaning, and Emotion*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.
- Gouldner, A. W., 1960, The Norm of Reciprocity: A Preliminary Statement, *American Sociological Review*, 25(2): 161-78.
- Habermas, J., 1981, *Theorie des Kommunikativen Handelns*, Frankfurt: Suhrkamp. (= 1985-7, 河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論』, (上) (中) (下), 未来社.)
- , [1962] 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt: Suhrkamp. (=1994, 細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究[第2版]』未来社.)
- Haenfler, R., B. Johnson and E. Jones, 2012, "Lifestyle Movements: Exploring the Intersection of Lifestyle and Social Movements," *Social Movement Studies*, 11(1): 1-20.
- Hardin, G., 1968, "The Tragedy of the Commons," *Science*, 162: 1243-8.
- , "Extensions of The Tragedy of the Commons," *Science*, 280(5364): 682-3.
- 原田隆司, 1999, 「『ボランティア』とよばれたもの」岩崎伸彦ほか編『阪神・淡路大震災の社会学 1 被災と救援の社会学』昭和堂, 275-90.
- , 2000, 『ボランティアという人間関係』世界思想社.
- , 2001, 「意味から人間関係へ——立体的なボランティア理解に向けて」『ボランティア学研究』2: 21-38.
- , 2006, 「ボランティア活動からみた若者論の試み」『フォーラム現代社会学』5: 16-24.
- , 2010, 『ポスト・ボランティア論——日常のはざまの人間関係』ミネルヴァ書房.
- 長谷川公一, 2000, 「市民が環境ボランティアになる可能性」鳥越皓之編『環境ボランティア・NPOの社会学 シリーズ環境社会学 1』新曜社, 177-92.
- , 2003, 『環境運動と新しい公共圏——環境社会学のパースペクティブ』有斐閣.
- 畠山重篤, 2006, 『森は海の恋人』文藝春秋.

- 鳩ノ巣連絡協議会, 2003, 「大自然塾『鳩ノ巣フィールド』第一次五ヵ年活動計画」.
- , 2008, 「大自然塾『鳩ノ巣フィールド』第一次五ヵ年活動計画終了報告——兼平成 19 年度活動報告」.
- , 2013, 「大自然塾『鳩ノ巣フィールド』第三次鳩ノ巣五ヵ年計画——鳩ノ巣連絡協議会」.
- , 2015, 「人工林保全活動 作業マニュアル」.
- , 2016, 「2016 年度大自然塾『鳩ノ巣フィールド』活動計画」.
- , 2017, 「2016 年度大自然塾『鳩ノ巣フィールド』活動報告」.
- 羽鳥孝明, 1995, 「この頃思う不満……参加者と行政に」 森林づくりフォーラム『第 3 回 森林づくりフォーラムシンポジウム「多様な人々による 100 年の森林づくりをめざして」』, 7.
- , 2001, 『遊ぶ! レジャー林業——都市(まち)からみえる森林(やま)がある』 日本林業調査会.
- 服部憲児, 1995, 「『育英』および『奨学』概念の再検討」『関西教育学会紀要』19: 191-5.
- , 1996, 「日本育英会奨学生推薦基準の変遷」『大学論集』25: 87-101.
- , 1999a, 「日本における学生財政援助対象者の選抜原理に関する議論——選抜基準としての優秀性および経済的必要度の支持理由の検討」『宮崎大学教育学部紀要. 教育科学』86: 1-12.
- , 1999b, 「日本における学生資金援助対象者の選抜原理に関する論理構造の分析」『宮崎大学教育文化学部紀要. 教育科学』1: 69-78.
- Heller, M., 1998, "The Tragedy of the Anticommons: Property in the Transition from Marx to Markets," *Harvard Law Review*, 111(3): 621-88.
- , 2008, *The Gridlock Economy: How Too Much Ownership Wrecks Markets, Stops Innovation and Costs Lives*, New York: Basic Books.
- 本郷正武, 2007, 『HIV/AIDS をめぐる集合行為の社会学』ミネルヴァ書房.
- , 2011, 「『良心的支持者』としての社会運動参加——葉害 HIV 感染被害者が非当事者として振る舞う利点とその問題状況」『社会学評論』62(1): 69-84.
- 細野助博・風見正三・保井美樹編, 2016, 『新コモンズ論——幸せなコミュニティをつくる八つの実践』中央大学出版部.
- Hustinx, L. and F. Lammertyn, 2003, "Collective and Reflexive Styles of Volunteering:

- A Sociological Modernization Perspective," *Voluntas: International Journal of Voluntary and Non-profit Organisations*, 14(2): 167-87.
- , 2004, "The Cultural Bases of Volunteering?: Understanding and Predicting Attitudinal Differences Between Flemish Red Cross Volunteers," *Non-profit and Voluntary Sector Quarterly*, 14(2): 548-81.
- Hustinx, L., R. A. Cnaan and F. Handy, 2010, "Navigating Theories of Volunteering: A Hybrid Map for a Complex Phenomenon," *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 40(4): 410-34.
- 飯國芳明, 2012, 「コモンズの類型と現代的課題」新保輝幸・松本充郎編『変容するコモンズ——フィールドと理論のはざまから』ナカニシヤ出版, 203-21.
- 今村仁司, 2000, 『交易する人間 (ホモ・コムニカンス) ——贈与と交換の人間学』講談社.
- 井上真, 2004, 『コモンズの思想を求めて——カリマンタンの森で考える』岩波書店.
- 井上真編, 2008, 『コモンズ論の挑戦——新たな資源管理を求めて』新曜社.
- 井上真・宮内泰介編, 2001, 『コモンズの社会学——森・川・海の資源共同管理を考える シリーズ環境社会学2』新曜社.
- 石井栄三編, 1979, 『交通遺児育英会十年史』交通遺児育英会.
- 石黒毅, 1974, 「訳者あとがき」E・ゴッフマン (石黒毅訳) 『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房, 303-13.
- , 1985, 「儀礼と秩序——初期のゴッフマン社会学における表出の機能論的微視分析」『現代社会学』(19): 30-63.
- 石川准, 1988, 「社会運動の戦略的ディレンマ——制度変革と自己変革の狭間で」『社会学評論』39(2): 153-67.
- 伊藤奈緒, 2006, 「社会運動の参加／不参加選択をめぐる意味構築——アイヌ民族による権利獲得運動を事例として」『社会学評論』56(4): 797-814.
- 岩波書店編集部, 2001, 『ボランティアへの招待』岩波書店.
- Jasper, J. M., 1997, "Cultural Approach," J. M. Jasper, *The Art of Moral Protest: Culture, Biography, and Creativity in Social Movements*, Chicago: The University of Chicago Press, 69-99.
- Johnston, H. and B. Klandermans eds., *Social Movements and Culture*, Minneapolis:

University of Minnesota Press.

- JUON NETWORK, [1999] 2006, 「特定非営利活動法人 JUON NETWORK 定款」.
- , 2012, 「鳩ノ巣駅～鳩ノ巣フィールド周辺MAP」, 認定NPO 法人 JUON (樹恩) NETWORK ホームページ, (2016年11月30日取得, <http://juon.univcoop.or.jp/files/hatonosu/hatonosu-ekimap2012.pdf>).
- , 2017, 「『多摩の森・大自然塾』奥多摩・鳩ノ巣フィールド」, 認定NPO 法人 JUON (樹恩) NETWORK ホームページ, (2017年9月5日取得, http://juon.univcoop.or.jp/files/mori_tirashi/daishizen17.pdf).
- 角一典, 2004, 「非日常と日常のはざままで——社会運動組織の変化」大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編『社会運動の社会学』有斐閣, 175-90.
- 柿澤宏昭, 1994, 「水産資源保全のための流域森林整備に関する研究」『水利科学』38(5): 24-43.
- , 1996, 「市民参加はなぜ必要なのか」木平勇吉編『森林環境保全マニュアル』朝倉書店, 1-9.
- , 2000, 『エコシステムマネジメント』築地書館.
- , 2001, 「森林保全とその担い手」鳥越皓之編『講座 環境社会学 第3巻 自然環境と環境文化』有斐閣, 77-103.
- 柿澤宏昭・斎藤和彦・山本信次, 2006, 「自然保護・自然参加論」林業経済学会『林業経済学会 50 周年記念 林業経済研究の論点——50 年の歩みから』日本林業調査会, 493-520.
- 金子郁容, 1992, 『ボランティア——もうひとつの情報社会』岩波書店.
- 鹿住貴之, 2014, 「森林ボランティア活動の今」『森林技術』872: 2-7.
- 片桐新自, 1995, 『社会運動の中範囲理論——資源動員論からの展開』東京大学出版会.
- Kaufmann, J.-C., 1995, *Corps de femmes, regards d'hommes: Sociologie des seins nus*, Paris: Nathan. (=2000, 藤田真利子訳『女の身体, 男の視線——浜辺とトップレスの社会学』新評論.)
- 木下征彦, 2002, 「90年代ボランティア論の動向——ボランティアの社会学的分析に向けて」『社会学論叢』143: 93-103.
- 鬼頭秀一, 1996, 『自然保護を問い直す——環境倫理とネットワーク』筑摩書房.
- , 1998, 「環境運動/環境理念研究における『よそ者』論の射程——諫早湾と奄美

- 大島の『自然の権利』訴訟の事例を中心に」『環境社会学研究』4: 44-59.
- 小林雅之, 2002, 「日本の奨学制度」『現代の高等教育』438: 37-43.
- , 2004, 「高等教育機会と育英奨学政策」『高等教育研究紀要』19: 108-29.
- , 2008, 『進学格差——深刻化する教育負担』筑摩書房.
- 小林雅之編, 2007, 『諸外国における奨学制度に関する調査研究及び奨学金事業の社会的効果に関する調査研究』平成 18～平成 19 年度文部科学省先導的大学改革推進委託事業調査研究報告書, 東京大学.
- 小泉聡美, 2013, 「漁業と森林——北海道の植樹運動を事例に」『農村計画学会誌』32(1): 33-6.
- 交通遺児育英会二十年史編集委員会, 1990, 『交通遺児育英会二十年史』交通遺児育英会.
- Kriesi, H., 1996, "The Organizational Structure of New Social Movements in a Political Context", D. McAdam, J. D. McCarthy and M. N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movement: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 久保田繁男, 2012, 「資源利用を伴わない里山管理への疑問と資源利用を阻害する行政のしくみ」『多摩ニュータウン研究』14: 17-28.
- , 2015, 「グリーンボランティア保険から見える森づくり活動団体の近年の事故の傾向」『森づくりフォーラム』154: 8-9.
- 蔵治光一郎・洲崎燈子・丹羽健司編, 2006, 『森の健康診断——100 円グッズで始める市民と研究者の愉快的森林調査』築地書館.
- 栗本修滋, 2004, 「森林ボランティアにおける共同性」『同志社社会学研究』8: 17-30.
- , 2005, 「森林ボランティア活動が紡ぎ出す公共性」『同志社社会学研究』9: 27-40.
- 栗山浩一・酒井功, 1997, 「住民参加型の森づくりに対する一般市民の意識に関する研究——北海道における事例研究」『森林計画誌』28: 7-13.
- Lévi-Strauss, C., 1968, "Introduction à l'œuvre de Marcel Mauss," M. Mauss, *Sociologie et Anthropologie*, 4 éd., Paris: Press Universitaires de France, I-LII. (=1973, 「マルセル・モース論文集への序文」有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳『社会学と人類学 I』弘文堂, 1-46.)

- 間宮陽介・廣川祐司, 2013, 『コモンズと公共空間——都市と農漁村の再生にむけて』昭和堂.
- 松川太一, 2013, 「森林ボランティア参加の規定要因——参加意欲を参加経験につなげるために」『人間環境学研究』11(15): 143-52.
- 松村正治, 2007, 「里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方——身近な環境調査による市民デザインの可能性」『環境社会学研究』13: 143-57.
- , 2009, 「里山ボランティアにおける自由の条件——人間-植物関係の批判社会学試論」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告——園芸文化』6: 48-68.
- , 2010, 「里山保全のための市民参加」木平勇吉編『みどりの市民参加——森と社会の未来をひらく』日本林業調査会, 51-68.
- , 2013, 「環境統治性の進化に応じた公共性の転換へ——横浜市内の里山ガバナンスの同時代史から」宮内泰介編『なぜ環境保全はうまくいかないのか——現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』新泉社, 222-46.
- Mauss, M., 1925, "Essai sur le don: Forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques", *L'Année Sociologiques*, nouvelle série 1: 30-186. (=2009, 吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』筑摩書房.)
- McCarthy, J. D., and M. N. Zald, 1977, "Resource Mobilization and Social Movements: A Partial Theory," *American Journal of Sociology*, 82(6): 1212-41. (=1989, 片桐新自訳「社会運動の合理的理論」塩原勉編『資源動員と組織戦略——運動論の新パラダイム』新曜社, 21-58.)
- McDonald, K., 2002, "From Solidarity to Fluidarity: Social Movements beyond 'Collective Identity'——the Case of Globalization Conflicts," *Social Movement Studies*, 1(2): 109-28.
- , 2004, "Oneself as Another: From Social Movement to Experience Movement," *Current Sociology*, 52(4): 575-93.
- , 2006, *Global Movements: Action and Culture*, Oxford: Blackwell.
- メディアウォッチ 100, 2012, 『志高く WORK HARD でがんばらなあかん——玉井義臣——あしなが運動のすべてを語る』同時代社.
- Melucci, A., 1989, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Philadelphia: Temple University Press. (=1997, 山之内靖・

- 貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民（ノマド）——新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店。）
- , 1996, *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 緑の列島ネットワーク, 2000, 『近くの山の木で家をつくる運動宣言』農山漁村文化協会.
- Mills, C. W., [1940] 1963, "Situating Actions and Vocabularies of Motive," I. L. Horowitz ed., *Power, Politics and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, New York: Oxford University Press, 439-68. (=1971, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 344-55.)
- 三井さよ, 2004, 『ケアの社会学——臨床現場との対話』勁草書房.
- 三井昭二, 1994, 「都市・山村関係からみる林業労働力の新しい動向と意義」『林業経済研究』25: 92-4.
- , 1997, 「森林からみるコモンズと流域——その歴史と現代的展望」『環境社会学研究』3: 33-46.
- 三俣学編, 2014, 『エコロジーとコモンズ——環境ガバナンスと地域自立の思想』晃洋書房.
- 宮林茂幸, 2006, 「1980年代の研究動向」林業経済学会『林業経済学会50周年記念 林業経済研究の論点——50年の歩みから』日本林業調査会, 73-87.
- 宮坂敬造, 1985, 「儀礼におおわれた対人的相互作用——狂気と性の考察にみられるゴッフマンの儀礼論について」『現代社会学』(19): 64-104.
- 宮内泰介編, 2006, 『コモンズをささえるしくみ——レジティマシーの環境社会学』新曜社.
- 森づくり安全技術・技能標準化促進委員会, 2013, 『森林ボランティアのための森づくり安全技術マニュアル 基本編』森づくり安全技術・技能全国推進協議会.
- 森づくりフォーラム, 2003, 「森づくりフォーラム活動報告『多摩の森・大自然塾』の成果と課題」『森づくりフォーラム NEWS』93: 8-9.
- , 2016, 「森林づくり活動についての実態調査 平成27年調査集計結果」.
- 森づくりグループ安全白書作成委員会, 2005, 『東京都府中青年の家閉所記念プロジェクト「転ばぬ先の森林ボランティア」安全読本』東京都府中青年の家.
- 室田武編, 2009, 『環境ガバナンス叢書3 グローバル時代のローカル・コモンズ』ミネル

ヴァ書房.

- 室田武・三俣学, 2004, 『入会林野とコモンズ——持続可能な共有の森』日本評論社.
- 中河伸俊・渡辺克典編, 2015, 『触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学』新曜社.
- 中川重年, 1996, 『再生の雑木林から』創森社.
- 中野民夫, 2012, 「ボランティア」大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編『現代社会学事典』弘文堂, 1188.
- 中野敏男, 1999, 「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27(5): 72-93.
- 中西正司・上野千鶴子, 2003, 『当事者主権』岩波書店.
- 中山淳雄, 2007, 『ボランティア社会の誕生——欺瞞を感じるからくり』三重大学出版会.
- 中沢新一, 2003, 『愛と経済のロゴス——カイエ・ソバージュⅢ』講談社.
- Nietzsche, F. W., [1886] 1968, *Jenseits von Gut und Böse*, Berlin: Walter de Gruyter. (= 2009, 中山元訳『善悪の彼岸』光文社.)
- , [1887] 1968, *Zur Genealogie der Moral*, Berlin: Walter de Gruyter. (=2009, 中山元訳『道徳の系譜』光文社.)
- 仁平典宏, 2001, 「ボランティア・アソシエーション再考のために——官僚制概念との関係で」『ソシオロゴス』25: 176-192.
- , 2011, 『「ボランティア」の誕生と終焉——〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』名古屋大学出版会.
- 日本林業調査会, 1998, 『森林ボランティアの風——新たなネットワークづくりに向けて』日本林業調査会.
- 丹羽健司, 2006, 「『森の健康診断』の可能性——素人山主と森林ボランティアを結ぶ」蔵治光一郎・洲崎燈子・丹羽健司編『森の健康診断——100円グッズで始める市民と研究者の愉快的森林調査』築地書館, 32-48.
- 西城戸誠, 2008, 『抗いの条件』人文書院.
- 西浦功, 1997, 「表出的役割からみたボランティア団体の組織運営——余暇活動としてのボランティア活動」『現代社会学研究』10: 118-31.
- 西山志保, 1999, 「阪神淡路大震災におけるボランティア活動の展開とその課題——活動と事業のはざまで揺れる被災地ボランティア」『社会学研究科紀要』50: 11-8.
- , 2002, 「都市社会における『ボランティア事業』の可能性——『拠り所』の創出」『日本都市社会学学会年報』20: 147-58.

- , 2003, 「『ボランティアリズム』概念の検討——『生命圏』の次元からの再考」『現代社会理論研究』13: 246-58.
- , [2005] 2007, 『〔改訂版〕ボランティア活動の論理——ボランティアリズムとサブシステンス』東信堂.
- 似田貝香門編, 2008, 『自立支援の実践知——阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂.
- 野宮大志郎編, 2002, 『社会運動と文化』ミネルヴァ書房.
- 野宮大志郎・西城戸誠編, 2016, 『サミット・プロテスト——グローバル化時代の社会運動』新泉社.
- 帯谷博明, 2004, 「『森は海の恋人』運動の生成と展開——運動戦略としての植林活動の行方」『ダム建設をめぐる環境運動と地域再生——対立と協働のダイナミズム』昭和堂, 108-30.
- 荻野昌弘, 1997, 「社会学の変身・変身の社会学」宮原浩二郎・荻野昌弘編『変身の社会学』世界思想社, 1-23.
- 大畑裕嗣, 2004, 「モダニティの変容と社会運動」曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂, 156-89.
- 奥村隆, [2004] 2017, 「没頭を喪失した社会」『社会はどこにあるか——根源性の社会学』ミネルヴァ書房, 35-75.
- 大村英昭, 1985, 「ゴッフマンにおける〈ダブル・ライフ〉のテーマ——演技＝儀礼論の意義」『現代社会学』(19): 5-29.
- 小野奈々, 2003, 「単純化されたイデオロギーの機能——NPO／NGO の考察」『年報社会学論集』16: 102-13.
- , 2008, 「成員の不確定性の側面からみたボランティア組織の研究——個人のモチベーションに視点を定めて」筑波大学大学院人文社会科学研究科 2007 年度博士論文.
- , 2009a, 「大規模 NGO のローカル支部のジレンマ——価値準拠の分析視角から」『ボランティア学研究』9: 83-105.
- , 2009, 「福祉コミュニティ事業におけるボランティア動員と下請け化問題——茨城県潮来市の社会福祉協議会を事例として」『年報社会学論集』22: 138-49.
- , 2013, 「地域環境保全ボランティア活動の対外閉鎖性と活動の非継承性——『行

- 政奉仕の習慣』と『相互鑑賞欲求』の動機づけからの考察」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』10(1): 27-36.
- 大澤真幸, [1996] 2009, 『増補 虚構時代の果て』筑摩書房.
- , 2008, 『不可能性の時代』岩波書店.
- Ostrom, E., 1990, *Governing the Commons*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 2003, "How Types of Goods and Property Rights Jointly Affect Collective Action," *Journal of Theoretical Politics*, 15(3): 239-70.
- Ostrom, E., R. Gardner and J. Walker, 1994, *Rules, Games, and Common-Pool Resources*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Ostrom, E., C. Gibson, S. Shivakumar, K. Andersson, 2002, *Aid, Incentives, and Sustainability: An Institutional Analysis of Development Cooperation*, Stockholm: Sida.
- Parsons, T., 1937, *The Structure of Social Action*, New York: McGraw Hill. (1974-89, 稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造』第1分冊～第5分冊, 木鐸社.)
- Pearce, J. L., 1993, *Volunteers: The Organizational Behavior of Unpaid Workers*, London; New York: Routledge.
- Polanyi, K., 1977, *The Livelihood of Man*, New York: Academic Press. (=1980, 玉野井芳郎・栗本慎一郎・中野忠訳『人間の経済』I・II, 岩波書店.)
- Riesman, D., 1961, *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*, New Haven: Yale University Press. (=1964, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房.)
- 李妍焱, 2002, 『ボランティア活動の成立と展開——日本と中国におけるボランティア・セクターの論理と可能性』ミネルヴァ書房.
- 林野庁, 2001, 「森林(もり)づくり活動についてのアンケート結果(平成12年9月調査)」.
- , 2004, 「森林(もり)づくり活動についてのアンケート結果(平成16年2月調査)」.
- , 2007, 「森林(もり)づくり活動についてのアンケート結果(平成19年3月調査)」.

- , 2010, 「森林（もり）づくり活動についてのアンケート結果（平成 22 年 3 月調査）」.
- , 2013, 「森林づくり活動についての実態調査 平成 24 年調査集計結果（平成 25 年 4 月調査）」.
- , 2017, 『平成 29 年版 森林・林業白書』.
- 斉藤和彦, 2003, 「漁民の森づくり活動の展開について」山本信次編『森林ボランティア論』日本林業調査会, 159-82.
- 桜井政成, 2005, 「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『ノンプロフィット・レビュー』5(2): 103-13.
- , 2007, 『ボランティアマネジメント』ミネルヴァ書房.
- 三本松政之・朝倉三江編, 2007, 『福祉ボランティア論』有斐閣.
- 佐藤恵, 2010, 『自立と支援の社会学——阪神大震災とボランティア』東信堂.
- 佐藤岳晴, 2003, 「森林ボランティアと支援政策——トップダウンからボトムアップへ」山本信次編『森林ボランティア論』日本林業調査会, 31-52.
- 佐藤慶幸, 1976, 『行為の社会学——ウェーバー理論の現代的展開』新泉社.
- , 1983, 「ボランティア活動の本質と理念」『ボランティア活動研究』2: 168-74.
- , 1986, 『ウェーバーからハバーマスへ』世界書院.
- , 1991, 『生活世界の対話と理論』文眞堂.
- , [1982] 1994, 『アソシエーションの社会学——行為論の展開〔新装版〕』早稲田大学出版部.
- , 1996, 『女性と協同組合の社会学——生活クラブからのメッセージ』文眞堂.
- , 2002, 『NPO と市民社会——アソシエーション論の可能性』有斐閣.
- , 2007, 『アソシエーティブ・デモクラシー』有斐閣.
- 佐藤慶幸編, 1988, 『女性たちの生活ネットワーク——生活クラブに集う人びと』文眞堂.
- 佐藤慶幸・天野正子・那須壽編, 1995, 『女性たちの生活者運動——生活クラブを支える人びと』マルジュ社.
- 関嘉寛, 2008, 『ボランティアからひろがる公共空間』梓出版社.
- 渋谷望, 1999, 「〈参加〉への封じ込め——ネオリベラリズムと主体化する権力」『現代思想』27(5): 94-105.
- , 2003, 『魂の労働——ネオリベラリズムの権力論』青土社.

- , 2004, 「〈参加〉への封じ込めとしてのNPO——市民活動と新自由主義」『都市問題』95(8): 35-47.
- 重松敏則, 1990, 「里山林の保全・管理に対する市民の参加意欲について」『農村計画学会誌』9(1): 6-22.
- , 1991, 『市民による里山の保全・管理』信山社サイテック.
- , 1992, 「英国 BTCV の田園景観及び森林生物環境の保全活動について」『日本造園学会誌』55(5): 325-30.
- 嶋田大作・室田武, 2010, 「開放型コモンズと閉鎖型コモンズにみる重層的資源管理——ノルウェーの番人権と国有地・集落有地・農家共有地コモンズを事例に」『財政と公共政策』48: 77-91.
- 嶋田俊平, 2003, 「森林所有者が森ボランティア活動を受け入れる意義——森林所有者の意識調査から」山本信次編『森林ボランティア論』日本林業調査会, 95-109.
- , 2005, 「森林ボランティアと山村住民との関係性に関する研究——近畿地方の森林ボランティア団体へのアンケート調査結果を中心に」『林業経済研究』51(3): 29-37.
- 嶋根克己・藤村正之編, 2001, 『非日常を生み出す文化装置』北樹出版.
- 新保輝幸・松本充郎編, 2012, 『変容するコモンズ——フィールドと理論のはざまから』ナカニシヤ出版.
- 篠原一, 1977, 『市民参加』岩波書店.
- 森林インストラクター東京会, 2015, 「FIT とは?」, 森林インストラクター東京会 (FIT) ホームページ, (2015 年 5 月 28 日取得, <http://www.forest-tokyo.org/FITintro/theFIT.html>).
- Smith, D. H., 1994, "Determinants of Voluntary Association Participation and Volunteering," *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 23(3): 243-63.
- Smith, D. H., R. A. Stebbins and M. A. Dover, 2006, *A Dictionary of Nonprofit Terms and Concepts: Philanthropic and Nonprofit Studies*, Bloomington: Indiana University Press.
- Snow, D. A., 2007, "Framing Processes, Ideology, and Discursive Fields," D. A. Snow, S. A. Soule and H. Kriesi eds., *The Blackwell Companion to Social Movements*, Malden: Blackwell.

- Snow, D. A., E. B. Rochford Jr., S. K. Worden and R. D. Benford, 1986, "Frame Alignment Processes, Micromobilization, and Movement Participation," *American Sociological Review*, 51(4): 464-81.
- Snow, D. A. and R. D. Benford, 1988, "Ideology, Frame Resonance and Participant Mobilization," *International Social Movement Research*, 1: 197-217.
- 副田義也, 1993, 『日本文化試論——ベネディクト『菊と刀』を読む』新曜社.
- , 2003, 『あしなが運動と玉井義臣——歴史社会学的考察』岩波書店.
- 宋美英, 2009, 「ボランティア活動の継続・発展とボランティア組織の構造——福祉ボランティア活動を事例に」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』109: 51-80.
- 多辺田政弘, 1990, 『コモンズの経済学』学陽書房.
- 高橋裕子, 2002, 『「女らしさ」の社会学——ゴフマンの視角を通して』学文社.
- 高村学人, 2012, 『コモンズからの都市再生——地域共同管理と法の新たな役割』ミネルヴァ書房.
- , 2013, 「コモンズとしてのマンション——都市と市場のなかでの公共性」間宮陽介・廣川祐司編『コモンズと公共空間——都市と農漁村の再生にむけて』昭和堂, 143-74.
- , 2014, 「現代総有論の歴史的位相とその今日的意義」五十嵐敬喜編『現代総有論序説』ブックエンド, 60-83.
- 竹中健, 2013, 『ボランティアへのまなざし——病院ボランティア組織の展開可能性』晃洋書房.
- 玉井義臣, 2010, 『だから、あしなが運動は素敵だ』批評社.
- Tarrow, S., 1998, *Power in Movement: Social Movement and Contentious Politics*, second edition, Cambridge: Cambridge University Press. (=2006, 大畑裕嗣監訳『社会運動の力——集合行為の比較社会学』彩流社.)
- 樽川典子, 1979, 「ボランティア活動の人間関係学的考察」『月刊福祉』62(7): 2-7.
- 寺田良一, 1998, 「環境 NPO (民間非営利組織) の制度化と環境運動の変容」『環境社会学研究』4: 7-23.
- Titmuss, R. M., 1970, *The Gift Relationship: From Human Blood to Social Policy*, Middlesex: Pelican Books.
- , 1968, *Commitment to Welfare*, London: Allen & Unwin. (=1971, 三浦文夫

監訳『社会福祉と社会保障』東京大学出版会.)

- 富井久義, 2012a, 「運動にあらたに参与する構成員の運動の理念とのつきあい——遺児学生があしなが運動において形成する重層化した秩序」『社会学ジャーナル』37: 137-55.
- , 2012b, 「ボランティアな行動に見いだされる贈与の可視化／不可視化——あしなが育英会大学奨学生をめぐる「恩返し」の思想の展開」『年報社会学論集』25: 156-67.
- , 2016, 「『H27 年森林づくり活動についての実態調査』の分析について」森づくりフォーラム『平成 28 年度林野庁補助事業「H27 年度森林づくり活動についての実態調査」の分析と課題解決に取り組む団体の調査報告 森づくり活動の一步先をめざして』, 3-10.
- , 2017, 「森林ボランティア活動における社会的意義の語られかた——都市住民が形成するコモンズとしての鳩ノ巣フィールド」『環境社会学研究』23: 99-113.
- 富永京子, 2016, 『社会運動のサブカルチャー化——G8 サミット抗議行動の経験分析』せりか書房.
- , 2017, 『社会運動と若者——日常と出来事を往還する政治』ナカニシヤ出版.
- 鳥越皓之, 1997, 「コモンズの利用権を享受する者」『環境社会学研究』(3): 5-14.
- , 2000, 「いまなにゆえに環境ボランティア・NPO か」鳥越皓之編『環境ボランティア・NPO の社会学 シリーズ環境社会学 1』新曜社, 1-19.
- , 2002, 「ボランティアな行為と社会秩序」佐々木毅・金泰昌編『中間集団が開く公共性』東京大学出版会, 231-45.
- , 2014, 「東日本大震災以降の社会学的実践の模索——家・ムラ論をふまえてのコモンズ論から」『社会学評論』65(1): 2-15.
- 東京の森林を考える懇談会, 1986, 『東京の森林を守り育てるために 提言』.
- 土屋俊幸, 2006, 「1990 年代の研究動向」林業経済学会『林業経済学会 50 周年記念 林業経済研究の論点——50 年の歩みから』日本林業調査会, 89-101.
- 内山節, 2003, 「森林ボランティアの可能性と課題」山本信次編『森林ボランティア論』日本林業調査会, 183-206.
- 内山節編, 2001, 『森の列島(しま)に暮らす』コモンズ.
- 内海成治編, 2001, 『ボランティア学のすすめ』昭和堂.
- 内海成治・入江幸男・水野義之編, 1999, 『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想

- 社.
- 脇田健一, 1997, 「変身する主婦」宮原浩二郎・荻野昌弘編『変身の社会学』世界思想社, 57-86.
- Weber, M., 1956, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen: J. C. B. Mohr. (=1972, 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店.)
- Wilson, J., 2000, "Volunteering," *Annual Review of Sociology*, 26: 215-40.
- , 2012, "Volunteerism Research: A Review Essay," *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 41(2): 176-212.
- 山本信次, 2010, 「市民参加・森林環境がバナンス論の射程——森林ボランティアの役割を中心として」『林業経済研究』56(1): 17-28.
- , 2014, 「社会運動としての森林ボランティア活動——都市と農山村は森林をコモンズとして共有できるか?」『大原社会問題研究所雑誌』671・672: 3-16.
- 山本信次編, 2003, 『森林ボランティア論』日本林業調査会.
- 吉村妙子, 2010, 「市民と森を結ぶNPO 法人森づくりフォーラム」木平勇吉編『みどりの市民参加』日本林業調査会, 69-85.
- 全国ボランティア・市民活動振興センター, 2010, 『全国ボランティア活動実態調査報告書』全国社会福祉協議会.
- Zurcher, L. A. and D. A. Snow, 1981, "Collective Behavior: Social Movements," M. Rosenberg and R. H. Turner eds., *Social Psychology: Sociological Perspectives*, New York: Basic Books, 447-82.